2004 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば
大会報告書

目次

東西インカレを終えて・・・

永井純（筑波大学体育専門学群長）

藤井伸二（つくば市教育委員会教育長）

都澤凡夫（東西インカレ実行委員会トーナメントディレクター）

新妻貞夫（つくば市商工会事務局長）

蓮見孝（筑波大学人間総合科学研究科教授）

松田裕雄（東西インカレ実行委員エグゼクティブプロデューサー）

第一章　大会概要

Ⅰ．2004 大会概要

Ⅱ．2004 東西インカレ実行委員会設立からの経緯

Ⅲ．東西インカレ過去の奇跡

第二章　事務局運営

Ⅰ．組織運営体制

Ⅱ．事務局運営経緯

Ⅲ．実行委員統括体制

≪１≫情報流通体制

≪２≫サミットカンファレンス

≪３≫スタッフ説明会

≪４≫総会開催

Ⅳ．物流体制

Ⅴ．財政

第三章　プロジェクト推進局運営

Ⅰ．エキジビジョンマッチプロジェクト

Ⅱ．パフォーマンス・演出プロジェクト

Ⅲ．スポンサードプロジェクト

Ⅳ．レセプションプロジェクト

Ⅴ．リサーチ・プロジェクト

Ⅵ．交流会プロジェクト

Ⅶ．地域デザインプロジェクト

Ⅷ．販売促進プロジェクト
Ⅸ．アカデミックフォーラム
≪１≫フォーラムプロデュースにあたって
≪２≫フォーラム・マネジメント
≪３≫フォーラム・制作
≪４≫フォーラム・ＰＲ
第四章　プロダクション局
Ⅰ．総合デザイン
Ⅱ．大会オフィシャルグッズ制作
Ⅲ．オフィシャルブック制作
Ⅳ．大会オフィシャルサイト制作
Ⅴ．ビデオ部・記録部
第五章　ＰＲ局運営
Ⅰ．大会広告活動について
Ⅱ．大会広報活動について
第六章　大会運営
Ⅰ．競技・イベント運営
≪１≫競技規則・進行について
≪２≫各種演出
（１）音響
（２）誘導
（３）アナウンス
（４）オープニングセレモニー
（５）クロージングセレモニー
≪３≫選手対応
≪４≫競技備品・機材に関して
≪５≫大会表彰品について
Ⅱ．大会運営
≪１≫大会運営組織体制及び経緯
≪２≫情報管理
≪３≫法務、保険
≪４≫消防、防災
≪５≫医事
≪６≫施設機材管理
≪７≫セキュリティ
≪８≫駐車場管理

≪９≫廃棄物管理・環境保全
≪１０≫宿泊管理
≪１１≫総合インフォメーション
≪１２≫スタッフ対応
≪１３≫スペシャルニーズ対応
≪１４≫運搬・撤収総括
≪１５≫オペレーションマニュアル制作
第七章　大会結果資料
Ⅰ．大会競技結果
≪１≫競技結果
≪２≫個人表彰
Ⅱ．大会運営データ
≪１≫大会関係者出席状況結果
≪２≫大会スタッフ対応
≪３≫各種収支決済詳細
（１）運営業務全般
（２）販売業務全般
（３）外注販売業務全般
≪４≫大会関係者使用駐車場内訳結果
Ⅲ．大会客観的評価データ
≪１≫　来場者アンケート結果
≪２≫　スタッフアンケート結果
≪３≫　アドヴァイザーによる講評結果
≪４≫　総合分析
Ⅳ．名簿
≪１≫　実行委員
≪２≫　ＧＵＥＳＴ・ＶＩＳＩＴＯＲ
≪３≫　協賛社・寄付者一覧

東西インカレに寄せて

アテネ・オリンピックは日本選手の活躍に興奮しました。また日本は歴史的な成果をあげました。これは、国・ＪＯＣ・各競技団体・選手・国民の皆さんの応援が一体化した結果だと思います。一方、地域に目を投じれば、経済界・行政・大学・市民の産官学民四位一体の融合・共生が求められる時代に入りました。「２００４東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば」は、筑波大学がスポーツを通してどの程度の規模で地域に貢献できるかが課題でした。インカレそのものは筑波大学が昨年に引き続き２連覇を遂げましたが、地域との融合・共生をコンセプトにしたイベントも大成功ではなかったかと思います。これほどのことを用意周到に計画し、実行し、成果をあげられた関係者に大いなる敬意を表します。

準備段階では、体育専門学群スポーツ･コーチング領域に「バレーボールイベントの企画・運営（自由科目)」を興し、全学の学生が履修できるようにしたところ約 160 名が履修登録をしたようです。この授業の延長線上が，この東西インカレであり、実践・実習を中心とした授業がイベントを成功に導いたと言っても過言ではありません。筑波大学学生の能力の高さが証明されたと思います。またこれはひとつの授業形態の成功例と言えます。

来年は３回目の開催となりますが、過去２回の成功を指標にして、いろいろな試みを加えながら、素晴らしいイベントを開催するよう頑張っていただきたいと存じます。暑い夏の２日間、大きな夢をいただきありがとうございました。

筑波大学体育専門学群長
東西インカレ実行委員会名誉顧問

永井　純

2004
The Intercollegiate Men's Volleyball Championships
among the Finalists from East and West in Tsukuba

2004 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくばを終えて

皆様の御陰で、7 月 10、11 日の両日にわたる「2004 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば」は好天に恵まれ、昨年に増して成功裡に終えることができたことを心から感謝申し上げます。

今年で2回目になるつくば市での開催は、「バレーボールイベントの企画・運営」という実習単位に認定され教育的機能にも補強されました。御陰さまで、約 200 名という大スタッフでの大会運営が成立しました。

大会全般を通して、昨年の経験をおおいに活かした大会にすることが出来たと言えるでしょう。それは、観客動員数が昨年の 3500 人から 6000 人に増大したことに象徴されます。多数の観客を動員するために、そしてバレーボールというスポーツを中心に、繋の精神で、「バレーボールと人を」、「人と人を」繋ぐために沢山のスタッフが知恵をしぼって、時間をかけて議論を繰り返してきた成果であると考えています。

PR もより充実したものとなり、ポスターやビラ、そして学内や土浦学園線に吊るした大きな横断幕のデザインや色彩にもそれらは顕著に表れていました。WEB での問い合わせも昨年の比較にならないほど多く、レセプションの事前申し込みは昨年の 40 件から、今年は北海道から九州まで 200 件に増大しました。

体育館前のバレーボール街道も非常に盛況でした。多くの人たちがパラソルの下で談笑しながら食事をし、その傍らではジャンプの高さを子供から大人まで計測していました。体育館内の熱気がそのまま外へ溢れ出ている感じがしました。

体育館では 28 団体の協力を得て、バレーボールの試合を盛り上げていただきました。特にシッティングバレー日本代表のプレーには感嘆の声が上がっていました。大会二日目には、子供向けのバレーボール教室を実施する一方で、大人向けにはアカデミックフォーラムも新たな試みとして開催しました。はたして人が集まってくれるだろうかという心配も杞憂に終わり、多数の方にご来場いただきました。Sports・Art・Life の融合をテーマに、つくば市のこれからの街創りを考える良い機会を提供できたのではないかと思っています。

大会そのものは、筑波大学が地元の大声援に後押しされ、見事 2 連覇を達成することが出来、皆様と喜びを共有することが出来ました。

「バレーボールの普及・強化のイベント」という従来のビジョンを越え、「人・社会・街」をみんなの手で作り上げていくという挑戦、そしてその先には未だ未だ大きな夢が広がっています。来年度もつくば市での開催が決定しています。この挑戦がさらに発展し、「つくばモデル」が大きな波紋となって日本国中に広がることを期待しています。

最後に、全日本学生バレーボール連盟の市川伊三夫会長をはじめ、役員の皆様、つくば市の藤沢順一市長をはじめ、教育委員会、スポーツ振興課、体育協会の皆様、筑波大学の岩崎洋一学長、永井純体育専門学群長をはじめ、大学関係者の皆様、新妻貞夫事務局長はじめ、つくば市商工会、ホテル組合の皆様、この大会に賛同してくださったミキプルーンをはじめとする協賛 61 社の皆様、そして大会の企画に半年前から関わっていただいたスタッフ、運営に携わって下さった全ての団体、スタッフ、選手、観客の皆様に衷心より御礼申し上げます。

筑波大学人間総合科学研究科教授
東西インカレ実行委員会トーナメントディレクター

都澤　凡夫

2004
The Intercollegiate Men's Volleyball Championships
among the Finalists from East and West in Tsukuba

04 東西インカレ in つくばを終えて

今年も昨年同様に感動、感激の二日間でした。
鍛え上げた身体で、持っている身体能力を活かした、あすの全日本代表候補者の一流プレーを見る事ができました。
今大会の理念「Ｓｐｏｒｔｓ　Ｆｏｒ　ＡＬＬ，ＡＬＬ　Ｆｏｒ　Ｓｐｏｒｔｓ」はスポーツのもつ普遍の魅力を十分に発揮できたものと思われます。競技の仕組みや成績は変わっても、変わっていけないものは理念であり、大会への情熱であって、その点昨年以上の大会にするために、多くのスタップが心ひとつになることができた大会でした。
つくば市は研究学園都市として全国的にその名を馳せていますが、今回開催した「つくばアカデミックフォーラム」は、つくばを思い、つくばが好きでたまらない方々が、それぞれの立場からこれからのつくばに期待する話は調味深く聞く事ができました。
そして、来年も是非つくばで東西インカレを開催し、何度でもすばらしい感動ができるように、多くの方々の連携と協力によって、素晴らし大会にして行きたい。

つくば市商工会事務局長

新妻　貞夫

2004
The Intercollegiate Men's Volleyball Championships
among the Finalists from East and West in Tsukuba

2004 東西インカレ
「つくばアカデミックフォーラム」のコーディネーターを担当して

2004 東西インカレは、トータル 300 人もの人たちがボランティアで企画・運営に参加した画期的なイベントだった。それをバレーボールのスポーツイベントに終わらせず、「地域デザイン」をめざすレベルまで領域を広げて企画が行われたところに、今回のインカレの大きな意味があるだろう。

体育と私の所属する芸術とは、筑波大学では「体芸」などとひとまとめに呼ばれることが多いのだが、体育と芸術のユニットが、一体となって一つのイベントづくりを実行するということは、私の経験上は未だかってなかったことだった。だから、東西インカレの企画の一つであるアカデミックフォーラムのコーディネーターを依頼されたときは本当にびっくりし、やがて心配になってきた。スポーツとアートの共通項はあるのだろうか。もし両者の意見が根本からかみあわなかったら、どうまとめていけばよいのだろう。古のギリシャでは、たしかにスポーツとアートは一体化していたのだが、それは基本的に異なる面が多い。たとえば、アートには、スポーツ競技の基本である明確な“勝ち負け”やルールがないのである。

東西インカレが終わって最も印象的だったのは、大会実行委員長の都澤凡夫先生や事務局機能を担うエクゼクティブプロデゥーサーの松田裕雄さんのもと、運営全体を通して、極めて緻密な企画が行われ、支援学生たちの真摯な取り組みが、細部に至るまで一貫してなされていたことである。それは、われわれが「デザイン力」と呼ぶ概念とピッタリ一致していた。個々バラバラに存在する多様な要素を束ねて、大きな全体的調和や力動に編み上げていく能力なのである。

科学技術が急発展した現代社会では、個々の専門性の深化が図られてきた反面で、全体性を創作・構築するパワーが退化してしまったように思われる。それは、私たちが住むまちのかたちにもいえることだろう。スポーツ的な表現をすれば、“チームワークに欠けるまち”になりつつあるのである。まちを、もっと多くの人たちが、さまざまな専門性の垣根を超えて、ともに連携しあう多様な活動の場としていく必要があるだろう。アカデミックフォーラムに参加する機会をいただいたことで、改めてそんなことを確信することができた。

幸いなことに、５名のプレゼンターは、ヘタクソなコーディネーター（私）を全く必要とすることなく、見事なハーモニーを奏でてくれた。なぜならば、それぞれのプレゼンターが、血もあれば息もする「生き身の人間たち」に普段から関わり、その生命力を何よりも大切に思う人たちだったからだろう。アカデミックフォーラムに参加いただいたみなさんは、きっとそのようなプレゼンターの爽やかなコメントを聞きながら、心から共感できる何かを感じていただけたのではないだろうか。

東西インカレという人間的なイベントが、これからもこのつくばのまちで継続的に大きく育ち、「スポーツ・タウン」と呼ばれるようなまちづくりに貢献していくとよいと願っている。

筑波大学人間総合科学研究科教授
アカデミックフォーラム･コーディネーター

蓮見　孝

2004
The Intercollegiate Men's Volleyball Championships
among the Finalists from East and West in Tsukuba

2004 夏の終わりに･･･

昨年 12 月から走り続けてきた 2004 東西インカレ実行委員会が、今この全員で書き上げてきた報告書の完成とともに終わりを迎えようとしています。

今年も昨年を上回る多くの人々とこの大会を創り上げることができました。大会２日間は、バレーボールを中心に，正に２日間いつでも，会場どこでも，そして子供から大人まで誰もが，気軽に「元気に，幸せ」になれる共生空間ができていたのではないかと思います.

ふと思えば、このような東西インカレという大会には、「～しなければならない」という絶対的な拘束力や義務はもともとありません。運営の原動力となっている大学生にとっても、今年こそ単位が出るようになったものの、多くの手間隙をかけ、時間を割いて取るほど単位における重要性はもっておりません。社会人の方を始め、学生も皆授業以外に部活動等、既に両立しなくてはならない活動を抱えています。要は完全に本人の「自由」です。つらければいつでもやめることができます。全ては自分次第です。

私は東西インカレというのは、スタッフにとってこの「自由」というものを自由に学ぶ場ではないかと思います。自分が人と人との間で常に生きていく存在である以上は、「自由」にはいつも「責任」が発生します。自分の「自由」が何に繋がっているのかということを常に見返す「責任」です。ひとつひとつの「責任」を重く見るか、軽く見るかも当人の「自由」です。組織運営、チームプレイを行っていく上でのある程度の「決まりごと」はあれども、それは規制でもなければ、「自由」を抑制するものでもありません。（これをどう捉えるか自体も「自由」ではありますが）解答書も教科書もありません。そして形として評価される絶対的な何かがあるわけでもありません。

「自由」を享受しながら「責任」を見通す目を持つ。これは人がより主体的に「生きていく」営みそのものではないかと思います。即ち「東西インカレとは、どんな活動?」と言われれば、それは「生きることそのもの」ではないでしょうか。

一生懸命に「生きること」で、人間同士，企画同士が切磋琢磨される。そうした過程を経て創り出された「環境」（イベント）の中で，切磋琢磨された「心と技」（ゲーム）が，より輝きを増し，より多くの「感動」と「興奮」を生む。そしてこれが来年のより大きな飛躍へと繋がる･･･「人によって人が活かされる，成長されあい，しあう」･･･人と人との間に生きる「人間」らしい，人間味溢れる「普遍の魅力」。私はこの一年で、このような身体技とは又異なる「普遍の魅力」をスタッフ達の前向き且つ真剣にその時を「生きる」姿の中に見出しました。

以上が 2004 夏の終わりに修める私なりの「自由」研究でした。スタッフの皆さんには、どのような「自由」研究が修められたでしょうか?一年間本当にご苦労様でした。今年も皆さんと共にこの機会を「生きる」ことができた「めぐり合い」に、心から感謝したいと思います。

筑波大学人間総合科学研究科技官
エグゼクティブプロデューサー

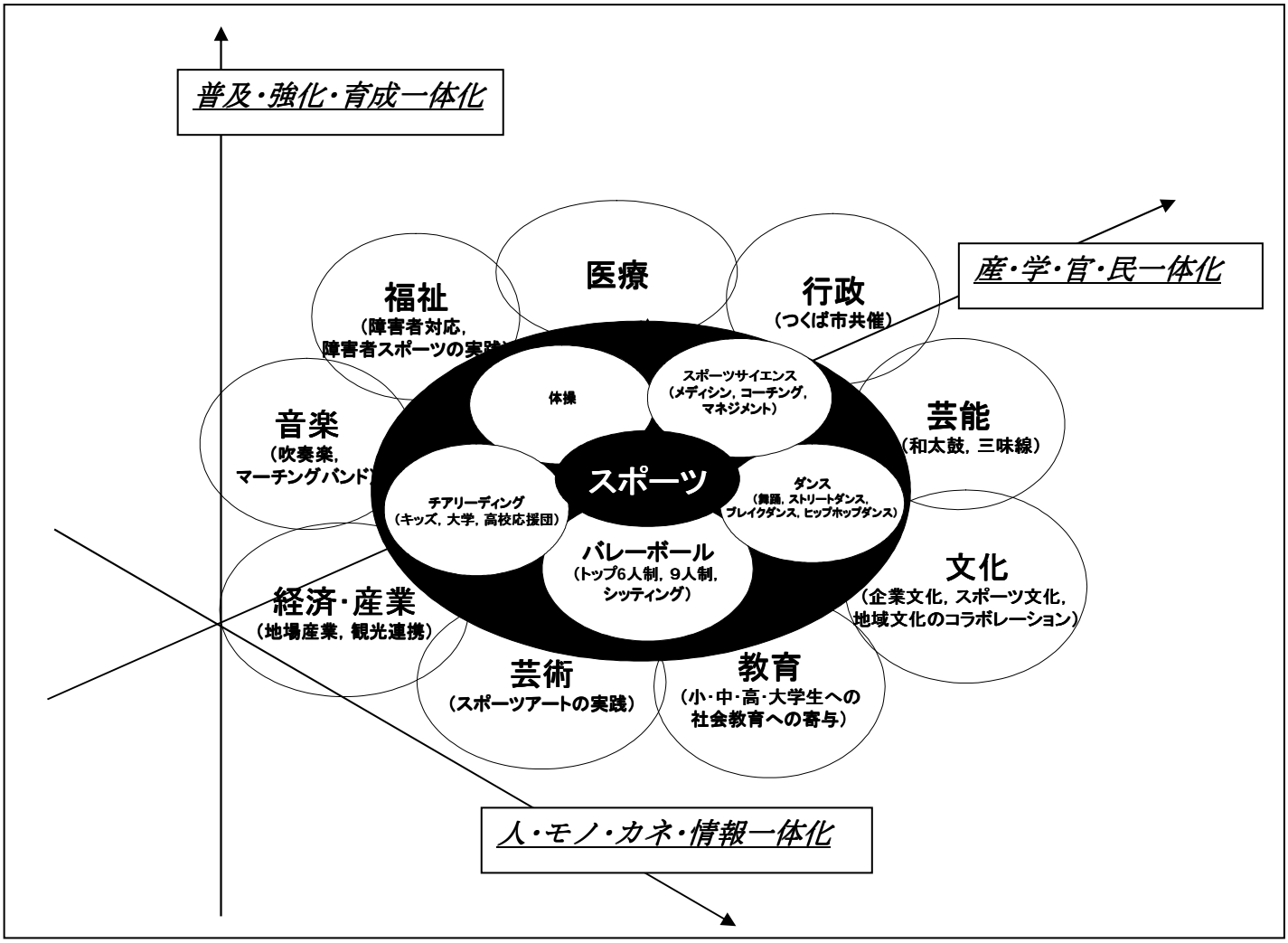
松田 裕雄

2004
The Intercollegiate Men's Volleyball Championships
among the Finalists from East and West in Tsukuba

第一章　大会概要

I　2004 大会概要

原稿作成者　松田裕雄



【開催理念】

Not ”sports for sports” 、 But “sports for all”

SPORTS FOR ALL、ALL FOR SPORTS

人へ、社会へ、そして次世代へ普遍の魅力を･･･

；スポーツが良くなる、発展する、普及する為のスポーツ活性化ではなく、スポーツの為が、音楽の為に、音楽の為が、スポーツの為に、とスポーツの為が、社会、経済、健康、教育、文化、防災、芸術、等々社会を構成するあらゆる分野の活性化に、そして又その逆も然り、というように、スポーツが社会生活の中に物理的にも、心理的にもしっかりと根を下ろし、他の分野との間に積極的にインタラクティブな関係を築いていくことを目指すというものです。そしてスポーツのアイデンティティ、「元気」と「幸せ」という、いつの時代であっても変わらぬ普遍の魅力を多世代、多地域、多志向に展開していこうという意味である。

【開催目的】

2003 大会が「認知」の年と称し、この初めての活動をより多くの国民に認識してもらおうという試みであったのを受け、2004 大会は「充実」の年としました。即ち前回大会は混沌とした中、五里霧中、暗中模索でおこなってきましたが、今年は昨年の「繋がり」を母体とし、更に充実した本格的な年にしようということである。以下 3 つの具体的な目標を掲げた。

1）産学官民四位一体への挑戦～手を繋ぐ（連携）からスクラム（一体化）への挑戦～

2）社会貢献から社会効果への実践～大学･市資源の社会還元を実践～（知的資源･人的資源･物的資源･情報資源）

3）バレーボールで小さな共生社会の実現～多様性を包含しうる大きく温かな存在を実現～

【デザインコンセプト】

上記理念及び本年の目的を達成する為に、実際のプログラムをデザインするにあたっては、以下のようなキーワードを

設定した。

SENSES BY INTERACTIVE INOVATION！

開催理念及び開催目的を体現することで、観客、スタッフ、選手、来賓全てに双方向の意識革命を誘発！

VOLLEYBALL FOR IDENTIFICATION！

様々なパフォーマンスの魅力がバレーボールを演出し、そしてバレーボールの魅力がこれらに一体感と連帯性をもたらすような仕掛けにするということ。

地域スポーツクラスターからスポーツイノベーションへ

続いて、実際のプログラム構成におけるメインコンセプトは「クラスター」とした。（イメージ図は前ページに）この語源は「ぶどうの房」であるが、近年、多数の主体（ぶどうの粒）が有機的に繋がりあい一つの固まり（房）を形作った形態を表す概念として、地域の産業構造と社会構造の分析に用いられている。そしてこのクラスターの生産性の成長は経済の活性化に大きく左右され、この成長はその地域において、知的資源を付加価値にしていく構造と環境によって決定されるという。イノベーションの出現というのはこうしたクラスターに拠る部分が非常に大きいという。

今大会では、このことを、スポーツを通じた今後の「社会の活性化」に引用した。今大会でのクラスターとは、まさに各々のプロジェクトや企画（ぶどうの粒）が独自に強力に存在する一方で、対立関係にあるのではなく、あくまで「連携あっての競合」であり、そのこと自体が大会自体（房）を大きなものにしていく。と考えている。このように各分野、フィールドにおいて知的資源が積極的に社会へ還元されていく中で、これを体現する選手、演者を始め、これを観る観客、実際に参加する人々のひとりでも多くの方々が、意識の中にひとつ新たな発見を持ち帰ってもらうことで、全体としてのイノベーションを誘発することができればと考えてデザインした。

【プログラムデザイン】

以上のような全体コンセプトを有し、具体的には、「スポーツ・音楽・芸能」における「普及・強化・育成」という軸に、「社会構成単位」の「産学官民一体化」という軸と、「社会・経済効果や活動の最小単位」の「人、モノ、カネ、情報、共通意識」という軸を添え、３方向に奥行きのあるビジョンから「人へ、社会へ、そして次世代へ･･･」スポーツの持つ普遍の魅力、いつの時代であっても変わらぬ「人間の魅力」を展開していく所存です。そして「小さな空間に大きな共生のひととき」を、市民を始めとする多くの人々の「心」の中へ贈り届けることを最優先に考えた。

以上の経緯を以って、これを実現する為に弾き出した具体的なサービスの柱三つを以下に紹介する。

１）地域、世代、志向を越えた･･･「バレーボールの技」

今大会におけるメインであり、キーワードは「スポーツマンスピリッツ」の魅力。大学バレーボールをトップに、９人制、シッティング、とバレーボール・スポーツの奥行きに挑戦した。同競技ではあるが、全く異色なこれらの種目が同一の会場で会するということは殆どない。今回はここにメスを入れることで、選手、スタッフ、観客、レフェリー等に新たな知見を提供する場となったのではないかと思う。そのプログラムは以下のようになる。

『東西大学男子王座決定戦』
～　トップアスリートの魅力　～

『Volleyball・エキシビジョンマッチ』
～Introduce Sports various combination～

９人制トップクラブマッチ／シッティングバレー公開マッチ
（東北ﾘｺｰ男子ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ部 VS 茨城選抜
／ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ日本代表 A VS ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ日本代表 B）

２）地域・世代・志向を越えた･･･「融合・共生」

ここでは、物的、人的、そして心的な融合と、これにより作り出される共生空間の実現を描いたものである。キーワードは「パートナーシップ」の魅力。分野の多元的、多角的、ボーダレスな融合と共生を目指した。スポーツ内でのコラボレーション、スポーツとアート、環境デザインと物的には特に会場を社会そのもの、ひとつの小さな「まち」に見立てた、人の集まる「場」、心が繋がる「輪」とした。
そのプログラムは以下のようになる。

『響・驚・興』
～　スポーツ・音楽・芸能の融合　～

筑波大学チア部／筑波大学応援団桐葉／東海大学チア部
FINE／REAL JAM／Dance Association Seeds／キッズチア・プロダクション／タッチ体操クラブ
／吾妻小マーチングバンド／常総学院応援団

『つくばバレー街道』
～　全ての道はバレーに通ずる　～

グルメストリート／商い横丁／Jump to the world／インカレ広場／街角演奏／インカレゲート

『つくばサイト』
～　みて みて わかる!　新たな魅力　～

つくばの Sports、Art、Town のパネル展示

3）「歓待と趣向」

ここでは、来場される方々をレセプトし、「娯楽」と「教養」の双方でそのサービスを提供した。キーワードは「ホスピタリティマインド」の魅力である。「娯楽」としては、東西インカレを通して出会うこの「時」を大事に、「邂逅」と称して選手、市民、スタッフ自由参加型のパーティを催した。一方「教養」としては、筑波大学、つくば市の知的財産を駆使し、「アカデミック」な催しと「アスレチック」な催しの両方を提供した。以下、そのプログラムとなる。

『Let's more Enjoy 東西インカレ！』
～つくば市・筑波大学が贈る「交流と教養」のひととき ～

東西インカレ KIDS'バレーボール交流会
－スタッフが心を込めて KIDS に贈る最高の思い出!－

つくばアカデミックフォーラム
－夢と魅力の溢れるまちづくりを　Sports, Art, Life の融合から　－

『レセプションパーティー』
～邂逅の魅力・・・presented by Tsukuba hospitality ～

大会参加選手、V リーグ選手、
一般市民、出演団体、スタッフ全参加
／井坂斗絲幸社中筑波大学津軽三味線倶楽部無絃塾／筑波大学ダンス部

Ⅱ．2004 東西インカレ実行委員会設立からの経緯

原稿作成者　小野智史

【１】「後始末」と立ち上げ―――**「継」**

2003 年 11 月中旬から「2003 東西インカレ」シャットダウンのための「後始末」が始まった。これは「2004 東西インカレ実行委員会」の立ち上げと、軌を一にしていた。「2003 東西インカレ」を反省し、資料を整理し、残された資源が何であるかを明らかにしていく。それを「2004 東西インカレ」の企画につなげていくのである。この役割を担って招集されたのが「CWG（コアワーキンググループ）」であった。

12 月にリサーチ結果の集計や、資料整理があらかた終わる。平行して「2003 東西インカレ報告書」の配信も行われる。この配信が終わったのはなんと 12 月 25 日であった。2003 の呪縛から解放された気がした。と同時に、というよりも木々が極寒の季節に芽吹きの準備をするようにすでに 2004 東西インカレの準備は進んでいたのである。12 月終わりの第 4 回 CWG で東西インカレの 3 カ年計画が話し合われ、年明けに企画とマニュアルを作成していくことが決められた。CWG はある意味ここで消滅し、以後サミットカンファレンスと呼ばれる 2004 を意識した EP、事務局員と局長のミーティングに移行した。

【２】組織作り―――**「築」**

2004 年に入り、3 ヵ年計画、持ち込み企画、組織図、各部署マニュアルが作られていく。組織図を考えるにあたり、各部署のネーミングでもめた。結果、「局－部－プロジェクト」制が承認される。プロジェクトに関してはそのまま「プロジェクト」となった。

2003 東西インカレは部署名の不統一が混乱を招く場合があった。今年度は結果として局、部、プロジェクトが定着し、わかりにくいという声は聞かれなかった。

1 月末から各局マニュアルが提出される。それぞれの局で素案を作り、EP にチェックを受け、サミットカンファレンスで最終的に調整を行って承認を得るという手順であった。

2 月に入り、各局マニュアル案が提出される。何度かの修正を加え、6 局分のマニュアル完成版がそろうのは 3 月も 29 日であった。

実際は、この後、マニュアルがすべてではなく、様々な決まりが不成文として誕生し、そのまま定着していくことも多かった。

同時進行でプロジェクトが確定し、リーダーが決まる。6 局-9 プロジェクト組織の大枠が決定した。2 月中旬から 3 回に分けて「スタッフプレゼン」（スタッフ募集のための説明会）を行う。東西インカレの理念や目的、何ができるかというプロジェクトの野望が語られ、参加希望者にどのように関わりたいかのアンケートがとられた。スタッフ調整ミーティングで参加希望者をドラフトした。

【３】企画の充実―――**「創」**

3 月にはいる。プロジェクトの動きが活発化する。アンケートによる希望者を取り込んで、プロジェクト企画立案が進む。「リーダーズミーティング」（プロジェクトリーダーと事務局員による情報伝達の場）が開かれる。この後、局長を含めた拡大サミットカンファレンスを経て常会のサミットカンファレンスに吸収されていくのだが・・・また 3 月下旬、学生とアドバイザー等の意思疎通を図るゼネラルミーティングが市や商工会と 2 回に分けて行われた。

4 月 20 日に第 1 回総会が行われた。4 月前半は総会のための準備に追われた。全てのプレゼンがパワーポイントであったため、準備が大変であったのを記憶している。また資料作りも深夜に及んだ。

今後、この体質は続く。総会に備えた資料作りが大きな負担になった。まず各部署からの提出の遅れ、チェックの不徹底、量自体の莫大さが原因である。

総会後第 1 回の「やれやれタイム」（飲み会）があったことは想像に難くないだろう。総会後、実際のワーキングが始まっていく。

5 月。それぞれの局、プロジェクトに別れ、PR や対外交渉、必要物品の準備などが始まる。また企画の具体的内容をつめる作業をした。当面の目標は主にポスターとチラシの内容を作ることと、総会（中間報告会）のためである。5 月下旬にチラシとポスターが完成し、即配布となる。筑波大学春季スポーツデーにも「東西インカレ部」「東西インカレ事務局」が参加し PR 活動を行った。

ドッチボール大会、ソフトバレー大会で優勝し、２種目制覇を達成した。（＾＿＾）V

【４】実働期―――**「動」**

6 月 2 日第 2 回総会が行われ、中間発表が行われた。「OFFICIAL DESIGN」をもとに各局、各部の進行状況が発表された。各局、各プロジェクトで大変忙しそうになる。6 月末のオペレーションマニュアル完成に向けての準備が始まるからである。当日を意識することで組織の改編が行われ、

準備段階から当日モードへと劇的に変化した。この時期のそれぞれの部署の活動については後述の報告書をご覧頂きたい。

6 月 25 日第 3 回総会が行われ、参加者全員が集うよう準備した。オペレーションマニュアルにそって全体の説明がなされたあと、各部署に分かれての読み合わせをした。

第 3 回総会から当日までは大会当日の動きを徹底的に把握するための小単位のミーティングが奨励された。またリハーサルが行われた。

【5】発表し魅了する―――**「表」**

7 月 8 日。必要物品の積み込みが始まる。

7 月 9 日。カピオに搬入。会場準備が行われた。今でもこの日、スタッフがどんな顔をしていたか克明に思い出すことができる。悲壮な顔といったらいいのか、疲弊しきった顔といったらいいのか、「準備してあるはずのものがない」「そんな話は聞いていない」「わからない」の連続だったらしい。夜の「ディレクターズミーティング」（当日の指揮者による打ち合わせ）は重い雰囲気であった。しかし不安と疲弊の裏側に明日への自信も多くの人が感じていた。

7 月 10 日 11 日。「2004 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば」が盛大に開催された。

11 日夜は裏レセプションパーティーで「うまい酒」を感動と達成感を肴に全身に浴びた。

【6】反省と来期への助走―――**「蓄」**

7 月 12 日 13 日をかけて後片づけを行い、研究室の清掃も行った。15 日には報告書作成の検討会が持たれ、2004 東西インカレをどうシャットダウンするか決定した。この後 3 回にわたって反省会サミットカンファレンスを開き、東西インカレに対しての来期につながる反省を話し合った。アドバイザーを招集しての反省会も行った。リサーチによる調査結果とこれら反省会の資料を用いて報告書用資料を作成し、9 月上旬に完成させる予定となる。

9 月 27 日には「インカレ報告会」が企画されている。

Ⅲ　東西インカレ過去の軌跡

原稿作成者　伊藤健士

2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば

Result

最終結果

優勝	筑波大学
準優勝	大阪商業大学
３位	東海大学

個人賞

スパイク賞	金子　隆行（３７）	東海大学
猛打賞	柴田　恭平（１）	筑波大学
猛打賞	吉田　譲　（１）	大阪商業大学
ブロック賞	鈴木　健太（１４）	東海大学
サーブ賞	堤　政博（２１）	東亜大学
レシーブ賞	吉田　譲　（１）	大阪商業大学
セッター賞	日下　慎吾（５）	筑波大学
リベロ賞	勝野　裕士（８）	筑波大学
優勝監督賞	都澤　凡夫	筑波大学
最優秀選手賞	柴田　恭平（１）	筑波大学
観客投票賞	吉田　譲　（１）	大阪商業大学
観客投票賞	柴田　恭平（１）	筑波大学

Result

東西の強豪チームが集い、日本一の栄光をかけて戦う。2003 年 7 月 12、13 日の両日、つくばカピオを会場に東西インカレバレーボール男子決定戦が行われた。

第１日目は、郷土芸能今宿太鼓の勇壮な音色で幕をあけた。オープニングセレモニーに続いて、つくば市バレーボール連盟に所属するママさんたちのエキシビジョンマッチが行われた。

午後からは準々決勝が行われた。東日本２位の筑波大学と東日本３位の法政大学が対戦。キャプテン鈴木寛史を中心に猛打で果敢に攻める法政大に対し、筑波大は着実な１本を積み重ね、３－０で法政大を下した。

続いて、東日本１位の東海大学と西日本２位の大阪商業大学の準決勝が始まった。全日本メンバーの阿部裕太が率いる東海大は、東日本インカレ 2 連覇を決め抜群のチーム状態に見えた。だが、大商大のキャプテン吉田譲の時間差攻撃に苦戦。大商大の勢いの前に惜しくも敗れた。

続いて準決勝２試合目が始まった。西日本１位の東亜大学と準々決勝を勝ち抜いた筑波大学の対戦。東亜大は安定した堅実なプレーを続けたが、筑波大のパワーにおされ、十分な実力を発揮できずに敗れた。

試合終了後にはホテル東雲へと場所を移し、レセプションパーティが行われた。出場選手やスタッフだけでなく、たくさんの観客が参加し、選手との交流のひとときを楽しんだ。

2 日目の午前中は、筑波大学男子バレーボールの都澤凡夫監督を講師に迎え、ジュニアバレーボール交流会が開かれた。

続いて東海大学対東亜大学の３位決定戦が始まった。ここでは、東海大が昨年度優勝校の意地を見せつけストレートで東亜大を下した。

部旗を先頭に筑波大学、大阪商業大学、両チームの選手がコートに走りこんでくる。優勝決定戦が始まった。会場は立ち見が出るほどの多くの観客で埋まり、熱気がコートを包んだ。

第１セット、大商大のキャプテン吉田譲のジャンプサーブが次々に決まる。筑波大はキャプテン柴田恭平が奮闘するも流れに乗り切れない。大商代が 2 セットを先取した。だが、地元の応援を受けこのままでは負けるわけにはいかない筑波大学は、土壇場で「筑波らしさ」を取り戻した。石島雄介のサーブポイントでゲームの流れを掴むと、柴田が確実にスパイクを決めていった。波に乗った筑波大が３，４セット目を連続で奪い、勝敗の行方は最終セットまでもつれこんだ。
迎えた最終セット。柴田が強烈なスパイクを決めれば、吉田が奪い返す。一進一退の攻防が続いたが、石島のブロックが吉田の渾身のスパイクを止めると、一気に流れが傾いた。大商大は筑波大の勢いを止められず、試合終了。会場を「筑波コール」が包んだ。地元の応援をうけた筑波大学が見事優勝を手にし、２００３年の東西インカレは幕を閉じた。

第二章　事務局運営

Ⅰ　組織運営体制

原稿作成者　松田裕雄

【１】　目的・方法

2004 東西インカレ実行委員会では、「企画を活かす企画」、「小さなチームの集合体としての大きな主体的なチーム」、これらをチームづくりにおける大きな目的として組織編制と情報処理編成とを行ってきました。

その為の方法として、まず年間計画は、１２月、１月に実行委員会の運営そのものの円滑化を図るための環境整備、２、３月でスタッフ募集、説明会開始、４月に第一回総会（大会グランドデザイン発表）、５月に第二回総会（中間報告会）、６月に第三回総会（当日運営促進会議）、という大きな流れで行っていくものとしました。一方、週間計画としては、週に１日のペースで「サミットカンファレンス」を開催し、各局、各プロジェクトのディレクター、リーダーを集めて情報交換及び意思決定を行ってきました。その他の大学外後援組織や、各プロジェクトにおけるミーティングは、そのリーダーの裁量で行いました。

このような運営方法を取り、実際に上記組織体制になったことの背景として

(1)事務局は，実行委員会全体における「人、モノ、カネ、情報」の最高統括機関として位置づけ、全体としての動き、全体としての体裁というものと常に向き合う組織として実行委員会の中核を担う存在であると考えたということ。

(2) そして事務局が最大の情報発信源として、３回の総会の開催マネジメント、ほか全ての大元の運営ミーティングのマネジメントを手掛け、全ての情報を管理･統括する機関であると考えたこと。

(3)これにより、以下５局、主に制作全般を担う「プロクション局」、広報･宣伝全般を担う「PR 局」、競技全般を担う「アスレチック局」、各種イベント全般を担う「プロジェダクト推進局」、そして大会当日の運営マネジメントを担う「大会運営局」、これらの「人･モノ･カネ･情報」が、事務局を基締めとして機能すべきであると考えたこと。

以上のような経緯からこのような組織編制を行った。但し、ここでは事務局が具体的にこれを遂行する為にどのような方法をとったかということについては後に触れられているために、ここでは言及しない。

【２】　結果・考察

このような意図で編成された実行委員会組織体制が実際にどのように機能したかについて。まず、「カネ・モノ」に関しては準備段階では特に停滞することなく促進された。(この辺はツールシートが大いに活躍したと考えられる）しかし、当日の運営段階になった時に、物流・運搬におけるリーダーやワーキングが、大会運営局にもなく、役職がかぶるどころか、全く不在になってしまうという盲点があった。このことに関しては、後の章で大会運営局側からも具体的に言及される。

一方「人」に関しても、ツールシートが大いに役立ち、各プロジェクトは更新されるたびにそのリストを提出し、誰がどこでどのようなワークをしているのかは大体把握できる状態にはなっていたといえる。又最も機能していたのは、スタッフ募集であったといえる。スタッフ募集の説明会から募集決定に至るまでの段取りが、非常にスムーズにいっていたことは大きな成果であったといえる。しかし、大会運営局を中心とした組織再編成の際に、多様な外部（ゲスト、ビジター、出演団体、選手、スポンサー等々）の種類に対応しきれず、当日、対応を実際に行う大会運営局の担当者に効率的にその情報を引き継がせることができなかった。これは、主に直前まで多様な外部の範疇化をしきれなかったことや次から次へと新しい名前等が急ぎ足で各方面から報告されたことが原因といえる。

最後に「情報」であるが、まずミーティング、総会等の事前準備については、ほとんど完璧に出来ていたといえる。若干他のプロジェクトや局で要人が追加されていたにも関わらず連絡不行き届きで、その情報が事務局に円滑に流れず、それが直前まで発覚しないという事態もしばしば見受けられた。しかし、それは大よそにおいてプロジェクトリーダーの報告ミスが多いといえる。

ここでひとつ言及すべきことがあるが、各プロジェクトリーダーにとっては、細かい報告というのは非常に厄介であり、いうなれば面倒であり、何か束縛されているような感に陥る。しかし、それは錯覚に過ぎないといえる。というのも、それは単にその報告や「情報」が具体的に何に「繋がる」のかということが見えてないだけに過ぎないからである。大元で動き、大きな情報をいたる範囲に、正確に、より早く発信することがワークとなっている事務局にとっては、そのひとつのミスが非常に大きな結果となって跳ね返ってくる。よって、このような大きな組織で情報を促進させていく際の、最初に

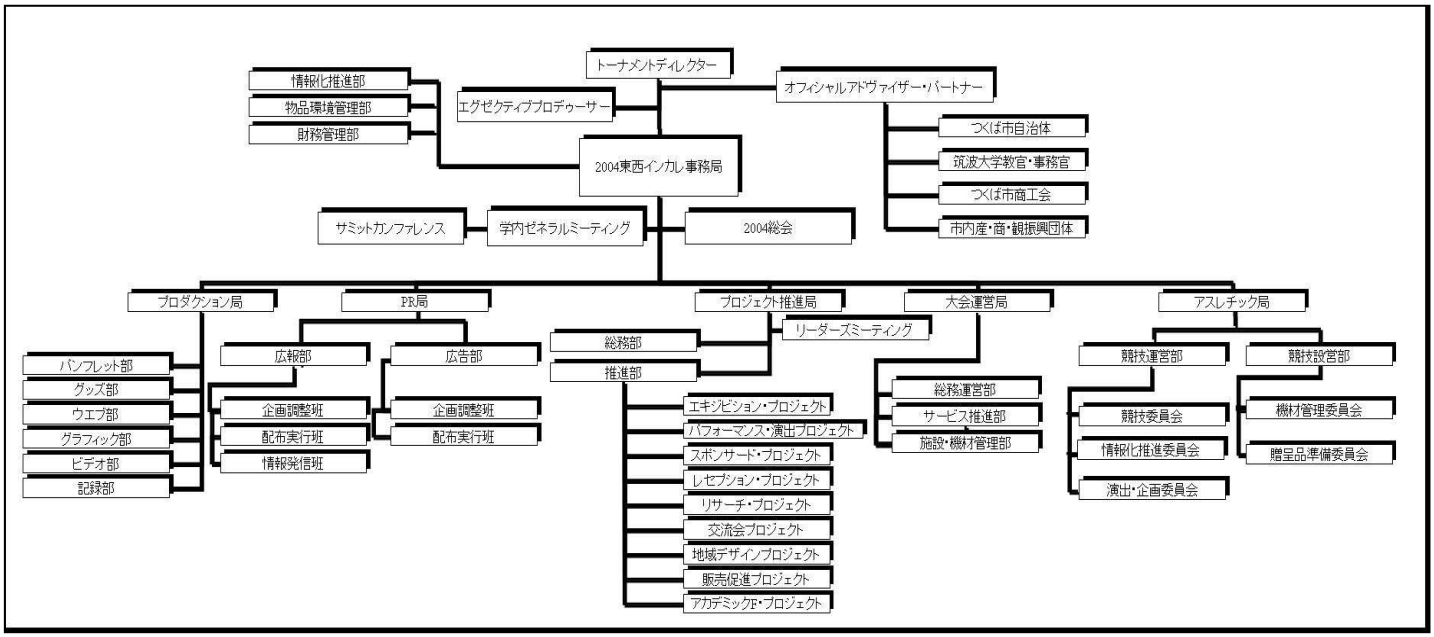
手がけるべきことは各リーダー格への教育ではないかと考えられる。これが組織運営におけるチームワークへと繋がるといえる。

そして「情報」に関して、反省すべき最大の点は、「情報を円滑に流通させるための手順」を考慮しなくてはならないということである。今回は、ひとつの団体、企業、大学、もしくはひとりの客人、要人に対し、実行委員会側の組織区分とワーク区分の都合で、そのワーク、プロジェクト、局ごとに、その必要性から独自にアクセスしようとしていた。しかし、そうすることで、逆に情報が氾濫、錯綜し、運営組織側にも、先方にも何が正しい「情報」なのかが最後まで見えなかったという状況が、多々として生まれていた。

小さい、一業務連絡的な「情報」から大会全体に関わる大きな「情報」まで、まずは窓口を一つにすることで、大方の「情報」を処理していうことがのぞましいと考えられる。(今回はそのために「マネジメントオフィサー」という役職を設置したが、基本的にはこれは内部の組織間での情報処理に留まる範囲であったといえる) そして、あくまでこうした手法をとっている過程において、その処理手段として、お互いが(実行委員会と交渉先)、これを専門的に処理する必要性があると判断した「情報」の場合に限り、これをお互いが同時にその専門窓口を紹介し、相互に「交換」をさせ、この結果を又最終的に大元の窓口に報告をするという手段をとるべきであると考えられる。

【3】　まとめ

組織運営を行っていく際には、バレーボールのチーム同様に、個を尊重し、その判断を重視しながらも、全体として同じ方向に向かって走り抜けていくことのできる質の高いチームワークが必要となってくる。「自由にやれる」、しかしその一方でその「自由」が他の仲間にどのような影響を及ぼしているのかということを常に察知しようとするアンテナを張っていかなくてはならない。そのような「責任」が、「自由」を与えられた、正にその時点で発生するのだということをリーダー格の人間は理解しなくてはならない。自分がいいカットを挙げていればそれでよいわけではない。自分が気持ちよく自由にスパイクを決めていればそれでいいわけではない。それがチームに何をもたらし、どう「繋がっている」のかということまでを見通す目をもって始めてチームの一員、組織のリーダーといえるのではないかと思う。このようなことをまずは「教育」していうことが、今後の情報処理をより円滑に、かつ効率的に行い、ひいてはスタッフのストレス緩和、時間の有効活用化を促す一番の早道になるのではないかと考えられる。



原稿作成者　小野智史

【１】目的・方法

（１）事務局の中心的な目的

2003 年 12 月、「2003 東西インカレ」をシャットダウンした後、「2004 東西インカレ実行委員会」が立ち上がった。2004 年度は人、物、金、情報の有効活用をめざして「事務局」を置くことが決定した。東西インカレ事業において、限られた資源を如何に活用して最大の効果を生むかを計画し、実行していくのが事務局の目的であった。

（２）実現への方策

これを実現させる方法として①事務局マニュアルに沿って、②ツールシートを使い、③MO（事務局とプロジェクトをつなぐパイプ役）が事務局員とリーダーを助けるというシステムを考案した。以下の模式図を参照されたい。

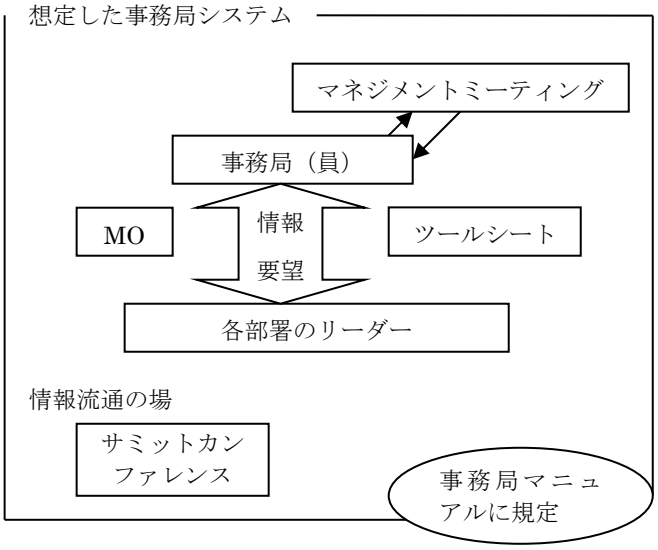


図１　運営計画模式図

事務局内の組織は人、物、金、情報という運営に共通して必要な資源にあわせて３つの「部」を置いた。情報化推進部、物品管理部、財務管理部である。

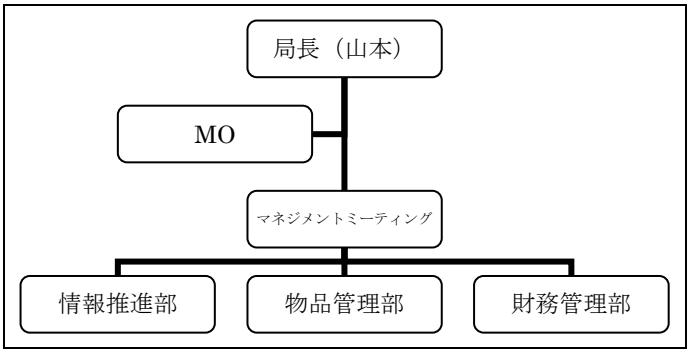


図２　事務局内部組織図

また事務局の役割として実行委員の負担感を軽減し、人と人のつながりを深める必要を感じたため「やれやれタイム」を設定した。目的はくつろぎ、なごみ、リフレッシュである。①「夜遅くの作業が続いたときなど、積極的に休憩を取り、一息つくようにしよう」、②「大きな仕事が終わったときは飲み会をしよう」③「誕生日の人を祝おう」などという計画で、実行委員にやれやれとした時空間を演出する試みだった。

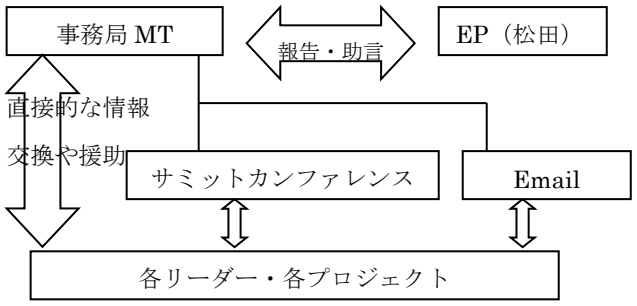
【２】結果

（１）運営の軌跡

2004 年１月に事務局員と役職が決定した。2 月 3 月でマニュアルを制作し、4 月からマニュアルに沿ってミーティングや事務処理を進めた。5 月の中ごろから事務局が機能不全に陥った。客観資料にも示されたように「特定の人に負担が集中する状態」が多く発生した。マネジメントミーティングも長期にわたり行われなかった。また事務局へのプロジェクトからの提出物が遅れることも負担を増大させた。この状態の打開のため 5 月 31 日に「事務局ミーティング」を開始し、以後定期開催した。事務局内での情報の共有を徹底するようになった。6 月 7 月は実行委員会全体の情報の流通が問題となった。客観資料に多くの指摘がある。事務局としてはこの問題を認識していたが、効果的な解決策は打ち出せなかった。6 月 25 日の第３回総会終了後、事務局は大会運営局に吸収され、大会当日の役割に携わるようになった。

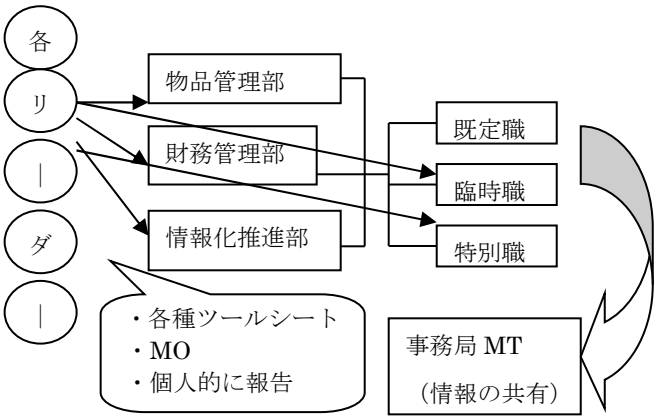
（２）概要

事務局マニュアルは徹底されなかった。読んでいないスタッフが多かった。しかしツールシートや MO システムはマニュアルを無意識にかつ独自に改良する形で定着していった。事務局内の組織も局員が必要な役割を見つけて「臨時職」や「特別職」を形成していった。企画段階で明確になっていなかった事務局の位置付けも作業をしていく中で形作られた。以下の３つの模式図を参照されたい。



※図のように各リーダーからの情報を直接、又はサミカン・Email などを通して把握し、事務局 MT で共有した。

図３　実行委員会全体の把握システム



＊臨時職・・・総会の担当、飲み会幹事 etc

＊特別職・・・鍵当番、資料印刷係 etc

※図のように既成の部を越えて役割が発生し、臨時職や特別職で対応した。事務内容はルールシートの集計を基に事務局 MT で共有した。

図４　事務処理システム

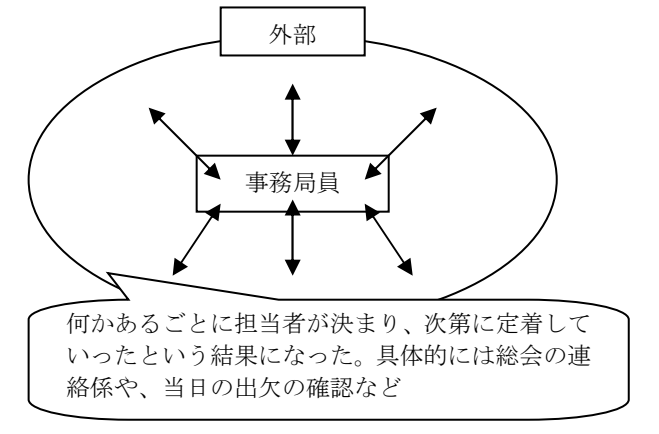


図５　外部連携システム

（３）客観資料から

スタッフアンケートの結果を見てみると「準備段階の運営体制や運営環境は適切だったか」という質問に対して 52%の人が肯定意見である。しかし 28%の人が否定的な意見である。反省会サミットカンファレンスでの意見では情報の流通に対する問題点の指摘が圧倒的に多かった。

（４）「やれやれタイム」について

全総会後に 3 回、5 月のスポーツデー後に 1 回、6 月中に 1 回、東西インカレ当日の夜に 1 回で計 6 回の懇親会を持った。平均して 15 名前後の人数が集まることが多かった。大会当日夜の打ち上げには 107 人程度が参加した。不定期に誕生会も行った。ミーティングが長引いた場合の積極的休憩はあまり設けられなかった。

【３】考察

「事務局はよくやった！いなければ組織が成立たなかった。」という言葉が反省会サミットカンファレンスで承認された。事務局はその役割を果たすことができたのである。人、物、金、情報の有効活用のため事務局を置いて、統括するというシステムは成功したといえる。しかし準備段階の運営体制や運営環境は万全であったといえないことがアンケート結果や反省会の指摘から読み取れる。実現への方策を修正していく必要がある。

そこで実現への方策について考察を加える。

① 事務局マニュアルについては、マニュアルの内容を徹底できなかったが、定着し、よりどころになっていた。改良して、「特別職」をできる限り減らすことで、もっと仕事が明確になり、有効活用できると思われる。

② ツールシートは情報共有の媒体として優れていた。ただ提出方法や期限を守ってもらうための工夫をしていく必要がある。細かい修正案については事務局内の各部に任せる。

③ MO システムはもっと MO の役割を明確にし、専任の MO を置くべきであった。パイプ役として機能したときは事務局としてもプロジェクトとしても効果的だった。

④ 「やれやれタイム」は客観的な考察のための資料がないので主観的になるが、連帯感をもち、人と人がつながるためには重要だと考える。

【４】まとめ

事務局体制の今後の方針は、今年度のマニュアルやシステムを改良しつつ、情報流通の一層の充実を図ることである。できるだけ「特別職」をなくし、事前に仕事の内容がイメージできるようにしておく必要がある。これらの具体的改良の方針については以下の事務局内の各部に委ねることとする。

Ⅲ．実行委員統括体制

≪１≫情報流通体制

原稿作成者　矢沢智子

【１】　目的・方法

事務局情報化推進部では、ヒト、モノ、カネ、情報の流通がスムーズに行われることを目的とし、内容を人事、情報の二つに大きく分けることとした。運営を行う上で、情報化推進マニュアルを作成し、このマニュアルをもとにして進めていくこととした。内容は以下の通りである。

（１）　パソコン、携帯電話、各種資料提出用 BOX の管理
（２）　スタッフ募集、スタッフ名簿管理
（３）　スポンサー・関係者管理
（４）　ミーティング管理
（５）　問い合わせ対応
（６）　全体スケジュール管理
（７）　各種文章フォーマットの作成
（８）　各種ミーティング議事録作成、記録管理
（９）　大会終了後の報告書作成
（10）　ツールシート作成、管理

これらが情報化推進部で実行していこうと考えていた内容である。詳しい内容については結果に記載するので省略する。

今回大きな役割として事務局に位置づけたのは、マネージメントオフィサー（通称 MO）とツールシートである。

マネージメントオフィサーは言わば事務局と各局・プロジェクトとのパイプ役になる人、ツールシートはヒト、モノ、カネ、情報のよりよい流通を目的として事務局が各局・プロジェクトに提出してもらうことを目的とした８種類のシートである。

【２】　結果

まず、目的における、各項目についての結果をあげていこうと思う。

（１）ユナイテッドの携帯電話は３台なので、連絡が集中する時期に使用したいという人は貸し出し名簿に記入し借りていく、という形をとった。BOX に関しては、各種資料の提出、保管に重要な役割を果たしたと言える。大会に関する FAX の管理も BOX を使って行なった。

（２）2/19 第 1 回スタッフプレゼン（体育会男女バレーボール部

2/21　第 2 回スタッフプレゼン

2/24　第 3 回スタッフプレゼン

以上３回のスタッフプレゼンを開催、人事調整を行なった後、ワーキングを開始した。

4/28　第４回スタッフプレゼン

第４回は、集中授業の説明を兼ねて行なった。2004 東西インカレは昨年と異なり、『バレーボールイベントの企画・運営』という２単位の授業として認められた。この授業に関しては、大会の運営に参加すること、大会終了後に報告書、またはレポートを提出することで単位を取得できるものとした。

第４回が終わった後、再度人事調整を行い、人員不足な局に新たなメンバーに加わってもらった。

各局・プロジェクトごとに増えたメンバーに関してはスタッフメンバーズシートに記入し、提出してもらうことにより情報化推進部で全スタッフを把握した。

（３）スタッフ管理と同じく、パートナーズシートに記入、提出してもらうことによって把握。

（４）サミットカンファレンス、ゼネラルミーティング、総会、以上３つの三大ミーティングに関しては、事務局がセッティング、管理を行なった。サミットカンファレンスは事務局、ディレクター、リーダーが参加。週に１度、毎週水曜日の夜に定期開催。ゼネラルミーティングはアドバイザーの方や大学関係者の方を含めて行なうものであり、総会は関係者全員が参加するものとした。

各ミーティングに関して行なったこととしては、各関係者への連絡、時間・場所の決定、教室の予約、鍵の管理、内容の検討、資料準備、司会進行、議事録作成などである。大学内外のアドバイザーの方には、電話連絡の後 FAX で案内状などを送付した。大学外の方は駐車場を使用する場合が多く、駐車場の手配も行なった。これらの三大ミーティングのほか、各局・プロジェクトのミーティングでも会議室を使用することが多かったため、会議室の予約、鍵の管理は一括して情報化推進部で行なった。会議室の使用頻度や鍵の返却などに関して検討すべき点があると思う。

（５）当初は各局・プロジェクトごとに携帯電話をもつなどして、問い合わせが事務局に集中しないようにすることを目的としたが、携帯電話を各部署がもつようにすることはできなかった。しかし、問い合わせが殺到するということはなかった。

（６）ワーキングスケジュールシートを提出してもらうことによって、各部署の大まかなスケジュールを把握。全体的な

スケジュールについては研究室に設置したホワイトボードを活用した。

（7）マニュアルの段階で、各文書のフォーマットを作成し、各部署に配布、それを参考にして文書を作成できるようにした。

（8）三大ミーティングではパソコンによって議事録をとり、データとプリントアウトしたもの双方を記録として保存した。

（9）大会終了後に報告書作成委員会を作り、報告書作成にあたった。

（10）ツールシートは全部で８種類、シートは以下の通りである。

①スタッフメンバーズシート　－情報化推進部
　スタッフの名簿、連絡先

②パートナーズシート　－情報化推進部
　関係団体の名簿、連絡先

③オーダーシート　－物品管理部
　物品の一括申請

④予算・決算シート　－財務管理部
　予算シート：予算案
　決算シート：実際の支出、領収書

⑤ワーキングスケジュールシート　－情報化推進部
　今後のワーキングスケジュール

⑥デザインシート　－情報化推進部
　各局の企画案、デザイン

⑦クライアントシート　－プロダクション局
　プロダクション局への依頼

⑧PR ルートシート　－PR 局
　自分たちで可能な PR ルート

以上のシートを必要に応じて提出してもらい、事務局でさまざまな情報を一括して管理した。提出はマネージメントオフィサーを通じて行う予定だったが、今回は徹底できなかった。

最後に、マネージメントオフィサー（以下MOとする）についてである。事務局でMOという仕事を設けたのは、事務局で決定した事項について、より早く確実に各部署に伝え、事務局と各部署のスムーズな情報の共有を行うため、言わば事務局と各部署のパイプ役を担ってもらうためである。しかし今回は仕事の役割が明確にならず、MOの人数も少なかったため、徹底できなかった。MOがいない局に対して、他の仕事と両立しながら事務局のメンバーが分け持つのも不可能であった。しかしだからと言ってすべてが悪かったわけではない。MOがいる局は、ツールシートの提出を行ったり、各部署への連絡事項を伝えたり、提出物の催促などを行うなど、役割を果たしてくれた。

【３】　考察

今回、情報の共有が最大の課題として残った。事務局として、全体の情報を扱う部署として、来年に向けて改善していかなければならない点は多々あると思う。

スタッフ内部だけでなく、外部で関わってくださった方や団体に対する連絡の仕方や情報のやりとりに関しても反省があがっている。今年は内部で窓口をひとつに統一するということが徹底できず、連絡が行き届かなかったり、二重にいってしまったりした。失礼のないように来年は改善していかなければならない。また、大会終了後の反省会で、スタッフ内の連絡用に全体の ML があってもいいのではないか、という意見があがっていた。昨年の反省から、今回は全体の ML はなくし、内部の連絡はディレクターやリーダーを通しておこなったが、当日が近づき所属が変わったり、複数の局に所属している人が多かったり、当日スタッフへの連絡が行き届かなかったりと、今回も連絡の取り方に関して全く問題が起きなかったわけではない。どういう連絡の取り方がベストなのかは、今後検討が必要だと思う。

また、MO に関しては、今回初めてできた役職だったため、本人も周りも MO の役割を完全に理解することができていなかった。しかし、組織が大きくなっていく中で、事務局と各部署のパイプ役となる人の存在は非常に重要だと思う。今年の反省を生かし、来年 MO という存在がしっかり定着すればいいと思う。

【４】　まとめ

事務局情報化推進部では、実行委員会全体の情報流通がよりスムーズに行われることを目指して、準備段階から動いてきた。ツールシートや MO など、今回初めて行なったことに対しても、反省点はあがったものの、次年度に向けて改善していくことでよりよい情報流通が行える手ごたえを感じた。

今回、全ての局やプロジェクトで反省点やそれに対する改善点などを報告書やマニュアルといった形にまとめている。今年はこれらを次の年に確実に生かし、事務局であがった反省も、事務局だけに留まらず実行委員会全体に反映できるようにしたい。

≪２≫　サミットカンファレンス

原稿作成者 羽田野真帆

【１】　目的・方法

①情報の共有と②大会全体に関わる事項を議論することを目的として、サミットカンファレンスを定期的に開くことにした。とくに、①の目的を達成するため、各部署のリーダーか代理の者が必ず出席することとし、また、毎回議事録をとり、欠席したリーダーにはメールで送るなどして、必ず目を通してもらうようにした。

【２】　結果

2003年11月　日の第1回目から大会終了後2004年8月4日の反省会サミットカンファレンス（全3回）まで、臨時のものも含めると、全31回のサミットカンファレンスが開催された。時期によって、参加者や、話し合いの内容が変わっていった。

（１）　第1期：実行委員会設立当初

第1回（11／　）～第5回（1／17報告会終了後）

→報告会兼結成式（1／17）

大会理念や運営方法など大きな枠組みについて議論する場としての意味を持っていた。12名のコア・ワーキング・グループ（CWG）で、企画書を持ち寄って、それをもとに議論するという形で話し合いが進んだ。それをもとに、2004東西インカレのグランドデザインを作成し、2003東西インカレ最終報告会兼 2004 東西インカレ結成式において、アドヴァイザーの方にご意見をいただいた。ここまでが、第1期である。

ちなみに報告会終了後、CWG のメンバーで部署や役職の名称について激しい議論となったのだが、この第5回サミットカンファレンスが全 31 回の中で熱い議論 BEST1であったと思う。今となってはいい思い出である。

（２）　第2期：第6回（1／21）～第8回（2／18）

徐々にコア・ワーキング・グループの人数が増えていった時期。ちなみに、大会運営局局長の伊藤、アスレチック局局長の田仲、事務局の矢沢は第2期からの参加である。

この頃から6つの局（第2期当初は5つの局だったが、マネジメント局が事務局と大会運営局にわかれたため、6つになった）にわかれ、CWG のメンバーはそれぞれのディレクターやリーダーとなる。スタッフが入って来る際、ワーキング内容を理解してもらい、その後のワーキングをスムーズに進める目的で、局ごとにワーキングマニュアルを作成した。それと平行して3回のスタッフ説明会を行い、希望をもとに人事調整ミーティングをした。ここまでが第2期である。

（３）　第3期：第9回（3／9）～第13回（4／14）

→第1回総会（4／20）

第9回からプロジェクトリーダーが参加するようになる。第10回からは出欠表で出欠を確認し始めている。また、春休み終了後の4月8日から、毎週水曜日の定期開催となった。議題は、各局のワーキングマニュアルの読み合わせやプロジェクトの発表、ツールシートの提出・検討などである。各部署の企画書をまとめたグランドデザインを作成、4月20日の第1回総会で発表した。この時点ではすでに、プログラムの原案も完成している。

（４）　第4期：第14回（4／21）～第19回（5／26）

→第2回総会（6／2）

このころになると、各部署の進行状況の報告、事務局からの連絡が主な内容となった。各部署のチーフも参加するようになり、毎回25～30人が参加していた。

この段階での企画内容を OFFICIAL　DESIGN にまとめ、6月2日の総会で発表、アドヴァイザーの方よりご意見をいただいた。

（５）　第5期：第20回（6／9）～第22回（6／23）

→第3回総会（6／25）

第5期は、オペレーションマニュアルの作成とそれにかかわる各部署の進行状況の報告が主な議題であった。準備2日間＋当日2日間の運営体制も決定し、準備段階の組織体制から当日運営組織への移行の時期であり、最も混乱が生じやすい時期でもあった。

各部署からの連絡が多く、印刷物の準備で開始時刻が遅れることが目立つようになったため、配布資料を事前に提出してもらい事務局で印刷を一括して行うことにした。これにより、無駄のない裏表印刷を徹底できるようになり、資源の節約にもつながった。

また、第21回からは議論が無駄に長時間化することをさけるため、論点を整理する黒板書記係（浦田）をつくった。

（６）　第6期：第23回（6／30）、第24回（7／7）

実施運営体制ミーティング（全3回）

第6期のサミットカンファレンスでは直前の確認をおこなった。第 23 回はオペレーションマニュアルの確認をし、第

24 回は翌日の準備についての確認がメインであった。全 3 回の実施運営体制ミーティングは、その日の変更点の確認を目的として行った。

第 23 回からは、当日実施運営組織の各リーダーも参加したため、最大 33 人の参加者となった。

（7） 場所と時間について

サミットカンファレンスは通常、体育科学系棟の B323 会議室で行われた。Web で予約し、事務局のスタッフが交代で鍵を借りに行った。

バレー部や同好会の練習が終わったあとでないと全員が集まれないため、22:00 から始まることが多かった。翌日授業もあるため、できるだけ早く終わることが理想だったのだが、２時間以上かかってしまうことが多かった。

【３】 考察

サミットカンファレンスは各部署の代表が集まる唯一の機会である。したがって連絡事項も多くなるが、いかに情報の共有を徹底できるかが課題であった。スタッフの集中力を考えて、できるだけスムーズな進行をめざしたが、当初は開始時刻が遅れることも多かった。事務局で話し合いを重ね、試行錯誤しながら理想の運営に近づけることが出来たと思う。

【４】 まとめ

来年も、サミットカンファレンスは定期的に開かれる必要があるだろう。週に一度、遅い時間のミーティングはスタッフにとって負担が多いのも事実だが、情報を共有するためには必要不可欠であり、体育会バレー部、医学バレー部、バレー同好会のメンバーが多い現状では、ほかの時間に開くことは不可能である。そのため、いかに無駄をなくし、スムーズに進行できるかがやはり重要となる。

来年は今年の実践をいかし、さらに運営方法を工夫していってほしい。

≪３≫スタッフ説明会

原稿作成者 羽田野真帆

【１】　目的・方法

事務局情報化促進部では、①能力・情熱を持った人材の発掘、②全学の様々な専攻の学生のとりこみを目的として、スタッフ説明会を企画した。昨年は、筑波大学内のバレーボール関係団体を中心として、人のつながりでスタッフが集まったが、今年はさらに広い範囲からスタッフを募るため、全学にポスターを掲示し、スタッフ説明会の開催をアピールした。

【２】結果

以下の日程で、スタッフ説明会を４回にわけて実施した。

（２月 18 日(水)20:00～　:　体育会男女バレー部対象）

①　２月 21 日(土)21：30～

②　２月 24 日(火)13：30～

③　４月 28 日(水)18：30～

（『バレーボールイベントの企画・運営』履修説明会）

（１）　説明会概要

2003 東西インカレの様子をビデオで見てもらった後、各局、各プロジェクトのワーキング内容を説明。最後に希望調査アンケートに記入してもらった。そのアンケート結果をもとに、人事調整ミーティングを行い、スタッフの所属を決定した。

（２）　参加人数→スタッフとして参加した人数

①　23 人→20 人

②　18 人→16 人

③　15 人→10 人

説明会に参加した 56 人中 45 人が実際にスタッフとして活動した。つまり、スタッフ 170 名のうちの 26%が説明会を通じて東西インカレに関わったことになる。

以下は、スタッフになった経緯別のグラフである。

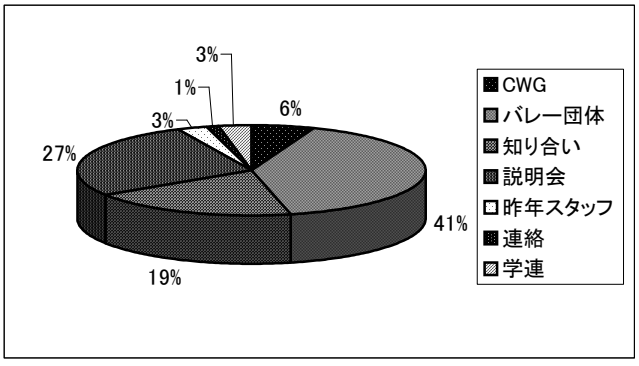


図１　スタッフになった経緯

図１を見ると、バレーボール団体に属している人がスタッフになることが多いことがわかる。また、もともとスタッフをやっていた友人に誘われた、という人も多い。スタッフ説明会でも説明会の存在を知った経緯を聞いたところ、友達の紹介で知った人が多かった。このように、基本的には、昨年同様、人のつながりにより集まった集団であったといえる。その中で、バレーの団体に所属していない人が多く参加したという点が昨年と異なっている点である。

（３）　スタッフの構成

表１　所属別スタッフの人数

所属先	人数	%	A
体育専門学群	30	17.8%	3
看護・医療科学類	18	10.7%	4
人間学類	17	10.1%	3
社会工学類	15	8.9%	4
医学類	14	8.3%	0
人文学類	9	5.3%	3
芸術専門学群	8	4.7%	3
自然学類	8	4.7%	4
生物資源学類	8	4.7%	0
比較文化学類	7	4.1%	5
工学基礎学類	5	3.0%	3
社会学類	5	3.0%	4
日本語・日本文化学類	5	3.0%	3
関東学生バレー連盟	4	2.4%	0
国際総合学類	3	1.8%	3
体育研究科	3	1.8%	1
教育研究科	2	1.2%	0
医療短期大学	1	0.6%	1
経営・政策科学研究科	1	0.6%	0
情報学類	1	0.6%	1
図書館情報専門学群	1	0.6%	0
理工学研究科	1	0.6%	0
生物学類	1	0.6%	0
その他（学外）	3	1.8%	0
合計	170		45

所属ごとのスタッフの人数とパーセントを出したのが前のページにある表１である。A はその中でスタッフ説明会にきて、スタッフになった人の数である。

これを見てわかるように、スタッフの所属は様々である。男子バレー部が参加している関係で、全体としては体育専門

学群生の多さが目立つが、スタッフ説明会から加入したスタッフに限れば、体育に偏ることなく、様々な学類の学生がいることがわかる。

（4）　スタッフの役職

スタッフ説明会を経て加入した45名のスタッフのうち、何らかの仕事においてリーダーやチーフになった人が 10 人いた。その他の人もMOやアシスタントリーダーなどを務めたり、何らかの役職につかったとしても、任された仕事をしっかりとこなすスタッフばかりであった。

【2】　考察

（1）スタッフになるきっかけ

今回、スタッフ説明会を開くことで、少しでも興味のある人が気軽に参加しやすい環境をつくることができたのではないか。バレーボールが好きで、東西インカレにも興味はあったけれど、昨年はどうやってスタッフになれるか知らなかった、という人もいた。また、バレーボールに興味があるわけではなく、このようなイベントごとに興味をもってスタッフ説明会の話を聞きにきてくれた人もいた。このように、当初の目的は達成されたといえる。ただし、全学にポスターを掲示したのだが、その数が限られているため、ポスターを見て来た人は思ったより少なかった。来年は、学内での広報の仕方にさらに工夫を加え、興味を持っている人に少しでも多く参加してもらいたい。

（2）スタッフの構成

これも、当初の目的どおり、さまざまな所属・専攻の学生に参加してもらうことができた。今回はいつも学生が専門に勉強していることや、ふだん活動していることがそのまま大会に生きた場面も多くあった。総合大学である筑波大学の特色をうまく生かすことができ、よかったと思う。

（3）スタッフの役職

この点に関してみても、十分に能力と情熱をもった学生を発掘することができたと感じている。はじめにアンケート調査をすることで、自分が興味をもつ部署で働くことができ、それがさらにやる気を引き起こしたともいえるのではないか。ただし、アンケート結果にこだわりすぎて、人員配置のバランスが偏ったことも否めない。全体と個人のバランスをとりつつ、人員配置をできなかったことが今回の反省点である。

【4】まとめ

今回、スタッフ説明会を開くことで、やる気のある人が早い段階で集まり、とてもよかったと思う。来年は、今回広がった輪がさらに輪を広げて戻ってくることも期待できる。個人的には、院生の方にももっと関わってもらいたい、と思う。学群生以上の専門知識を生かして、より質の高いプロジェクトが生まれるのではないか。

≪４≫総会開催

原稿作成者　山本三津子

【１】目的と方法

目的：2004 東西インカレ実行委員会の企画内容、進行状況を大学内アドバイザー、外部アドバイザー、全部署スタッフに向け発表する。また、意見交換を行う。

上記の目的を達成すべく、実行委員会発足当初より、第１回～第３回総会を以下の段取りで計画した。

（１）第１回総会(初期)

各企画の構想発表とスタッフ顔合わせ

（２）第２回総会(中期)

具体的な企画内容と進行状況の発表

（３）第３回総会(直前)

大会準備２日間、当日２日間の運営を潤滑に進める為の最終確認

【２】結果

（１）第１回総会

日時：４月２０日(火)　19:00～21:00

場所：筑波大学体育専門学群棟 51A01 教室

出席者：アドバイザー　38 名、スタッフ　76 名

配布資料：OUTLINE&GRAND DESIGN

(「2004 東西インカレ実行委員会」基本方針及び企画案等が掲載された冊子)

発行部数：190 部

各局ディレクター、各プロジェクトリーダーが基本方針及び企画を発表。その後、アドバイザー、スタッフとの意見交換が行われた。

（２）第２回総会

日時：６月２日(水)　19:00～21:00

場所：筑波大学体育専門学群棟 51A01 教室

出席者：アドバイザー　18 名、スタッフ　50 名

配布資料：OFFICIAL DESIGN

(OUTLINE より具体性を持った内容が掲載された冊子。)

発行部数：103 部

各局ディレクター、各プロジェクトリーダーが具体化された企画内容及び進行状況を発表。その後、アドバイザー、スタッフとの意見交換が行われた。

（３）第３回総会

日時：６月２５日(金)　19:00～21:00

場所：筑波大学体育専門学群棟 51A01 教室

出席者：アドバイザー　25 名、スタッフ　119 名

配布資料：公式オペレーションマニュアル

(当日２日間の動き、連絡形態が掲載された冊子。)

発行部数：250 部

当日スタッフも出席し、準備２日間、当日２日間の動きの確認。全体説明後、当日部署内にて個別ミーティングを行い、準備～当日の動きの確認を行った。

【３】考察

■準備段階

総会準備は事務局主体で行った。回を重ねる毎に運営がスムースになっていったと言える。次年度も主体は変更せずに開催した方がより効率的な準備進行が期待できるであろう。

■開催日程

前年度は準備期間も短く総会開催日程も全くゆとりの無い日程で行っていた。本年度はその反省点を踏まえ「余裕を持った日程で進めよう」という意識のもと、開催予定日を計画したが第１回目、第２回目ともに予定より遅れをとってしまった。これらの遅れは実行委員会自体の進行の遅れが影響したものと考えられる。第３回においては予定通り開催されたものの、資料作成の段階では時間の無い中開会時刻ぎりぎりまで作成し間に合わせた形になってしまった。資料作成日程と総会日程の調整をもう少しゆとりを持たせたものにできると良いだろう。

極めて常識的なことではあるが、３回の総会を通じて１度も開始時刻を遅延することなく予定時刻通りに開会できたことは評価すべきであろう。

■内容

第１回～第３回と各回における総会目的を達成できたと言ってよいだろう。ただし、特に第１回総会においては発表者がプレゼンテーションに慣れていない場合が多く、各企画内容を十分に伝えられたとは言いにくい状況であった。第２回においては第１回を踏まえ、各発表者による発表の事前準備が的確になされており、発表者の意図することが出席者に伝わったと考えられる。次年度においても発表者が何を伝えたいのかを確実に認識し、それを参加者全員にうまく伝達できるよう努めいただきたい。

【４】まとめ

数々の反省点はあったものの、各回における総会目的を達成できたという点においては成功であったと言ってよいだろう。

総会は大会を成功させる上で大変重要な意見交換の場である。大学内部アドバイザー、外部アドバイザー、全部署スタッフという、東西インカレに関わる全ての人達と顔を合わせる貴重な機会を更に充実したものとするためさらなる改善が期待される。

Ⅳ．物流体制

原稿作成者　山本三津子

【１】目的と方法

目的：2004 東西インカレの運営にあたり必要な物品の管理、物品購入の管理を行うことで無駄な経費支出をなくす。

上記の目的を達成すべく、以下のような方法を考案した。

■物品管理

実行委員会が何をどれだけ所有しているのかを正確に把握し、貸出リストを作成、運用する。

■物品購入

物品購入にあたっては各部署に前もってオーダーシート(※)を提出してもらい、物品管理部で一旦回収、チェックした後再配布し、そこに記載された指示通りに購入してもらうという形式をとる。支出のある場合にはそれが交通費や郵送費等、目に見えない物にかかる経費であってもオーダーシートにより事前に報告するという形態をとる。購入方法は各部署で各自購入、物品管理部で一括購入のいずれか。すでに実行委員会が所有しているモノについては既存物の使用を指示。提出日は大会開催までに３回程度を予定。

※オーダーシート

購入品名、価格、個数、用途、購入予定日を記入したリスト。

【２】結果

■物品管理

消耗品等細かい物品が多く、数量の把握が正確にできなかった。そのような中、貸出リストを作成したが活用できずに終わってしまった。管理が行き届かなかったこともあり、いくつかの紛失物の報告があった。また、消耗品が無くなり作業が滞ってしまうという事態も起きてしまった。

■物品購入

物品購入に際しては上記の「【１】方法」に記したような手続きに沿って購入してもらうという形式をとった。ただし、提出日は予定では３回であったものを週１回に変更した。当初は予定していなかったが必然的に、物品購入品リストを作成した。リスト分類は a.一括購入品リスト、b.各自購入品リスト、c. a と b を合わせた購入品総合リストの３つ。リストには、購入品名、価格、個数、用途、購入時期を記載。一括購入品については、発注日、到着日も記載。

どの部署もこちらで設定した手続きに沿ってくれたが直前の準備あたりから臨時購入品はオーダーシートを提出せずに適宜購入するという状態になり、状況を把握するのは難しくなった。

【３】考察

■物品管理

物品管理の不行届により作業に悪影響を与えてしまうため、十分な管理が必要であると実感させられた。また、管理していくには物品管理部の力だけでなく作業室を使用する全てのスタッフの協力が必要である。次年度は全スタッフの意識を高め、紛失物が無くなるよう改善策を講じる必要がある。

■物品購入

いくつかの部署で必要物品が重複している場合が何件か見られた。オーダーシートを事前に提出してもらうことにより、重複した物品購入が避けられたという点は評価すべきである。よって、次年度もオーダーシートは導入すべきであると言える。

しかし、今年度はオーダーシートを有効活用できたとは言い難い状況であった。有効活用するためには、財務管理部とのやりとりが十分に必要であろう。次年度以降は物品管理部と財務管理部との横の繋がりをより強固なものとし、物品購入に関する情報を共有すべきであり、それによりオーダーシートが有効活用されることを期待したい。

予想はしていたが、やはり直前になって臨時購入せざるを得ないものが出てきてしまった。こういったことが積み重なるとオーダーシートを提出する意味が薄れてしまう。臨時で必要物品が出てしまうことは避けられないだろうから、どこから臨時購入を認めるかを明確に線引きすべきである。(例：準備段階の運営組織においては認めないが、当日運営組織に移行後は許可する、等)この点においても改善が必要である。

【４】まとめ

全部署に共通し必要となってくる「ヒト・モノ・カネ・情報」の一つである「モノ」の管理、購入時の監査という役割を担っていた物品管理部であったが、改善すべき点が多く残ったと言える。それらの点において適切な改善策を講じることができれば更なる経費削減にも繋がるであろう。

実行委員会の所有する物品自体は今年度の分も加わり増えたことは確実である。次年度はそれらの物品がどれだけあるのかを正確に把握するところから始め、効率よく運営されることを期待する。

Ⅴ．財政

原稿作成者　伊藤リナ

【１】目的・方法

今年度、事務局財務管理部で掲げた目標は、円滑で明瞭な会計業務の遂行であった。具体的な業務内容は、①各局・プロジェクト及び事務局内の出納管理による予算書・決算書の作成、②大学・市等への申請書の提出、の 2 点だった。

①については、事務局として設置した「MO」及び「ツールシート」の活用を目指した。具体的には、実行委員会活動初期には、各局・プロジェクトの要望を踏まえた予算書を作成するため、MO に「予算シート」の提出を求め、さらに各局・プロジェクトごとの支出状況の把握と、決算書作成の効率化のため、MO に「決算シート」の提出を求めた。特にシート作成に関しては、「スポーツ振興くじ助成金交付要項」における「収支予算書」を参考にした。また MO には出納管理に詳しくなってもらうため、「会計勉強会」の実施を目指した。

②については、エグゼクティブ・プロデューサーの松田（以下、松田ディレクター）や、つくば市スポーツ振興課、筑波大学人間総合科学支援室会計担当と連絡を取ることにより、早めの遂行を目指した。

【２】結果

（１）全体収支概要

①　収入

今年度の総収入は 913 万 3358 円であり、昨年度（808 万 4500 円）に比べて約 13%増となった。表 1 は 2004 年度東西インカレ収入内訳、表 2 は主な項目における昨年度の比較である。

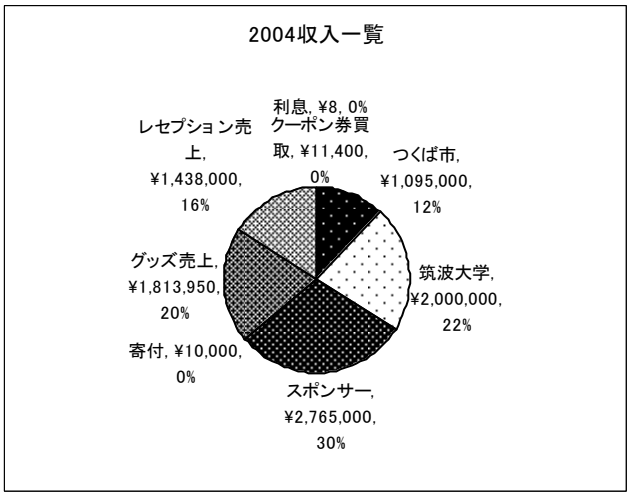


表 1 .2004 東西インカレ収入一覧

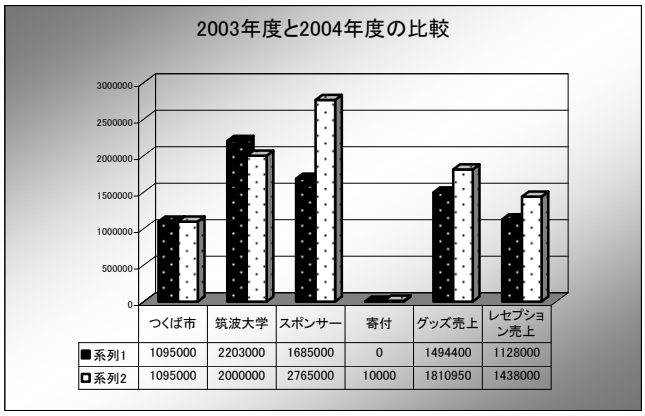


表 2．昨年度との比較

このように、収入全体で最も多くの割合を占めたのはスポンサーの約 30%であった。以下、筑波大（22%）グッズ（20%）、レセプション（16%）、つくば市（12%）の順で、昨年と比べてもスポンサーの比率が上がった。また、各項目における昨年度の収入額との比較においては、大学の負担金が減少したものの、スポンサーの 108 万円増を筆頭に、グッズ、レセプションによる収入が増加した。

②支出

今年度の支出総額は、784 万 404 円（9 月 7 日現在）であった。以下の表 3 は、項目別及び目的別に分類したデータである。なお、ここでいう項目別とは決算書の分類をそのままグラフ化したものであり、目的別とは「何の目的で使ったのか」という視点から分類しなおしたものである。

ｉ）項目別

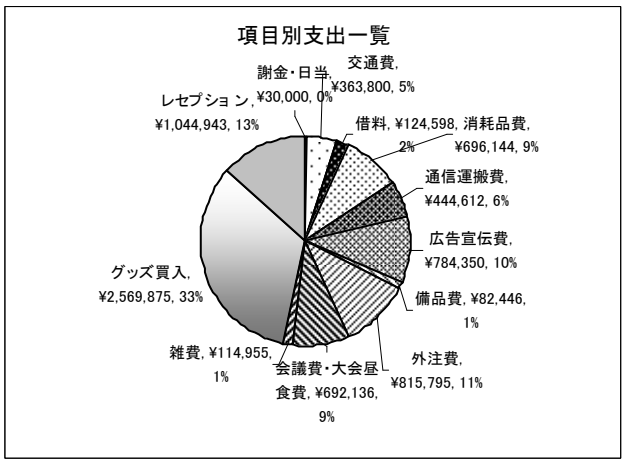


表 3．項目別支出一覧

表 3 によると、今年度の支出は、グッズ買入が 32%と大きな割合を占めていたことがわかる。以下、レセプション費用（料理代等）、外注費（看板等）、広告宣伝費（ポスター、チ

ラシ、横断幕）と続いた。昨年に比べて、文具をはじめとする消耗品費、備品費が金額・割合ともに減少したといえる。

ⅱ）目的別

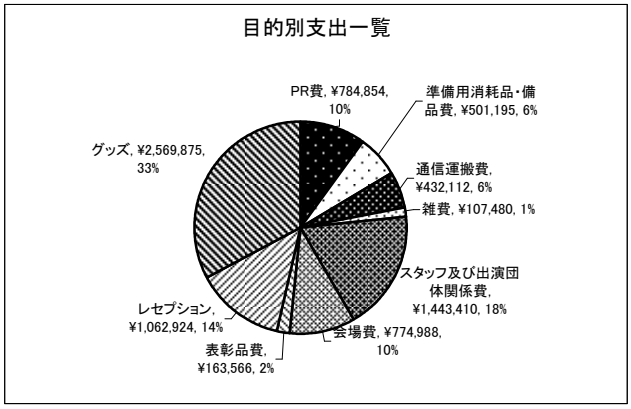


表４．目的別支出一覧

目的別データでは、特に「会場費」と「スタッフ及び出演団体関係費」を設け、準備と大会当日のどこで支出されたものかを意識した。ここからもグッズ買入に最も金額を割いたことがわかるが、「スタッフ及び出演団体関係費」（昼食クーポン代、V リーグ選手、出演団体の交通費、AD 作成等）や「会場費」などの当日に多くの資金を投入できたといえよう。

ⅲ）まとめ

昨年度と比較して購入額が減少したのは、備品費と消耗品に分類される文具、それに当日会場で使用する消耗品であった。逆に増加したのは、表彰品（昨年度比、昼食代（大会前日及び当日）などが指摘できる。

③全体

以上のように、9 月 7 日時点においては、129 万 2954 円の黒字となった。なお、今後、①報告書作成費 50 万円、②ファイナルパーティ補助費 30 万円、の合計 80 万円の支出が見込まれており、最終的には 49 万 2954 円が黒字となり、来年度に繰り越される予定である。

（2）予算書及び決算書の作成

①予算書

各局・プロジェクトから現実的な数字を記した要望書はほとんど提出されなかった。

②決算書

きちんとまとめて提出する局・プロジェクトと、まとめないところとの差があった。しかし、昨年度に比べると、局・プロジェクトごとの支出状態が把握しやすく、決算書の作成も比較的円滑に進んだ。来年度の予算書の作成にも役立つデータができたと思う。

（3）各手続

①つくば市

つくば市には 3 月に「負担金請求書」（4 月 1 日付）を作成し、松田ディレクターに渡した。入金日は 4 月 28 日だった。

②筑波大学

4 月上旬に松田ディレクターとともに、大学の体育専門学群長の永井先生等を尋ね、現状における大学からの負担金拠出の可能性について話をうかがった。その後は松田ディレクターを中心に交渉が行なわれた。最終的には 7 月に「社会貢献プロジェクト」に申請し（会計に関する提出書類は、購入品リスト）、8 月に採択された。ちなみに、同プロジェクトには 92 件の応募があり、採択はうち 13 件であり、総額 1100 万円のうち、この東西インカレで 200 万円を獲得することができた。その後は、体芸経理の経理担当者と領収書等の手続きを行なった。

【３】考察

（１）　全体収支について

結果的に大幅な黒字となった。この主な理由は、①スポンサー収入が増えたことと、②大学から負担金をもらえたこと、③無駄な支出がほとんどなかったこと、の 3 点と考える。特に②については、副学長が実際に「東西インカレ」を見にきていただいたことが大きかったのではないだろうか。その意味では、選手、出演団体そしてスタッフみんなでもらった補助金といっても言い過ぎではないだろう。③に関しては、オーダーシートによる申請が利いたといえよう。

（２）　予算書・決算書の作成について

財務管理部としては、「決算シート」は活用できたと思う。ただ、実際に記入をする側からは、「分かりづらい」「紙がもったいない」「決算シートがたまってしまう」等の声がきかれた。この原因の一つに、「項目」の分かりにくさがあったのではないだろうか。私自身、試行錯誤の中で「項目」を立て、決算書を作成しており、やはり一度専門家に指導を受けながら、インカレ独自の項目をたてたほうがいいのかもしれない。来年度は、今年度できなかった「会計勉強会」をぜひ実施してほしい。

（３）　各手続きについて

全体としては、松田ディレクターに頼りっぱなしであった。私自身に時間がなかったこともあったが、実際こうした手続きは、大学や市と信頼関係の上に成り立つものであり、松田ディレクターだからこそ円滑に進んだことも多分にあろう。来年度以降も、ディレクター等の指示の下、事務局員が事務的な手続きを行なっていくことが望ましいだろう。

【４】まとめ

来年度への検討事項として、①各局・プロジェクトに予算配分（仮払金を渡す）を行なうか、②シート・MO をどうするか、③財務管理部が「サポート」ではなく積極的に会計業務を行なうか、の 3 点があると思う。①に関しては、使用する側が便利になるとともに、無駄遣いの可能性も出てくるだろう。②の「決算シート」は、シートの中身を改良した形で残るといいのではないか。さらに、紙をボードやファイルに挟んで渡してもいいだろう。③に関しては、今年度は各局・プロジェクトの「サポート」という形で臨んだが、より積極的な関わり方もあるだろう。特に、予算を立てるためには早めの収入確保が必要であり、それにはスポンサー担当との積極的な連携も必要だったといえる。来年こそ、円滑で明瞭な会計業務が行なわれることを期待したい。

第三章 プロジェクト推進局運営

Ⅰ．エキジビションマッチプロジェクト

原稿作成者 羽田野真帆

【1】目的・方法

本プロジェクトの目的は、①「バレーボールの多様な魅力をアピールすること」と、②「多様な客層を取り込むこと」であった。メインマッチである 6 人制の大学バレーボールのほかにも、様々な形のバレーボールが存在し、それぞれ独自のおもしろさがある。様々な観客が集まる東西インカレの場で紹介することで、一人でも多くの方にその魅力を知っていただきたいと考えた。また、大学バレーボールファン以外のさらに幅広い層の集客も目的の一つであった。

これらの目的を実現していく方法として、つなぎのおもしろさを持つ 9 人制バレーボールと、障害者スポーツの一つであるシッティングバレーボールをとりあげ、それぞれエキジビションマッチを行うことにした。また、②の目的を達成するため、9 人制バレーボール、シッティングバレーボールそれぞれの分野で PR ルートを確保することを目指した。

【2】結果

（1） 出場チームの決定

① 9 人制バレーボール

9 人制バレーボールの大会結果などをもとに、茨城県近郊のクラブチームや実業団チームをピックアップした。都沢先生を通して、いくつかのチームに連絡をとった結果、全国 4 位の成績を残している東北リコー（宮城県）VS 国体出場チームである茨城選抜（茨城県）という組み合わせが決まった。この組み合わせは 3 月中に決定し、4 月初旬に正式な依頼を行った。

② シッティングバレーボール

9 月に行われたアテネパラリンピックに出場するシッティングバレーボール JAPAN チームに出場してもらいたいと考え、全日本シッティングバレーボール協会に連絡をとった。パソコンのトラブル等で連絡が滞ったこともあったが、5 月上旬の合宿見学などを経て、5 月中旬に出場が正式決定した。居住地などの関係で代表選手 12 名の参加は不可能だったため、スタッフ 3 名を交えた 6 対 6 で紅白戦を行うことになった。

（2） PR

茨城県クラブ連盟や全日本シッティングバレーボール協会の協力を得て、9 人制バレーボール、シッティングバレーボールそれぞれの大会で、ポスターの掲示とチラシの配布を行った。

シッティングバレーボールに関しては、シッティングバレーボール JAPAN チームのエキジビションマッチを中心的に宣伝するチラシを独自に作成し、シッティングバレーの大会や学内で配布した。

（3） 試合形式と演出

① 9 人制バレーボール

9 人制トップチーム同士の本気のぶつかり合いをみせるため、21 点 3 セットマッチで行い 3 セット目は 15 点とした。試合終了後にはスタッフより、両チームに表彰品の贈呈を行った。

② シッティングバレーボール

試合前に、10 分間ウォーミングアップの時間をとり、あえて練習の様子も見せることにした。それと平行して、日本シッティングバレーボール協会会長兼 JAPAN チームの監督である真野嘉久氏にシッティングバレーボールのルール説明と代表選手の紹介をしていただいた。試合は 25 点 1 セットマッチで行い、試合終了後には 9 人制と同様に表彰品の贈呈を行った。また、贈呈後にはキャプテンへのインタビューを行い、アテネパラリンピックへの抱負などを伺った。ちなみに、両チームの「イリソス」と「キフィソス」という名前はアテネの東西を流れる川の名前からとった。

（4） 当日の結果

試合結果はそれぞれ以下のようになった。

東北リコー	VS	茨城選抜
20	－	22
21	－	8
15	－	11

セットカウント２－１で東北リコーの勝利

キフィソス	VS	イリソス
27	－	25

セットカウント１－０でキフィソスの勝利

両マッチともに白熱した試合となり、予定の時間を 1 時間近くオーバーしてしまう形となった。

また、東西インカレオリジナルの賞である観客投票によって決まる Best Tsukuban Performer で、シッティングバレーボール JAPAN チームが選ばれ、すでに帰ってしまったチームに代わり担当スタッフを賞状と表彰品を受けとった。

（5） スタッフによる対応組織

シッティングバレーボール JAPAN チームについては当初から担当者をつくったが、9 人制に関しては連絡先を一つにしたため、ひとりのスタッフが各チームの代表者の方と連絡をとることになった。その後各チームの担当者が決まった後も仕事の引継ぎが遅れ、準備段階の担当者と当日の担当者が異なってしまった。また、仕事の負担に偏りが出てしまい、出場チームへの連絡が遅れてしまうこともあった。

また、各出場チームに対し、オフィシャルブックなどエキジビションマッチプロジェクト以外の部署からの連絡が殺到してしまい、先方の混乱を招く形となってしまった。

（6） シッティングバレーボールチームの応援募金

2004 東西インカレ実行委員会が立ち上がった当初から、大会中に募金活動を行ってみてはどうかという声があり、シッティングバレーボール JAPAN チームの希望もあったことから、大会当日にシッティングバレーボール JAPAN チームの募金活動をすることになった。また、当初は予定になかったことだが、常総学院高等学校の JRC 部というボランティア活動をしている団体の協力が得られることになり、２日目は JRC 部の部員１８名が客席や会場前で募金を呼びかけた。

その結果、49,713 円の募金が集まった。後日、Best Tsukuban Performer の賞状・表彰品とともに、日本シッティングバレーボール協会本部がある東京にスタッフが直接届けた。

【３】考察

（1） 出場チームの決定に関して

９人制の出場チームが決定したのは 3 月中と早かったため時間に余裕をもって行動することができた。逆にこちらの動きが遅く出場チームの方々に迷惑をかけてしまったことも多かった。

一方、シッティングバレーボール JAPAN チームは出場の正式決定が遅く、他の部署にも迷惑をかけてしまった。すべて、早めに動くことが大切だと痛感した。

（2） PR に関して

アンケート結果に、「9 人制バレーの観戦・勉強」や「パラリンピック選手が見られるから」という記述があった。独自のルートでの PR が直接的な効果を持ったか考察することは難しいが、まったく効果がなかったわけではないということが言えるだろう。

（3） 試合形式と演出に関して

大会後、「9 人制バレーボールの試合が長く感じた」という意見や「シッティングバレーボールの試合をもっと観たかった」という声を多く聞いた。時間配分のバランスについては考慮の余地があったと反省している。とくに、9 人制バレーボールはサーブが 2 回打てる、などそれぞれの特徴を把握し、試合形式を考えるべきであった。

シッティングバレーボールの紅白戦後のインタビューは選手の生の言葉を聞くことができ、パラリンピックへ選手を送るという雰囲気ができたと思う。

時間が限られている事もあり、9 人制のエキジビションマッチではインタビューなどの時間は設けなかったが、選手や監督に自分たちの言葉で 9 人制バレーをアピールしてもらってもよかったのではないか、と感じている。

（4） 当日の結果に関して

2 試合とも白熱した試合となり、会場を盛り上げる事ができた。これは、全力をつくしてすばらしいプレーを見せてくれた選手のおかげである。

ただし、タイムスケジュールが予定よりも大幅に遅れてしまったことは、反省すべき点である。（3）同様、事前に予測しセット数を考慮すべきであった。ただし、2 時間で 2 試合やるというプログラム自体に無理があったという点は否めない。

大会 1 日目、オープニングセレモニーに続く 2 番目のプログラムであったにもかかわらず、多くの方が会場に足を運んでくださり、シッティングバレーボールの試合の頃には客席がほぼ埋まっている状況であった。2 年目である東西インカレが認知されつつあることを示すものであり、また PR 局の頑張りを表していたと思う。できるだけ多くの方に見てもらいたいという思いのあったエキジビジョンマッチプロジェクトとしては、大変嬉しかった。

（5） スタッフによる対応組織に関して

まず、プロジェクト内でうまく仕事の分担ができなかったことは、リーダーである自分の力不足の結果である。先を見通し、仕事の割り振りをする必要があった。とくに、チーム対応の担当者は早い段階から分担し、そのチームについてすべてを把握していることが望ましかったと思う。連絡窓口をひとりに集中させることは一見仕事がスムーズに動くのだが、今回は次第に負担が大きくなり他局との情報共有を怠ること

につながった。その結果、他局のスタッフはもとより、出場チームの方々に迷惑をかける形となってしまった。

組織内での役割分担と情報共有がプロジェクトの運営の中で、最大の反省点であると痛感している。

（6） シッティングバレーボールチームの応援募金に関して

募金活動をしてくれた常総学院高等学校 JRC 部が、2 日目のみの参加であったことが残念である。また、多くの方々に募金をしていただいたが、その結果報告が十分でなかった。閉会式の表彰の際に、途中結果だけでも発表できればよかったのではないか。今後、web などを通じて、フォローアップをしていく必要がある。

【4】まとめ

準備から当日の運営にかけて、ハプニングだらけだったエキジビションマッチではあるが、結果的には大成功だったように思う。アンケート結果や直接寄せられた感想などを聞いて、「多くの方に見てもらいたい、おもしろさを知ってもらいたい」という目的はほぼ達成されたと感じている。

時間についてだが、エキジビションマッチは 1 試合にするか、時間を長くする必要がある。今回はバレーボールの多様性を魅せることが目的だったので、9 人制バレーボールとシッティングバレーボールという、コートの大きさも人数も違うバレーボールの試合を続けて行うことで、効果は高まった。来年、エキジビションマッチを行うとしたら、目的によっては 1 試合をじっくり魅せるなど、今回とはまったく違った演出も可能だろう。「何を伝えたいのか」、そこが一番重要である。伝えたいことがあったからこそ、当日まで何とかやってくることができたと、私自身は感じている。

準備から大変迷惑をかけてしまったアスレチック局をはじめ、当日のコート周辺管理のスタッフの方々、レフェリー、リトリーバーをしてくださったつくば市バレーボール連盟の方々など、多くの方の協力でこのプロジェクトを形にすることができた。改めて、感謝したい。

Ⅱ．パフォーマンス・演出プロジェクト

原稿作成者　津波古陽香

【１】　目的・方法

本プロジェクトの目的は、バレーボール以外の様々なパフォーマンスを行うことにより、大会全体を盛り上げること、そして、バレーボール観戦を目的としていらっしゃる方にも、その他の理由があり会場に足を運んでくれた方にも、バレーボール以外の魅力で大会を楽しんでもらうということであった。

これらを実現していく方法は、様々な団体に東西インカレの大会趣旨を説明し、それを踏まえた上で本大会への出演を依頼して、出演箇所や内容、当日の動き、その他の様々な連絡を取ることである。

【２】　結果

私が本プロジェクトを引き継いだ時には、もうすでにほとんどの団体が出演を決定している状態であった。よって、出演団体と連絡を取ることが主な仕事であった。まず、出演してもらう団体全てにパートナーズシートを提出してもらった。それをもとに、それぞれ連絡担当者を決め、情報のやりとりを行った。

本プロジェクトは、オープニングセレモニーやクロージングセレモニー、試合間などにパフォーマンスをしてもらう団体との連絡を取る、という役割であり、大会の成功に大きく関わると感じた。そのため、細かい所まで詰めていく必要があった。その情報のやり取りが非常に困難なことを実感した。例えば、連絡がスムーズにいかなかったり、団体の方に色々な所から連絡が行ってしまったり、混乱してしまったということもあった。また、本番直前まで色々と分からないことが出てきて、不安な点が多くあったので、今後は当日の動きをきちんと描きながら、余裕を持って大会に臨めるようにしたい。

【３】　考察

大会が終わって感じたことは、たくさんの団体が参加してくれたおかげで、バレーボールの大会がより良いものになったのではないかということである。観客アンケートでも、バレー以外の点でも楽しめる、というような意見もあり、目的が達成できたと思う。しかし、イベントが多すぎ、間延びした、等の意見もあり、そういう部分をどう改善していくかが今後の課題である。

そして、今回最も反省すべき点は「情報のやり取り」である。実際出演してもらった団体の方からも、連絡のやり取りが悪いといった意見が出た。私自身も力不足で他のスタッフをうまくまとめられなくて、色々な方に迷惑をかけた。しかし、たくさんの方々の協力のおかげで、本番はとても良いものになった。今回大会運営に関わって、大変だったし反省点もたくさん出たが、とても良い経験になった。観客からも、イベントがよかった、楽しかったという意見も聞けたし、出演団体からも、良い経験になった、参加して良かった、などと言ってもらえた。そういう意見を大事にしつつ、今回出た反省を次に生かしていきたい。

団体名	分野	出演箇所
吾妻小マーチングバンドレッドウィングス	マーチングバンド	ファイナル
NPO法人キッズチア・プロダクション	チアリーディング	エキシビジョン
常総学院高等学校応援指導部	応援団	セミファイナル
常総学院高等学校チアリーダー部SOLDIERS	チアリーディング	エキシビジョン、セミファイナル、ファイナル
竹園高校吹奏楽部	吹奏楽	オープニング、ファイナル、クロージング
タッチ体操クラブ	体操	エキシビジョン
Dance Association Seeds	ダンス	ファイナル
筑波大学応援団桐葉	応援団	セミファイナル、ファイナル
筑波大学吹奏楽団	吹奏楽	ファイナル、クロージング
筑波大学体操部	体操	オープニング
筑波大学チアリーディング部	チアリーディング	エキシビジョン、セミファイナル、ファイナル
東海大学チアリーディング部FINE	チアリーディング	ファイナル
常陸乃国ふるさと太鼓会	太鼓	オープニング
REAL JAM	ダンス	セミファイナル、ファイナル

図１．参加団体一覧と分野・出演箇所

【４】　まとめ

今回、東西インカレの大会運営を通して貴重な経験ができた。たくさんの人との出会いがあったし、普段接点がない方々の考えも聞け、とても勉強になった。何より自分たちで大会を作ったという達成感を得ることができた。これは今後生活していく上で大きな自信につながるだろう。この経験を今後に生かしていきたい。

大会全体を盛り上げるという意味で、さまざまな団体に参加してもらいパフォーマンスをするということは今後も必要なことであると思う。今回課題として出てきた情報のやり取りについて、今回はパフォーマンス、オフィシャルブック、など複数をプロジェクトからそれぞれ連絡を行っていたが来年は実行委員会側にも各団体への連絡担当者を作り各団体へ連絡したりする場合はその担当者を通すようにするなどの工夫が必要だと思う。

Ⅲ．スポンサードプロジェクト

原稿作成者　松本みな

【１】目的・方法

本プロジェクトの目的は、①産学官民の産と民の部分との一体化を目指し、企業と共創していく地域イベントという観点から活動すること。②地場産業の有効活用と認知度ＵＰに挑戦すること。であった。

これを実現していく方法として、単に「カネ」という資源だけではなく、「モノ」や「情報」というソフトの面でも関係を持てるよう、その分類分けには特色をつけて行った。この際に作成したものが「パートナーシップに関する全規約」であり、情報流通を明確にするために作成した「契約書」である。より柔軟性の高い「規約」とその執行としての「契約」を作成することで、パートナーとの関わりを明確にした。

以下、そのカテゴリーの概要である。

ＴＯＰパートナー	協賛金 50 万若しくは相当
プレミアパートナー	協賛金 30 万若しくは相当
ゴールドスポンサー	協賛金 10 万若しくは相当
オフィシャルサポーター	協賛金 5 万若しくは相当
オフィシャルサプライヤー	協賛品提供
メディアパートナー	協賛広告提供

図１　スポンサーカテゴリー2004

【２】結果

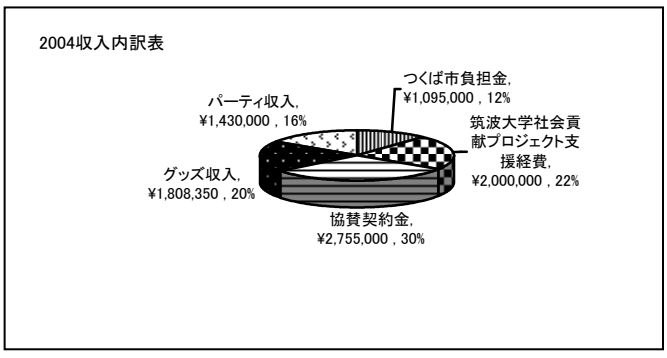


図２　2004 収入内訳表

（１）収入内訳

上記図は、今回インカレ全収入の中で、スポンサー契約金が占める割合を示したものである。全体の約 30%を占め、昨年度より全体で約 6%シェアが増え、額も約 100 万円近く増えた。今回は、全部で 61 社が協賛し、これもまた昨年より 10 社ほど増えた結果となった。

（２）協賛タイプ内訳

次に協賛タイプの内訳についてであるが、今年は特に「プレミアパートナー」という昨年度は設けなかったカテゴリーを設けることで、カテゴリー内で定められた協賛金に付け足して、更に協賛品や協賛サービスをして頂けるように付加価値を与えた。また本年は「関東鉄道株式会社」をはじめ、「カネ」ではなく「情報ルート」の提供や資材提供、物品提供という「サプライヤー」的な協賛が多かった。

（３）スタッフによる対応組織

スタッフ側の対応としては、各社に対しスポンサード以外の部署からの連絡も殺到し、先方にとってはどこがどのようなことを担当しているのか、そして誰がその責任者なのかが非常に不明瞭な状態となってしまった。その結果、連絡情報が被るなどしてあまり情報の促進が行われなかった。

【３】考察

（１）収入に関して

今回は、つくば市商工会との連携作業が非常にスムーズに進んだことや、昨年の協賛社がほぼ全てリピーターとなってくれたこと、そして TUV の活動を通してこの大会理念を認知してくれる方々が単純に増えたということの大きく 3 つのポイントがこの増額の背景として考えられる。

（２）協賛タイプに関して

今回の焦点は、ソフト面での協賛（情報や物的）をどう「オフィシャルスポンサー（カネ的ランキング)」の中に組み込んでいくかであった。価値を全て商業的な価値観で置き換えるというのは非常に困難であった。これには「オフィシャルサプライヤー」という括りが「オフィシャルスポンサー」のように中でさらに細分化されて（TOP,プレミア,ゴールド等）いなかったことが原因と考えられる。

（３）スタッフ対応組織

今回は、各スポンサーに専属対応をつけ行ってきた。しかし、スタッフが揃ったのが活動途中であったため、先方にとっては途中で対応スタッフが変わるという事態が発生し、情報後やり取りを阻害したひとつの原因を作ってしまった。また、スタッフが表面的にしか分からない公の文書（実行委員会全体としての連絡や他、広告掲載の技術的な連絡など）も

多々存在したために、多くの部署がひとつの協賛社に殺到するすると言う事態を招いてしまった。

【４】まとめ

今回のスポンサードプロジェクトは総じて予定通りに進んだといえる。次年度への提言としては、やはり広報活動の更なる充実を考えると、もう若干の増額を希望する。よって、

（１）各カテゴリー内の基本協賛金ラインを上げる。

（２）オフィシャルスポンサー、オフィシャルサプライヤー、メディアパートナー、アドヴァータイズパートナーの４種類に分け、各々の中で細分化を検討する。

（３）募集時期は 12 月～1 月とし、2, 3 月には決定、そしてロゴマーク等必要データは受領している状態にすべきである。

（４）協賛社と実行委員会とのやり取りを円滑に行うため、担当者･責任者をはっきりさせ、始めから終わりまで同じ担当で行えるようにする。また、対応マニュアルを細部まで決め、連絡が殺到しないような組織作り、マニュアル作りをする。

以上、スポンサードプロジェクトの今年度を指標にまとめた次年度への提言である。

Ⅳ．レセプションプロジェクト

原稿作成者　大城聡香

【１】　目的・方法

本プロジェクトは、コートとは違った場所における「食」と「談」を通じた共生空間の創出を目指し、それにより、バレーボールの魅力、東西インカレの魅力、そして邂逅の魅力を体験できる場を全員で創り上げ、2 日間の東西インカレをより一層盛り上げることを目的とした。

これを実現していく方法として、東西インカレ関係者、バレーボール関係者、東西インカレ参加チーム、Ｖリーグ選手、一般の方々等、誰でも参加できるパーティを企画した。その構成内容も、音楽と舞踊、そしてメインイベントにはＶ選手紹介を取り入れ、邂逅の魅力を全員が体験できるのに、十分に充実した内容となった。

【２】　結果

（１）　ワーキングスケジュールの概略

３月･･･レセプション部発足
４月･･･企画書作成
↓
第１回東雲ミーティング開催
↓
出演団体依頼開始＆決定
５月･･･出演団体ミーティング開催
↓
チラシや HP に載せる内容決定
↓
スポンサー決定
６月･･･レセプションチケット受付開始
↓
チケット作成
↓
看板データを東雲に提出
↓
協賛品の決定
↓
予算案の作成
↓
チケット受付終了
７月･･･出席者リスト作成
↓
チケット発送
↓
プログラム作成
↓
捨て看板作成
↓
協賛品納品
↓
レセプション当日

今回のワーキングスケジュールに関しての一番の失敗は、プログラムを作成するに当たり、その内容をクリエイティブの方に提出するのが遅くなってしまい、クリエイターの皆さんに迷惑をかけてしまったことです。プログラムは、一番印刷に時間がかかるので、クリエイターの皆さんが徹夜などしないように、6 月中旬ぐらいまでには内容を提出すべきでした。一番の反省点です。また、協賛品の決定も遅く、それに伴って、予算案の決定にも遅れが出てしまったので、協賛品等の決定も５月には済ませた方がいいと思いました。

（２）　協賛品一覧

スポンサー	協賛品	数量
JAつくば市	米	25Kg
JAつくば市谷田部	キャベツ	20ヶ
	椎茸	35P/C
	茄子	20C/S+2P/C
	ピーマン（緑）	12袋
	胡瓜	1C/S+20本
	トマト	1C/S+10ヶ
	ジャガイモ	1C/S
	人参	25本
	長ネギ	30本
	牛蒡	5本
	ほうれん草	5束
	漬物（1種）	1Kg
	小松菜	3Kg
	モロヘイヤ	1Kg
	インゲン	2Kg
	トウモロコシ	5Kg
	南瓜	3Kg
	シメジ	1Kg
	ナメコ	1Kg
	メロン	20個
	西瓜	20個
サントリー株式会社	モルツ中瓶	400本
	ペプシコーラ1，5Lペット	40本
	伊衛門21	30本

（３）　式次第

☆オープニング　「芸能」

井坂斗絲幸社中筑波大学津軽三味線倶楽部無絃塾

☆開会の辞

☆乾杯

つくば市議会議長　兼平英雄様

☆懇親

☆ショータイム　「舞踊」

筑波大学ダンス部

☆懇親

☆サブイベント　「交流」

大会参加チームによるチーム紹介

☆メインイベント　「邂逅」

筑波大学出身Ｖリーグ選手紹介

☆懇親

☆スペシャルプレゼント抽選会

☆閉会の辞

全日本大学バレーボール連盟副会長

栃堀申二様

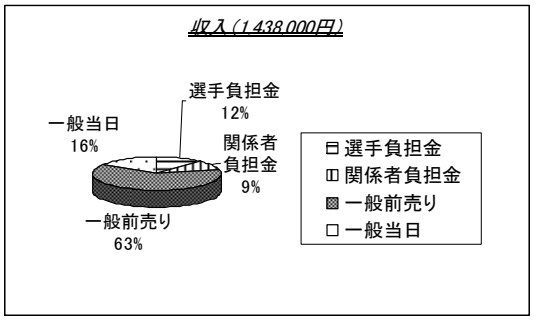
今回の式次第は、前回とは違い、挨拶を大幅に減らしました。少しでも多く懇親の時間を楽しんでもらう為です。また、今年は出演団体を２団体に依頼し、前回と同様、筑波大学ダンス部による懇親中の華麗なショータイムに加え、オープニングイベントとして井坂斗絲幸社中筑波大学津軽三味線倶楽部無絃塾の皆さんに冒頭を派手に飾ってもらうことによって、パーティをより一層盛り上げました。

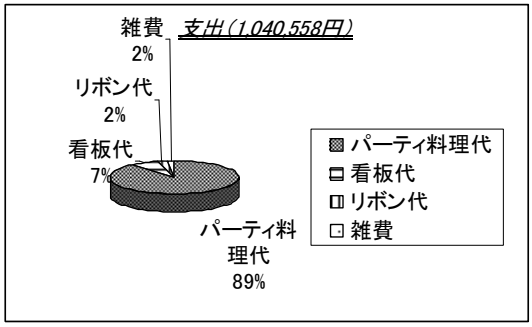
（４）　関係者・団体リスト

パートナー	ホテルグランド東雲
スポンサー	サントリー株式会社
	JA つくば市
	JA つくば市谷田部
出演団体	井坂斗絲幸社中筑波大学 津軽三味線倶楽部無絃塾
	筑波大学ダンス部

パートナーであるホテルグランド東雲様には、会場費を無料にしてもらい、さらに JA つくば市様、JA つくば市谷田部様、サントリー株式会社様には飲食物の面で多大な援助を頂きました。そのおかげで、前回と同じ値段で前回よりも豪華なパーティにすることができました。

（５）　収支決算





＊詳しくは表１参照

今回は 40 万に近い黒字を得ることができました。事前の PR も徹底し、V 選手の参加状況も HP で随時更新していった結果、一般市民も 300 人近く参加し、パーティは大成功に終わりました！！

【３】　考察

（１）　PR に関して

今回のレセプションの PR は、東西インカレの大会チラシと HP だけではありましたが、前売りの段階で 250 人近い申し込みがあり、大成功だったように思います。しかし、メールでの申し込みが主だったのですが、その返信の対応を、プロジェクト内でスムーズにまわせず、バレ研で作業していた他のスタッフに迷惑をかけてしまいした。プロジェクト内の役割分担をもっと明確にすべきでした。

（２）　出演団体対応に関して

出演団体に関しては、音響や舞台設置等の情報を、団体間で共有することがうまくいきませんでした。プロジェクト内でそれぞれに団体対応をつけていたのですが、個々で話を進めるのではなく、２団体、東雲、スタッフを交えたミーティングを行う必要があったと思います。また、今回の東西インカレは、様々なセクションがあるため、１団体に多くの人が連絡していたと思いますが、レセプションプロジェクト内で団体対応に割り当てられたスタッフは、どういう内容の連絡がその団体に出されているかを把握していたほうがよかっただろうと思います。

（３）　V 選手対応に関して

V 選手対応に関しては、大会全体への出席、

レセプションへの出席、宿泊などレセプション以外のセクションにも関する事柄が多かったにもかかわらず、当初レセプションプロジェクト内に対応が一任されていました。しかし、途中からゲスト対応ということで、事務局に移行するという形になってしまいましたが、次回からは実行委員会発足と同時にどのセクションが対応するかを明確にする必要があると思います。

（４）　スポンサーに関して

スポンサーに関しては、スポンサードプロジェクトとレセプションプロジェクト間の、役割分担の境界線をよく理解しておらず、協賛品に関してもスムーズに話を進めることができませんでした。事前にスポンサードプロジェクト内のスタッフとコミュニケーションを図るべきでした。

（５）制作物に関して

制作物は、チケット、プログラム、立て看板、吊り看板、誘導看板でしたが、いずれもクリエイターの方にデータを提出するのが遅くなってしまいました。データの提出は、早めに行うべきでした。

【４】　まとめ

今回のレセプションは、目標人数を大幅に上まわり、目的にしていた、邂逅の魅力を体験できる場を会場の皆さんと創り上げ、２日間の東西インカレをより一層盛り上げることに成功したと思います。しかしその一方で、スタッフ同士のコミュニケーション不足や、関係団体間にも情報をうまく伝えられなかったということが最大の反省点に挙げられます。

来年は、レセプションだけでももっと多くの団体が関わってくるようになると思うので、その団体 or 関係者一つ一つにしっかりと対応者をつけ、情報の流通を円滑に行うことが一番の課題になるのではないかと思われます。そのためには、プロジェクトスタッフも増員させるべきだと思います。

最後になりましたが、レセプションプロジェクトを進めていくにあたり、つくば市商工会の皆様や、つくば市教育委員会スポーツ振興課の皆様、そしてホテルグランド東雲の皆様には多くのアドバイスを頂きました。本当にありがとうございました。改めて感謝の意を表明いたします。

収入

項目	内訳	合計
東海大学	2,000円×24人	48,000
東亜大学	2,000円×24人	48,000
近畿大学	2,000円×22人	44,000
筑波大学	1,000円×30人	30,000
スタッフ	1,000円×106人	106,000
出演団体	2,000円×13人	26,000
一般前売り(大人)	4,000円×199人	796,000
一般前売り(学生)	3,000円×14人	42,000
一般前売り(中・高)	2,500円×26人	65,000
一般当日(大人)	4,500円×33人	148,500
一般当日(学生)	3,500円×22人	77,000
一般当日(中・高)	2,500円×3人	7,500
合計		1,438,000

支出

項目	内訳	合計
パーティ料理	2,000円×400人	800,000
サービス料	800,000円×10%	80,000
吊り看板		40,000
立て看板		30,000
消費税		47,500
式次第紙代		756
雑費(プレゼント包装紙等)		6,752
チケット郵送代		10,000
リボン代		25,550
合計		1,040,558

表１　会計詳細報告

Ｖ．リサーチ・プロジェクト

原稿作成者　影山　あき子

【１】目的・方法

本プロジェクトの目的は、「東西インカレを評価しよう」ということであり、主に①バレーボールの研究、②各プロジェクトの研究、③スタッフの評価という３つの柱を建てた。また、この研究を通して今年度のアンケートを集計し、昨年と比較・反省し来年度に生かしていくためのデータベース作りと、研究結果をバレーボール学会やスポーツ産業学会、卒業論文や修士論文として世の中に配信し、スポーツの魅力を伝えていくということもプロジェクト遂行の効果として実現を目指した。

これを実現していく方法として、より多くのアンケートが行き渡るように、入り口でスタッフが一人一人に手渡しで渡し、初めての試みとしてアンケートの回収員を設けてアンケート記入の呼びかけを行ったり、筆記用具の貸し出しをしたりした。また、昨年に引き続きアンケートの回答者に抽選でプレゼントを渡すというイベントも回収率を上げるための作戦の一環として行った。

【２】結果

	2004 東西インカレ	2003 東西インカレ
来場者	延べ 6000 人	延べ 4000 人
配布枚数	2879 枚	1000 枚
有効回収枚数	893 枚	725 枚
回収率	31.0%	72.5%

上記の表１は観客アンケートの回収状況である。観客アンケートの配布対象は一般客と関係者・関係団体・関係大学である。また、アンケートが一番書かれた時間帯は各日の最終試合の開始後あたりであった。アンケート抽選会は最終試合の直後に行ったが、そのころには観客の半分以上が帰ってしまっていた。

(2) スタッフ対象アンケート

大会当日の朝、会場に到着したスタッフ一人一人に手渡しで渡した。また、アドバイザーの方々には代表者の石黒さんなどに渡してもらった。アンケートの記入はスタッフ個人の自主性に任せるとして、回収箱をバレ研前に設置し各自入れてもらった。結果的に 93 枚のアンケートが集まった。約 50%の回収率といえる。

(3) プレゼント抽選会

各日の最終試合の 2 セットが終わった時点で抽選権のあるアンケートはしめきり、それまでに集まったアンケートの中から 3 人のプレゼンターに一枚ずつ選んでもらい当選者にプレゼントを手渡ししてもらった。プレゼントは、その日の第一試合の試合球（株式会社モルテン提供）に Ｖリーガーがサインしたボール・サイン入りＴシャツ（株式会社アシックス提供)・スポルコプロ（日本ハム株式会社中央研究所提供）である。

一日目プレゼンター　加藤陽一選手・増村選手・大久保選手・朝長選手

二日目プレゼンター　筑波大学男子バレーボール部　監督、選手

(4) アンケートの集計

集めたアンケートに通し番号をふってエクセルに打ち込んでいく。クロス集計のものはアンケート解析ソフト SPSS を使用した。

【１】　考察

(1)　観客アンケートに関して

回収枚数は今回が限度だと思う。回収アンケートの男女比は半分以上が女性であったが、来場者の男女比からして仕方がないと思う。配布員の設置によりアンケートは均等に配ることができた。筆記用具の貸し出しによって、持ち合わせていなかった人にも書いてもらえた。(貸してほしいという声は結構あった）しかし、回収員の設置による効果は目に見えては現れなかった。回収員については再考の余地あり。

(2)　スタッフアンケートに関して

配布方法は非効率ではあったが、できるだけ大会がすべて終わってから書いてほしかったということと、人員配置が不明確であったのでリーダーを通しての配布は困難だったということで仕方がなかった。回収率は予想をはるかに上回っており、回収方法は妥当であった。

(3)　プレゼント抽選会に関して

アンケートの〆切のタイミングは今回以上に遅らせるとアンケートの集計に支障をきたすため、このままでよいと思う。プレゼント抽選会のときには半分以上の観客が帰ってしまっていたがひきとめるのは難しいと思った。二日目に優勝チー

ムのヒーローインタビューを急遽やることにしたが、好評だったので来年もやってみるのはよいと思う。アナウンサーの仕切りがとてもよかったため、当選者がいなかったり、マイク争いが起こったりなどのハプニングにも臨機応変に対応してくれて助かった。

（4）　アンケートの集計に関して

大会が終わってからの作業だったため、人が集まらなくて大変だった。昨年のデータがあいまいだったためどのようにデータを形にすべきか悩んだ。また昨年のデータをもう一度集計するという二度手間もあった。集計のことは大会が終わってからばたばたと決めることになってしまったため来年は計画の段階から集計の話も出しておくべきだと思う。

【２】　まとめ

リサーチプロジェクトではその場でいろいろ計画が変更になったり急に仕事ができたりしてばたばたすることがあったが最終的にデータを一目で分かるような形にできたのでよかったと思う。抽選会も本番までどうなるかわからなかったが結果的には大成功を収めることができた。来年度に向けて回収員のあり方を含め、回収方法についてはよりよい方法をもう一度考えるとよいと思う。

VI. 交流会プロジェクト

原稿作成者　鈴木淳

【１】目的・方法

本プロジェクトの目的は、①参加者同士の交流、②参加者と指導者の交流、③参加者とバレーボールの交流、④スタッフ･指導員間の交流といった４つの交流を「東西インカレKIDSバレーボール交流会」の企画・運営を通して達成することでした。

方法としては、まずつくば市内だけではなく近隣の市町村にも広く募集をかけ様々な地域から参加者を集め、色々な地域・団体の子ども達と交流できるようにした。次に「東西インカレKIDSバレーボール交流会」の内容は以下の通りである。

１　参加者全体でアップにかわるようなレクリエーションを行う。他校や他チームの参加者との交流。(参加者同士の交流)

２　８～10人のチームに分かれ（あらかじめ数種類の色のハチマキを受付で参加者に配布しておき、1 の全体交流の後、ハチマキの色ごとに参加者を分かれさせる。）チームごとに指導員二人をつける。(一人は全体指導、もう一人はチーム内の個人のバックアップを行うチーム･ティーチングの形式)
ハチマキの色のチームごとにアップを行うことで、チーム内（指導員と参加者、参加者同士）の連携をつくる。(参加者と指導員との交流)

３　２のアップが終わり次第、技術向上を目的とした練習を行う。(参加者とバレーボールの交流)

【２】結果

（１）　募集

チラシ兼申込用紙を、PR局と協力して配布、募集した。

用紙配布及び募集の日程：

4月28日　県南の体育協会の集まりにて交流会の宣伝用チラシ☆１を配布→各市町村の体育協会から各市町村の小学校へ

5月26日　つくば市スポーツ少年団の集まりにて交流会の本募集用紙☆２を配布→各クラブチームへ

6月18日　募集締め切り

募集に協力していただいた団体：

- つくば市バレーボール連盟（市内小学校へ）
- 各市町村教育委員会・各市町村体育協会（各市外小学校へ）
- Jr.サポートつくば（市内クラブチームへ）
- つくば市及び各市町村スポーツ少年団（市内及び各市町村クラブチームへ）

※宣伝用チラシと本募集用紙は別紙参照

表１：申し込み及び参加者数

・つくば市内	
チーム名	人数
つくばユナイッテドJr	15
並木ジュニアＴＵ	18
つくばベアーズ	28
小計	61
・つくば市外	
千代川クレッシェンズ　スポーツ少年団	12
龍友バレーボール　スポーツ少年団	16
小計	28
その他	20
申込者合計	109
当日欠席	13
当日参加者	96

募集の結果は、表１の通りつくば市外から２チーム計２０名の申し込みがあり、最終的に申込者数は目標としていた１００名を超えた。

（２）　指導内容

①全体ウォーミングアップ

松井先生指導の下で参加者、指導員に配布したはちまきを用いて、全員参加のしっぽ取り鬼を行ない、参加者同士、参加者と指導員の交流を交わした。またしっぽ取り鬼というレクリエーションをすることにより参加者の緊張をほぐし、チームごとに分かれてからの交流行ないやすいようにした。数人のけが人がでてしまったがドクターを中心にして指導員・スタッフが迅速に対応できたので大事には至らなかった。

②チーム別ウォーミングアップ

当初はチームごとで別々のメニューを行なう予定だったが、フラフープを使ったチーム対抗リレーに変更した。各チームフラフープを６個並べ、ケンパ、ジグザク走、サイドジャン

プ、トンネルをして各チームの指導員の指導の下参加者はリレーを行なった。

③技術指導

中西先生指導の下で強く、正確なサーブを打つための練習を行なった。まず腰を使ってボールを強く投げるキャッチボールをして、その動きを応用して強いサーブを打つ練習をした。次に指導者が持っているフラフープの中を狙ってサーブを打ち、正確なサーブを打つ練習を行なった。

【３】考察

（１）募集に関して

今回はつくば市内だけでなく、つくば市外からも参加して欲しいということで近隣市町村にも募集をかけ、結果として２０名の申し込みがあり、全体としても目標としていた１００名を超える申し込みがありＰＲの方法としては成功だったと言える。しかし〆切日を過ぎてからも申し込みがあったのでＰＲをもっと早く始めていればそういった人達も募集期間内に申し込めたのではないか、直前にもう一度ＰＲすればよかったのではなどの反省点も挙げられる。

（２）指導内容に関して

①全体ウォーミングアップ

大多数の参加者が楽しんでくれて、緊張をほぐすという目的は達成できた。だが参加者を自由に動かせたので顔見知りの人ばかりで集まってしまい、他チームの人との交流はできなかった。またけが人がでてしまったのも大きな反省点だ。あの狭い空間で約１００人を乱雑に動かしてしまったことが原因として考えられる。空間を広くすることはできないし、できるだけ多くの人に参加して欲しいので、内容をもっとよく考える必要があった。

②チーム別ウォーミングアップ

各チームについていた指導員がよく内容を理解していて、空間的にも余裕があったのでトラブルもなくスムーズにできた。事前に松井先生も交えてコーチミーティングをしたことが成功の要因だったと考えられる。

③技術指導

中西先生の指導を聞いてから練習を始めるといった時に、「どこに行けばいいのか？」「何をすればいいのか？」といった風に参加者が混乱している場面が多々見られた。練習を始めてからは、窮屈そうにしている参加者や、長い練習に疲れてしまった参加者が目立った。これらの反省点は事前の打ち合わせ不足が大きな原因と考えられる。打ち合わせをしっかりとしておけば、指導者が的確に指示をだせ、参加者が混乱することもなく、空間ももっとうまく利用できただろうし、参加者が疲れてきたら休憩をとるなどの措置もとれたと考えられる。

【４】まとめ

この度の交流会プロジェクトは募集の反省にもあったように全体的に当初の予定よりも遅れ気味だった。次年度への提言として、他のプロジェクトに比べ事前の準備でやるべきことは少ないので、募集などの仕事を早めに終わらせ、内容を練るのに時間を割いて欲しい。

内容を考える上で重要なことは、狭い空間の中で安全かつ参加者に満足してもらえるものにすること、参加者をどのように動かすかを考えその動きを指導者一人一人がよく理解して的確な指示ができるようにすることの２点だ。この２点をクリアするためには、メインインストラクターや当日の指導員とのミーティングを重ねることが必要不可欠だ。６月までに募集のチラシを配り終え、６月の始めからメインインストラクターとよく話し合い、内容を詰め、６月中頃には内容が完全に決まっている状態にしたい。内容が固まったら、当日の指導員とのミーティングをして、一度は体育館で全体の動きを確認するためにもリハーサルをしておきたい。

また休憩をとるべきだという反省があったが、休憩をとるとしたとき、アリーナ内飲食禁止という状況で、どのように参加者に水分補給させるのかも考えなければならない。

全体を通して常に頭に置いていて欲しい事は、参加者に一つでも多くの交流をもってもらい、何かを学んでもらい、満足してもらえる内容にするということだ。その様なものを作る為には、時間や労力を惜しんだり、妥協をせずに、細かい部分までよく話し合って欲しい。

以上が交流会プロジェクトの今年度を指標にまとめた次年度への提言だ。

原稿作成者　監修：荒木祐亮
担当：(1) 笹木隆之、(3) 山本三津子、(4) 埃沢賢志、(5) 高橋沙矢香、(6) 堀越晃子、(7) 荒川暁郎

【１】目的・方法

本プロジェクトの目的は、バレーボールと地域、ハードとソフト、体育館（内部）とまち（外部）、バレーボール関係者と一般人、つくばの一資源とその他の資源といったものの間・すきま・つなぎ・関係・環境をデザインすることを目的とする。それらにより、インカレ＝大学生のバレーボールの大会という既成概念を破壊すべく空間・時間・体験を創出する効果を生みだす。

具体的な方法としては、カピオ前の広場を一連のストリート（街道、まち）と捉え、それに伴って発生する行動に従って以下に示す７つの機能を点在させた。

『つくばバレー街道』～すべの道はバレーに通ずる～

（１）「食」：グルメストリート（学生団体・商工会による飲食店）
（２）「商」：商い横丁（インカレ関連グッズの販売店）
（３）「遊」：Jump to the world（最高到達点を競う遊戯装置）
（４）「憩」：インカレ広場（食事や休憩のためのスペース）
（５）「観」：つくばサイト（つくばの魅力をパネル展示）
（６）「聴」：街角演奏（学生バンドによるストリートライブ）
（７）「通」：インカレゲート（グリーンハウスを使ったゲート）

【２】結果

（１）「食」：グルメストリート（学生団体・商工会による飲食店）

①出店団体およびメニュー

以下の団体に飲食店としての出店を依頼した。メニューに関しては、あらかじめ学生団体の方に決定してもらった上で、重複がないよう、また選手等の意見も取り入れつつ、昼食になり得るようなメニューを商工会の方に打診した。

表１　飲食店出店団体およびメニュー

所属	団体名	メニュー
学生	・香川県人会	さぬきうどん
	・新潟県人会	ちまき
	・広島県人会	お好み焼き
商工会	・いいじま	カキ氷、生ビール、揚げ物
	・カレーハウス coco 壱番屋	カレーライス
	・篠田屋	お弁当、おにぎり、稲荷寿司
	・よしば	焼きそば、

②収入に関して

スタッフおよび出演団体等の関係者には事前にクーポン券（１日１人 600 円分）を配り、それぞれグルメストリートの飲食店で大会中の昼食をまかなう形式にした。売り上げは100%出店団体の収入となる形にし、その代わりに実行委員側から出店団体に対しては、保健所の登録申請代（７店含めて8200 円）の負担と殺菌消毒液の提供に留めた。図１は出店団体のクーポン券による収入内訳である。

昨年度（2003 年）の飲食店の収入に関するデータが把握できないため、正確に比較することは出来ないが、商工会の吉原によるとかなり大幅に増収したという。クーポン券以外の収入に関しては収入額を把握していないが、おおよそクーポン券における収入と同程度の収入が見込まれる。

③スタッフによる対応について

各出店団体とも模擬店の出店には慣れており、それぞれの運営方法に任せる形を取った。スタッフが行った対応としては、カピオ内の給湯室を案内し、汚した場合の処理を徹底させたことと、食材の保存に使用する氷を両日の朝に用意したことぐらいである。また、各出店団体は日に数回荷物搬入を行うため、駐車場担当と事前に打ち合わせを行い、公営駐車場の駐車券のほかに、荷物搬入時の駐車スペースを確保した。

④機材物品、食品衛生管理について

当日に必要な機材物品（ガスボンベ、コンロ、机椅子、水道場所、食器類、テント等）はスタッフ側でまとめてレンタルの手続きを行い、出店団体側の業務負担を軽減させた。ただし商工会出店店舗においては各自で機材物品の確保を行った。事前における出店者団体のミーティングの場で、食品衛生管理の重要性を促しつつ、大腸菌検査、保健所への屋外模擬店申請、消毒液の手配をすることから食品衛生管理を徹底した。

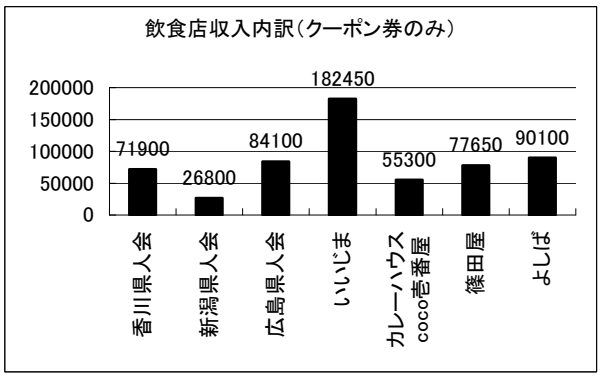


図１　飲食店クーポン収入内訳

写真１　グルメストリートの様子

（２）「商」：商い横丁（インカレ関連グッズの販売店）

販売促進プロジェクトの部分で述べてあるので以下、割愛。

（３）「遊」：Jump to the world（最高到達点を競う遊戯装置）

①試行錯誤の末に生まれた完成体

早い段階から最高到達点を競い合う遊戯装置という企画は、あったものの、いざ実現する上で構造面・安全面・コスト面等を考えると、なかなか完成の形が見出せない状態が続いた。最終的に決定したのは、縦 1,8M×横 1,8M×高さ 3,6M の直方体の構造物である。中に工事現場用のイントレを４基組み、その周りにベニア板とプラスチックダンボールで覆った。内側には木材の角柱を入れ、外側からドリルでネジ釘を打ち付けて固定させた。それぞれ４面にはペンキで絵やデザインを描き、その内１面は、ジャンプで最高到達点が競い合えるよ

う高さのメモリを入れた。当日、挑戦者には指先にチョークの粉をつけてもらい、ジャンプして壁に印を付けてもらった。それぞれの記録が残るようにチョークのあとには名前を書いたシールを貼って、わかりやすいようにした。

②スタッフ体制について

当日は安全面を第一に考え、常に常駐スタッフが２人以上いるような体制をとった。強風や壁に激突した際に、壊れることも想定した上で、厳重な警戒態勢をとった。

③集客について

子供から大人、選手まで男女問わず幅広い層の人達がたくさん参加してくれた。ペデストリアンからも十分目に付く程の大きさであったため、試合観戦を目的とした人だけでなく学校帰りの学生や家族連れ等、通りすがっただけの人達も参加してくれた。特にチームや団体で来場している人達はお互いに競い合うシーンが多く見受けられた。

また２日目にはＶリーガー参加によるミニイベントを企画し、更なる盛り上がりが期待されたが、大会プログラムとの時間のズレやアナウンサーとの事前の打ち合わせ不足等こちらの準備不足も影響し、想定していたような盛り上がりを創出することができなかった。

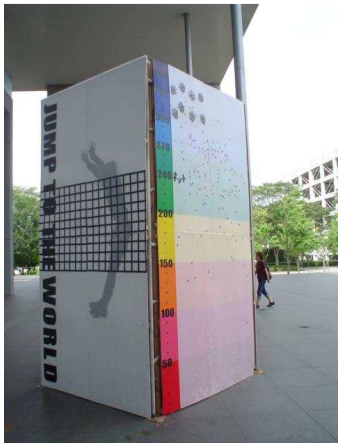


写真２　外観

写真３　ジャンプする小学生

（４）「憩」：インカレ広場（食事や休憩のためのスペース）

グルメストリートと商い横丁の間の空間にパラソル付きテーブル１０個、テーブル１０個、イスを約７０脚をランダムに配置した。幸いにも大会期間中は雨が降ることなく、多くの人が利用していた。特にお昼ごろではグルメストリートで買った飲食物を食べる人たちで、常に満席であった。お昼ご飯を食べながら、話をしたり、パンフレットに目を通したりと各々思い思いの時間を過ごしていた。それは高校生、大学生、子供づれの家族、年配の方々など幅広い年齢層にいたる。またアリーナ内で試合が行われている最中でも、外のスペースにいる人はたくさんいて、多くの席が利用されていた。

写真４　広場の様子

「Sports,Art,Life」の視点から３つのゾーンに分けて展示を行った。ゾーン分けには、3 色のラインテープにデザインを施したものを用いて、来場者が一目でどのブースか分かるように工夫した。

写真５　ゾーン分けのラインテープ

表２　展示ゾーンと団体

ゾーン	展示団体
Sports	・つくばユナイテッドVolleyball ・障害者バレーボール ・筑波大学スポーツクリニック ・筑波大学ダンス部 ・キッズチア・プロダクション
Art	・能面（奥山欽哉氏） ・筑波大学吹奏楽団 ・津軽三味線井斗絲幸社中　無弦塾
Life	・筑波大学社会工学都市計画実習報告 ・つくば・まちの変遷 ・アースデイつくば ・つくばエクスプレス ・Na ごみ

（６）「聴」：街角演奏（学生バンドによるストリートライブ）

①演奏場所の変更

当初、二日目のみの演奏依頼だったが、一日目に、リハーサルとして本番を想定した時間帯、場所、演奏曲目で演奏をしてもらった。場所が出店の脇だったため、出店の前に人がたまってしまい販売者から苦情が出た。さらに立ち見の聴衆が多い、正午近くになると日差しがあたるようになり楽器をいためてしまう恐れがある等の理由から二日目は場所を変更。西側のグリーンハウスを利用して機材を設置し、リハーサルでの問題点を改善できる位置に移動した。（図２を参照）

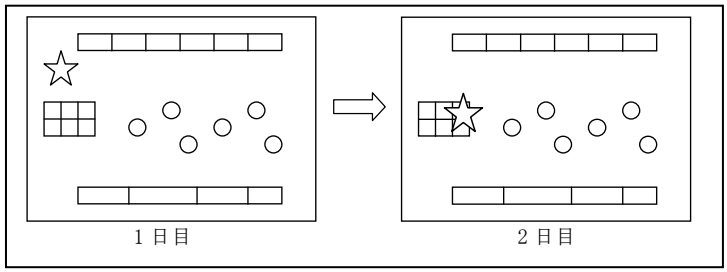


図２　バンド位置

☆はバンド、〇はテーブル、上側は飲食店、下側は販売店。
２日目はグリーンハウスの中にバンドが入っている。

②聴衆の反応

一日目のリハーサル、二日目の本番ともに飲食店に昼食を買いに来る観客を中心にオーディエンスを確保した。多くの人が、椅子に座って昼食を取りながらの鑑賞だったが、特にパフォーマンスに出演していた高校の吹奏楽部の生徒はバンドの近くで立ったまま聴いている様子が見られた。

③演奏者の反応

「結成してまだ数ヶ月ということもあり、キャパシティを広げてゆくという意味で今回の演奏は試験的な要素を含んでいたが、聴衆の反応が予想外によかった。来年も依頼があればぜひ受けたい。」というコメントをいただいた。

写真６　バンドの様子

（7）「通」：インカレゲート（グリーンハウスを使ったゲート）

①東側ゲート

カピオ向かって左に設置されたこのゲートは、鉄でできた農業用のグリーンハウスを加工したフレームの中に「東・西」という二つの漢字のオブジェを廃棄木材で組み上げた。カピオの裏や横の駐車場から来た選手や見物客に対し、「東西インカレに来た」という強い印象をつけ、気持ちを盛り上げるためのアイストップ的意味合いを狙った。

ゲート前で足をとめ眺めている人、記念撮影をする人もいたが、多くの人はゲートの存在に気付きつつもその場を通りすぎていたようだ。また多くの来場者の動線は予想していた東側からではなく、会場の西に南北に走るペデストリアンデッキを通って歩いてきていため、東のゲートはメインゲートにはなっていなかった。

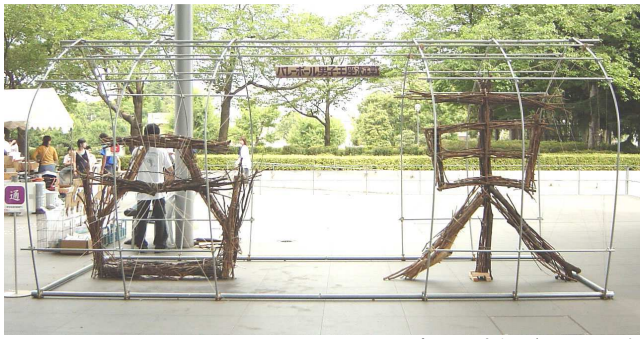


写真７　東側ゲートの外観

②西側のゲート

カピオ向かって右に設置されたこのゲートは、東側のゲート同様に鉄のフレームを使ったものである。このゲートでは選手と来場者とのインタラクティブなコミュニケーションを狙った。バレーボールをしている筑波大の選手のシルエットをＴシャツにプリントしたものをハンガーに掛け吊るし、サインペンで自由にそのシルエットの選手に対してメッセージを書いてもらうという仕掛けにした。

Ｔシャツの存在に気付きつつも、何も書かれていないＴシャツにペンをいれることに抵抗を感じたのか、半日間は何も書かれずじまいだった。そこでスタッフに頼み、率先してメッセージを書いてもらったところ、一般の来場者も続々と参加するようになった。

特徴的だったのは千葉県、埼玉県、神奈川県などつくば市内だけでなく遠隔地からも、筑波大の選手を応援しにきているファンがいたことである。熱心なファンの方々は選手に自記筆のメッセージを伝えられる機会を喜んでいた。

また選手自身も試合の合間に自分たちへのメッセージを読むためＴシャツを見にきたり、誰のシルエットなのかを見に来たりしていて、Ｔシャツに興味を持っていたようだ。これらのＴシャツは試合後にバレー部の出場選手全員にプレゼントし、先生をはじめ選手達も感激していた。

写真８　西側ゲートの様子

③両ゲート

２つのゲートはカピオ前の広場の両端に設置し、ストリート（バレー街道）をつくるための「軸」を与えることを狙った。これは来場者に意識されていたかは定かではないが、出店やテーブルを並べる際に、それらが広場全体に散らばるのを抑え、まとまりを与える結果につながった。

【３】考察

（1）「食」：グルメストリート（学生団体・商工会による飲食店）

①収入に関して

7 店の出店店舗で全日総額売り上げは 120 万円に達すると推測される。この数字から申し分ない盛況であったと言える。しかし、各店舗における売上金額には、いくらかの差が生じている。今年度に関しては、商工会出店店舗における「いいじま」がカキ氷を販売して、季節、気温の要因などから大盛況を収めた。今後、店舗数を増やす案も提案されると思うが、出店商品の分担をどのようにコーディネイトをしていくかを検討していかなければならない。

②スタッフによる対応について

週に一度の学生出店団体とのミーティングを行うことから、出店団体にもインカレを構成する一員として参加するよう働きかけた。その結果、準備段階の際にも同じスタッフとして活発な意見交換を実現させ、当日運営においても信頼のもと運営することが可能となった。今後、出店団体が増え、模擬店に未経験の団体が存在した場合、模擬店に関する実行マニュアルを配付することが望ましいと考えられる。

③機材物品、食品衛生管理において

機材物品における業務フローにおいて、大学、学園祭実行委員会から借用及び、使い捨て食器の通販から購入するなど、学園祭実行委員会のノウハウを利用して、効率的に業務を遂行することができた。撤収作業においても出店団体が自主的に返却するなど機材物品の撤去に能動的に取り組んでくれたおかげでスムーズに撤収作業を終えることができた。しかし、床にこぼれた油の汚れが撤収後に発見され、来年以降、各店舗の地面にブルーシートを敷くことを徹底する必要性を感じた。

（3）「遊」：Jump to the world（最高到達点を競う遊戯装置）

①安全面に関して
　最も注意をしていた安全面だが、参加者からけが人が一人も出なかったことは成果と言える。せっかくの盛り上がる企画でもけが人が出てしまえば、一度に信頼を失い、屋外のみならずインカレ全体への迷惑をかけることになる。そうした意味で、今回のようなスタッフの常駐および万が一の対策は必要である。
　また、けがとまではいかないが、一部の参加者からは、着地時に膝を痛めたとの声もあった。同様にジャンプ着地時に生じる足への負担を懸念し参加を断る選手がいたことから、負担を軽減するための配慮が必要であったと言える。今回のように数多くのＶリーガーが集まる貴重な機会にそのような配慮不足から参加を断られてしまったことは残念であった。次回は事前に選手やトレーナーからアドバイスをもらい、対策をした上でより多くの選手の参加を期待したい。
②集客について
　数多くの参加者があったにも関わらず、その参加人数を把握する手段をとっていなかった。今後、自己満足を避けるためにも客観的資料となる参加者人数を把握すべきである。また、幅広い層の参加者があったのだから、その層に応じてシールの色分けをする等、記録を残す点においてもう一工夫あっても良かった。
　Ｖリーガー参加によるイベントにおいては事前にアナウンサー、音響担当者等ともう少し細かい所まで打ち合わせをすることにより更なる盛り上がりが創出できると考えられる。
　また、繰り返し自分の記録に挑戦するリピーターも数多く見られたことから、来年度引き続いて行っても多くの参加人数を見込めるであろう。
　全体を通してみると、参加人数、幅広い層からの参加者、参加者とスタッフとのコミュニケーション等、数々の評価すべき点が得られた。

（4）「憩」：インカレ広場（食事や休憩のためのスペース）
　グルメストリートで買った飲食物を、すぐ近くで座って食べられること、それに加えて友達、家族、たまたま会った知り合いなどとテーブルを囲んで食べたり、話したりすることができることが、多くの人に利用された要因であるだろう。幸い雨が降らなかったことや、そこまで暑くなかったことも、外で食べたりすることを促したのではないか。最悪、雨の場合は、グルメストリートを３ｍ前進させて屋根のある部分だけに広場は縮小する予定であった。
　お昼ごろは、常に満席であり、お昼ご飯を食べても席を立つことなく、そのまま話をしたり、のんびりしたりする人が多くて、座るための回転はよくなかった。飲食物を買っても座って食べることができない人が多かったのも事実である。来年はもう少しテーブル、イスを増やしてもよいのではないか。
　また利用した人がこぼしたものが、テーブルや床についたりして、その汚れを落とすのにかなり苦労した。対処としては、床への影響を少なくするためにこのスペースにシートを敷いて、その上からテーブルやイスを並べるなどが考えられる。

（5）「観」：つくばサイト（つくばの魅力をパネル展示）
　３つのゾーン分けをどのようにするか、が今回の課題の一つであったが、ラインテープを用いることで、来場者に分かりやすく出来たのではないかと考えられる。
①Sports
　写真・ビデオや体験的なものを取り入れるなどして、来場者の関心を惹くことが出来たように思う。障害者バレーでは、普段は目にすることのない競技であったにも関わらず、立ち止まってビデオを見てくださる方の姿が見られた。設置した募金箱への募金も、予想以上に多かった。
　ユナイテッドの部分は、他より高い位置に展示してあったので、注目を集め、また見やすかったように思う。パネルの高さは調整可能であるので、どの高さが見やすいか、安全性も考慮した上で検討すべきである。
②Art
　なぜここに能面が？と驚いた方も多かったのではないだろうか。このゾーンでは、一種の異空間が存在したように思う。吹奏楽団のパネルいっぱいのポスターには、目を引くものがあった。
③Life
　1 階エントランスでの展示であったこともあり、じっくりと見てくれる人が少なかった。エントランスロビーを通らずに体育館に入ってしまう人も多かった。せっかく展示するならば、より多くの来場者に見てもらえるよう、1 階での展示には工夫が必要である。
④展示全体を通して
　今回は、「Sports,Art,Life」というテーマを設けて展示を行ったが、全体としてのまとまりに欠ける部分がまだあったように思う。全体で一つのものを作り上げるようなつながりのある展示を作り出すことが出来ると、もっと良いのかもしれない。

（6）「聴」：街角演奏（学生バンドによるストリートライブ）
①演奏場所の変更、前日リハーサルについて
　一日目にリハーサルを行ったのがよかった。リハーサル時には機材の調整や音響確認も同時にできた。演奏者が屋外演奏に慣れていたため臨機応変に動いてもらえたこと、カピオ前の広いスペースを十分に活用できたことが、リハーサルを生かしての二日目の成功につながったといえる。
②聴衆の反応、屋外ブースの雰囲気作りについて
　昼食時に演奏時間を設定したことにより、多くの観客の方に聴いていただくことができた。また「セサミ・ストリート」などの低年齢層向けの曲から、CM などで耳馴染みのスカバンドのナンバーまで、幅広い年齢層が親しめるような選曲が屋外の雰囲気をより盛り上げる要素となった。そして、会場内にあって屋外ブースにない『音楽』を屋外にも導入することにより、会場内と屋外との温度差を少なくすることにも貢献した。
③演奏者の反応について
　後日談：インカレでの演奏をきっかけにして、バンドが出演する地域のイベント等を高校の吹奏楽部の生徒が見に行くなど、メンバーと高校の吹奏楽部の生徒との交流があった。
　このようにバレーをきっかけとして、交流の輪が広がってゆくことはまさに今回地域デザインプロジェクトが、そして大会全体が目指した目標の一歩になると考えられる。

（7）「通」：インカレゲート（グリーンハウスを使ったゲート）
①東側ゲート
　自動車で来場する見物客が予想していたよりも少なかったため、東側がメインゲートになるという推測は見当違いだったのではないだろうか。
　しかしこのような大会を象徴する巨大なオブジェを広場に設置することは、スタッフ、選手、見物客の気分を盛り上げ、試合やイベントを盛り上げようという共通の意識をつくり出し、大会全体にまとまりを与えたのではないだろうかと考えられる。
②西側のゲート
　シルエットという表現方法は、クイズ形式で誰なのか推測しあうことができる一方、関係者や選手自身もその答である選手が誰を差しているのかわからず、メッセージを書く際に混乱を生んでいたのも事実である。答である選手名を裏に書いておくなどの配慮もできたと考えられる。

企画としては、T シャツというメディアにより、ファンと選手を繋ぐことができ、想像以上にファン・選手共に喜んでくれたことが印象的であった。

③両ゲート

広場の両端にゲートを設け、ストリート空間を作り出すというコンセプトからすれば、全体として締りを与える効果を創出していたと考えられる。両ゲートの装飾および活用方法に関しては、大変悩んだところでもあったが、結果的には八場所等も含めてうまくバランスがとれたのではないかと考えている。

【４】まとめ

本プロジェクトは、新しい試みであった。本来のバレーの大会ということを考えるとあくまでプラスアルファとなる付加価値の部分であり、ともすれば「なくても成立」するプロジェクトであった。それでも、多大な時間をかけ、コストをかけ、多くの関係者を巻き込みながら協力していただいたことは、それだけ意味があり、価値があるプロジェクトであったといえる。また、初めてのことが多く、時間や予算的な部分でなかなか見当が付けづらく、他のスタッフ等には迷惑をかけてしまうこともしばしばあったが、結果的にみれば、予想を上回る好評をいただくことができた。

今回の反省を次年度に生かすとすれば、まず早い段階でおよその企画の柱を設定し、それぞれにおいて責任者を配置することである。今回は、初期のころから複数のアイデアの源泉はあったものの、そこから柱となる企画を打ち立てるまでに時間がかかってしまった。それに関わるメンバーとしても早い段階から責任を持たせることで、実行にむけてよりオリジナリティを発揮することができるであろう。

また、全体を把握し、管理できる人間が最低２人は必要である。本プロジェクトのように多くの企画を抱えるようになるとなかなかリーダー１人では、負担や効率の面を考えても難しくなってくる。２人いれば、１人が不在の時でも対応できるし、チームをまとめる上で役割を分担することができる。

最後に、基本かつ忘れてはならない部分が、あくまで「東西インカレ」という全体を共に創り上げる上でのプロジェクトであるという意識である。個々のプロジェクトに没頭することにより、ややもすると全体との関係やバランスと失うことも考えられる。それは、特に組織の末端になればなるほど、生じやすいものである。そこは、リーダーが常に意識をしながら縦・横の情報の流通をスムーズにし、メンテナンスしていかなければならないところである。

本プロジェクトの効果は、インカレの本番当日２日間に留まるところはない。今回のプロジェクトをきっかけに様々なものが「出会い」「つながり」、そしてまた新たに「生まれて」いくことを今後も期待したい。

Ⅷ. 販売促進プロジェクト

原稿作成者　横沢友樹

【１】目的・方法

（１）目的

- ２日間の感動を後にも残るようにしてもらうため。
- 売上金を他のイベント、または次回開催時の運営費にまわす事によって、より質の高いものにするため。
- お客様の気分をより一層インカレ気分にして、大会を盛り上げるため。

（２）方法

販売物と販売数は以下の通りであった。

- Ｔシャツ（紺）‥‥‥‥　３００枚
- Ｔシャツ（白）‥‥‥‥　２５０枚
- タオル‥‥‥‥‥‥‥‥　１００本
- タンクトップ‥‥‥‥‥　１００枚
- 応援バルーン‥‥‥‥‥１０００個
- オフィシャルブック‥‥２０００冊
- レセプションチケット‥　　無制限

以下に、おのおのの販売方法の概略を示す。

①　前売り販売

販売物は、Ｔシャツ、タオル、タンクトップの３点に絞った。また、販売する対象者を一般市民は除き、「第２回総会出席者および、その知人」とした。販売方法は、第２回総会時に注文申し込み用紙を参加者に配布し、第３回総会時に各々が取ってきた注文用紙を提出してもらった。その後、販売のスタッフが申込者に直接連絡を取り、料金と引き換えにグッズを手渡した（→以上ここまで一般前売りとした）。

また、各局・各プロジェクトに参加しているスタッフを対象とした販売も行った。こちらは、６月中旬に開催されたサミットカンファレンスにて、各リーダーに申し込み用指を配布、次回カンファレンスで提出してもらった。グッズの配布については、大会前日、会場にて手渡した。料金については、各リーダーに集めてもらい、それをバレ研に提出するという形を取った（→以上ここまでスタッフ前売りとした）。

②　当日販売

販売物は、Ｔシャツ、タオル、タンクトップ、応援バルーン、オフィシャルブック、レセプション当日チケットとした。

- カピオ販売

カピオ入り口脇の２箇所に２つの販売ブース（見本商品の展示場所兼販売所）を設置し、各ブーススタッフ２人、計４名を配置、約２時間～３時間毎のローテーション（３グループ）で販売を行った。宣伝として、応援団・常総学院の生徒・チアに応援バルーンを無流配布し、応援に使ってもらった。また、試合間・セット間に販売広告のアナウンスをしてもらった。

- 売り子販売

２人１組を２組作り、セット間、試合間、またはチアリーディングの時間など各イベントの合間に客席に行って購入を呼びかけた。一人が箱の中に商品を入れて持ち歩き、もう一人は看板を持って歩いた（販売員だということが一目でわかるための工夫）。また、チアリーダーと一緒に会場内を歩き販売を行った。

- レセプション会場販売

カピオでの販売ブースと同じように１つの販売ブースに２人を配置しておこなった。また、白いＴシャツや、タオルにＶリーガーのサインを書いてもらって展示した。

- アカデミックフォーラム会場販売

２日目に行われたアカデミックフォーラムの開催時間中に、アカデミックフォーラム会場の受付に販売員１人を派遣し、オフィシャルブックを販売した。

【２】結果（詳細は別紙①決算表を参照）

（１）前売り

販売数は予想を遥かに超え、３種類とも作成数の約半数が売れた。売り上げは、一般、スタッフ合わせて、￥513,300となった。

（２）当日販売

２日間で、Ｔシャツ、タオル、タンクトップはほぼ完売、応援バルーンも645個を売ることができた。しかし、オフィシャルブックは、わずか331冊にとどまった。売り上げは、グッズで￥969,650、オフィシャルブックで￥331,000となった。

また、詳細は、「Ⅴ．レセプション・プロジェクト」で述べるが、レセプションチケット合計34枚、売り上げで￥135,000となった。

（３）決算

決算について、オフィシャルブック、レセプションは各々のプロジェクトで報告する。したがって、ここでは、グッズについてのみ述べる。

前述のように、グッズでは前売り￥513,300、当日￥969,650、合計￥1,482,950 となった。また、グッズの制作費が￥1,414,875 であるから、利益は￥68,075 となった。

【３】考察

（１）前売り

昨年は、広く一般にもチラシを配り、申し込みを受け付けたが、注文の多くは関係者であったため、今年はこのような手段を選んだ。

また、市民に対しての申し込みの受付は、以下の点で課題が残る。

- グッズ制作および受付開始の時期

  より市民に早く届けるために、受付開始の時期を早めなくてはいけない。すると、インカレはまだまだ先の事として捕らえられ、注文が減る可能性がある。また、それに合わせ、グッズの発注時期を早める必要がある。さらに、これは後述の商品の配布方法とも関係するが、逆に注文時期を遅らせた場合、大会までに商品を届けるこちら側の余裕がなくなる。

- 注文の受付方法

  受付場所をどこにするのか？その手段は？管理者はだれか？など、バレ研やスタッフへの負担が増す。

- 商品の配布方法

  どのようにして市民に商品を渡すかが一番の課題と考えられる。具体的には、仮に輸送するにしたとすると、お客に送料を負担してもらわなければならず、結果、当日の価格よりも高くなってしまう。また、市内外のお客に対して、スタッフが戸別訪問で届ければ、送料はかからないが、スタッフへの負担はかなり多きいものとなる。

以上を考え、また、去年の結果を踏まえると、一般市民への販売は行わず、関係者のみに絞ったほうが効率がよいと判断した。結果、今回は、一般の市民に対しての宣伝を行わず、注文も取らなかったが、スタッフとインカレ関係者内だけの販売で充分な数（販売予定数の焼く半数）を得られた。

よって、前売りは、その労力と売り上げを考慮すると、今回のように関係者のみに絞ってもよいのではないかと考えられる。ただし、今後、この東西インカレがより多くの市民に受け入れられるようになれば、市民からの注文も増すことが予想され、再考する必要性は十分にある。

（２）当日販売

結果で述べたように、Ｔシャツ、タオル、タンクトップはほぼ完売することが出来た。これには、去年の反省が充分に反映されたためと考えられる。

第一に、制作物の限定があげられる。昨年は、ストラップ、マグカップなど「小物」の制作物があり、また、その販売予定数も多かったのだが、売り上げは低く、赤字の大きな要因となった。しかし、Ｔシャツ、タオルの売れるゆきはまずまずであった。そこで、今回は制作グッズの種類を限定し、おのおのの販売予定数を増やす方針とした。

また、来客者のニーズが昨年で明らかとなった。昨年は、「バレーボール」ということで、身長や体の大きい来場者が多数という予想の元、商品のサイズも大きめのものを用意した。しかし、実際の来場者はママさん、小学生、女子中高生が多く、消費者も同様であり、小さめのサイズが売れた。そこで今回は、サイズの種類を増やすとともに、小さめの商品の数を多くした。

さらに、「赤字を出さないためには、売れ残りを出さなければよい。」という考えの下に、タオル、タンクトップは昨年の売り上げを元に制作数を決定し、やや少な目にした。

以上のような方針で販売活動を行った結果、Ｔシャツ、タオル、タンクトップの中で、売れ残りはＴシャツ１３枚に留まり。ここで赤字を出すことはなかった。

結果から考えれば、売れたペースを踏まえると、タオル、タンクトップはもっと作っていればあと、５０枚くらいずつは売れたと考えられる。しかし、「売れ残りを出さない」という方針であるならば、これ以上の制作は厳しいのではないだろうか（昨年のタオルは９０本前後しか売れていない）。しかし、善処するのであれば、前売りの注文をもっと早めにとり、その売れ行きを見て当日の予想を立て、メーカーに注文する形がよいと考える。

オフィシャルブックについては、昨年と同様な結果となった。これには、来年こそ対策が必要と考える。詳しくは「オフィシャルブック」の項を参照してほしいが、客と接する立場からの意見としては、価格が高いとの声が多かったので、質を下げることになったとしても、価格を下げることが望まれているようだ。また、制作数自体の検討も必要である。

応援バルーンについては、決算から見ればわずかながらの赤字であるが、もともと原価ぎりぎりの値段で出しており、会場を盛り上げることが第一の目的の商品であったため、これは、来年度以降もこのスタイルで販売してもよいと考える。

（３）販売場所について

売り子販売を前回に引き続き行ったが、今回は、観客の邪魔にならないことを前提とした販売方法、販売時間を選んだ。結果としては、応援バルーンの売れ行きが特によかった。また、スタッフにとってもそれほど負担ではないので、数はそれほど出ていないが、Ｔシャツやタオルなどの販売も引き続き行ったほうがよいのではないか。

レセプション会場での売れゆきもまずまずで、これも次年度以降も続けたほうがよいと考える。一方、アカデミックでの販売はオフィシャルブック７冊のみであったため、やめてもよいのではないだろうか。

【４】まとめ

以上、これまでのことを簡潔にまとめ、次年度以降の参考とする。

- 商品は、小物の商品の販売をやめ、Ｔシャツ・タオルなどの比較的大きなもの、実用的なもの（インカレが終了しても使用可能なもの）の販売に力を入れる。ただし、応援バルーンのような会場を盛り上げるのに役立つグッズの販売は、やったほうがよい。この場合、この商品での利益は考えず、極力価格を下げることに徹する。
- 前売りは、現状ではインカレスタッフ、および関係者のみを対象に行うほうがよい。また、注文をとる時期を早め、前売りの売れ行きを見て、制作数（販売数）を決定するとよい。
- オフィシャルブックについては、何らかの対策・検討が必要である。
- 販売場所・方法は、今年と同様なものでも充分な成果が挙げられる。ただし、アカデミック会場での販売は中止することを考えなければならない。

表１　グッズ販売決算

収入		前売り(staff)	前売り(一般)	当日販売	合計	売り上げ	請求額	収支
Ｔシャツ		123	123	289	535	1,153,000	1,147,125	5,875
タンクトップ		34	11	54	99	118,000	99,750	18,250
タオル		48	17	35	100	87,800	0	87,800
応援バルーン	単体			548	548	109,600	168,000	-43,850
	セット			97	97	14,550		
グッズ売り上げ		212,500	300,800	969,650	**1,482,950**		**1,414,875**	**68,075**
Official book				331	331			
Official book売り上げ				331,000	**331,000**			

Ⅸ　アカデミックフォーラム

原稿作成者　松田裕雄　中村玲　中山知佳　小松原亜弓

≪１≫　フォーラムプロデュースにあたって（松田裕雄）

【１】目的･方法

このフォーラムは、「Sports for All、All for Sports 人へ、社会へ、そして次世代へ、普遍の魅力を・・・」、「繋ぎのバレーで繋がる社会を！」いう理念に基づき、バレーボールを中心に「人が創る」魅力を多分野、多世代、多地域に向けて発信していこうとする「東西インカレ」という大学チャンピオンシップ内の一イベントとして企画されました。 これは、益々進む地域化、地方分権化の世相に対する「地学連携」（つくば市、筑波大学）の必要性とその実際の取り組みを市民に感知、認知してもらうという意図のもと、市と大学が贈る知的財産公開の場というイメージで行いました。以下がその主要目的になります。

１） 産学官民一体化へのスタート（Sports、Art、Life のコラボーレーション）
２） つくば市のアイデンティティを知ってもらう(つくばは資源の宝庫)
３） 夢多き教養を深めよう（市民、研究者、行政官、競技者の情報共有）

上記３つの目的に順じた企画・進行は、そのまま３つの大きな特色を持たせることでデザインしました。１）に関して－「産学官民」、「Sports、Art、Life」、この２つの軸からプレゼンターを選定し、都澤凡夫氏（筑波大学体育）、蓮見孝氏（同大学芸術）、渡和由氏（同大学芸術）、島袋典子氏（(有)インキュベーションラボ）、飯泉省三氏（つくば市企画調整）、中垣内祐一氏（堺ブレイザーズ）、以上６名で設定。（６人制に掛けて） ２）に関して－上記６名を選定した理由は、各人は活動する分野は異なり、その「手段」や「アプローチ」は全く異なるが、活動の「本質」や「根幹」は同じということにあります。即ち、各々が、自らの分野を他分野との相対的な位置づけを以って、非常に広いビジョンで捉えているということ（今回はそれが「まちづくり」という点で共通項になった）、裏を返せば、アイデンティティが確立されている方々であるということでした。３）に関して－所謂「シンポジュウム」的に何か最後に大きな提言を出すのではなく、こんな世界になればいい、こんなものが創れればという夢を公にすることで、情報を共有することを根幹的な目的とした為、論点を小さく絞らずに、自由な気風を出し、プレゼンター同士の対話、そして来場者との対話という形式をとりました。しかし、一方ではコーディネーター（蓮見氏）を設定することで、大きな論の流転は創るという進行形式（５段階の区切り、５セットマッチに掛けて）で行いました。

－進行方法（以下箇条書き風に記します）－

１）　2003 大会プロモーションビデオの放映
２）　１分間・自己紹介：(1 分×6 人)
　　自己紹介＋「今回のテーマに対する思い、つくばに対する思いを述べてもらう」
３）中垣内さんからの「問題提起」:(8 分)

ご自身の経験から、プロバレーボールチームの魅力という観点から自由に述べて頂き、最終的にはプロチームやバレーが地域社会へと密着していくことへの挑戦や課題等を挙げてもらう。そして最後に「筑波時代」に振り返り、当時との比較も交え、今のこの「つくば」の地に求めるひとつの「提言」や「期待」を述べてもらう。

４）各プレゼンターから、つくばへの提言：(5 分×4 人＋1 分×4 人)

中垣内さんからの「問題提起、提言」を受け、各プレゼンターから、これからのつくば市への話題提供を行なう。（各プレゼンターの発言後、コーディネータが発言要旨を簡単にまとめる）

1. 都澤氏（バレーボールでの堺モデルからつくばモデルへ）
2. 渡氏（バレーボールからスポーツ、そして地域デザインへ）
3. 飯泉氏（地域づくりでの行政のビジョン）
4. 島袋氏（ここまでを受けた産業のあり方）

５）各プレゼンターによるディスカッション（3 分×6 人）

それぞれのパネリストの提言に対する率直な意見交換。自分の提言に対する補足。

６）参加者とを結ぶディスカッション：(3 分×5 件)

質問、意見等を受け、それぞれのプレゼンターがコメントを述べる

７）まとめ：(2 分)

コーディネータが、全体のまとめを行う。

８）おわりに、閉会宣言：松田氏

【２】結果

さて当日は、入場者数は約 200 人と、当初の想定を大幅に上回る人数でした。参加者層は、学生から、地域振興市民団体の方々、スポンサー企業、市職員、一般父兄と、当初の狙いとしていた通りの多様な層となり、広報活動と連動した結果となりました。

実際のディベートについてです。中垣内氏は、スポーツとまち興業という観点から、大都市の中で地域感を社会的に教

化しながら、一方では経済的なビジネスの視点も入れていかなくてはならない難しさ、しかしこれは宿命であるということを。都澤氏は、スポーツと教育という観点から、あらゆる分野からの総体としての「つくばアイデンティティ」の確立により、中都市「つくば」にしかできないことを追求、キーワードは「自然」、「研究開発」、「地学連携」、「文化、芸術、スポーツ」、そしてその結晶としての「プロチーム」の存在を提起。渡氏は、生活とデザインという観点から、まちを構成する要素、「レジャー、医療、教育、芸術、音楽、健康等」がハードとしても一体化した施設をTX（常磐新線、通称「つくばエクスプレス」）開通とともに、スポーツを中心として創る「つくばスポーツパーク構想」を提起、ここではいつでも、どこでも、誰もが、気軽に「元気に、幸せ」になれる空間と機会があることを指摘。飯泉氏は生活向上と行政の観点から、地方分権下での、地域におけるあらゆる分野の協働制作が「まち」を創ることを述べ、まちの至る所、至る分野でこれが促進されやすい、しやすい環境づくりが「官」の最重要な役割であることを指摘。島袋氏は、多様な資源が「ある」だけではなく、それを生かし、それ以上の「ある」ものを磨いていく、付加価値をつける努力をし、もっと価値のあるもの、もっと輝けるものにしていくことで、産業も行政も財政も、そして結果として町全体が潤いを帯びる、こうした営みの中で地域力がついてくるということを指摘。

【３】考察

こうした展開の中で、一貫して流れていたものは、「魅力あるまち、人が住みたくなるまち、人が～したくなるようなまち」を創りたい、そして人が「幸せに、元気になれるような世界」にしたいということへの想いでした。これを異分野のプレゼンター同士、そして来場者が多角的に共感し、認識する瞬間が会場全体に創りだされていたといえます。

【４】まとめ

「東西インカレ」では、「繋ぎ」のスポーツ、バレーボールだからこそできることに挑戦しています。このような意味では、今回のフォーラムも、「本質」が同じであればどんな「手段」も「分野」も「繋がる」ということを証明するひとつの「生きた」、生の舞台でした。（実際、ほぼ初対面でありながらプレゼンター同士の打ち合わせは一切ありませんでした。当日は隣人の話を聞き、それに感性のままに反応してもらうことで、逆に「論」が「繋がる」ことを期待しました）「繋ぎ」のバレーボールで「繋がる」社会を！その一部がしっかりと担えた意義あるフォーラムであったと思います。

コーディネーターの蓮見氏は、フォーラム中に川端康成の著書「雪国」の冒頭を文字って、こう述べました。「つくばエクスプレスの長いトンネルを越えると、スポーツタウンの街だった。心のそこから楽しくなった。」こんな言葉が、このまちの「語り出し」になれる日がくればなあ・・・いうことを密かに夢描いています。

≪２≫フォーラム･マネジメント（中村 玲）

【１】目的･方法

運営面は、このイベント自体が東西インカレ初の試みであった。そのため、「やってみなければわからない」という手探りの状態であり、実際の場面を入念に想定することや、より良いイベントになるよう各々のアイデアを出し合うことが不可欠であった。また、プロジェクトの大きさに対し、メンバーの人数が少なく感じられたが、そのような条件の中でも各自が力を発揮し、スムーズに準備を進めていくことを目標とした。

これを実現するための方法として、以下のように役割分担を明確にしたということがある。

チーフ：松田
プレゼンター、コーディネーターとの交渉、イベントの総責任を担当

総務：鯨井、中村、西山
全体の動きの把握、ミーティング時のリーダー、チーフに続いた運営の代表

ＰＲ：小松原
初の試みであるこのイベントを少しでも多くの人々に知ってもらうため、つくば市内・市外にかかわらず、個人や企業団体、学生、教官などへのアピール

制作：仲山
クリエイターと連携し、吊り看板、広告、また、当日の試合の観戦者も呼び込めるよう、立て看板を製作

機材：宮崎
プレゼンターが使用するテーブルの用意、本番中のパワーポイントの操作

以上が主な役割分担である。また、当日は、アカデミックフォーラムプロジェクトのメンバーだけでは人手が足りなかったため、つくば市バレーボール連盟、事務局長、レセプションプロジェクトからも応援を依頼した。当日の役割分担は以下のとおりである。

司会：松田
総務：鯨井
受付：中村、仲山、鈴木〔つくば市バレーボール連盟〕、山本〔事務局長〕
来場者誘導：池田、金谷〔レセプションプロジェクト〕、岩瀬〔同〕、川口〔同〕
機材：宮崎、小松原
プレゼンター対応：西山、谷中
情報保障：手話･･･図師、菅家、中西
パソコン通訳･･･羽田野、有海、平野、関田

【２】結果

運営の始動から７月初旬までの間、少ない人数で各々がフルに活動した。また、慎重に計画を立てていった甲斐もあり、カピオ側との全体を通したリハーサルでは、特に問題も無くスムーズに実行することができた。しかし、チーフが学生でなかったことから、チーフの下で学生をまとめるリーダーが明確でなかったため、「常にメンバーを引っ張っていく人」の存在があいまいであった。

【３】考察

少ない人数で大きな物事に取り組んでいくためには、やはり役割分担が必要であると考えられる。「誰が何をやる」ということをメンバー全員が把握できていたことは、このイベントを成功させた理由の一つであるだろう。また、チーフの下で学生をまとめるリーダーが決まっていれば、もう少し円滑に物事が進んでいたであろう。この部分については、役割分担の明確化の必要性を感じる。

【４】まとめ

今回の本プロジェクトは、初の試みであったため、運営側としては「挑戦」という意味合いが大きかったかもしれない。しかし、結果的に、大きな問題も起こることなく、一人一人が努力しイベントを成功させることができた。プレゼンター、観客の方々からも、興味深く、充実した内容だったというお声をいただいた。次年度への提言としては、まずは役割分担を決めることが重要であると思う。それにとどまらず、役割同士がきちんとコミュニケーションをとり、協力し合える環境を作って準備を進行させてほしい。次年度の「アカデミックフォーラム」が、さらに多くの人を巻き込む、魅力的な内容になるよう願っている。

≪３≫ フォーラム・制作（中山知佳）

【１】目的･方法

本プロジェクトを実行する際に企画段階でプロジェクトチームを総務、PR、制作の 3 つに分けた。ここでは私の担当した制作物について報告したいと思う。制作を行うに当たっての目的はアカデミックフォーラムという催しが学生の行う、いわゆる手作り感のあるといったものではなく、一般に行われているものと比べて遜色がないような雰囲気を制作物によって作ること、でした。

これを実現する方法として一般にホール等で行われる催しに倣って吊り看板、たて看板、プレゼンターのプレートを制作することにした。また、会場設計および必要機材の調達・確保、搬入についてもこれを担当することとした。看板はその他にも案内用、会場前、会場内、カピオ前に設置し、記載する内容は「時間、プレゼンター、インカレのロゴ、キャッチコピー、テーマ、タイトル、内容、演題、場所、目的」とした。

【２】結果

（１）　吊り看板、たて看板

吊り看板はフォーマットを決めた後、業者に発注することとなっていたため実際の制作、というような事は行わなかった。また、たて看板も同様にフォーマットのみを指定し、プロダクション局に制作を依頼した。

（２）　ネームプレート

ネームプレートには各プレゼンターの現在の肩書き・名前・インカレのロゴ・スポンサーのロゴ・Ａｒｔ＆Ｓｐｏｒｔｓなどそのプレゼンターが活動している分野、を記載すること、出来上がりのサイズを指定し、会場のどこからでも名前が見えるように、と注文を入れてプロダクション局に依頼した。デザインされた紙をＢ３　５５×４０ｃｍ　のボール紙に４等分になるよう折り目を入れ、三角に組み立てたものに張り、完成とした。

（３）　事前ＰＲチラシ

バレーに興味を持たない対象に PR するため、インカレ全体とは別に本プロジェクト単独でのチラシを作成することにした。事前申し込みを促すために先着１００名へのオリジナルグッズのプレゼントがあることをアピールし、インカレ開催の目的、フォーラム開催の目的、開催日時、プレゼンターの肩書き・名前、申し込み要項を記載し、Ａ４版・両面刷りで作成した。

（４）　当日ＰＲチラシ

本プロジェクトはインカレ２日目の開催であったため、１日目に当日参加者対象にＰＲを行った。チラシにはプレゼンターの顔写真と名前・開催日時・開催目的といった必要最低限事項を記載し，Ａ５版、片面刷りで５００部作成した。

（５）　アンケート

今回が第一回目の開催となる本プロジェクトについて参加者がどのように感じたか、今後の課題等をフィードバックするためにアンケートを行うこととした。内容は以下の通りである。所属団体・住まい（つくば市内・外程度）フォーラムを何で知ったか・フォーラム参加の動機・フォーラムに参加しての意見、感想・情報保障を見たことがあったか・情報保障についてどう思ったか

【３】考察

（１）看板

業者やプロダクション局に依頼した後はほとんどノータッチであった。フォーマット等に間違いさえなければ問題はないと思う。

（２）ネームプレート

プロダクション局からは期待していた以上にフォーラムの雰囲気に合う素晴らしいものをあげてもらい、感謝の一言である。

（３）　事前ＰＲチラシ

よいものができたことは事実であるが、プロダクション局と連絡をしていなかったため、インカレ全体で決められていたフォント等の制作上のルールを無視することとなってしまった。

（４）　当日ＰＲチラシ

チラシ作成を決定したのが当日近くであったため、本番前日の仕上がりであった。プロジェクトチームで分担してＰＲを行う以外にも販売促進等に配布を依頼した。印刷枚数が少なかったために２時間ほどでチラシがなくなってしまい、あまり成果が上がらなかったように思う。

（５）　アンケート

情報保障についての質問に関しては、まだ世間一般に「情報保障」という言葉が定着していない事に気づかずに、「情報保障について～」という訊き方をしてしまったために、「情報保障って何ですか」などの回答が半数以上でてしまった。

【４】まとめ

アカデミックフォーラムプロジェクトにおける制作物については予定通りに進めることができたとは言えない。予定していなかった制作物が多かったこともあるが、制作物についてのマニュアルが完成していないため、どこからがプロダクション局に依頼すべきで、どこまでが自分たちで作成すべきなのかわからず、時間や作業のロスが多かったように思う。

アカデミックは他に比べてインカレ全体とは距離があるもの、独自に制作するものが多いイベントであるため、来年

も開催することになった場合、プロダクション局と食い違いが起きないよう綿密な打ち合わせ、申し合わせを行うべきである。

≪４≫　フォーラム･PR（小松原亜弓）

.【１】目的･方法

産学官民が連携したまちづくりへの提言という本プロジェクトの目的を達成するため、バレーボール、まちづくりのみならず、幅広い分野にまたがる多くの市民にこのフォーラムの存在を知ってもらい、一人でも多くの方に実際に参加してもらうことが、ＰＲ活動の目的であった。ホールの収容人数が 400 人弱であったことから、最低でもその半分以上の 200 人を、と目標設定した。

ＰＲの方法としてはまず、インターネットやスタッフの人脈によるＰＲルートの開拓から始まった。そして、そこで得たルートを活用してメール等で連絡をとり、電子媒体あるいはチラシ、ポスターを送付し、配布や掲示をしてもらう、という形をとった。さらに大会一日目にはカピオ入り口にてプレゼンターの写真も入れたチラシを配布、カピオ内の電光掲示板でのＰＲも行った。

また、ＰＲの効果の把握や、来場者の意見・感想を知るため、当日会場でアカデミックフォーラム独自のアンケートを実施した。

【２】結果

（1）ＰＲ依頼

市内の各市民団体、大学内の関係分野の先生方、バレーボール学会の協力を得て、合計約 1300 部のチラシを配布。また、アカデミック独自に電子媒体でのチラシ配布、東西インカレ全体のポスターの掲示もあわせて依頼した。

その他、つくば市内、茨城県内の情報サイトや広報誌などへの掲載依頼も考慮したが、これらの場合にはただチラシやポスターを送付するだけではなく、内容、文面等相当の準備、打ち合わせが必要なため、時期が迫っていたこともあり、断念せざるを得なかった。

（２）アンケート集計結果

①来場者内訳

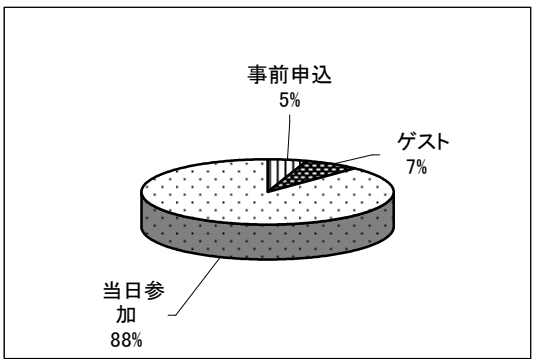


表１　2004 来場者内訳

あらかじめ設定した目標人数には少し足りなかったが、事前申込の少なさを危惧した割には当日申込で非常に多くの人が来場した。このうちアンケートの回収は 32%の 57 名分であった。

②所属団体

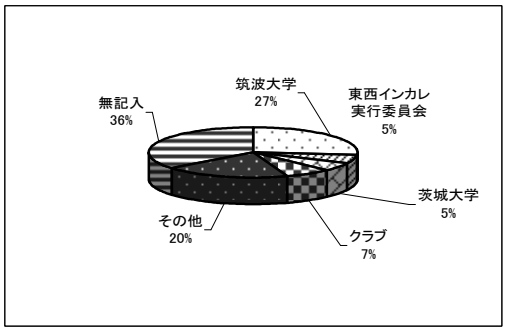


表２　2004 来場者所属団体

来場者の所属団体は主に筑波大学、東西インカレの関係団体、バレーボール関係の団体が多かったが、まちづくり関係団体からの参加が少なかった。

③住まい

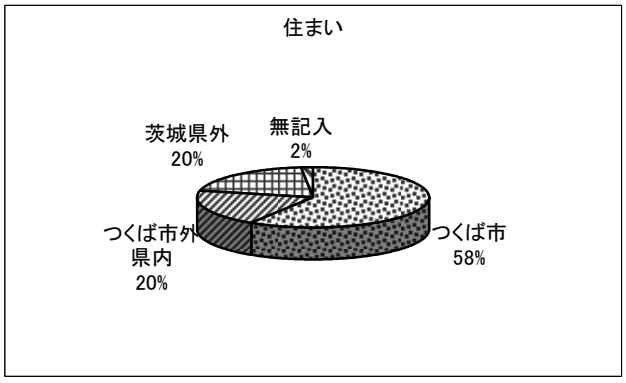


表３　参加者の住まい

つくば市外からも多くの人の参加があった。したがって、次回はより広範囲での PR 活動を実施すれば、さらなる効果が見込めるだろう。

④フォーラムを知った手段（アンケートより）

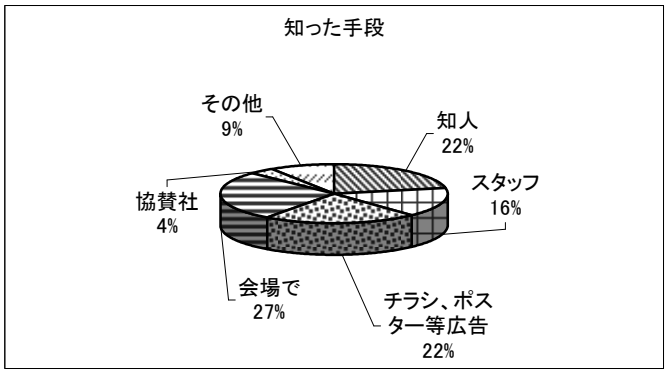


表４　2004 来場者フォーラムを知った手段

アカデミックフォーラム独自のＰＲルートのみならず、東西インカレ全体のＰＲ局、あるいは大会オフィシャルブックやホームページによって、来場した人が多いことがわかる。

⑤参加動機（アンケートより）

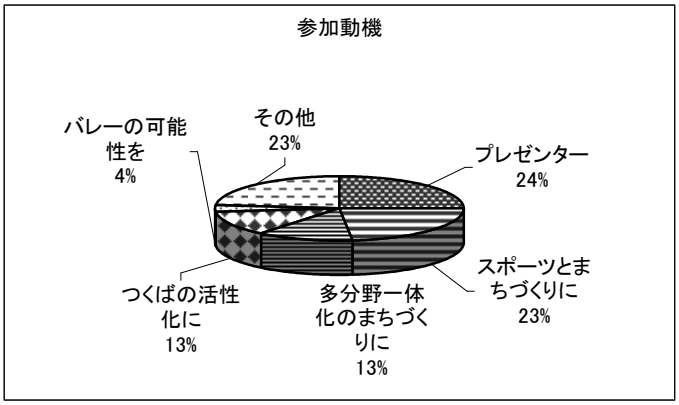


表５　2004 来場者参加動機

参加動機は様々であったが、やはり魅力あるプレゼンターの存在、加えてまちづくりなど地域に密着したテーマを取り上げたことが集客につながったと見られる。

⑥意見・感想

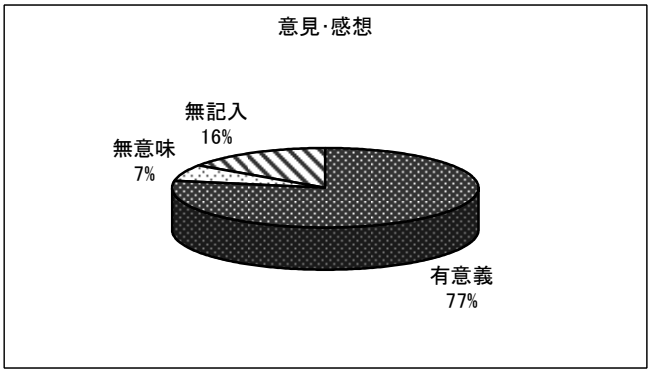


表６　2004 来場者意見・感想

自由記述であったため、この他にも様々な意見が寄せられたが、多分野が連携したあたらしいまちづくりという企画の意図が十分伝わったことがわかる回答が特に多く寄せられた。一方で、ディスカッションの時間が短い、テーマがぼやけているといった批評も寄せられた。

（３）情報保障

①情報保障を見たことがあったか

見たことがある	12 名
ない	23 名
わからない、または無記入	19 名
手話はあるが字幕はない	1 名

②情報保障をどう思うか

よい。普及してほしい	7 名
役に立つ（聴覚障害者だけでなく、健常者にも）	6 名
わからない	3 名
特になし	2 名
間違いが目立ったが、努力はすごい	2 名
助かった	2 名
優しい配慮だと思った	2 名
その他	各１名

一文が長すぎると見る人が飽きるのではないか？
手話･字幕の両方がすごい
プレゼンターとの打ち合わせが足りなかったのでは？
微妙なニュアンスが無視されていて残念
大変そう
アリーナ内よりもしっかりした保障
勉強になった
驚いた

無記入・・・２８人

【４】まとめ

今回のアカデミックフォーラムプロジェクトにおける PR 活動は、プロジェクトの人数が少なく、時間も限られていた割には効率よくでき、成功したといえるのではないだろうか。目標人数こそクリアすることはできなかったが、次回は今回開拓した PR ルートへの資料配布に加え、早い段階で広報誌等への掲載依頼をすることで、さらなる集客が期待できるだろう。また、より幅広い分野の団体、地理的にも寄り広域への PR を行うことも､ある程度の効果を見込めると思われる。スポーツ、まちづくり、プレゼンター、情報保障など、いろいろなキーワードに関連させた効率よい集客を、次回へ期待したい。

第四章　プロダクション局

Ⅰ．総合デザイン

原稿作成者　小澤　宏行

【１】　目的・方法

大会を通じた発行物、制作物の全統括、産出機関。ビジュアル面より大会のイメージ作りをサポート。

各局・プロジェクトから依頼のある制作物を作成。企画段階より各タスクとのミーティングし連携をとることで、印刷業者など各種外部業者とのやりとりをスムーズにする。また各タスクからの制作依頼のコンセプトを把握した上での制作を行う事を目標とする。

【２】　結果

(1)　制作物リスト

PR 局

- 第一期ポスター
- 第二期ポスター
- 第三期ポスター
- チラシ
- 紫峰会報記事用ロゴ画像
- 大会横断幕
- スポーツデイ用告知広告
- 春季リーグパンフレット掲載用広告
- 東日本インカレパンフレット掲載用広告
- 学内スタッフ募集用ポスター

大会運営局

- 会場立て看板
- 会場つり看板
- 参加賞キーホルダー
- AD
- 食事引き換えクーポン券
- 捨て看板

アカデミックフォーラムプロジェクト

- アカデミックフォーラム立て看板
- アカデミックフォーラムつり看板
- 告知用ビラ
- ネームプレート

レセプションプロジェクト

- レセプション会場立て看板
- レセプション会場つり看板
- リーフレット
- 捨て看板

アスレチック局　競技備品

- エントリー変更届け
- メダマ
- 臨時役員変更届
- IF
- サービスオーダー表

アスレチック局　表彰品

- メダル
- 賞状
- プレート
- プラカード（贈呈品リスト）

プロダクション局内

- オフィシャルブック
- T シャツ
- スタッフ T シャツ
- タンクトップ
- タオル
- 応援バルーン
- オフィシャル HP
- 景品用バッグ
- 情報保証・障害者対応
- 視覚部用ポスター

その他

- 名刺
- インカレシール
- フロッピーラベル
- 領収書
- 公式文章用 Word テンプレート
- PowerPoint 用背景テンプレート

(2)　各タスクとの連携

やりとりがスムーズにいくかどうかがタスクによって大きくばらつきがあった。

連絡ミスや二度手間になるような業者、外部団体とのやり取りが多かった。

クライアントシートがうまく機能しなかった。

(3)　制作時間

2003 年度と同じく、東西インカレ自体の各部分の詳細がぎりぎりになって決まる部分があったため、情報をもらってから完成させるまでの制作時間はとても短かった。また情報の変更が様々な部分でたびたびあり、細かい訂正のデータの直しも多かった。一つの制作物をじっくり作るというよりは、とりあえず完成させて次の制作物に移るというような状態だった。東西インカレ実行委員会のミーティングにも製作時間を取られた。

(4)　アンケート集計結果より

来場動機では広告、横断幕などの PR によって来た来場者は 5%を切っている。情報入手経路ではポスター、チラシ、大会 HP が合計で 35%を占めている。

【３】　考察

(1)　制作物の種類、量に関して

制作物の種類が多すぎる。PR や会場のイメージ作りのためには、ロゴを入れたりプロダクションが制作しなければならない物は数多くあると思う。しかし、ポスター・チラシ・会場の看板など、重要な物を優先して力を注ぎ込んで作ることで、大会のイメージの芯をつくる事が出来るのではないかと思う。人手が足りないなかで、すべての物（印刷物、会場で使用するプリント類）をプロダクションで制作するのは、結果として力が分散し中途半端になったのではないかと思う。

(2)　各タスクとの連携について

マニュアルをつくってやり取りをしようとしても、人が新しく入ってきたりして、各局内でマニュアルの徹底が出来ていなかったためにスムーズなやり取りが出来なかった。

専門外の学生が外部の組織と関わるとき、印刷や制作を考えた対応が出来ない部分があった。プロダクションからの伝え方が足りない部分もあったかもしれないが、最初からプロダクションが対応を引き継ぐ形式にするべきだったのかもしれない。

(3)　制作時間について

短かい時間の中であまりに多くの制作を同時進行していかなければならなかった。制作の依頼を受けミーティングをしてから、考える時間がなく、データをまとめるだけの時間しかない物ばかりだった。デザインするというよりは、DTP オペレータとして、データ製作の代理をしているような部分も多々あった。

パソコンに向かってデータを制作してばかりで、制作物のイメージ、完成形を考えアイデアを練る時間がないのはやりがいがなく、打ち込みがいがなかった。

(4)　アンケート集計結果より

来場者の多くは、PR の効果のみによって大会に来たわけではない。しかし、来場者の多くはポスター、チラシ、大会 HP から大会の情報を入手している。

大会ポスターなどの PR が新しい客層の開拓ではなく、観客が来るにあたっての正確な情報を掲載したものとして働いていたと思われる。

大会の詳細はチラシでも伝える事が出来るので、ポスターは、イメージ重視の文字情報が少ない物でもよかったのではないかと思う。

【４】　まとめ

昨年度と同じような問題が結局起きている。他タスクの遅れや変更が大きく関わる部門なので、各タスクとの関わり方や委員会内での締め切りの厳守等を改善していく必要がある。

依頼が来た制作物をこなすだけならば、人さえ集まれば何とかなる。しかしそれがプロダクションとして関わった学生のためにも、東西インカレの大会のイメージ作りのためにもなるとは思えない。

今年度はつくばでの開催がまだ 2 回目という事もあり、大会のイメージを浸透させる事を目指したが、それによって制作物がユーモアにかける物ばかりになってしまった。

大会の認知度も上がってきているので、来年度の PR では、もっと自由に大会のイメージにとらわれない制作をした方が良いのではないかと思う。

プロダクション局の役割を考え直しても良いのではないかと思う。

Ⅱ．大会オフィシャルグッズ制作

原稿作成者　林　宏樹

【１】　目的・方法

グッズ部としての目的は、モノを通じて大学と市民の距離を近づけて産学官民の一部を担おうというものでした。その目的を達成するためにグッズ部として掲げた具体的目標は

①出来るだけ多くの人にグッズを手にしてもらいたい。

②赤字を出さない。出来るだけの黒字を。

③グッズで東西インカレを盛り上げる。

これを実現していくためには、一見正反対に思えるこの２つの目標をどちらも達成するために、バランスと工夫が必要でした。その方法としては、

① よりデザイン性を高めるため、デザイナーのスタッフを増やし、出来るだけ多くの人の意見を取り入れる。

② 前売り販売を効果的に行う。

③ 仕入れ値をできるだけ抑え、出来るだけ安価でお客様の手に届くようにする。

④ 準備を早くして、早い段階で具体的な販売戦略に移れるようにする。

商品	製作個数	仕入れ値	販売価格	前売り価格
Ｔシャツ	５５０	１８５０	２５００	２２００
タンクトップ	１００	９５０	１５００	１２００
タオル	１００	８５０	１２００	１０００
応援バルーン	１０００	１４０	２００	×
スタッフＴ	１００	×	×	×

以上、製作したグッズの概要です。

表１　制作グッズ概要

※応援バルーンは他の商品とセットで 150 円で販売

表２　グッズサイズ内訳

サイズ	S	M	L	O(XL)	XO
Ｔシャツ	２５(紺７５)	２００	１００	１００	５０
タンク		２０	４０	４０	
スタッフＴ			１００		

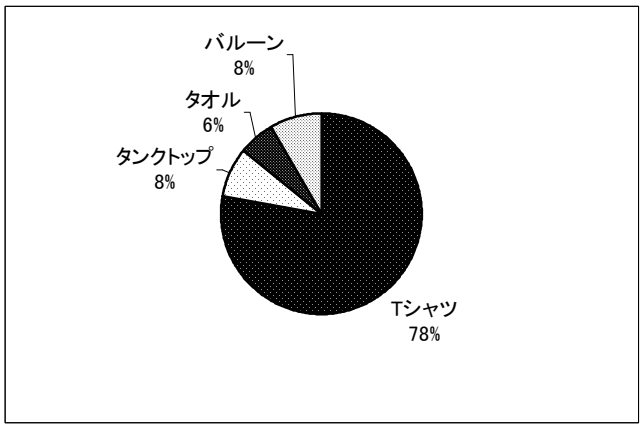
また、２００３東西インカレのときとの一番の違いは、製作部と販売部の連携をもっと密に取れるようにと、林がグッズ部チーフ兼販売促進部チーフ、横沢が販売促進部チーフという二人のリーダーを中心にグッズ製作から販売までの仕事を行うようにした。

【２】　結果

(１) グッズ販売

表３　グッズ販売結果

収入	T-shirt	タンク	タオル	バルーン	
				単体	set
前売り（staff）	123	34	48		
前売り（一般）	123	11	17		
当日販売	289	54	35	548	97
合計	535	99	100	548	97



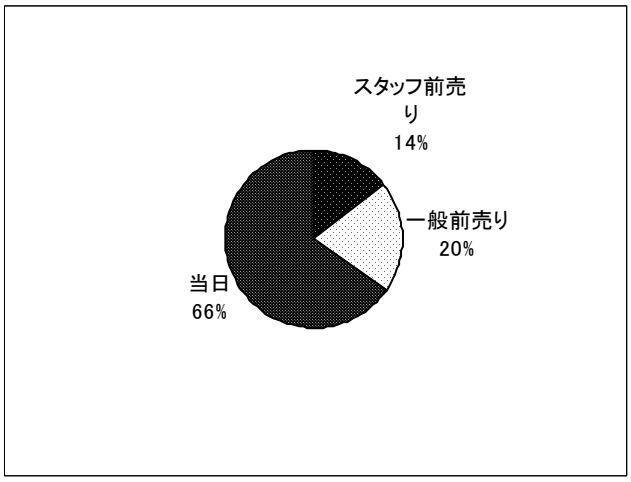


図４　各種販売比較

応援バルーンを除いては全て完売し、全体でも約７万円の黒字という結果になった。収入の内訳を見てみると、前売り販売によって全売り上げの半分、または半分以上を売りさば

いているので前売り販売が非常に効果的に働いたことがわかる。

(2) 販売製作依頼先

①アシックス　　Ｔシャツ・スタッフＴシャツ・タオル

②ライトオン　　タンクトップ

③日本文化出版　　応援バルーン

製作会社については質を保ちながらコストを落とすという面から考えて納得の行く会社に頼めた。やはりモノを製作するということで依頼先にデザインを届けるまでの時間がかなりかかって納品がギリギリになってしまった商品もあった。それに伴い、請求金額もギリギリまではっきりと決まらず、予算を出すのが難しかった。

(3) スタッフ組織

やはり細かい調整作業のような仕事はチーフに集まって仕事量は偏ってしまったが、仕事の効率などを考えると仕方のないことだった。しかし情報の共有量が余りにも少なすぎて組織としてはかなり未熟なものであった。しかしデザインを決める時のような重要な取り決めの際にはスタッフ全員の力が集約され、結果としてもとてもいいものが出来、デザインについては周囲の評価も高かった。

グッズ部チーフ兼販売促進部チーフという立場を設けたことにより、販売促進部自体がグッズを製作しているという形になり、グッズ部と販売部の連携が取りやすかったことはもちろん、製作者が直接販売戦略立案にもかかわっていたので、たくさん売りたいという気持ちがよりいっそう高められていた。

【３】　考察

(1) 収入に関して

まず当初の目標であった、出来るだけの黒字という目標を達成することが出来て成功したといっていいと思う。応援バルーンに関しては元々収入を得るということよりも大会を盛り上げるということに重点を置いていたということと在庫が出ても今後の筑波大学の試合でも使うつもりであったために、マイナスという結果にも何の問題もないであろう。そう考えると応援バルーンを除いては完売のプラス１１万円であったので収入だけに関しては完璧な結果だったと思う。これは上でも述べたように前売り販売が効果的だったということと、デザインを考えるメンバーを増やしたことによって良いデザインが出来、良い商品が出来たということが大きな理由だと思う。また、タンクトップの値段を思ったよりもおさえられたということも原因の一つに上げられる。

(2) 応援バルーンについて

今回新たな挑戦として応援バルーンを作ったが大会を盛り上げるという点では非常に多くの人がそれを手に応援してくれていたので良かったと思う。応援バルーンを作ったということに関してはいい試みであった。しかし応援バルーン全体の売り上げ個数が６４５個に対し、セット販売が９７個と全体の１５％に終わった。これはグッズを買った人のほとんどがセットで応援バルーンを買っていないということである。ここはもっと改善できる点であったと思う。この理由として考えられるのは、セット販売のＰＲが足りなかったことか、定価２００円に対しセット１５０円で差が５０円しか出なかったのでお客様の意識の中には大して得ではないなという意識があったのかもしれない。もう少しセット料金を下げることは可能ではなかったか。

(3) 製作依頼先との連携について

依頼会社とのコンタクトの方法があまり良いとはいえなかった。コンタクトを取る人がその時によって変わってしまって、全員が誰かを頼っていたのでスムーズで正確な情報交換ができず、不手際が生じていた。例えば、デザインを送信する際などのＥメール上でやり取りをする際には完全にプロダクションに依頼するという形になっていたので、デザイン以外の情報のやり取りがやりにくい状況になってしまった。また、デザインが決まってからデータを作って依頼先に送るという段階で非常に時間がかかってしまったので期日を決めるなどしてそこの時間をもっと短縮する必要があったと思う。

(4) グッズ製作過程について

一番ややこしいことは製作依頼先が複数あるということ。複数の会社と複数の作業を同時進行しなければいけなかった。この作業を各依頼先に担当者を決めて行えば非常にスムーズに進んだと思う。これにはやはり組織化を進めてプロジェクト内の縦のラインを明確にする必要がある。

今回アシックスが協賛品という形でＴシャツを１００枚提供してくれた。このようにスポンサーをうまく使うともっとコスト削減にもつながるので他者にもこれを当てはめていっていいと思う。

【４】まとめ

今年のグッズ製作に関しては早い時期から準備をしていたにもかかわらず、結果的には当日ギリギリの納品という余裕のないものになってしまった。各作業段階での無駄な時間の

削減が必須であろう。そのためにはプロジェクト内の組織化による役割分担と、他のプロジェクトとのスムーズな連携が次年度もとめられてくるものであると考えられる。

今回プロダクション局としてのグッズ部と販売促進プロジェクトとの合同のような組織をとっていたが、これでは誰がグッズ部で誰が販売促進部なのかが重複してしまうケースが少なくなかったので、そこの明確化をしてもらいたい。いっそのこと販売促進部の中にグッズ部やオフィシャルブック部などの販売物を製作する組織が入っていた方が動きやすいのではないかと思った。現にグッズ部と販売促進部よりも、オフィシャルブック部と販売促進部との間の方が距離があったように感じた。

今年のグッズはほとんどの目標を達成し、黒字という一番大きな目標を十分に達成することが出来たので次年度ではさらに高い目標設定をしていいと思う。次年度に求めることは

① 製作個数を増やし、更なる売り上げを。
② スポンサーを上手く利用して、コストの削減。
③ 新たな製作物による挑戦。
④ 東西インカレだけに限らず一年中グッズが購入できる体制を作る。（ＴＵＶショップの設立）

以上、今年度の分析と次年度への期待である。

Ⅲ．オフィシャルブック制作

原稿作成者　桧山佑介

【１】　目的・方法

オフィシャルブック制作の目的は、何らかのきっかけで「東西インカレ」に出会った人が、東西インカレを様々な切り口から紹介するオフィシャルブックを見ることで他の分野を提示し、「Sports for All, All for Sports」という理念に賛同してもらうことであった。さらに制作に関わる人間同士の親交・「繋がり」を深めるといった側面も持つ。

これらを実現する方法として、

①サブイベントに関わる各団体の紹介ページを充実させる

② 記事制作の段階においてインタビュー取材による生の声を取り入れる

③ 視覚的なデザイン技術を活かして「見てわかる」ことを内容構成のコンセプトとする

ことなどが検討された。

【２】　結果

（1）完成品

Ａ４－１００ページ　フルカラー

制作部数：２０００部

販売価格：１０００円

各出演団体紹介ページでは昨年の1／2ページから各団体1ページへと掲載スペースを拡大し、写真の使用枚数も増えた。取材に基づく掲載記事にまとまりごとの小見出しをつけ、どこからでも読むことのできる内容となった。さらに交流会やレセプション、アカデミックフォーラムなどのページについては、大会全体の魅力を伝えるため各プロジェクト担当者に記事制作を依頼した。また、昨年度大会の写真も数多く使用し、テーマカラーを中心とした色使いや統一されたレイアウトなど高いデザイン技術により良質のオフィシャルブックを制作することができた。

協賛企業広告ページ

制作スケジュールの都合上、オフィシャルブックの後半にほとんどの企業広告を集める形となってしまった。当初全体のページ数を削減するつもりだったが、結局広告数の増大により実現不可能となってしまった。

（2）各団体との連絡

実行委員会内の様々な局やプロジェクトなどからそれぞれ別の用件で連絡が幾度となく行われ、実行委員会側も誰がどの用件で各団体と連絡をやりとりしているのかが把握できず、問い合わせにも明確な返答ができずに多くの団体に迷惑をかける結果となってしまった。

（3）作業環境

企画開始時から完成まで制作スタッフは常時４～５人しかおらず、一人当たりの作業量が大きくなってしまった。さらに、学校生活や部活の合間を縫っての作業は夜遅い時間に集中してしまい、時間的・体力的にも厳しい毎日が続いた。

（4）決算

オフィシャルブック制作に関わる決算は、以下のとおりである。

表１　オフィシャルブック決算

項目	金額
収入	
売り上げ	¥330,000
支出	
印刷・製本費	¥1,155,000
合計	－¥825,000

【３】　考察

（1）完成品に関して

見栄えもよく、必要な情報が凝縮した内容の濃いものができた。しかしこれほど大きなイベントの「オフィシャルブック」となると情報量・ページ数などがどうしても大きくなってしまうので、価格設定・売り上げ部数などとのバランスも今後は検討が必要であると考える。

（2）協賛企業広告について

ページ割などを検討し、広告に何ページ使用するのかをあらかじめ設定した後に広告募集をするべきだったように思う。また、来場者の手元に行き届かなければ広告効果はないという理由からも、制作部数・価格設定などは重要になってくると思われる。

（3）各団体との連絡について

実行委員会内の組織が細分化したために、各団体と個別に関わる局やプロジェクトが多数存在し、それぞれが自分たちの作業を進めるためだけに各団体と連絡をとりあっていたことから、知らず知らずのうちに大きな迷惑をかけてしまっていた、というような事態が発生したと考えられる。

（4）作業環境について

昨年から引き続いていることではあるが、企画・運営の中心が学生である以上は仕方のない部分ではあると思う。昨年より準備期間は延長されたが大会の規模が大きくなったために、時間のない毎日という同じ結果にたどり着いてしまったと言えるのではないだろうか。企画期間と準備期間とに分け、企画期間で決まった内容を準備期間で煮詰める(企画内容の変更はなし)という準備態勢を提案したい。

（5）決算について

1部1000円という販売価格の設定は失敗であった。来場者の多くが手にするようにという願いが込められた品物も、入場料無料の会場に安価な大会グッズが並ぶ中では一際手を伸ばしにくい存在になってしまったからである。制作部数や印刷・製本にかかる費用から販売価格を設定したのだが、オフィシャルブックだけの決算にとらわれず、大会全体の収支を考えた上で販売価格を少なく押さえることは可能であったように思う。完成品を見てもらってこそオフィシャルブックの価値が生まれることから、多くの人の手に渡ることがなかった事実をただただ嘆くだけである。

【4】　まとめ

オフィシャルブック制作は大会の企画・内容が決定しないと実際に制作することができないという点で、企画が大会直前まで煮詰められる東西インカレにおいては非常に困難な作業であると思う。また、いい物を制作することとそれらを売る(多くの人の手に渡る)ことの違いを痛感した。多くの情報を盛り込み、印刷・製本するという過程が金銭面に与える影響はやはり大きい。次年度は、情報量の低下に目をつむり、来場者全てが手にすることのできるリーズナブルなものを制作するという案も1つの手段として考えてみてはどうだろうか。制作費用軽減という視点から、次年度以降オフィシャルブックの一部をモノクロ化するというのも検討すべき事項であると感じた。こちらが伝えたい情報で質・量を満足させるという点と、来場者が入手したい情報を的確に押さえるという点を両面から飲み込んだものづくりが必要になってくるであろう。

Ⅳ．大会オフィシャルサイト制作

原稿作成者　佐々木　絵理

【１】　目的・方法

今大会の総合情報をインターネットを介し、全国区にむけて配信する。またレセプションのチケット事前販売など、閲サイト覧者へ向けたオンラインのサービスも実施した。

【２】　結果

この報告書が出る段階では、まだ本年度のオフィシャルサイトは終了していないが、現時点までを振り返える。

本年度のオフィシャルサイトは昨年と同じく、大会当日を迎えるまでに、十分な大会の情報を UP することができなかった。また終了してからも大会の結果等を速やかに公開することができなかった。昨年度よりも改善された部分もあるが、今後へ引き続き残る課題が多い。

(1) 制作の流れ

今年度は、オフィシャルサイト製作を広報活動の一環とし、企画・構成の段階から PR 局にも関わってもらい、主にデザインと更新作業をメインで担当する予定であった。しかし、実際は PR 局からオフィシャルサイトに関われる人材が確保できなかったので、企画・構成の段階からプロダクション局のデザイン担当がメインで制作することとなった。この段階で、すでに昨年と同じようなワーキングシステム（図１）になってしまい、課題であった制作の流れを改善できいまま、実際の運営に移らざるを得なかった。こういった問題点が、間違った情報を配信してしまう、予定されていた UP の時期に間に合わない、などのミスを生んでしまった。

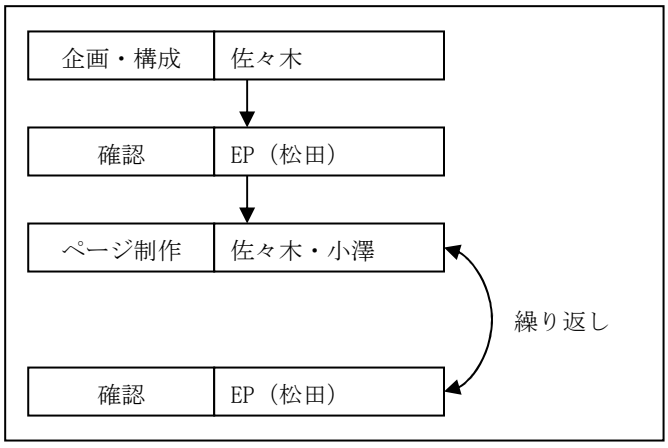


図１　今年度の制作の流れ

また、オフィシャルサイトのコンセプト自体が曖昧で、制作時間がない中で情報を優先させるのか、それともインカレのイメージを大切にデザインも重要視して制作するのか、全体の方針が曖昧なまま実際の制作の流れに入ってしまったことも反省点である。これはプロダクション局の制作物全体にも共通して言える部分であるだろう。

(2) 情報の提供

①大会概要

大会グランドデザイン・理念などの説明

②イベントガイド

各プログラムの見所紹介

③参加・募集・グッズ

事前予約などが必要なイベントなどの手続き情報等

④アクセス・宿泊

交通・宿泊に関する情報提供

⑤インフォメーション

当日までの活動報告・プレスリリースなど

⑥運営組織

実行委員会の形態、及び関係・協賛各社へのリンク

⑦お問い合わせ

連絡先

以上の７項目に情報を分けて提供した。

(3) 制作環境

サーバー：バレーボール作業室内 TSUKUBA UNITED VOLLEYBALL のサーバー

使用ソフト： Macromedia Dreamweaver MX

デザインスタッフ：２名（WEB 専任者は無し）

企画スタッフ：デザインスタッフによる兼任

【３】　考察

本年度のオフィシャルサイト制作を開始する前、想定していたワーキングの二分化が実現出来なかったことが全ての課題の根源であると思われる。具体的には、グランドデザイン・企画・構成の部分の担当者（コンセプト・及びコンテンツなどの決定）と、実際のページ制作の担当者（コーディング・画像作成・アップロードなどの制作及び実施）を分け、それぞれの仕事に専念できる体制を作ることであった。同じプロダクション局内の制作物であるオフィシャルブックはその体制が昨年度から出来ていたので、本年度はその関係性をぜひオフィシャルサイト制作でも実現させたかった。

(1) 人材確保

昨年度と比べ、イベント自体の規模が拡大し、唯一の全国的PRのツールとしてより一層の情報更新の迅速化が必要になった。しかし実際にはサイト制作に関われる人員が圧倒的に不足していた。プロダクション局内でのデザインができる人員自体が不足していて、さらにその他の制作を併行していかなければならないので、いくらサイト制作の経験があるといっても、プロダクションのデザイン担当者に企画・構成まで担当するのは無理があった。

(2) 情報提供

オフィシャルサイトの役目は「正しい情報を、分かりやすく、迅速に」提供することである。インカレ全体が常に締め切りに追われ、決定事項が出るのが遅い・変更が多いため、オフィシャルサイトの全体像を描いても、実際にまだ掲載できない内容や整理されていない内容が多く、時間がない中で効率的に作業を進めることができなかった。インカレ自体の決定事項が、もうあと１ヶ月でも早く決まれば、十分に企画を練ってオフィシャルサイト制作ができたであろう。

(3) オンラインサービス

レセプション等のオンラインでの参加受付サービスだが、レセプションへの参加希望が予想を遥かに上回り、設備・技術的に対応しきれなかった。来年はブラウザからの申し込みを廃止し、面倒でも確実なメールによる受付に限定したい。

【４】 まとめ

<u>全ては企画・構成の重要性に還る</u>

本年度は、昨年の反省を活かしPR局に企画・構成の依頼をしたものの、実現できなかった。掲載する情報の整理は全てエグゼクティブ・プロデューサーである松田氏とほぼ１対１で進めてきた。実際のデータ制作の事前に行う企画・構成つまりは「何を、誰に、いつまでに、どうやって伝えるのか」という情報整理の部分にかなり時間と手間を取られ、ページ制作が間に合わなかった。不十分な企画・構成はその後の作業の手間が増えるだけである。

こういった状況は、プロダクション局が他に手がけたポスター・チラシなどの制作でも同じであった。オフィシャルサイトを含め、PRツール全般の企画・構成をだれがすべきなのかはっきりさせなければ、問題は解決されないだろう。

そういった意味で企画・構成の重要性は、来年度さらに増すであろう。そのためには前述の作業の二分化を確立することが必須だと思われる。さらに、企画・構成の担当者が実際の制作作業全体を想定し、マネジメント的な部分まで含めて、どれだけデータ製作者の負担をカバーできるかが課題である。

Ｖ．ビデオ部・記録部

原稿作成者　小澤　宏行

【１】　目的・方法

準備段階からの大会が開催されるまでを写真・ビデオで記録として収録する。大会終了後の報告書、およびプロモーションビデオ、来年度製作物の制作に使用する。

大会当日の事前にカメラの移動や撮影するべきイベントを確認、リストアップし大会プログラムに沿った撮影スケジュールを立て、それをもとにスタッフで分担し撮影した。また、それに伴い必要な機材等を確認し、足りないものの中で購入可能はものは購入した。

【２】　結果 写真

(1) ビデオの記録の量

当日はデジタルカメラ 3 台、フィルムカメラ 1 台、デジタルビデオカメラ 3 台で撮影。デジタルカメラの写真は約 2000 枚で約２GB 分を撮影。フィルムカメラの写真はフィルム 18 本で約 650 枚を撮影。ビデオは約 40 本で 40 時間分撮影をした。

(2) スタッフの記録活動

今年度は昨年より会場が早くから混雑していたため、撮影のために動き回れない状態だった。またスタッフとして撮影しているので、観客の邪魔になることを気にしながら撮影しなければいけなかった。

【３】　考察 写真

(1) ビデオの記録の量

昨年度のプロモーションビデオは事前に計画を立てずに撮影したため、使いたい映像が撮れていなかったり、映像のない出演団体などがあった。その反省から事前に撮影スケジュールとカメラの配置を考えたが、それでもカメラの数がギリギリであった。短い時間で進行するオープニングセレモニーや出演団体のイベントをすべて確実に使えるレベルで記録を残すためには更なるカメラが必要だと思う。

(2) スタッフの記録活動

様々な出演団体がそれぞれの演出方法で演技をするため、会場の正面を撮り続ければ、すべての出演団体の良い記録が残せるわけではない。多少観客の邪魔になってでも会場内の数カ所にビデオ・デジタルカメラ撮影用のスペースを確実に確保するか、あくまでも観客主体で、空いたスペースで撮影するかを決める必要がある。

【４】　まとめ

学生がいくら集まって機材を用意してもすべてのイベントを確実に撮ることは出来ないのではないか。すべての記録を残すために撮影をするのではなく、撮影した物を後々どのように使うかを考えて撮影するほうがいいと思う。

第五章 PR 局運営

Ⅰ．大会広告活動について

原稿作成者 高橋一郎

【1】目的・方法

PR 局の目的は､｢大会の会場を満員にする｣ことであった。そのために PR 局として外部への情報発信が主な仕事であった。広告部としての活動の定義を「制作物を用いての情報発信」とした。制作物を用いての情報発信は、実行委員会側の意図を確実に伝えることができるというメリットがあった。

具体的には、ポスター、チラシ、横断幕を活用しての広報活動であり、これに加え、大学内で本大会の認知度を上げるために、学内でのチラシ配りの企画の実行などを行った。

ポスターは 1000 部、チラシは 50000 部作成した。これらは、昨年同様につくば市施設や商工会加盟の店、協賛・協力企業を中心に配布・掲示を行った。さらに、学生スタッフ全員にポスター配布の協力を仰ぐことや、総会での呼びかけにより、多くの関係者を経由しての配布活動を行った。横断幕は、大学内に 2 枚、つくばセンター付近に 3 枚、計 5 枚（サイズは 90cm×12m）の掲示を行った。

【2】結果

右に、ポスター・チラシの主な配布箇所を挙げた。配布の時期は主に 6 月の第 1 週～第 2 週である。これは、大会の 1 ヶ月前に情報を知らせていくと宣伝の効果があるのではないかという話から決定した。

【3】考察

昨年の活動を基本として、関係者を経由してのポスター配布活動の強化、関東鉄道株式会社をはじめとした協賛協力企業を経由しての配布活動の実行を行った。これらにより昨年にくらべ、大会の認知度が上がったと考えている。大会当日も昨年よりも大勢の観客が来場したようである。

【まとめ】

大会の会場が満員になり､大きな喜びを得ることができた。協力してくれた皆さんには感謝の気持ちでいっぱいである。東西インカレには「スタッフの時間の制約」「100 名を超える学生」「多数の協賛協力企業」という特徴がある。これらの特徴を考え、①ポスター等の配布活動に多くの学生に参加してもらう仕組みを整えること②協賛協力企業の持つネットワークを使っての広報活動の充実、これら 2 つが来年以降の課題である。今年はこれら 2 つをほんの少しではあるが実行できた。今年の経験を基にしながら、来年以降も充実した PR を行い「つくばカピオ満員御礼」という風景をつくってほしいと思っている。

表１　制作物の主な配布箇所

配布箇所	ポスター	チラシ
関東鉄道バス(高速バス)		7000
つくば市内回覧板		5400
関東鉄道バス(路線バス)		4600
市内小中学校		3800
体育教官による授業受講者への配布		3600
商工会便り挟み込み		3000
筑波スポーツ挟み込み		2000
つくば市施設	65	1300
GALLERY2		1000
県教育委員会		1000
竹園高校(学園祭)		1000
つくば国際会議場	2	1000
ライトオン		1000
市内高校	100	850
商工会委託(市内金融業)	30	800
筑波大学吹奏楽団定期演奏会		800
市バレーボール連盟	10	500
西日本インカレ		500
東日本インカレ		500
つくばYOUワールド		400
バレーボール学会		400
NPO法人スマイルクラブ		300
バレー各種大会		300
学内掲示板	42	200
クレオ		200
つくば産業開発株式会社		200
県内大学	18	180
市内研究機関(研究交流センター)	100	
大学授業(バレーボール)		
つくば市体育施設(4月)		
つくば市庁舎(4月)		
東西インカレスタッフ	300	
協賛企業各社		

写真１　横断幕掲示の様子（つくばセンター付近）

Ⅱ．大会広報活動について

原稿作成者 高橋一郎

【1】目的・方法

PR 局の目的は、「大会会場を満員にする」ことであった。そのために PR 局として外部への情報発信が主な仕事であった。広報部としての活動の定義をポスターやチラシ等の制作物を用いない「文書を中心とした情報発信」とした。

具体的には、新聞・テレビといったマスメディアへのアプローチから、つくば市や筑波大学、つくば市商工会といった関係者への協力を得ての広報活動を行った。マスメディアへのアプローチとして今年はプレスリリースを記者クラブなどへ投げ込むといったことを中心に行った。その他、つくば市からの記者発表してもらうなどだった。

【2】結果

上記の方法のようなアプローチや関係者の協力を得ての広報活動により、掲載された大会案内・記事などを以下に列挙しておく（9 月 1 日現在)。

（1）新聞

・6 月 1 日　茨城新聞　20 面
・6 月 7 日　筑波大学新聞
・6 月下旬　筑波スポーツチラシ折込
・7 月 1 日　常陽新聞　6 面
・7 月 2 日　常陽ウイークリー
・7 月 5 日　筑波ジャーナル
・7 月 6 日　日本経済新聞　35 面
・7 月 9 日　毎日新聞　24 面
・7 月 9 日　朝日新聞　33 面
・7 月 10 日　茨城新聞　18 面
・7 月 11 日　常陽新聞　4 面
・8 月 3 日　茨城新聞　16 面

（2）テレビ

・6 月下旬　ACCS「つくば市広報タイム」

（3）広報紙

・4 月 26 日　紫峰会会報
・6 月　　つくば市商工会便り
・7 月 1 日　つくば市広報紙
・7 月 2 日　紫峰会会報
・7 月 22 日　速報つくば
・8 月 15 日　つくば市広報紙

（4）WEB 関連

・つくば市ホームページ
・筑波大学ホームページ
・全日本大学バレーボール連盟
・つくばユナイテッド Volleyball
・ツクナビ（特集記事）
・つくば総合案内
・つくばカピオ催し案内
・中日新聞 WEB
・ヤフージャパンニュース（地域）
・AIST バレー部　リンク
・太郎会＋α　リンク

その他多数

（5）雑誌

・月刊バレーボール
・バレーボールマガジン

【考察】

市や大学、商工会といった関係者を通しての広報をはじめ、常陽ウイークリーやツクナビ（学生団体 C4 運営）といった宣伝効果のあるメディアに掲載の確約を頂き広報できたことはよかった。来年以降も広報活動の協力を得たいところである。これに加え、新聞の「情報募集」欄への投稿やプレスリリースを行い、全国紙の茨城面への掲載を獲得できたのも広報活動の成果として評価できるのではないか。

紙面等への掲載が直接の観客動員には結びついていないということが、情報入手の経路のデータからいうことができる。昨年にくらべ「つくばでの開催」に対するニュース性も低く、記事のインパクトも少なくなっている事が要因として考えられる。

【まとめ】

多くの関係者の協力を得ての広報活動というのは、上記のように良い成果がでていた。しかし、情報の伝達不足等により、〆切間際での連絡が多かったりしたことは反省材料である。学生という時間の制約が多いスタッフが多い中で、外部の人との連絡が多いという状況の中で、連絡を密に取ることができる体制を考えていく必要がある。

さらに広報活動の拡大を図るためには、WEB を中心とした情報の更新により注目度を上げることや、関係者の所属する分野で其々が情報発信していけるような体制を築くことができるはずである。今年の活動を基本としながら、来年は広報活動の拡大を図ってほしいものである。

第六章　大会運営

Ⅰ．競技・イベント運営

≪１≫　競技規則・進行について

原稿作成者　田仲俊樹

【１】　目的・方法

（１）　競技規則

他の大学バレーボールの大会よりも、よりいっそうレベルが高くトップレベルの大会に近いものにするために、競技規則なども細則までつめて決めることでこの目的を達成できるようにした。

（２）　進行

イベントと試合の間のコートの設営や試合の進行をすばやくし来ていただいた観客の皆様を待たすことのないようなスムーズの進行を目的とし、事前に役割分担等を決めてすばやい行動ができるような体制を整えることでこの目的を達成しようとした。

【２】　結果

（１）競技規則

競技を行ううえでの注意事項や決まりごと、運営組織を明確にし『レギュレーション&オブリゲーション』という冊子にまとめ各出場大学、出演団体、アドバイザー、レフェリーへ渡した。

レギュレーション&オブリゲーションについて競技及び審判上の確認事項、競技上の確認事項、実行委員会からの注意事項に関しては、昨年度のオペレーションマニュアルに記載してあるものをもとに、それ以外のものに関してはＶリーグの大会要項をもとに作った。

試合結果速報、監督コメント記入用紙、試合会場レポートに関して準備はしていたのだが当日人手や時間が足りなかったので実際に使うことはなかった。

報道関係受付名簿、取材申請書に関して昨年プレスに関して全く把握できていなかった反省を生かし準備をし実際に当日会場に足を運んでいただいた報道関係者に書いていただいた。

（２）進行

競技を進行する上でコートの設営やネットの張替えがスムーズに行えるように学連から派遣されてきた 4 人を中心に『コート周辺管理』という 10 人のチームを作り、前日にリハーサル等を行った。

当日全試合テクニカルタイムアウトを採用して試合を行ったのだが、実際にテクニカルタイムアウトをどのように取るのかということを知らずにいてテクニカルタイムアウトは、副審の人がとるのではなく IF の記録員が点数を確認し、ブザーを鳴らし時間を計るということを審判の方に教えていただき IF を各大学の補助役員で補おうとしていたがそれではテクニカルタイムアウトが取れないということで急遽コート周辺管理の中から人を出して行った。コート周辺管理は JVIS やバックアップ、判定も行わなければならなかったので全員休みも取れないまま仕事をしていた。

各試合、イベント間のコート設営に関して、当日は派遣した審判の方々もコート設営に協力していただいた。事前段階で開会式から９人制マッチまでの設営時間は５分、９人制マッチからシッティングマッチまでの設営時間は１０分、オープニングファンファーレからファイナルマッチまでの設営時間は１０分の予定であったが実際に設営でかかった時間は当初の予定よりも２～３分よけいにかかってしまった。

そのほかに、前日のリハーサルのときになってからセレモニーの台が必要となったり、マーチングバンドの指揮者の台が必要となったりしたがその場で役割分担を変更して対応した。

【３】　考察

（１）　競技規則

今年度は、昨年とは違いちゃんとした公式な競技規則を作りたいということでＶリーグの大会要項を参考にレギュレーション&オブリゲーションを作成したのだが、よく内容を把握しないままＶリーグのものをそのまま写したような形になってしまった。そのため、各大学のマネージャー等から質問をされても答えることができない部分があり大変迷惑をかけてしまった。

（２）　進行

今回コート周辺管理というチームを作りそのチームを中心にコートの設営や撤去などを行った。人数に関して今回は１０人ということで望んだが少なすぎることや多すぎることもなくちょうどよかったと思う。突然の変更にもその場で学連

のメンバーを中心に役割分担を決めスムーズに対応できていたのでよかったと思う。

今回ネットを立てるときに審判の方々に協力していただいたのだが、審判の方々が設営段階から手伝ってくれることによって人手が増えて作業が早くなるとともに試合前にネットのチェックをしなくてもよくなり時間の短縮にもつながった。

【４】　まとめ

（１）　競技規則

大会を行ううえでこのような競技規則というものはなくてはならないものであると思う。何か競技に関して問題が発生した場合この競技規則が基準となってくると思う。そのためにも来年度もこのような公式な競技規則を作るべきであると思う。今回は何も分からないまま、ただＶリーグのものをもとに作っただけであったが来年度はちゃんと規則の内容を把握してどんなときにでも対応できるようにしておかなければならないと思う。

（２）　進行

コートの設営に関してはこちら側のスタッフだけではどうしてもまかないきれず学連の力を頼らずにはいられない。しかしながら学連の役員は大会前日にしか合流しないため一緒に設営のリハーサルを行うということができず、当日少しもたつくということがあるので事前に綿密な打ち合わせを行い当日の進行をよりスムーズに行えるようにするべきである。また、審判の方々は依頼をすればネットの設営を手伝っていただけるので、考察のところに書いた利点を生かすためにも来年も手伝っていただいたほうがよいと思う。

来年もテクニカルタイムアウトを採用する場合は、今年度の反省を生かしテクニカルタイムアウトの時間を計ったり、ブザーを鳴らしたりする人をあらかじめ誰がやるのかということを決めておいたほうがよいと思う。

≪２≫各種演出

（1）音響

原稿作成者　石川大悟

【1】目的・方法

音響の目的は、来場する様々な世代の人にバレーボールの大会がより身近なものになるように色づけをすることである。

その方法として音響では、①「大会に用いる音楽の選曲・編集」、②「会場準備・大会進行及び団体のパフォーマンス・選手の試合における音楽の演出」を行った。

【2】結果

（1）　音楽の選曲・編集

音楽の選曲は、音楽を各個人が持ち寄り、その中から①邦楽を「会場設営や試合準備の時の音楽」として、②洋楽を「選手入場・ウォームアップ・試合間の音楽」として選曲した。

音楽の編集は、大会進行に合わせて順番に Mini Disk に録音して、設営時に使用する邦楽は CD-R に曲を焼いた。

表 1　大会進行用 Mini Disk

1	オープニング退場
2	東北リコー入場
3	茨城選抜入場
4	表彰曲
5	9 人制バレー退場曲
6	シッティングバレー入場
7	表彰曲
8	シッティングバレー退場
9	セミファイナル①入場
10	ウォームアップ
11	ウォームアップ
12	セミファイナル①退場
13	セミファイナル②入場
14	ウォームアップ
15	ウォームアップ
16	セミファイナル②退場

表 1 のように大会の進行に合わせて、円滑に音楽を演出できるようにした。

大会当日に使用した音響機器は、カピオから借用したもので、フロアーの天井の部分に四方向に向いたスピーカーを通して音を流した。借用した音響機器にはテープ・CD・MD を音源として使用することが出来たが、CD-R を CD の音源として使用する場合には時折雑音になってしまったり、音が途切れてしまったりした。　また、音楽の音量に比べてマイクの音量は小さかったため、しばしば声が音楽によってかき消されてしまうことがあった。

（2）　オープニングセレモニー

オープニングセレモニーでは、選手退場時に音楽を演出したが、退場のタイミングと音楽の演出のタイミングがうまく合わなかった。

（3）　エキジビションマッチ

①9 人制バレー

9 人制バレーボールのエキジビションマッチでは、選手入場・退場と試合前のウォームアップおよび試合後の表彰で音楽の演出を行った。ここでは、問題なく演出出来た。

②シッティングバレー

シッティングバレーボールのエキジビションマッチでは、選手入場・退場と試合後のインタビュー・表彰で音楽の演出を行った。シッティングバレーでは、表彰・インタビューでの音楽のつなぎがスムーズにいかなかった。

（4）　セミファイナルマッチ

セミファイナルマッチでは、選手入場・退場と試合前のウォームアップ・試合間で音楽の演出を行った。セミファイナルマッチでは、選手入場時に誘導とアナウンスに情報がうまく伝わらなかったため、意図するよりも選手が先に入場してしまった。また、プロトコールまでの時間が予定されていた時間よりも超過してしまったために同じ音楽を二度かけることになってしまった。

（5）　ファイナルマッチ

ファイナルマッチでは、選手入場・退場と試合前のウォームアップ・試合間で音楽の演出を行った。ファイナルマッチにおいてもプロトコールまでの時間が大幅に超過してしまったために同じ音楽を二度かけることになってしまった。また、試合終了後筑波大学の優勝インタビューと選手退場の音楽の演出が円滑に行えなかった。

（6）　団体パフォーマンス

団体パフォーマンスでは、リハーサルが不十分であった常総チアリーディングの音楽の演出がうまくいかなかった。団体パフォーマンスでの音楽の演出は、もっと打ち合わせが必

要であった。

(7)　クロージングセレモニー

クロージングセレモニーでは、吹奏楽団との打ち合わせの結果、表彰のみ音楽の演出が必要であったはずであるが、事前の打ち合わせの情報と当日の吹奏楽団との意志の違いにより円滑に演出を行えなかった。

【3】考察

(1)　準備段階

準備段階では、団体と打ち合わせが少なく、団体の意図と音響の意図がうまくかみ合わず当日の演出が円滑に行かなかった。この問題に関しては、団体側の意図をより詳しくつかむことが必要であり、団体との橋渡しを担う役割をはっきりさせることが必要である。

音楽を選曲する段階では、それぞれのイメージに合う曲を見つける事が非常に困難で多くの時間を必要とした。そのため、事前から多くの音楽をチェック＆ストックしておく必要がある。

(2)　大会当日

アンケートの結果によると、①二階席では音楽とアナウンスが非常に聞こえにくい。②音楽が大きすぎるためにアナウンスが聞こえない。といった来場者の声が聞かれた。この問題点を解決するためには、二階席で音の聴こえ具合を確認していかなくてはならない。

大会当日では、アナウンスと誘導との情報の流通が重要であったが、今回は進行毎に確認を取り合っていたために円滑な進行が出来ず、間延びしてしまった感じがあった。そのため、打ち合わせと共にリハーサルの機会を増やす必要がある。

全体として音響では大会当日までに、事前情報の熟知と演出構想の共有ならびにリハーサルの徹底が不可欠である。

【4】まとめ

今大会で音響は、来場する様々な世代の人々にただのバレーボールの試合ではなく、一つの芸術としての色を印象付けることが出来たといえる。大会の進行で時折間延びしてしまった感があるが、来年は事前準備を徹底することにより、よりよい演出ができるだろう。

今大会ではわずか一週間前に発足したため、十分に事前準備を行う時間がなかったが、来年はより早くから始動すれば、さらなる芸術を追及していけるだろう。

（2） 誘導

原稿作成者　浜中陽子

【1】目的・方法

カピオ内で行われるイベントや試合において、出場団体・選手（または選手・団体対応）との連絡や入退場時の誘導を行い、全体の円滑な進行を目指す草の根的な演出を行うために発足したのが、演出 Team の中でも特に誘導係である。

二日間の東西インカレの中で、カピオ内で行われるイベントとしてあげられるのが、オープニングセレモニー・エキシビジョンマッチ・セミファイナルマッチ・ファイナルマッチ・クロージングセレモニーの５つであるが、各々のイベントに関して、アナウンスや音響との兼ね合いの中で選手や団体の誘導を行っていくのが具体的な目的であった。

これを実現していく方法として、当日までに全体の流れをイメージした上で、主に各セレモニーや試合の運営チームやアナウンス、音響、選手・出場団体対応と密に連絡をとり、細かい流れや進行を確認した上で、誘導係や指示係、マイク調節係などの役割分担や当日のシフト割りを細かく決めていくことを目指した。

【2】結果

(1)演出 Team 発足から前日準備まで

6 月 25 日（金）の第 3 回総会において、初めて演出 Team が発足した。更にその中でも、音響担当と誘導担当の２チームに分かれることになり、前述したイベント運営チーム及び選手・団体対応、アナウンスチームと連絡をとりあいながら当日の流れをイメージし、役割分担や仕事の確認を行っていく作業に入ることになった。

具体的な仕事内容としては、各イベントにおいて、出入口 A・B のそれぞれに誘導係一人ずつ、アナウンス及び本部近くに指示係一人を決めた上で、選手及び出演団体の①集合時間、②集合場所、③入場口及び入場方法、④退場方法、を団体対応と確認をとりながら決定していった。

オープニングセレモニーやクロージングセレモニーにおいては、入退場に多くの団体が関わってくるため、入場の順序やタイミング、整列の仕方などを確認した。セミファイナルマッチ・ファイナルマッチ・エキジビションマッチにおいては、セット間や花道など数チーム・数箇所に渡りチアリーディングの出場箇所があるので、どの学校のチアリーディング部がどのタイミングで演技を行うのかも確認した。

以上のような、進行や流れに関わる誘導の役割分担や確認作業を Team の発足から前日準備まで連日繰り返し行った。その際、細かいシフトや役割分担などがわかる表を作成し、それに沿って詳細な打ち合わせをしていった。

(2)前日準備からオープニングセレモニーまで

7 月 9 日の前日準備一日目は、最終ミーティングにより全体の進行・誘導の再確認を行い、翌日 10 日のリハーサルにのぞんだ。しかし 9 日の時点で、誘導係の頭の中は混沌としており、全体の流れやイメージを自分なりにつかむには困難な状況だったように思う。

7 月 10 日の前日準備二日目は、応援団やチアを始めとする出演団体のリハーサルを、入退場を含めて行った。実際に、アリーナ内で団体や団体対応と話をし、リハーサルを進めようとすると、打ち合わせと異なることや打ち合わせの時点では見えなかったような演出上の観点がいくつも見つかり、その場でリハーサルを行うことで当日の動きが初めて見えてくるような結果となった。

前日までの打ち合わせと確認ではあまり見えていなかった観点とは、①選手または団体は、どのタイミングで入場するのか（アナウンスが先？入場が先？BGM が先？第三者の合図があるのか？誘導が指示するのか？）、②コート内のどこで演技をするのか、③団体はどの場所で入場を待つのか（内扉の外？外扉の外？内扉のなか？会場内にはいり、フェンスの前で待つ？）などである。これらの観点や、またそれまでの打ち合わせで確認済みと思われていた点についても、いざリハーサルとなると、団体側に連絡がいっていないことや、団体側が直前に変更を申し込むこと、また複数の団体で合同の演技を行う際、団体間の連絡がとれていないことが原因で、全く始めから打ち合わせのやり直しとなることが多かった。

当日、オープニングセレモニーの直前までリハーサルが行われたが、前日の経験をいかして、始めからいくつかの確認しなければならない観点を団体側に質問してからリハーサルを行うことで、スムーズに誘導・進行を行うことができた。

リハーサルの中で、最終的に出演団体に確認した点は主に以下の 5 つである。

① 入場口はどこか。A？B？両方？
② BGM はあるか。こちらが用意したもの？団体が用意したもの？それは音響側に確実に渡っているか？
③ どのタイミングで入場するか。こちらが指示するの

か？団体側のタイミングではいるのか？BGM は先か、後か？アナウンスは先か、後か？

④　どちらのコートで演技するのか。

⑤　退場口はどこか。A？B？両方？

これらの確認や打ち合わせを常に確実に団体と行うことで、やっと実際の流れやイメージをつくることができてきた。

(3)インカレ当日（オープニング～クロージングまで）

①オープニングセレモニー

ふるさと太鼓の演奏開始、選手・出場団体の入場から始まって、メモリアルパフォーマンス前の選手・団体の誘導、そして退場まで、何度も練習を繰り返した成果か、スムーズに誘導を行うことができた。全体入場前に出入場口 A から外に向かって全団体が並ぶのだが、時間までに全ての団体が並び終え、メリハリのきいた入場を演出することができた。アナウンスや音響との息も合わせることができた。ただ、ふるさと太鼓との打ち合わせがぎりぎりまでバタバタしてしまい、団体側からクレーム受ける結果となってしまった。

②エキジビションマッチ

キッズチア・9 人制・セット間チア・タッチ体操クラブ・シッティングの全てにおいて、ほぼ誘導に問題はなかった。どの団体・選手も、出番前にかなり余裕をもって集合してくれたため、入場口・退場口、入場のタイミング、BGM の有無などをしっかりと確認する時間が持てた。

また、選手入場の際に直前に演技をしたチアが花道を作り、そこを通って選手が入場するというプログラムが何度かあったが、試合直前の盛り上がりに効果的だったように思う。来年にはさらにその際、花道をつくったチアと選手の写真撮影などをすれば、出場して下さった選手に形に残るものを渡すことができるし、更に演出上の山場にもなるのではないかと感じた。

ただ反省点としては、シッティングチームの入場の際、コート設営に大変時間がかかったのだが、チームの方々には入場口に整列して立ったまま待っていていただく訳にいかず、入り口近くの観客席や、壁際でバラバラに待機してもらう形になってしまったことである。もしシッティングチームのプログラムが来年もあれば、待機・整列の場所や椅子の確保などを考えておくことが必要だろう。

③セミファイナルマッチ・ファイナルマッチ

選手の入場が BGM より先か、アナウンスより先か、など直前まではっきりしない点が多かった。また、当日選手入場のタイミングまで選手を抑え切れず、選手が早まって入場してしまうというミスもあった。

また、セット間のチアがどちら側のコートで演技をするかでチームの練習量が不平等になってしまったことや、退場口を B とした場合に、休憩中やアップ中の選手が退場するチアの妨げになることがあった。

④クロージングセレモニー

入退場に関してはオープニング同様、整列・集合も迅速に行えた。特に入場に関しては直前になって参加を辞退する団体や参加することになった団体があったが、とくに混乱もなく誘導が行えた。

【3】考察

(1) 前日までの準備に関して

演出 Team の発足がとにかく遅かった。音響や誘導やアナウンスは、アリーナ内で起こっている総てのことを知り、イメージできた上で、演出・進行を行わなければならないのに、Team が発足したのが二週間前だったことで、連絡をとらなければならないチームや団体・係との連絡の緊密さに欠け、当日のイメージが最後までつかめず、直前までバタバタしてしまった。また、演出チーム内においても、他の局から突然演出に任命された者が多く、責任感を持ちづらい状態で Team がスタートせざるを得なかったのも、準備が遅れた原因ではなかろうか。

(2) 前日準備及びリハーサルに関して

リハーサルで団体対応や団体と実際に即した打ち合わせをしたことで、ここにきて初めて流れや実際にしなければならないこと、確認しなければならないことを理解することができた状態であった。

確かに演出に関しては、リハーサルや当日の状況に際して、臨機応変に動くことが重要となる要素も多いが、もっと早くから選手・団体対応と打ち合わせを進め、連絡を密に取ること、そして前述した主な観点だけでもあらかじめ決定して、団体・誘導・アナウンス・音響など関わりのある人全てに共通して知らせておけば、当日実際に変更があったり、連絡がうまく伝わっていないなどのハプニングにもフォローがし易かったのではないかと感じた。

また、その連絡や打ち合わせに際して、誰が一番の決定権を持っているのか、話が分かりづらくなった時に、誰がリーダーとして指示を出すのか、がわからなかったのが、その場での問題解決が遅れたもうひとつの原因だと考えられる。

例えば、演出上で一番優先するのは出演団体の意見で、それに対して全体を見通した上で演出 Team が団体対応を通し

て最終的にどんな演出をするのかを伝える…など演出上の意見の優先順位を決めておくことが必要だと感じた。

（3)当日に関して

リハーサルまでにかなり苦労して話を詰めておいておかげで、当日プログラムの進行に関しては戸惑うことは少なかった。当日の状況に即して動いた点（扉の開け閉め→試合などボールを使う競技はこまめに開け閉めをする、団体を入場口どこまで入れて待機させるか→セット間チアなど時間が限られた中で演技を行う団体だけはフェンスの手前で待機する）も多々あったが、それぞれ適宜有効に誘導できた。

ただ、当日に関して改善したい点がいくつかあった。

まず、当日試合前の選手は早めに練習を開始するため早く会場に入場したがるが、それを抑えきれなかったという場面もあったので、選手や団体をしっかりタイミングどおりに入場させることにも気をつけたい。

それから、オープニングセレモニー等で会場が静かな時に、誘導のトランシーバーの音が会場に聞こえてしまう時があった。来年からはインカムを使用することを提案したい。

【４】まとめ

今年、演出 Team の発足はインカレ当日二週間前という本当に直前の時期だった。それから連日アリーナ内の進行・演出にかかわる打ち合わせや役割分担・確認を行い、当日はなんとか目に見える部分としては合格点をとることができたように思う。しかし、実際に振り返ってみると反省点が山のようにある。

まずは前述した発足・始動の遅さ。全体の演出、つまり人々の一番目に触れる部分をコーディネイトし、プロデュースしなければならない誘導・音響は、アリーナ内のことを全て把握した上で自分の仕事をこなす必要がある。そのためにはインカレ準備の要所要所で団体や選手、式典関係のチームと連絡をとって一緒に準備を進めていくことが必要であったはずだ。その、他団体との歩み寄り、ひいてはつながり不足のために、前日やリハーサルになるまで全くイメージをつかむことができなかった。来年からは、より早い Team の発足と、演出のプロともいえるアリーナ内のことを知りきった人間の集団である演出 Team を目指すことが目標だろう。

次に見直したいのは、当日誘導において必要な観点や確認点が最後までつかめず、担当者や団体との打ち合わせの効率が非常に悪かった点である。前述したように、入退場口や入場のタイミングなど、必ず団体・団体対応・アナウンス・音響・誘導の間で確認しなければならないことがあるのだが、その確認点自体が直前まではっきりしなかった。来年度の効率の良い誘導打ち合わせの方法として私が提案するのは、演出 Team から、各出演団体やチームに演出上の観点をまとめた書類をかなり早い時期に手渡すことだ。

例えばまず初めに演出や進行の細かい観点に関して、各チームや団体に希望を聞く調査を実施する。（ＢＧＭは？アナウンスは？入場口は？退場口は？など)。それを加味した上で、演出・誘導側で、その観点に関して各チーム、団体ごとに詳細に動きを決定し、まとめた書類を、改めてチーム、団体ごとに作成し、団体・チーム・団体対応・アナウンス・音響・誘導などの関わりのある局・団体に配る。

このようにあらかじめ誘導や演出に関わる観点を絞っておき、関係者に知らせておくことで、リハーサルがスムーズに行えるし、変更やトラブルが起きたときもフォローがし易くなると考えられる。

以上のような反省点が挙げられるが、逆に良かった点もいくつかある。前日やリハまでは戸惑うことが多かった誘導だが、当日はスムーズに行うことができたし、当日までにはアリーナ内の大抵のことを頭にいれて動くことができた。これはリハーサルでとことん苦労し、詰めるべきことを詰めておくことができたからだと思う。改めてリハーサルの重要さを感じた。

また、入場に際して、出演団体や出場チーム・団体対応の方々の協力もあり、毎回団体が早めに集合してくれ整列も余裕をもって行えたため、毎回余裕を持って準備ができた。これは素晴しい事であり、来年も継続して行きたい事だと思う。

演出、ここでは特に誘導は、なくてはならない部署であり、来年も発足が当然と考えられる。しかし今年よりも早い発足と、他の組織との連絡やつながりの更なる緊密さが求められるだろう。

（3）アナウンス

原稿作成者　西山嘉倫

【1】　目的・方法

アナウンスの目的は、当日の円滑な大会進行である。大会での音声情報を管理することで、プログラムを進めることをはじめとし、来場者に各種イベントの案内をするなどしてよりよい環境づくりを目指した。また、サブイベントの司会や出演者へのインタビューなどを通して、大会を盛り上げることも目的であった。

そのための方法として、アナウンスのメンバーで担当するプログラムの箇所を後述のように決め、準備段階から運営に関わるようにした。実行委員会内各局や出演団体と連絡を取り、アナウンス原稿を作成した。

当日は、演出に関わる他部門と連携を図るよう努めた。

【2】　結果

4月下旬ころから運営に参加し､5月中旬からサミットカンファレンスにも出席することで、実行委員会各局と連携を図り、大会の1週間ほど前までを原稿作成とその推敲に費やした。それ以降は、音響や誘導など演出に関わる部署や当日スタッフと打ち合わせ、リハーサルを行い、当日を迎えた。

（1）　原稿作成

アナウンスのメンバーで、役割を大きく以下のような5つに分担し、それぞれで原稿を作成・推敲していった。

①　大会全体進行担当

大会全体のプログラム進行を行う。会場での注意事項を調べて会場案内を作成したり、実行委員会内各局と打ち合わせをしてプログラムの間に各種イベントのPRを入れたりした。

②　セレモニー担当

オープニングセレモニーとクロージングセレモニーのアナウンスを担当する。式次第を元に原稿を起こし、大会イメージに合うように推敲した。

③　試合アナウンス担当

試合に関するプログラムのアナウンスを担当する。アスレチック局と打ち合わせながら、タイムアウトのタイミングなどアナウンスをする上で必要な試合に関する知識を得るとともに、バレーボールの試合をビデオで見るなどして、当日のイメージを膨らませた。

④　レセプション担当

レセプションパーティの司会進行を努める。レセプション局と打ち合わせながら原稿を作成した。

⑤　出演者担当

パフォーマーの紹介や出演者へのインタビュー、そして抽選会の司会進行を担当する。パフォーマンス局を通じて各出演団体と連絡を取り、紹介文を作成するとともに演技とアナウンスのタイミングなどの打ち合わせを進めた。また、インタビューを行うために､その出演者に関する情報を集めたり、質問事項を考えたりした。

⑥　情報保障との連携

また、今回は当日の音声情報に関して情報保障を行うということで、情報保障班とも連携を図った。具体的には作成段階のアナウンス原稿をすべて情報保障班と共有し、推敲の際には変更点を、色を変えて示すことで明確にし、その都度更新した。

（2）　演出打ち合わせ

当日の一週間ほど前から演出に関わるエキジビションマッチプロジェクトやアスレチック局などと、選手・スタッフの動きや表彰のタイミングなど、プログラムの詳細について確認した。当日の細かい部分までイメージできていなかったり合意が取れていなかったりした部分が多く、やり取りが錯綜した。この時点で原稿がほぼ完成した。同時に音響とも打ち合わせをした。

大会前日にリハーサルを行ったところ、誘導や音響とのタイミングについてお互い十分に確認が取れておらず、不備が多々発見された。そのため、その日に音響・誘導・アナウンスでアナウンス原稿を元に打ち合わせを行い、入退場のタイミングや BGM とアナウンスのタイミングなどの具体的な動きについて確認した。その結果をアナウンス原稿に組み込み、それを最終版として、音響、誘導班にも一部ずつ配布した。

（3）　当日

当日は大きな混乱もなく､大会を進行させることが出来た。アナウンスを含めて試合を楽しめたというような声も聞かれた。

①声量について

リハーサルの時には会場にいた人数が少なかったため、発声もスムーズだったが、当日は思った以上に声が響かなかった。特に二階席に来場者が多くいたにも関わらず、そこまでアナウンスの声が聞こえなかったという意見が多く聞かれた。当日は、一階のアナウンス席では二階のそういった状況が把

握できていなかった。

セレモニーの時には、アナウンス担当者がうまく発声するために立ってアナウンスをした。その際、想定していなかったことなので場所をうまく確保できず、立ち位置について少々戸惑った。また、立ってアナウンスを行ったことについて、パフォーマンスとしてはやや中途半端に見られたという意見があった。

②アナウンス内容について

当日、来場者が多かったため、客席に荷物を置いたり幅を取って座っていた来場者に対し、客席を詰めて座るよう呼びかけたり、ボールが客席まで飛んでくるのに注意を呼びかけたり、想定できていなかったことを、その場で判断してアナウンスした。また、決勝戦などのアナウンスに関しては、会場の雰囲気を盛り上げられるような言葉をその場で付け加えたりした。

③観客をいかにひきつけるか

一日目の試合終了後、また二日目の決勝戦とも、試合終了の瞬間から多くの観客が出口へ流れ始め、二日目のクロージングセレモニーは若干寂しい雰囲気になってしまったように思われる。また、決勝戦終了後にヒーローインタビューを行ったが、勝ったチームが胴上げを始めたのでいつインタビューに移ればよいのかタイミングが分からず、少し間延びしてしまったように思う。

④演出との連携について

時間を把握し、演出全体を統率して指示を出すリーダーが明確に存在していなかったため、だいたいはアナウンスの方で判断してプログラムを進めた。しかし、入場やその他の演出の準備がきちんと出来ているのかはっきりと確認できず、進めてよいものか不安になるときもあった。演出チーム内でも指揮系統がはっきりしておらず、連絡に戸惑った部分もあった。1 日目はアナウンスチームでトランシーバーを一つ持ち、他の演出班と連絡を取っていたが、トランシーバーの声がマイクに入ってしまうため、2 日目は持たず、その代わり入退場の統率者にひとり、常にアナウンス席のそばにいてもらい、確認を取るようにした。

【3】　考察

（1）　原稿作成

アナウンスのメンバー全員が、今年から新しく実行委員会のメンバーに加わったので、最初は具体的な仕事のイメージが湧かず、手探りで原稿を作成してきたように思う。当日のプログラム進行について各局に聞いても、直前までなかなか詳細が煮詰まっていないことが多かったので、最終的な原稿の完成はかなり遅くなった。

（2）　演出打ち合わせ

演出チームが発足したのが直前だったため、音響や誘導班との打ち合わせが十分にできなかった。今回は全体リハーサルを行ったため、その時点でだいぶフォローができたが、演出チーム全体の統率があまり取られなかったため、個々の部署で情報の伝達がうまくいかなかったり、情報が錯綜して混乱が生じたりした。これらの点は、来年度への詳細な引継ぎがしっかり行われること、ひとりひとりが当日の詳細なイメージをもっと早くから持つこと、演出チームがもっと早くから発足することで解決できると思う。

また、特にセレモニーなどのリハーサルをしっかりとできたことは、とても有効であった。

（3）　当日

①声量とアナウンスについて

会場内が大変騒がしかったため、アナウンスチームに放送サークルのメンバーが多かったことは、特に声量の点でとても有効に働いたし、ある程度臨機応変な対応ができた。しかしながら二階席ではアナウンスが聞こえず、またそういった状況を一階からは把握できない点が問題であった。当日の雑音を十分に想定し、リハーサルからしっかりとした発声の練習をすることが重要であるし、当日アナウンスがどれだけ聞こえているのか、各場所と連絡を取って確認できる体制が必要である。

②観客をいかにひきつけるか

試合終了直後から抽選会、クロージングセレモニーまでの流れの中で、いかに観客をひきつけるか、プログラムの構成とアナウンスのあり方について、考える必要がある。

③演出との連携

1 日目は誘導の担当者が数箇所にいて、常に動いていたので連携が図りにくかったが、2 日目に行ったように誘導班に指示を出す人に常に本部にいてもらうことが有効であった。演出全体の指揮系統を明確にすべきであった。

（4）　全体を通して

①組織内での位置づけ

今回のアナウンスチームは、準備段階においては大会運営局の下部組織として動いていたが、そのため組織の中での立場が不明確だった。大会全体を把握し、各部署と連絡を取る必要があったため、サミットカンファレンスにも出席してい

たが、局でもプロジェクトでもないため、事務局との公的なやり取りはなく、あまり組織的に動けなかった。実際、自局内での連携の必要性の方が少なかったように思われる。

②情報の共有

アナウンスチームは 5 人で構成されていたが、チーフ以外の 4 人は大学内の放送サークルのメンバーであった。そのためアナウンスの質を高めることができたが、反面、サークル活動が忙しいため、あまり運営の段階で関わることができず、結果的に各局や出演団体との連絡、打ち合わせがチーフに集中し、情報の共有が難しかった。当日、来場者に大会に関するさまざまな情報を提供し、またアナウンスを通してこの東西インカレの魅力を伝えるためには、まず自分たちが大会についてよく把握し、イメージやコンセプトを理解しておくことが重要である。しかし今回は、その点をうまく 5 人でシェアできなかった部分もあったように思われる。

【4】　まとめ

今回は、全体的に大きな混乱もなく大会を進めることができ、また大会を盛り上げることに貢献できたと思う。

この大会自体がつくばで行われるようになってまだ二回目だということもあると思うが、当日の細かい想定が直前まで煮詰まらなかったことが大きな反省点としてある。来年度への提言としては、演出チームを準備段階から早いうちに組織し、各部署の連携を強化していくことが必要である。またその際には、準備段階での他局との連携、出演団体との連絡を考慮し、縦と横のつながりをバランスよく組織のあり方に反映できればよい。

大会のコンセプト自体が、Sports for All,　All for Sports という型にはまらない自由な発想に基づいており、アナウンスも堅苦しい感じではなく、できるだけ楽しく、観客にとって身近なものとなるよう意識した。アナウンスというのは、準備段階ではあまり意識されない部署であるが、当日はすべてのイベントに関わり、大会自体の雰囲気や印象を形作る大きな要素となると思う。この東西インカレだからこそできること、大会を盛り上げ、観客により楽しんでもらうためにアナウンスだからできること、そういった可能性を来年度へ向けて追求できれば良いと思う。

（4）オープニングセレモニー

原稿作成者　木曽雄介

【1】目的・方法

今回のオープニングセレモニーを行うにあたってもっとも重要とした目的は最初からカピオを観客で満員にすることでした。そのために多くの魅力的な演出を設け、観客をカピオに集結させることを意識した。さらにその観客を満足させ、出演団体、選手の人々に東西インカレの雰囲気を味わうことのできるセレモニーを目指し、式の流れを想像しながら作成していくことを心がけた。

【2】結果

（1）オープニングセレモニーの作成

オープニングセレモニーを作成するということでまず行ったことは、まずは出演団体や挨拶を行う人を決定していくというものだった。そしてその後昨年を参考にしつつ今年なりのアレンジをつけていくという形でオープニングセレモニーの式次第が決定していくという形をとった。このときに問題となったのがクロージングセレモニーやレセプションとも関係してくるのだが、誰がどこでどの順番で挨拶を行うかということだった。

（2）式次第

式次第は上記の通り、基本的に去年のものを参考にして作った。その中でどのように盛り上げていくのかについて出演団体の内容も考察しながら作成していった。実際の式次第とタイムスケジュールを下に示す。

表1　オープニングセレモニー式次第

TIME	式次第
10：00	プレパフォーマンス　常陸の国ふるさと太鼓会
10：05	選手入場
10：10	開会宣言
10：11	国家斉唱
10：12	開会の挨拶　全日本大学バレーボール連盟会長
10：15	つくば市長
10：18	実行委員会挨拶
10：20	優勝杯返還ならびにレプリカ授与
10：22	選手宣誓
10：23	メモリアルパフォーマンス 筑波大学体操部
10：28	選手退場

（3）オープニングセレモニーの動き

オープニングセレモニーの内容が決まったあと、実際に細かい部分のことについての話合いをつめていくという作業を行った。このとき出演団体との交渉や誘導を含めオープニングセレモニーについての情報がうまく伝わらず情報が錯綜してしまっている状態であった。そのため直前まで変更点が相次いででるという形になってしまった。その結果さらにリハーサルにも影響を与える結果になってしまった。

（4）当日

実際当日になって特に問題もなく順調に進めることができた。選手の誘導や音響もうまくいっていた。ただ少し太鼓の音でアナウンスがかき消されてしまい2階席では聞きずらい状態になってしまっていた。

【3】考察

（1）進行について

オープニングセレモニーも進行に関しては結果のところでも述べたようにうまくいっていたので問題もなくスムーズに行うことができていた。ただ全体を通して少しあたふたする場面もあった。これはリハーサルに問題があったと考えられる。リハーサルを何度も行うことができたところもあれば、リハーサルに参加できずそのまま本番を迎えるしかなかった団体や関係者もあった。もう少し余裕をもってリハーサルの時間がとれるようにする必要があると感じた。

（2）内容

オープニングセレモニーの内容としてはとてもいいものができあがった。観客や選手、出演団体にもとても楽しんでもらうことができていたし、東西インカレの印象を強く与えることができたと思う。そういった意味では当初の目標が達成

できていた。またそのことによって観客の増加にもつながりいいものを完成することができたと思う。

【４】まとめ

　オープニングセレモニーのことについて作業を行ってきたが、今回オープニングセレモニーはとても充実したものにすることができた。来年への提言としては、打ち合わせを含めオープニングセレモニーに関係する団体や組織、実行委員会のなかでももっとミーティングをする機会をもつなどしてより確実に情報を伝えることである。そしてできるだけ早く決定事項をすばやく済ませリハーサルを行う時間と余裕をもつことである。これができればさらによいオープニングセレモニーを作ることが可能になると思う。来年も人を引き付けるよいオープニングセレモニーになることを期待しています。

（5）クロージングセレモニー

原稿作成者　木曽雄介

【1】目的・方法

今回のクロージングセレモニーの目標としては表彰をメインのイベントとしつつも、大会の最後を締めくくるイベントとしての意味を持たすということを目標として企画、立案してきた。

表彰に関しては今回の 2004 東西インカレの大会理念である「産・学・官・民」の融合や一体化ということをもとにそれぞれから表彰を行うということを実行に移していった。また、表彰においてもさまざまなものを設けるということを行い、団体や選手の繋がりを意識していこうと考えた。

【2】結果

（1）クロージングセレモニーの作成

クロージングセレモニーを作成という中で行ったのはオープニングセレモニーと同様で出演団体と挨拶する順番とだれがどこで挨拶するかということであった。これについては出演団体の決定を待ち、式次第を去年のものを参考にしながら作っていくという形をとった。

（2）式次第

去年のものを参考にしながら式次第を決定したわけだが、その中においても流れや順番を意識しながら決定することを心がけた。下に式次第を示す。

表1　クロージングセレモニー式次第

TIME	式次第
0	優勝決定戦終了
14	選手入場
16	成績発表
17	表彰
34	特別賞発表
39	閉会挨拶　　つくば市体育協会会長
40	つくば市商工会副会長
41	筑波大学学長
42	閉会宣言

（3）クロージングセレモニーの動き

内容や式次第が決まり出演団体や選手、挨拶をしていただく人との細かいつめの作業を行うという段階に入っていった。ここでもオープニングセレモニーと同様情報が錯綜してしまいなかなか決定事項がまとまらないという状態を作ってしまった。さらにそれをリハーサルの段階でもつめきれていないという状態になりリハーサルをほとんど行うことのないまま実際本番をむかえる形になってしまった。

（3）当日

当日はクロージングセレモニーが最後ということもあり、結局リハーサルも万全に行うこともできないまま、そのことについて確認するということも行われないままになってしまった。実際はその不安が現実になるということになってしまった。まず、西日本の代表チームが帰らなければいけないという状態になってしまい先に表彰式を行うという形になってしまった。これは選手対応などとの話し合いがスムーズに行われていなかった結果である。

そしてクロージングセレモニーのときには観客がほとんど帰ってしまうという寂しい状態になってしまった。さらには表彰の段取りが悪くあたふたしてしまうことになってしまった。

【3】考察

（1）進行について

進行についてはとにかくリハーサルの数が少なすぎたのが一番の問題であると思う。出演団体や表彰品のプレゼンターさらには実行委員会の中でもアナウンサーや選手対応などが当日の動きについてきちんと理解することのできるミーティングを何回か設ける必要性を感じた。

プレゼンターの依頼についてはさらに詳細を明確な文書として何度か送り、当日も動きを確認することが必要ではないだろうか。さらにプレゼンターの横でプレゼンターを誘導するといったような人員配置をすることも考えなければならないと思う。

（2）内容について

内容の面から見るととても寂しいものになってしまっていたのではないだろうか。オープニングセレモニーと比べても見劣りするような状態だった。もっとクロージングセレモニーに出演団体を増やし魅力的なものにすることが、観客が帰ってしまうということの予防策になるのではないだろうか。さらにはクロージングセレモニーのあとに抽選会を行うなどして楽しみを残しておくことが必要となるのかもしれない。

【4】まとめ

クロージングセレモニーについて関わってきたわけだが、なかなかうまくまとめきれず本番一発勝負になってしまった

というのが正直なところである。来年にむけてはクロージングを含めセレモニーに関して形式ばった形を意識しないほうが円滑に進むのかもしれないと感じた。挨拶も文書にするなどして簡略化するのもいいのではないかと思う。

さらに表彰についても全試合終了後に行うにではなく、三位決定戦終了後に一度表彰を行い、さらに優勝決定戦終了後に行うという形をとるほうが選手側の立場から考えると楽なのではないだろうか。そのときに挨拶していただく方には挨拶のかわりに講評をいただくという形でもいいのではないだろうか。

これらのことを踏まえ来年はクロージングとして成功を収めることができるような形を考えていく必要があると思う。

Ⅱ.大会運営

≪１≫　大会運営組織体制及び経緯

原稿作成者　松田裕雄・伊藤健士

【１】目的・方法

大会当日の運営を円滑に行うことを目的に，大会運営局を主軸に組織を編成した.その分割する際の方法としては，基本的に各イベントの開催されるハード毎に行った.カピオ（大会会場）と東雲（レセプ会場），そしてカピオの中で，更に内部，外部，ホール，そして運搬と警備.そしてどの部門も分割する際の基準となったのは，物流管理，機材管理，各種対応，イベント運営の４つとなった.

【２】結果

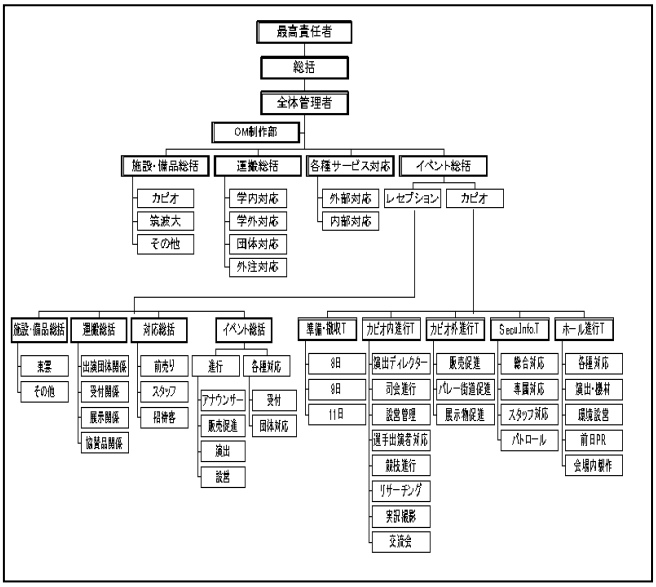


図１　当日運営組織図

図１は当日の運営組織図である。基本的には，どのセクションも物流，情報共に円滑に促進されてはいた.しかし，準備段階における組織編制と連動した組織編制を全体的に組むことができず，個人の情報処理能力に頼ることにウエイトが置かれてしまった.例えば，セキュリティや運搬物流全般，準備撤収全般，そして施設管理者側（カピオ職員）との連携.これらは事前の組織編制では全く考慮されておらず，オペレーションマニュアル作成時に急遽設置することとなり，時期的に非常に厳しいものがあった.結果として，準備や撤収は，迅速に行われはしたが，一部のスタッフに多大な負担を掛けたことは否めない.

【３】考察

先にも述べたが，今年の組織体制として当初はパトロールの扱いが低く、大会が近づくにつれて重要視されるようになっていた。パトロールが一プロジェクトとして成立していたり、こういったイベントに対して一般的にどれほどの警備が必要なのだろうかといった事前のリサーチもあったりしたならばよかったと思う。このことは多くのＶリーガーに出席した頂いたレセプションパーティーのところでもいえるかもしれない。今後大会が成功を続けていくためには重要になってくるのは間違いないだろう。

施設、備品というものは全てのワーキンググループに関わってくるところであり、その充実振りが大会の可能性を広げるといっても過言ではない。今回の組織体制では施設、備品を運搬と分け一つの括りにすることで、仕事を充実させようとした。昨年はトラックへの荷物詰め込みと搬入を大会前日だけでやったが今年は二日前にトラックへの詰め込みをし、前日にはカピオに搬入するだけということにしたのでうまく仕事を流れさすことができたようだ。施設備品と運搬を充実させるためにも来年度も大きく取り扱っていった方がよいだろう。

【４】まとめ

運営組織の体制作り、組織のチーム分け、区切りは非常によかったと思う。しかしチームごとにミーティングを開催したりするということは少なかった、もしくは無かったのではないだろうか。学生の組織に情報の流通というものは大きな課題となるが、大会の運営組織体制を整える側は体制作りで終えるのではなく、その後の組織の中での情報の流れ、チームの繋がりにまで気を配り、点を線に、線を輪にするところまで考え通せたならば最高だと思う。簡単に出来ることではなく多大な労力を要することではあるが、次年度の提言としてはどれだけ輪を大きくすることが出来るかに努めてほしいと思う。現段階では，次年度の具体的な組織図はイメージされては来ないが，以下の項目が今後は事前段階で必要なプロジェクトになるということを加えて結びとする.

１）　マーケティング局：東西インカレという大会における実行委員会内部による販売行為の全てと第三者と，これとの販売権益を巡る公正取締り機関.具体的には，グッズ等の開発，販売･営業企画と実行，全ての販売行為や販売スペースにおける権益の管理.

２）　運搬･物流･機材管理：大会当日に必要な機材の一括管理及び物流マネジメント（搬送方法，ルート及び

チームの編成等)，カピオ施設.

3） 大会プロモーション部:大会当日の各イベントの「つなぎ」と総括を行う.演出，誘導，音響，各種セレモニーがその中に考えられる.

4） 環境保全･警備部:ゴミの管理から駐車場管理,場内･場外警備の総括.

≪２≫情報管理

原稿作成者　松田裕雄

【１】　目的･方法

大会運営局がもともとできた目的は，大会当日を想定した組織編制における全体の情報処理にありました.一方で，事前の準備過程における情報処理を東西インカレ事務局としていました.その運営方法は，大会運営局の準備段階における組織編制と大会当日段階における組織編制との二段階に敢えて分けることで柔軟性を持たせる手法をとりました.大会準備段階では，総務運営部，サービス推進部，施設機材管理部の大きく三つのくくりの中で当日を想定した準備を行い，６月中旬に当日の動きに合わせてそこから様々な部署を派生させていくことで，組織の大編成を行いました.

【２】　結果

準備段階では特に滞りなく，情報は流通していたといえます.しかし，６月中旬の組織編制に伴い，組織が細分化され，他局でこれまで動いていた部署が入ってきたときに，統括がしっかりとれておらず，情報が溢れ返り，その情報の持ち主がいないという状態が起きていました.

【３】　考察

直前まで状況を見てから組織の再編成を行うという手法は，柔軟性はあり，現状に則したワークの住み分けはできたのですが，現場で動く人間にとっては，やや連動性が見えにくい（当日があまりに想定できないため）状況となっていました..総務運営部は，各種対応へ，サービス推進部は，セキュリティ，ゴミ管理へ，施設機材管理部は，備品･運搬総括へと移行しましたが，事前準備の想像をはるかに上回る当日の情報量に，完全に人材量がついていけていませんでした.特に対応もスタッフ対応が新出したり，セキュリティでは警備の重要性が直前で高まりました.又昨年をはるかに凌ぐ物流の多さに，肝心なハードの準備･撤収の総括が，その場しのぎで擁立したスタッフでは，非常に負担が大きかったといえます.その分割り当てられたスタッフの能力に依存する割合が非常に高かったといえる.

【４】　まとめ

やはり当日の具体的な詳細まで考慮したうえでの組織編制（役割分担）を行うのがベストであると考えられます.昨年に引き続き，本年も非常に新しい企画が多く入っていた為，１年目のように，当日にならないと感触がつかめない，細かい想定がしにくいという状況ができていたということが，まずひとつめのネックであったといえる.更には，スタッフが毎年（これは宿命ではあるが･･･）入れ替わるということもあり，情報伝達がゼロから，という部署もでてきてしまうという現状が殆どであるということです.

そうした情報の管理と「つなぎ」をスムーズに行う為に，今回はこのような報告書を詳細な設定で残すことを企画し，これへのひとつの対応策としました.

基本的に，情報を処理し，管理するという際に今回心がけていたことは,「管理側は，細分化された各部署において共通する項目（例えば，財務，外務，内務，制作，機材使用等）が取り出されたもので，その全てを大元で統括するということを目的に存在する機関なのだ」ということを学生に認識させることでありました.しかし,「管理しなくては」という認識を与え，逆に管理側には過剰な負担がかかり，その割には「管理されて自由に動けない」という認識を現場側には持たせてしまうという全く逆の事態が起きてしまいました.

人的に「実行委員」としての続投率が不安定なこのような組織の場合には，大元を先に決めるのではなく，各部署単位で決め,その部署の担当者の集合体として大元の最高責任者,もしくは最高責任グループを決めた方がよいと考えられます.例えば，各部署の会計を集めて，その中からインカレ全体の会計役を任命する等もそのひとつとして考えられます.

いずれにせよ，縦の組織（各イベント毎，各局毎，それだけで一応は独立できる組織）と，横の「つながり」からの組織化（先に挙げた共通項目を取り出した形での集合組織，例えば，プロダクション局，PR 局等）とを使い分けた形で最終的な情報処理機関としての組織作りをし，風通しのよいものにしてくことが，外部にとっても，そして何よりもスタッフ自身にとって居心地の良い環境になると思われます.寝不足や授業中の居眠りが多いということは見過ごせない深刻な事態であると思います.

効率よく，気持ち良くワークに取り掛かれるには，本人の能力も然りではありますが，それを行うフィールド作りも非常に大きく重要なことであるといえる.今後の組織作りにおける最も大きな課題であると私は捉えています.

≪３≫法務、保険

原稿作成者　伊藤リナ

【１】目的・方法

バレーボールをはじめとした総合イベントの実施にあたって、想定しなければならないものの一つが危機管理についてである。特に、万一ケガをした場合に備えて保険に加入することは必須である。したがって、大会当日の事故を未然に防ぐことや緊急な事故への対応・連絡が機能することを念頭におき、計画を立てた。

【２】結果

バレーボール交流会への参加者及び出演団体の出演者等に対し、下記内容の傷害保険に加入した。なお、学生スタッフについては、大学入学時に加入している保険を適用した。

（１）ワーキングスケジュール

保険加入の手続きは以下のとおりである。

６月２９日　　つくば市体協で朝倉さんに相談
７月２日　　朝倉さんが三井住友海上と契約
７月 13 日　　保険料を朝倉さんに支払う

（２）保険の概要

今年度、実行委員会としてかけた保険の概要は以下の通りである。

表１　保険概要

保険期間	平成１６年７月１０日～１１日
加入人数	８００人（バレーボール交流会への参加者、出演団体の出演者）
保険料	７２００円（実行委員会負担）
保険支払金額	死亡・後遺障害：１００万円
	入院・保険金日額：１５００円
	通院・保険金日額：１０００円

（３）当日の状況

当日、観客の一人にボールがあたり、その観客がかけていたメガネが損傷する事故が１件あった。観客の事故を想定していなかったので、対応に戸惑い、その場で事情を保険の適用が可能かどうか答えることができなかった。一方で、保険をかけた交流会への参加者及び出演団体の出演者等に関しては事故がなく、保険の適用もなかった。学生スタッフについても特に事故は起きなかった。

【３】考察

加入した保険は十分なものだったと思われる。しかし、当日起きた上記事故の対応に戸惑った原因は、

・保険の内容をきちんと把握していなかったこと
・保険の担当者が誰であるか実行委員に伝えていなかったこと
・保険内容を実行委員にきちんと伝えていなかったこと

の３点が挙げられるだろう。

今後に関しては、いろいろな事故を想定して、その場合の対応をきちんと準備していくことが重要だろう。来年度に向けて具体的には、

・一般的なスポーツイベントにおける保険の範囲、特に観客についての対応を調べる
・総会やカンファレンス、または文書等にて、事故が発生したときの対応、さらに保険の適用内容について知らせる
・その際、責任者が誰であるかを知らせる

などが挙げられるだろう。まずは、組織として保険をどこの局が担当するのか、さらには安全管理を組織としてどう位置づけるかを考えることも必要だろう。

【４】まとめ

イベントにおける無事故は、観客をはじめ、選手、出演団体、そしてスタッフの全員がイベントを楽しみ、成功するための必須事項である。そのための危機管理も重要な項目であろう。今年度の東西インカレにおいては、安全管理の一つとして保険加入しか行わなかったが、今後は幅広い法務、危機管理を行っていくことが必要だろう。特に、この東西インカレにおいては様々な著作物があり、この著作物に関する権利関係等についても考えていくことも大事ではないだろうか。こうした知識は、自分で勉強することも必要だが、実際にスポーツイベントを行っている団体の担当者に、一度話をおうかがいするのも一つの方法だろう。

来年度の開催に向けては、早い時期からさまざまなリスクを想定し、準備ができればいいと思う。

≪４≫消防、防災

原稿作成者　伊藤リナ

【１】目的・方法

火災等の災害予防は、イベント実施にとって不可欠な項目である。今年度はつくばカピオ前の広場を利用したプロジェクト「バレー街道」の一環として、つくばカピオ外に飲食物の模擬店を設置するため、特に消防について配慮する必要がある。なお、屋外で火を使用する場合、消防署に申請が必要となるため、つくば市消防本部に申請書を提出した。

【２】結果

（１）　ワーキングスケジュール

申請書を提出したスケジュールは以下の通りである。

６月１７日　つくば市スポーツ振興課の南さんとつくば市消防本部（つくば市春日）に挨拶、「禁止行為の解除承認申請書」をもらう

７月６日　つくば市消防本部に届出を提出

※なお、「禁止行為の解除承認申請書」は別紙の通りである。

（２）　当日について

万が一、火災等が発生した場合に備え、

・水バケツを設置

・現場責任者の荒木（地域デザイン）が 119 番通報する

と対策を講じた。また、他の災害等に関しては、緊急連絡系統（下記図１参照）により対応した。

当日は火災や地震等の災害はなく、滞りなく行なわれた。

【３】考察

幸いにも災害が発生しなかったため、特に問題は起きなかった。しかし、万一火災が発生した場合、きちんとした対応ができただろうか。私自身の反省としては、自分が消防・防災の担当であることをあまり理解しておらず、そのため現場責任者との事前打ち合わせや火災予防の現場確認を十分に行うことができなかった。

また、防災全般として、緊急連絡系統があったとはいえ機能できたか疑問が残った。

なお、この「禁止行為の解除承認申請書」の存在に気づいたのは、南さんのご助言によってであった。しかも一緒に挨拶にいってもらったことにより、消防本部とコミュニケーションがとれ、「東西インカレ」の消防に関して認識していただいた上、結果的には「東西インカレ」の宣伝にもなったように思う。ただ、来年度は時間的に余裕があるときに申請をした方が楽だと思う。

【４】まとめ

当日については災害等が起きなかったことに尽きる。しかし、想定される災害は火災以外にも、

・地震

・落雷

・不審者の乱入

などあるだろう。来年度に向けては、緊急連絡系統の周知徹底とともに、当日現場を仕切るパトロール隊との組織連携を図るなど、大会の規模にふさわしいリスクマネジメントをしていくことが必要であろう。

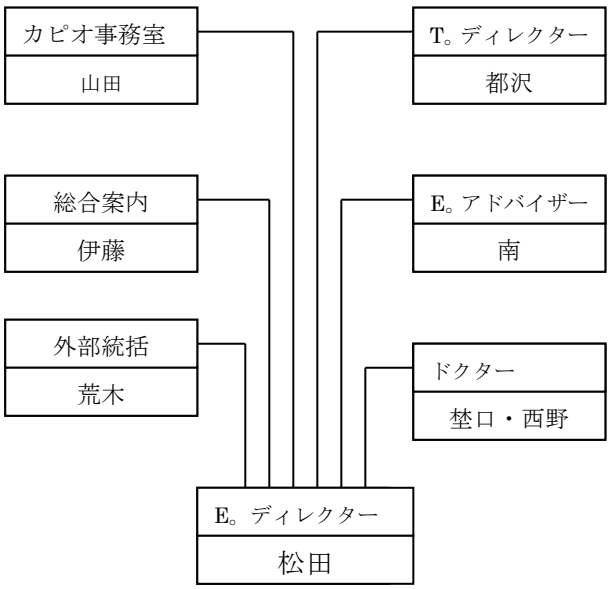


図１　大会当日(10・11 日)連絡系統図

≪５≫　医事

原稿作成者　田仲俊樹

【１】　目的・方法

当日何か事故でけが人が出たときの場合に備え、けが人が出てから迅速に対応することを目的とした。この目的を達成するために、連絡系統を作ったり、ドクター用の携帯電話を用意したりするなどの方法を迅速な対応ができるように考えた。

【２】　結果

当日は１日目に水戸赤十字病院整形外科医長である埜口博司先生に、２日目には筑波メディカルセンター病院整形外科医である西野衆文先生に来ていただいた。緊急の対応病院には筑波大学付属病院にご協力いただき、坂根先生に待機していただいた。救護室には氷、最低限の処置道具を用意し、けが人が出た場合にはコート周辺管理の人間がすぐにサポートできるように待機していた。

当日は幸いにもけがをした人はいなかった。

【３】　考察

準備段階のときにドクターの発送を忘れていたりといろいろと問題があったのだが当日は事故等もなくけが人がひとりも出なかったということで最高の結果で終わったと思う。

しかしながら、実際にけが人が出た場合にどのように対応するのかということのマニュアルなどを考えていなかったためもしもけが人が出ていたら迅速な対応ができたかどうかはわからなかったと思う。

【４】　まとめ

けが人が出ないということが一番ではあるが、もしものときのために来年も今年と同様にドクターを派遣しけが人が出た場合にいつでも対応できるようにするべきだと思う。そして、実際にけが人が出た場合にどのように対応するのかというマニュアルを来年度は作っておくべきだと思う。

≪６≫施設機材管理

原稿作成者　赤木貴雅

【１】目的・方法

目的は、大会の運営や準備を円滑に進めるために、大会中だけでなく大会前の準備から大会後の片付けまでに使用する施設・機材を用意し、管理することである。

これを実現していく方法として、備品の管理では、大会実行委員会各局から使用する備品のデータを集め、使用場所・使用団体・運搬ルートなど様々な特色をつけて把握することである。施設の管理では、各団体が利用する施設や日時などの情報を収集し、希望するスケジュールを立て、利用する施設の予約を取ることである。また、大会会場の管理では、つくばカピオの全部屋ごとのスケジュールを作成し、当日はサイン看板を設置し、出演団体や観客を誘導することである。。

【２】結果

（１）　備品管理

まず、大会実行委員会各局から大会で使用する備品のリストをあげてもらい、その情報を一つのリストにまとめた。この際、一つの備品について様々な情報を明確にすることにより、リストアップされた全ての備品を把握することができた。また、このリストを運搬ルートや使用場所などで整理することによって、運搬などの各作業をより円滑に進めることができた。しかし、備品を把握するのが遅れてしまい、レンタルしなければならない備品の申し込みが遅れてしまった。そして、これらの備品をスタッフ全員が理解できるように、それぞれの備品に使用方法・使用場所・責任者を明記したシールを貼った。このシールによって、準備・片付けがうまくできたのだが、片付けの際、シールをうまくはがすことができず、備品を少し傷つけてしまった。

（２）　施設管理

まず、備品と同様にして、施設の情報を収集した。施設の利用方法として、リハーサル、ウォームアップ、そして大会会場があった。次に、会場別に仮のスケジュールを作成した。そのスケジュール通りに施設を利用することができるかどうかを各施設の管理事務室に問い合わせた。そして、利用可能な日時を聞き、各出演団体と日程を調整して、施設ごとのタイムスケジュールを作成した。このタイムスケジュールによって、各出演団体が予定通りに活動することができた。しかし、施設管理も備品管理と同様に、情報の把握が遅れてしまった。そのため、利用したい施設に予約が入ってしまっていたり、申し込みの期日を過ぎてしまっているのに、施設側に無理を言って貸していただいたりして、迷惑をかけてしまうことがあった。また、ウォームアップ会場として筑波大学球技体育館を貸していただいたのだが、利用する団体に施設の利用方法を明確にしていなかったため、団体に迷惑をかけてしまった。

（３）　大会会場の管理

大会会場の管理では、控え室の管理が中心となった。まず、出演団体の人数を把握し、プログラムに合わせて各部屋のスケジュールを立てた。そして、大会前日に各部屋の前にサイン看板を設置した。これがサイン看板のサンプルである。

図１　サイン看板

このサイン看板によって出演団体をうまく誘導することができたが、会場図の座席の数と実際の会場の座席の数が違っていたため、うまく出演団体の座席を確保することができなかった。

また、会場の外では来場者を会場に誘導するために会場案内や駐車場案内などの捨て看板を設置した。以下の地図は捨て看板の配置図である。

【３】考察

（１）　備品・施設管理

今回課題となったのは、情報の処理の遅れと備品の取り扱いである。備品や施設を借りる際に、利用する直前になって問い合わせることが多かった。つくばカピオでは利用する 2 週間前までに申し込まなければならないなど、施設には申し込みの期日がある。そのために利用することができなかったり、施設に迷惑をかけてしまったので、もっと早く予定を立てるべきである。また、スタッフ間での情報の交換が遅れ、

突然の備品の不足に対応しきれなかったこともあり、実行委員会内部での情報の処理の悪さが目立った。施設機材管理では小出しで出てくる多量の情報を少人数で処理していたため、漏れを生じてしまった。もう少し人員を増やすべきである。

（2）　大会会場の管理

今回課題となったのは、会場を事前に把握し切れなかったことである。控え室の割り振りや出演団体の観客席の確保などを行う際に、控え室の広さや座席の数などの会場の細かい部分が明確になっていなかったために、計画性を失ってしまうことがあった。これを改善するためには、カピオの視察の回数を増やすことや、カピオのことを細かい部分まですべて把握しているスタッフを養成するべきである。

【4】まとめ

この度の施設機材管理は計画性が不足していたと言える。次年度への提言としては、備品や施設の安全や確保のことを考えると、スタッフの増員と大会実行委員会全体の早い段階での計画の実行を希望する。よって、1）各プロジェクトの計画をはやめる。2）数人のスタッフですべての備品を把握する。3）各プロジェクトとの連絡を頻繁に取る。

以上、施設機材管理の今年度を指標にまとめた次年度への提言である。

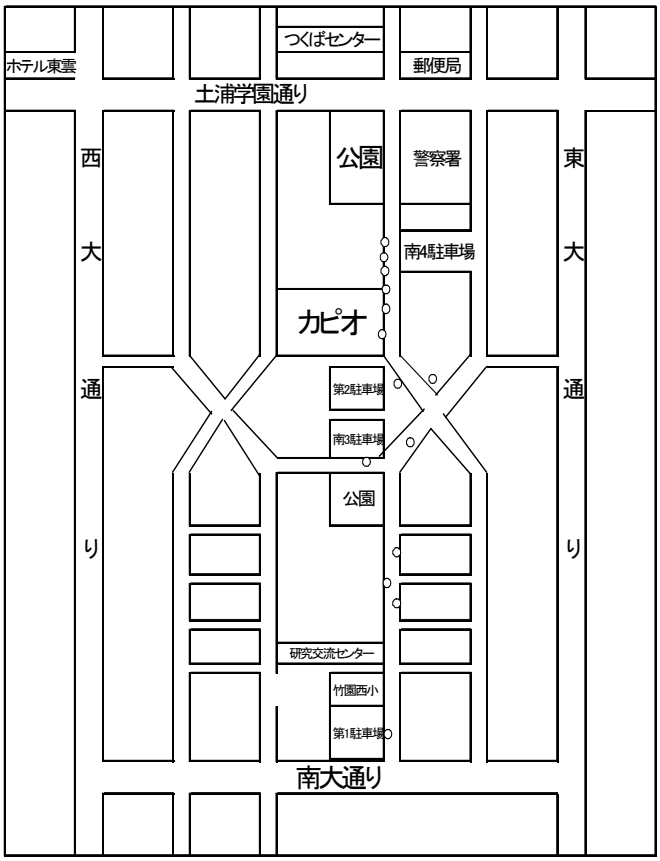


図2　捨て看板の配置図

≪７≫セキュリティ

原稿作成者　藤澤寛子

【１】　目的・方法

セキュリティでは、①カピオ内外においての警備を行うこと。②本部前において、混雑を避け、人の流れを制限するために AD の確認を行うこと。③手すりへの寄りかかり注意を呼びかけること。④各種掲示物の管理。⑤駐車場の管理をすること。を大きな目的に掲げていた。

これを実現していく方法としては、巡回班・駐在班に分かれ、場所ごとにリーダーを立てて管理を行う。巡回班はカピオ内アリーナ１F、アリーナ２F、控室、外パトロールにわける。駐在班は、本部、本部プレス控室、アリーナ１F、つくばサイト、カピオ・第２駐車場、バレー街に分ける。情報伝達の方法としては、トランシーバーを用い、本部と指示を出すものの連絡網をつくる。また、サイン看板を利用し、大多数の観客に働きかける掲示物を作成する。というものである。

【２】　結果

各場所のワーキングスケジュール概略とその結果

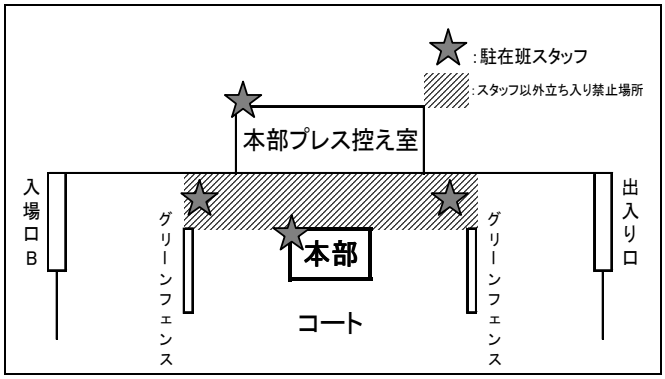


図 1　駐在班アリーナ内配置図

①　アリーナ１F 巡回

コート周辺とエントランスロビーを中心に回り、グリーンフェンスのバナーの確認と警備、飲食・喫煙禁止を呼びかける、観客の流れをスムーズにするという仕事内容であった。しかし、飲食物の飲み食いに関しての注意は十分に行き届いていたが、グリーンフェンスのバナーの確認までは行えなかった。ドアも開きっぱなしで冷房の効き目がなかった。

②　アリーナ２F 巡回

２F 観客席周辺を回り、手すりの寄りかかり注意と清掃、警備、各種制作物の確認を行うという仕事であった。手すりの寄りかかり注意はできたが、出場・出演団体の応援席の確保ができず、各団体に失礼になってしまった。バナーの確認は十分に行えた。また、本部からの連絡量に対しての情報処理に対処できなかった。

③　控室巡回

控室全般を巡回し、警備を行うというものであったが、やる仕事量に対して人員が多く、仕事の偏りが出てしまった。

④　外パトロール巡回

午前 10 時まで第１駐車場で車の誘導を行い、その後は、カピオ周辺を巡回するというものであった。しかし、第１駐車場に入る車が少なく、いても仕事がほとんどなかった。カピオ周辺の警備といっても特にすることもなく、他に人員の必要な所に人をまわすということで、２日目からは外パトロールを行うことをやめた。

⑤　本部・本部プレス控室駐在

図１のように、本部・本部プレス控室に１人ずつ駐在し、大会本部や、他部署、部署内での情報伝達を行う予定であった。しかし、常駐のはずなのに動いてしまい、本当に必要なときに人がいないという状態を作ってしまった。人員が少ない場所へと人が流れてしまった。また、本部プレス控室の警備を行うことになっていたができずに、スタッフの私物などの物が散乱してしまい混沌とした控室になってしまった。

⑥　アリーナ１F 駐在

図１のようにスッタフ以外立ち入り禁止場所の両端に１人ずつ駐在し、本部に入る人の AD 確認を行うという仕事内容であった。２箇所駐在する場所に対して、スタッフが２人しかいない時間があり、スタッフの休憩が取れなかった。AD 確認を行ったことで、本部席内での混乱は防げた。

⑦　つくばサイト駐在

つくばサイトの掲示物の警備を行う仕事であった。仕事量に対してスタッフが多かった。２F 巡回をしているスタッフへと情報が回らない時に、観客席への対応をした。

⑧　カピオ・第２駐車場駐在

車の誘導を行う仕事に対して十分にでき、特に問題は起こらなかった。朝、スタッフが集合する時点での誘導者がおらず、出演団体の保護者の車などへの対応ができていなかった。食店周辺においての火気対策を行った。安全確保と火気対策は行えたが、インカレ広場においての清掃が行き届いてなか

⑨　バレー街駐在

「インカレゲート」「Jump to the world」の安全確保と飲

った。

【３】　考察

（１）　情報伝達について

情報伝達のために用意していたトランシーバーは、事前準備が少なかったり、トランシーバーを使えないスタッフがいたり、アリーナ内では周りの音がうるさ過ぎて聞き取れなかったりして、うまく機能しなかった。さらに、パトロールの仕事自体についての情報も行き届いておらず内容の把握できていないスタッフが大勢いたと考えられる。また、当日になってもまだ仕事内容の変更点が多く、曖昧で情報が錯綜してしまっていたようだ。チーフ自身が動きまわっていることが、情報が伝わらない原因だという意見もでた。このような結果、部署内での仕事の偏りや、対応の遅れを生んだ可能性が高い。

（２）　人員について

当日スタッフがほとんどの寄せ集めの組織では、情報のやり取りだけでなく仕事の効率的にも悪かったと考える。しかし、スタッフの人数などの関係を考えると当日しか働けない人で構成してもしかたがない。それよりもミーティングを重ね、疑問点を解消する必要があった。また、市や商工会のスタッフを加えることで大人の方の協力を得られてよかったが、連絡不足のためうまく活用できなかった。セキュリティにおいての大人の方の協力ははずせないが、事前の打ち合わせが少ないと、今回のように情報の伝達がうまくいかないということを起こしてしまう。当日の打ち合わせをやったほうがよかったという意見もでた。ミーティングをもっと開き、仕事内容の把握を十分に行っておく必要があったと考えられる。

（３）　巡回班、駐在班の活動について

外パトロール、控室巡回班は必要ではあったが、仕事内容が曖昧すぎてうまく働かなかったという意見がある。人員の削減など、仕事量に対してのスケジュールを考えるべきであった。応援席の確保については、サイン看板だけでは分からない。前日から選手・出場団体と連絡を取り合い、ロープを張るなどして当日に臨むべきであったと考えられる。

【４】　まとめ

今年度のセキュリティでは、予定通りに進んだとは言えない。そこで次年度に向けてこのプロジェクトの提言としては、１）事前プロジェクトとして、組織の発足を早くする必要がある。または、セキュリティ専門の他団体の協力を仰ぐ必要がある。２）トランシーバーは情報伝達手段として成り立たないため、インカムを使うか専用の携帯電話を用意する必要がある。３）応援席の確保は、前日の段階で人数を確認しロープを張っておく必要がある。サイン看板だけではわからない。

以上、セキュリティでの今年度を指標にまとめた次年度への提言である。

≪８≫駐車場管理

原稿作成者　大野史成

【1】目的・方法

本プロジェクトの目的は、観客と会場を繋ぐ役割を果たすべく、会場へのアクセスをスムーズにし、観客の皆様に不満を感じさせることなく来場していただくことであった。

これを実現していく方法として昨年の反省から、カピオ内に入れる車両を逐一止めて確認していたために生じていた渋滞を解消するために駐車証を作成して、カピオに入れていただく車両に配り、誘導しやすくしようと思った。また、車の流れをスムーズにするための案内方法の立案・実行（捨て看板の設置）、観客の皆さまに駐車していただく無料駐車場の借用の要請、またスタッフ専用の駐車場の確保や、有料駐車場の使用の有無、そしてゲスト・ビジターの駐車場の確保などを考えていた。

【2】結果

（１）　カピオの駐車場

ゲストの方やビジターの方にはなるべく近い駐車場を利用していただくことを決め、カピオ大会会場の駐車場で使用許可をいただいた３０台の駐車スペースで、停めていただく３０台を厳選した。そして、駐車場への誘導をスムーズにするための駐車証（図１）を作成してお渡しし、その駐車証を提示された車両のみをカピオ内の駐車場へと入れるようにした。また、その３０台の中には障害者用のスペースが２台分あり、当初そこにはシッティングバレーの選手に停めていただくことにしたが、作業が進むにつれシッティングバレーの方々には特に特別な駐車スペースは必要無いということで、障害者スペースの２台分を空けて、普通乗用車を３台停められるようにした。そして前日になり、問題が１つ生じた。模擬店を出す商工会団体と学生団体の食材などの搬入のことを考えてなかったのだ。搬入は１日に３、４回あるらしく、事前に渡していた近くの有料駐車場の無料駐車券２枚（２日分）では対応出来ないとのことだった。そこで、急遽カピオ駐車場内に搬入スペースを作り、障害者用のスペースも使用して搬入してもらうことを決めた。併せて、搬入する車両用に搬入駐車証（図２）を作成し、渡すことを決めた。

そして当日はたいした問題もなく、スムーズに車両を誘導することが出来た。駐車証を作成したのは効果覿面であった。カピオ内駐車場の誘導人員は３人でのローテーションとし、一人が１時間半を担当し、それを交代して行った。

図１カピオ駐車証（緑）

図２搬入駐車証（黄）

（２）一般無料駐車場

今年の大会では、昨年とは大幅に異なり無料駐車場の数を減らした。その理由は、昨年の反省から無料駐車場にあまり車が停まらないということが分かっていたため、昨年のように３ヶ所も用意する必要が無いと考えたからである。その結果、無料駐車場は１つとし、そこを一般の観客の皆様に停めていただく一般駐車場とした。

当初、一般駐車場への人員配置は終日３人としていたが、あまりとまらないと予想されたため、最初の１時間は一人だけが見張り、あとは外パトロールの見回りで補うということ

を決めた。そして前日に駐車場に線を引いて車を置くスペースを定めた。

そして当日、一般駐車場に停まった車は収容台数２００台中、2 日間とも３０台程度であった。予想されていたとおり全く車が入らなかった。

（3）大型バス・トラック駐車場（関係者）

カピオの裏の空き地を昨年同様使用させてもらうことが出来た。今年はこの空き地を半分使用させてもらえることが出来たので、大きな車両でも切り返しの可能な広い場所であるこの場所を、関係者のバスとトラック用に準備し、１０台厳選して入れることを決めた。当日はなんとか大きな問題も無く対応することが出来た。

（4）有料駐車場

今回の大会に出演していただく団体と大会スタッフには有料駐車場に停めていただくことにした。事前に市の方から２５０枚の無料駐車券をもらっていたので、その駐車券を配布する人を厳選した。まずはカピオ駐車場に停められなかったゲスト・ビジター・スポンサーを優先し、その次に出演団体、大会スタッフと決めていった。が、しかし、大会前日になって次々と券が必要な人が増えてきて、駐車券が足りないという事態が起こった。これはアドバイザーの方のご配慮で、無料駐車券をあと数十枚いただき、何とか解決した。

【3】考察

（1）カピオの駐車場について

この駐車場に関して言えることは、駐車証を作ったことは大成功であった。しかし、搬入のことを考えていなかったのが前日にきて大きな障害となって現れ、ドタバタした。こういう事態が起きないためにも、前々から各団体との連絡を取り合うということが大事であったと思う。商工会などの連絡の取りづらい団体にも目を向けておくことが必要だった。

（2）一般無料駐車場について

一般無料駐車場について言えることは、やはり遠くの無料駐車場よりも近くの有料駐車場を選んだということだ。この点から言って、来年は有料駐車場だけでも良いのではないだろうかと思う。

（3）大型バス・トラック駐車場について

ここについていえることは、関係者専用（大型バス・トラック）と捨て看板に書いてあるにも関わらず、普通の乗用車が勝手に入ってきてしまうことだった。この対応のために人員を割いても良いとは思うが、あまり仕事が無いため、カピオ駐車場の１人で両方の駐車場に対応するのが適当ではないかと思う。

（4）有料駐車場について

有料駐車場については来年に関してもどんどん使用するべきであると思う。しかし問題は、今年のように駐車券が足りないという事態が起こらないようにすることである。この事態が起こった原因はやはり、各対応スタッフとの連絡が取れていなかったことであろう。前日に慌てないためにも、もっと事前にゲスト対応との間で確認をしておくべきだったように思う。各出演団体に関しては事前準備も完璧であったし、対応も適当であったように思う。

【4】まとめ

今年度の駐車場管理は、当日に関して言えば、ほぼ滞りなく進行できたといえる。がしかし、前日までドタバタしたという事実も残っており、やはり、各局間や各対応間との情報のやりとりが上手く出来ていなかったように思える。このことを次年度につなげるために、来年はさらに詰めた話し合いをするべきであると考える。各局・各プロジェクト全体に聞くべきであったとも言える。そのために早期からサミットカンファレンスなどに出席し全体に対して駐車場の必要の有無を聞くことも必要だったと思う。

以上が、今年度の駐車場管理における反省から、次年度に対する提言である。

≪９≫　廃棄物管理・環境保全

原稿執筆者　前原三智子

【１】目的・方法

当部署の目的は、①東西インカレをつくば市制定の『エコイベントマニュアル』に沿った、環境に配慮した大会にする。②大会主旨にあわせ、人と人との交流が生まれるような対策をとる。ということであった。

具体的な方法として、ゴミは、マニュアル通り「燃やせるごみ、燃やせないごみ、カン、ビン、ペットボトル、わりばし、紙コップ」の７種類に分別して回収する。わりばしは市内の木材加工業者に引き取ってもらい、木材チップに加工。それ以外のゴミは、回収業者を通して市が運営するクリーンセンターに搬入し、適切な処理を行う、という流れを作った。

来場者に対しては、会場内の数ヶ所にゴミ箱を設置し、そこにスタッフが常駐して分別をナビゲートする。そのことによって、混入やゴミ箱からゴミがあふれるのを防ぐと同時に、ゴミを捨てる際にも交流が生まれるような工夫をした。また、出店者に対しては、地域デザインの担当者とも協力して事前に分別への協力を呼びかけ、当日も店舗ごとに声をかけてゴミ対策をきちんととっていることを印象づけるようにした。

さらに、当日会場内を巡回して、置き去られているゴミがあったらすぐに片付けて会場内をきれいにしておくことで、それ以上汚せない雰囲気作りも目指した。

【２】結果

（１）ワーキングスケジュール

５月７日　ゴミ回収業「筑波学園環境整備」との打ち合わせ
５月中旬　カピオ視察
５月 21 日　クリーンセンターとの打ち合わせ
６月８日　木材加工業者「ヤマゲン」との打ち合わせ
６月中旬　つくば市役所に、ゴミ箱レンタルの申し込み
６月 23 日　地域デザイン担当者との打ち合わせ
７月８、９日　買出し等の準備
７月 10，11 日　両日共に 17：00～19：00 頃にゴミ回収

（２）紙コップのリサイクル

紙コップは古紙回収業者に引き取ってもらい、リサイクルすることが可能である。しかし、リサイクルできる紙コップとできない紙コップがあり、その判断は専門の人間でないとできないという。今回の大会では、どのような紙コップがどのくらい出るのか分からなかったため、引き取ってくれる業者が見つからず、紙コップのリサイクルは断念した。

（３）ゴミ箱の数と配置

スタッフ数が限られているなかで最大限の効果を上げるため、一般来場者用のゴミ箱を会場内に４ヶ所（カピオ外、アリーナ入り口各１、観客席２階）配置してスタッフを集中させ、スタッフ用のゴミ箱２ヶ所については無人とした。無人のゴミ箱に関しては、スタッフが巡回の際にチェックするようにした。

ゴミ箱の配置は、地域デザインの担当者とも協議し、来場者の目に付きながらも、会場内の装飾に影響を与えない位置になるようにした。また、アリーナ入り口に設置したゴミ箱のうち、総合案内側のゴミ箱については、当初は公衆電話の前に設置したが、電話を使いたいという来場者が多かったため、急遽位置を少しずらした。

（４）来場者・出店者の反応

来場者はナビゲーションに好意的に反応してくれる人が多かった。また、会場内に置き去られるゴミの数も少なかった。

出店者については、出店側の忙しさを考慮して「燃やせるごみ、資源ごみ」の２分別で依頼したのだが、多くの店がゴミ箱の様子を見て自主的に６分別にしてくれた。

（５）ゴミの総計

ゴミの種類ごとの重量を出してもらう予定だったが、連絡の不備により、総計しか出ていない。

	１日目	２日目	合計
総計	150kg	150kg	300kg
わりばし			8kg

【３】考察

（１）ワーキングスケジュール

具体的な対策等は、週に１回、部署内でミーティングを行って決めていた。ゴミ対策の場合、複数の分野・業種にまたがり、また人の動きに左右されることが多いため、まわりのことが決まってからそれに従って調整することになる。そのため、まわりとは準備のテンポが少しずれることが多い。

（２）紙コップのリサイクルについて

今回の大会を見た限り、紙コップはそれほど量が出ないと

いうことが分かった。量が出ないと回収業者も引き取ってはくれないので、来年度も紙コップのリサイクルを行う必要はないと思われる。

（3）ゴミ箱の数と配置

反省会の意見のなかで、「ゴミ箱に気づかなかった」というものがあった。ゴミ箱の配置は、地域デザインのほうとも話し合ったのだが、非常に気を使わなければならない。目に付くところになければならないし、かと言って強く主張してはいけない。今回の場合は、スタッフの人数や会場内の構造を考えても、あれが限界だったのではないかと思う。

（4）来場者・出店者の反応

今回会場内がきれいだったのは、ゴミ箱の配置の影響が大きかったのではないだろうか。ゴミがでるのはカピオ外の飲食スペースであるため、まず外で出たゴミは外のゴミ箱で回収される。そして中で出たゴミも、アリーナ入り口にあるゴミ箱がまず目に付き、また動線上にあるためにそこに捨てられることが多く、観客席自体にゴミが持ち込まれにくかったということがあったと考えられる。

一方出店者は、「学生がスタッフをしている」ということで、県人会は仲間意識、商工会は好意で分別をしてくれたのではないだろうか。

（5）ゴミの総計

昨年は 2 日間で 186kg ということで、一気に量が増えている。これは、出店数が増えたということと、暑かったということの両方の理由が考えられる。いずれにしても、種類別の重量が出ていないことが悔やまれる。

【4】まとめ

（1）ゴミの行方について

今回、来場者に対してリサイクルに関する情報が伝えられなかったと思った。「なぜペットボトルのラベルを剥がさなければならないのか」「なぜわりばしは分別して、竹串は燃えるごみなのか」。ゴミを捨てる際にそういった疑問を持つのは当然であるし、知っていたほうが進んで分別する気になる。ゴミ箱の近くにそういった表示をするなどして、より多くの情報を伝えればよかった。「ゴミはこの後どうなるのですか？」という質問から会話が生まれるという利点もあるが、より多くの人にいろいろなことを学んでもらったほうが、大会自体のレベルももっと上がったのではないかと思う。

（2）ゴミの発生源を抑える

どんなにゴミをリサイクルしても、発生源を抑えない限り本当に環境に配慮したイベントとは言えない。洗い場や衛生面の問題もあるが、来年度はリユース容器の導入を考える必要があると思う。また、それができないとしても、エコ容器の導入など、さらに環境に配慮したイベントにすることはいくらでも可能である。少しでも改善できる部分は改善して、より「学生が運営している東西インカレらしさ」を出していけたらいいと思う。

（3）組織体制について

今回当部署は、「Na ごみ」という、まつりつくばのゴミ対策を行っている学生団体が担当していたため、まつりつくばでの経験や人脈を生かし、比較的スムーズに運営することができた。しかしながら、インカレを運営する団体のなかに、もう 1 つ団体があるということで、メンバーや周囲にやりにくさがあったのも事実である。また、ゴミ処理の場合、複数の部署にまたがる仕事が多くなる。各部署との話し合いだけでなく、どの部署に所属するのかということすら戸惑うことがあった。組織間ネットワークをどう改善していくかが来年の問題であると思う。

個人的には、①来年も Na ごみに対策をまかせ、Na ごみ自体を 1 つのプロジェクトとしてしまう。②Na ごみとは関係なくメンバーを募って部署を作り、組織体制を全体的に変更する。このどちらかがいいのではないかと考えている。他にもいろいろな案があると思う。来年に向けて、ぜひ熟考してほしい。

≪１０≫　宿泊管理

原稿作成者　櫻井友樹

【１】方法・目的

東西インカレに出演する団体（大学、バレーボールチーム）や、スポンサー、ゲスト、役員などを担当するスタッフとホテルとのパイプ役となり、ホテルを確保することを通して、東西インカレの成功に貢献することをねらいとした。

このねらいを実現させるために、ホテルと交渉し、宿泊料金、食事といった宿泊に関する必要事項の交渉を行うことを想定した。

【２】結果

（１）ワーキングスケジュールについて

５月１３日（木）東雲、松島訪問

両ホテルで東西インカレの宿泊に関する対応者（東雲は野口さん、後に片岡さん。松島は松岡さん）と大会の宿泊における概要の説明。

５月１９日（水）松島訪問

返信されたパートナーズシートをもとに宿泊人数を把握し、両ホテルに報告。

松島で料金の設定（一泊朝食付 5500 円）、送迎バスの交渉を行う。(東雲に関しては松田さんが交渉してくださった。料金は一泊朝食付 7000 円)

６月１０日（木）東雲訪問

後日返信されたパートナーズシートをもとに宿泊人数を再度報告。

６月２２日（火）東雲、松島訪問

確認し損なっていたＶリーガーたちの宿泊の予約。ならびに宿泊者の部屋割り(シングル or ツイン等)、料金支払手段の打ち合わせ（東雲)。

出演団体の要望による駐車場の利用、９日の夕食についての交渉（松島)。

６月２９日（火）東雲訪問

スポンサーや役員の方を担当しているスタッフからの確認。宿泊数が増えたため再度、東雲に報告し、宿泊の予約。ならびに送迎バスに関する打ち合わせ。

７月３日（土）松島訪問

大会出場大学の宿泊人数、部屋割り(シングル、ツイン等)の報告。

７月６日（火）東雲、松島訪問

最終確認（料金、部屋割り、人数、バスに関すること)。

（２）宿泊者数

		８日	９日	１０日
ホテルグランド東雲		－	６名	１９名
ホテル松島	近畿大学	２２名	２２名	３２名
	東海大学	－	２４名	２４名
	東亜大学	－	２４名	２４名
	東北リコー	－	１７名	－
	茨城選抜	－	１０名	－
	キッズチア	－	１名	－
	スポンサー	－	－	４名

※ホテル松島に宿泊されたスポンサー４名は東雲のホテルのキャパシティーが越えていたので松島に宿泊していただいた。（ゲスト、スポンサー、役員らは本来ならホテルグランド東雲に宿泊していただく予定だった）

（３）問い合わせ件数

なし

（４）その他（反省点）

- ホテルグランド東雲に宿泊者専用の「東雲－カピオ」往復の送迎バスを出してもらうことになっていたが、そのことが宿泊者に行き届いておらず、結局バスを使うことをせず、東雲のバスの運転手に迷惑をかけることとなった。（宿泊者は歩いて移動した。）
- ゲスト（V リーガー）からの返信はがきのことを知らなかったため、気づいたとき慌てることとなった。

【３】考察

（１）ワーキングスケジュールに関して

４月、５月は宿泊者が未定だったため、やることはホテルグランド東雲、ホテル松島へ行き、料金の設定、送迎バスの交渉、部屋の空き状況について調べたりするにとどまった。その中で、東雲に関しては空いている部屋が少なく、またこちら側としてもはっきりとした人数が出ていない以上、空いている部屋を予約し、確保してよいかどうか分からなかった。（結局、局長に相談したところ松田さんが残りの空き部屋を予約してくださった。）

こういった状況では事情を詳しく説明し、ホテル側としては迷惑かもしれないが、昨年の宿泊者数を参考にある程度の部屋を予約し、確保しておくべきだと思った。また、今回は大会の日に大学で学会があったようで、その分空き部屋が少なく、ツイン部屋を使うこととなったが、シングルのほうが宿泊者にとってもよいだろうから、早めに予約に行くべきだ

と感じた。

（２）宿泊部屋の確保に関して

大学や出演団体と連絡をとってくださったスタッフとの連絡はうまく行き、また松島（大学、出演団体が宿泊する予定）に多くの空き部屋があったことからの部屋の確保はスムーズに行った。

一方で、ゲスト･役員･スポンサー等の部屋の確保はスムーズに行かなかった。原因はホテルグランド東雲の空き部屋が少なかったことに加え、スタッフとの連絡がうまく行かず、大会が近づくにつれ追加で宿泊される方が増えていったため、大会間近に慌てることとなった。初めてやる仕事だったため、どんな方が宿泊されるか分からず、各対応者からの連絡を待つという状況だったので心理的に余裕がなかったのだろう。あらかじめ昨年の大会で宿泊された方のリストなり資料なりがあると対応者との連絡も前もってでき、少しは助かったような気がした。

（３）バスに関して

ホテルグランド東雲に依頼した送迎バスは利用されず、バスの運転手を待たせることとなった。東雲に宿泊された方に送迎バスの連絡が行っていなかったことが原因で、スタッフ間での連携がうまくいってなかったことが感じられた。

他方で、東雲－カピオ間は徒歩５分ぐらいの場所のため、バスは不要であるかもしれないとも思った。また、宿泊者にとっても、時間に合わせて出発する送迎バスは面倒かもしれないとも思った。

【４】まとめ

今回、自分の専門種目の試合が、東西インカレ両日と重なってしまったため、当日はスタッフとして現地におらず、また宿泊管理が一人しかいなかったため大変迷惑をかけてしまった。そういったことからもいずれの部署に関して、対応者が一人しかいないのは対応しきれないとも思った。また一人であったために気づかずに見過ごしてしまうこともあり、複数で対応することが望ましいと感じた。また、役員やゲスト、スポンサー、大学、出演団体の対応者から宿泊の連絡を待っているだけではなく、自分から各対応者へ連絡し、宿泊に関する確認をしていくことが大切だと思う。そのためにも昨年泊まられた方のリストは参照までも必要であると感じた。

また、来年は東雲に泊まられている方の東雲－カピオ間の送迎バスの必要性をもう一度考えなければならないと思う。

加えて、ホテルの予約、大会の説明や打ち合わせは早めに行動していくこと、ホテルの予約は昨年泊まられた人数を参考にある程度の部屋を確保すべきだと感じた。

≪11≫総合インフォメーション

原稿作成者　伊藤リナ、矢沢智子

【１】目的・方法

「総合インフォメーション」は、当日の関係者受付、一般客に対するインフォメーション、プレス受付、また各関係者に対する専属対応を総合的に行なうことを目的として設けた。

昨年度は、「関係者受付」と「総合案内」として、受付とインフォメーションを分けて行なったが、去年の反省を踏まえ、今年はより機能的に対応するため、すべてをまとめて「総合案内」とした。

具体的な当日の方法としては、「総合案内」内部で各担当を決め、全員が内容を把握することで、「総合案内」に訪れた人が時間を割くことなく、よりスムーズに案内することを目指した。関係者に関しては、「総合案内」担当者から、「専属対応」担当者へ引継ぎ、控室や会場内までの案内を一括して行なうことを目指した。

【２】結果

（１）　関係者受付

大会運営局の外部対応が、事前に発送等の作業を行ない、当日の関係者受付に同じメンバーがシフトする形となった。事前の準備段階から含めた反省点は以下の通りである。

・昨年度からの引継ぎがうまくいかなかった。
・リストの更新などがうまくいかず、リストに新しく加わる人が多かったため、発送を何度も行なわなければならなかった。
・昨年は、返信はがきを作成し返信をいただいたが、思うように集まらなかった。そのため今年は新たに FAX で返信をもらうこととしたが、今年も期限までに返信をもらえないことが多く、ゲストの方々には電話で出欠確認を行なうこととなった。発送も予定していた期日より遅れてしまったので、もっと早く準備ができればよかった。
・返信が集まらなかったために、当日の出欠や交通手段が、当日まではっきり把握できなかった。

よかった点は以下の通りである。

・準備段階から当日まで同じメンバーが担当することができ、昨年の反省を当日の対応に生かすことができた。
・　今年は「総合案内」として仕事を共有したため、一度に何組かの関係者が見えてもスムーズな対応を行なえた。
・　当日出席が未定の方の封筒も用意していたため、当日急に来られた方にも対応できた。

（２）　プレス対応

当日、取材に見えたプレスは以下の通りである。

表 １　来場プレス一覧

７月１０日	ACCS
	つくば市役所
	北海道新聞社
	筑波大学新聞
	筑波放送協会
	筑波ジャーナル
	バレーボールマガジン
	TBS ビジョン
７月１１日	常陽新聞社
	紫峰会
	筑波大学
	筑波大学新聞
	月刊バレーボール
	バレーボールマガジン
	筑波放送協会
	TBS ビジョン
	筑波ジャーナル
	東海大学新聞

プレスの方に対しては総合案内にて受付を行なった。取材に関する案内をお渡しし、報道関係受付名簿と取材申請書に必要事項を記入してもらった。その後、AD を発行、各社に１部オフィシャルブックをお渡しした。特に大きな問題は起きず、比較的スムーズな案内ができた。

（３）　総合案内

総合案内は、一般客に対するインフォメーションが仕事である。交通情報・宿泊案内、遺失物対応、迷子対応等もここで行なった。準備したものは、交通情報(電車時刻、バス時刻、タクシー会社等)、カピオ近郊の地図、遺失物・拾得物リスト、カピオ会場図、などである。

総合案内では、さまざまな質問に対応するため、全員がマニュアルを熟読し、当日の対応にあたった。

当日多かった質問は、会場内のトイレや控室等の場所、タイムスケジュール、試合結果等である。当日のタイムスケジュールに関しては、当日急遽プリントアウトしたものを用意

して対応した。予想していなかった質問等にもうまく対応できていたと思う。今年は障害者の方に１階席で観覧していただく予定だったため、昨年とは異なり、エレベーターで２階席へ行く通路は封鎖していたが、何人かベビーカーで２階へ行くことができなかった方がみえた。今年は総合案内スタッフでお手伝いして２階へ行っていただいたりしたが、来年は何か対策を検討すべきである。また、スタッフから質問を受けることが多かった。

（４）　専属対応

①　巡回対応

ゲストの対応は、ゲストが所属する組織や事前連絡を行っていた担当者が当日も引き続き行った。仕事の内容としては総合受付でゲストを出迎え、アリーナや控室への案内が中心だった。

②　控室応接

ⅰ）担当

ゲスト控室（4 階和室）において、高巣・朝倉（つくば市体育協会）が対応した。なお、学連役員に対しては、川村（学連）が逐次対応した。高巣・朝倉の休憩時には、総合案内担当が出向いて対応した。仕事内容は、ゲストの接客(お茶出し等)及び荷物の管理が中心だった。

ⅱ）利用状況

利用したゲストは、学連役員とＶリーグ選手（特に筑波大 OB）が中心だった。学連役員は受付後に控室に行き、打ち合わせを行ない、試合開始に間に合うようにアリーナに行き、昼食時に控室に戻るという行動だった。なお、利用人数のピークは昼食時で約 8 人ほどだった。逆に、試合やエキシビション時の利用者はほとんどいなかった。

【３】考察

（１）対応全般に関して

当日の対応はおおむね混乱なく行われた。昨年度の反省を活かし、今年は昨年よりもスムーズだったと思う。総合案内としては、会場内や大会全体に関する情報が足りなかった部分もあった。各担当者へ連絡をとらなければならないことが非常に多く、スタッフ内の情報共有がもっとできればよかった。当日の受付に関してはアドバイザーの方で当日スタッフとして仕事をしていただいた方などへの事前連絡や受付の仕方に改善が必要だと感じた。専属対応としては、対応担当者への事前連絡が遅れたため、当日の仕事に関する十分な説明ができなかった点が、反省として挙げられる。

（２）控室に関して

昨年度と比べ、利用人数が若干減ったといえる。これは、①昼食が弁当配付ではなくなったこと、②審判の利用がなかったこと、③試合だけでなく、エキジビションやアリーナ外も充実したこと、が理由として挙げられよう。

【４】まとめ

今年は、比較的スムーズな対応ができてよかったと思う。今年あがった反省点のうち、来年に向けて改善すべき点とその方法については以下の通りである。

（１）　発送の時期や返信の方法

今年は、発送準備が整わず、発送を予定していた期日に発送ができなかった。昨年も発送が遅かったとの反省があがったので、今年は早めに設定したが、結果的に昨年とほぼ変わらなくなってしまった。返信が期日までに集まるようにするためにも、未返信の方に対する対応を行なうためにも、できるだけ早く行なえるようにしたい。また、返信の方法に関しても、もう一度検討する必要がある。昨年のはがきも、今年の FAX も、思うように返信が集まらなかった。今年、FAX で行なったが、FAX をこまめにチェックし、インクや用紙を補充しなければならず、研究室にいる人に対応してもらうことも多くなってしまった。

（２）　大会全体の把握、各スタッフとの連携

当日の総合案内では、さまざまな問い合わせが殺到する。それぞれに対し、よりスムーズな対応を行なうため、会場内の把握を始め、大会全体に関する把握が重要だと感じた。また、今年は各スタッフとの連携が不十分だと感じることも多かった。

（３）　一般客に対するインフォメーション

（プログラムの配付や電光掲示板の利用等）

今年は、大会のプログラムについて聞かれることが多かったので、当日プリントアウトして配布したり、あまっていたチラシを配るなどの対策をとった。事前にある程度用意しておくといいのではないかと思った。また、電光掲示板を見る方はあまりいなかったので、必要性については検討が必要かと思う。

改善すべき点は今年もあがった。昨年の反省は今年に十分反映できたと思うので、今年も来年にむけて引き継ぎをしっかり行ない、さらにスムーズな対応ができればよいと思う。

≪１２≫　スタッフ対応

原稿作成者　阪口かなえ

【１】目的・方法

東西インカレを進めるスタッフのサポートを目的とする。主に身分証明(AD)の作成、食品管理、控え室管理を行う。当日スタッフの把握をすると共に、ゲスト・ビジター管理者と連絡をとることで各控え室に必要な飲料やスタッフの食事の手配等を行い、東西インカレをスムーズに行う環境をつくる。

(1)AD作成

ADは大会当日、会場の関係者区域に立ち入る際に必要となる身分証明であり、STAFF・GUEST・VISITOR・REFEREE・DOCTOR・PRESS の６区分にわけて作成。参加者名簿を利用し、役職・氏名の把握を行った。

（２）食品管理

大会前日のスタッフの昼食・夜食の手配。各控え室に置くコーヒー・茶菓子などの手配。協賛品（ドリンク）の当日管理。当日、模擬店で利用できるクーポン券の作成、配布。クーポン券はスタッフ・ゲストと、出演団体のうちパートナーズシートにおいて「ハードにおけるONEサービスの執行(交通費支給もしくは一食分の優遇措置)」の項目で「一食分の優遇措置」を選ばれた団体、を対象に大会1日参加につき1人1枚を配布。

各控え室にコーヒーとお茶菓子を用意。スタッフの飲食禁止区域を徹底。

(3)配布

(1)・(2)を表にまとめ、どのスタッフが当日どの部署で働き、昼食・夜食・クーポン券の有無の把握をする。その名簿より昼食・夜食の数の決定、配布する。

【２】結果

(1)AD作成

ＡＤに記述した項目は、役職・氏名であり、名簿はオペレーションマニュアルから抜粋した。STAFF の名簿は当日の仕事別に編集し、氏名の訂正や配属部署を各リーダーの方に確認してもらった。GUEST・VISITOR・REFEREE・DOCTOR はオペレーションマニュアルから抜粋したものを専属対応の方に確認してもらった。しかし、配布当日になって部署の違いや、受け取りが違うなどがあった。また、参加の確認がギリギリになった方が多くＡＤ・ＡＤケース・ストラップの買い足しを行った。当日、ＡＤが必要と判断された方には記述のないＡＤにテプラで役職・氏名のシールを作り貼り付けた。

(2)食品管理

大会前日、午後のみ参加のスタッフには夜食を、一日参加のスタッフには昼食と夜食を配布。AD用に作成した名簿より大体の昼食・夜食数を把握後、当日一週間前には発注。当日の朝、最終的な数の決定を行った。しかし、当日予定とは違う方が昼食を持っていってしまったので、夜食は名簿にチェックをした。

クーポン券は1枚 600 円分で、100 円分が6枚切り離せるように点線カッターで切り目を入れた。また 100 円分を半分にして 50 円分として使えるように 100 円分の両サイドに 50 と表示を入れるようにクリエイターの方にお願いした。

各控え室にコーヒー・お茶菓子を用意。1F本部・プレス控え室にはアイスコーヒーメーカー1台、1Fアカデミックフォーラム・プレゼンター控え室にはホットコーヒーメーカー1台、3Fスタッフルーム3(バレー連盟・体育協会控え室)には、インスタントコーヒーとポット、4Fゲスト・ビジター控え室にはホットコーヒーメーカー1台、アイスコーヒーメーカー1台、ポット1台、急須1瓶、4Fスタッフルーム4(商工会・市スタッフ控え室)にはインスタントコーヒーとポットを配置した。しかし、季節的なこともあり、当日にプレゼンター控え室のホットコーヒーメーカーをアイスにしたいという意見があったが、レンタル先に問い合わせたところ無理であった。

コーヒーのある部屋には、コーヒー用ミルク・シュガー・ガムシロップ・マドラーとお茶菓子を用意した。1Fスタッフルーム1と3Fスタッフ本部には、水槽を置き、協賛品を冷やした。

アカデミックフォーラムの担当の方からフォーラム中にプレゼンターのかたに飲み物が必要という依頼があったので用意した。

(3)配布

AD・クーポン券・スタッフTシャツは大会前日の昼食配布時に各リーダーにまとめて配布した。部署によっては違う部署の方にあずける場面もあった。協賛品のドリンク・参加賞は1Fにて各出演団体用に冷やし、出演後担当の方に配布。しかし、連絡がとれておらず、何時に担当の方が来るのかわからないときがあった。

(4)ワーキングスケジュールの概略

6月後半・・・クーポン券の作成、オペレーションマニュアルの作成、コーヒーの手配

7月1～3日・・・AD名簿の作成、確認

7月3～5日・・・AD作成

7月６日・・・大会前日の昼食・夜食の発注

7月７・８日・・・追加AD・クーポン券の作成

7月9日・・・AD・クーポン券・スタッフ用Tシャツの配布、昼食・夜食の配布

7月 10・11日・・・協賛品ドリンク・参加賞の渡し

【３】考察

（１）ＡＤ作成

今回の大会では、当日の受付において追加のＡＤを大量に作成してもらうことになってしまった。この原因は、作成者である私自身が、ＡＤを必要とする方の把握が足りなかったことにあると考えられる。

(2)食品管理

大会前日のスタッフ用昼食・夜食の発注は過不足なく行えた。AD用の名簿を確認してもらったときに食事の確認もできたのがよかったようだ。

クーポン券は当初、商工会用と学生模擬店用の2種類が予定されていたため、区別なく使用できる2種類のクーポン券ができてしまい、混乱が予想されたが、問題なく済んだようだ。

控え室に用意したコーヒー・茶菓子類はほとんど利用されていなかった。どうやら、学生スタッフ以外の方はあまり控え室を利用されないことがわかる。

（３）配布

あらかじめ、各部署のリーダーの方に配布したＡＤ用名簿と同じ順でＡＤ・クーポン券・スタッフＴシャツを並べていたので問題なく思えたが、配布時に「この人は〇〇の部署の人だから」という意見がいくつかあり、並べ直しの作業が入ったりしたのは「確認」という言葉でくくっていたことのつめが甘かったようだ。

協賛品ドリンクを渡す時間が不明であったのは、選手対応・団体対応の方との情報交換の少なさに原因があったようだ。

【４】まとめ

（１）ＡＤ作成

各部署の詳しい状況を知らないと誰にＡＤが必要なのか、把握するのは難しいので、各部署のリーダーの方にその部署に関わる方についてＡＤが必要な人の役職・氏名・区分を提出してもらい、間違いや当日の追加を減らせる。

（２）食品管理

コーヒーメーカーは、アイスかホットなのか、その控え室を利用になる方と話し合い、何が必要なのか把握する。そのためには、誰がどこの担当になっているのか、はっきりとした提示を行うべき。

（３）配布

リーダーの誰にどこの部署のどのＡＤを渡すのか、という確認を徹底する必要がある。同時に誰がどこの部署に属すのか、という把握が各リーダーに必須である。

協賛品ドリンクを選手・出演団体に渡すときはあらかじめ、何時ごろに取りに来るのかという予定を把握しなくてはいけない。

≪13≫　スペシャルニーズ対応

原稿作成者　羽田野真帆・武内栄希

【１】目的・方法

東西インカレの理念：Sports for all、All for sports

↑

真の All にするために…

●障害を持っている方にもスポーツ観戦を楽しんでもらう
●障害を持っている方もスポーツを楽しむことが当たり前という認識を広める

⇩

共生社会の実現において、スポーツが持つ可能性をアピールする！

障害のある・なしに関わらず好きなときに来て、好きなようにスポーツを楽しめるようにする。(事前申し込みをしてもらうと、義務感がでてしまう。）特別扱いではなく、必要な配慮をする、というスタンス。視覚（パソコン通訳）・聴覚（FM ラジオ）の情報保障をする、 また専属のスタッフを配置し、様々なスペシャルニーズに対応できるようにする。 情報保障や専属スタッフの対応から、 障害についての認知度を高める。

【２】結果

専門分野（知識・技術）をいかすためにそれぞれの障害に分かれて PR 等の作業を行った。福祉の関係者や実際に障害を持つ方に相談し、助言をいただくことで、よりニーズにそった対応をできるようにした。

(１)視覚障害を持つ方に対する対応

①アドバイザー；筑波大学に在籍している全盲の青松さんや、筑波大学短期大学視覚部の方に助言をいただいた。

②PR について；3 月に一度簡単な説明と挨拶のため、 筑波技術短期大学視覚部を訪問した。 4 月 25 日にポスター・ビラをデータにて渡した。 ビラは点字・墨字のものを用意。 フォントは 18 ポイントの大きさで作成した。 また、 ポスターについては、 プロダクション局に依頼し、文字や写真・イラストの重複をさけ、文字の大きさも考慮した 視覚部 PR 用のものを一般向けとは別に作成してもらった。

③当日について；FM ラジオによる視覚障害者に対しての情報保障は残念ながらできなかった。 また、 当日の視覚障害者の来場は 1 人もいなかった。

(２)聴覚障害を持つ方への対応

①アドバイザー；筑波大学技術短期大学バレーボール部顧問の今井先生や、技術短期大学の学生に意見を伺った。また、情報保障に関しては、NPO 法人 PCY298 の方にも助言をいただき、アカデミックフォーラムではパソコン通訳での協力もしていただいた。

当初は、アリーナとアカデミックフォーラムでのパソコン通訳のみを予定していたが、1 日目のレセプションパーティにも聴覚障害を持つ方が来られるということで急遽、手話通訳を行うことになった。また、文字よりも手話の方が理解しやすい聴覚障害者の方もいるということで、アカデミックフォーラムではパソコン通訳と手話通訳の両方をおこなうことにした。

②PR について；筑波技術短期大学を訪問し、チラシを 180 部配布してもらい、 ポスターの掲示も依頼した。 そのときに、 当日パソコン通訳や手話での情報保障を行う旨も伝えた。

③当日について；数名の来場者があった。受付の専属スタッフや情報保障に携わったスタッフが対応した。(パソコン通訳のスクリーンが見やすい位置への誘導)

アリーナでは、２階席の一角でパソコン通訳を行なった。パソコンに入力した画面を、プロジェクターを使って壁に投影した。一般客の通路にもなっていたので、興味を持って質問してくださる方もいた。アナウンス原稿や挨拶原稿など、事前に決まっているものは、可能な限りいただいて、入力しておいた。当日にならないと分からないものは、聞いたままをタイプした。ただし、２階からだとアナウンスの声が聞こえにくかったこともあり、情報を早く、正確に得るために、スターティングメンバーなどについては、アナウンス席の横で待機して、そこに入ってきた情報を、2 階の情報保障スペースにいるスタッフに手話で伝えるという方法をとった。

レセプションパーティでは、舞台の右端にたって手話通訳をした。終了後、昨年も参加したという聴覚障害を持つお客様が、「今年は手話通訳がついて、とても助かった」と声をかけてくださった。

アカデミックフォーラムではステージの右端においたスクリーンに文字を投影し、その横で手話通訳を行った。コーディネイターの蓮見先生の進行のおかげで、数名が同時に話すということもなく、問題なく通訳することができた。

(３)全体対応

①アドバイザー；障害福祉課の椙山さんに、継続的なアドバイスと協力をいただいた。4 月 28 日には、大会の説明と協力の依頼のため、つくば市役所桜庁舎を訪問し、障害福祉課、スポーツ振興課の方にアドバイスをいただいた。

②PR について；障害福祉課の椙山さんを通じて、市役所窓口・市内にある各障害者センターにビラ・ポスターの設置・配布をしてもらった。また、連絡協議会（毎月行われている障害者関連団体との話し合い）でもビラの配布をお願いした。5 月の連絡協議会（5 月 13 日）では暫定版ビラのみ、6 月の連絡協議会(6 月 10 日)には完成版ビラとポスターを渡した。

③駐車場について；カピオにある障害者用駐車スペース（2 台分）を、一般来場者の混み具合に関わらず、大会期間中障害者専用として終日確保した。また、(これについてはエキジビションとの関連でもあるが）障害者用駐車スペースと同時に、シッティングバレーボール日本代表選手の駐車スペース（1 日目の午前中に 8 台分）も駐車場係に依頼・相談し、確保した。

④各優先スペースについて；

＜アリーナ＞…車椅子の来場者には 1 階に優先席を設けた。（＊2 階にある車椅子スペース〔８席〕は移動が困難なため、できる限り 1 階を利用してもらうよう配慮）また、2 階のパソコン通訳のスクリーンが見やすい位置を聴覚障害者優先席とし、そこへ誘導するよう専属スタッフに伝えた。

＜アカデミックフォーラム＞…ホール最後尾にある車椅子専用スペース 4 席の確保。また、こちらでもパソコン通訳のスクリーンが見やすい位置に誘導するように配慮した。

④当日について；車椅子の来場者が１名いた。専属スタッフは受付にて待機し、様々なスペシャルニーズに対応した。確保した車椅子専用駐車スペースにも障害者手帳を持った来場者が１名駐車した。その他、障害者に限らず、スペシャルニーズには柔軟に対応した。例を挙げると、乳母車での来場者のアリーナ２階への移動の手伝いなど。

⑤事前ミーティングについて；毎週月曜日にスペシャルニーズ対応のメンバーでのミーティングを開いて、進行状況や意見の交換を行った。「スペシャルニーズ対応」という局はなかったため、各局に分かれていた他のメンバーから、他局の情報についても得られた。

【３】考察

（１）視覚障害を持つ方の対応について

FM ラジオでの情報保障を実際に行うことができなくて残念だった。そういったサポート体制を整えておけば、もっと来場者も増えるのではないか。次回は来場者０人という結果を打開したい。しかし、筑波技術短期大学とのパイプは強くなり、来年度からも関係は続くと思われる。これは非常によかった点だと思う。せっかくつながったこのパイプなので次回からも有効活用していけたら、と思う。

（２）聴覚障害を持つ方への対応について

今回は聴覚障害関係のイベントと重なってしまい、来場者は数名と少なかったが、次回からは PR 時期を早めたりしてもっと来場者を増やせるようにしたい。しかし、それでも来てくれた人もいるので、そこはよかったと思う。そういう人たちを大事にし、さらに増やしていきたい。

普段、大学の講義などで情報保障をしているメンバーがこの大会でも手話通訳・パソコン通訳を務めた。アカデミックフォーラムやレセプションパーティは別として、このようなスポーツイベントにおいて情報保障をするのは初めてだったため、準備段階から戸惑うことが多々あった。とくに、情報保障というものに対して理解してもらう（どうして必要なのか、どのような協力があると助かるのか、など）ことが、難しかった。こちらの説明の仕方、協力依頼の姿勢が甘かったと反省することもあったが、今後の活動のためにも大変勉強になった。その中で、徐々に理解してもらえるようになり、アナウンサーを始め多くの方に協力をいただくことができた。大会終了後、様々な方面から大きな評価を受けた。多くの方に情報保障についてアピールすることができたと思う。ただし、スクリーンが見にくかったという指摘もあり、来年への改善点となった。

（３）スペシャルニーズ対応全体として

スペシャルニーズ対応全体として昨年よりも大幅に積極的な活動ができたと思う。こちら側の体制をさらに充実させ、来場者のさらなる増加を図りたい。スペシャルニーズの対応は、目立たないところでのものも多い。たとえば障害者専用駐車スペースを確保するなど。しかし、そういう小さいごく当たり前のことからしっかりやっていくことが大事だと思う。そういった意味では今年は成功だったといえるのではないかと思う。しかし課題もまだまだ残っている。駐車場には配慮したが、駐輪場まで注意が向かなかったことである。スタッフも含め、多くの自転車が無造作に置かれ、通路をふさいでいたり点字の上におかれているものまであった。気づいたものは移動させたりしたが、大会も終わりの頃だったため、これは次回への大きな反省点であった。

また、スペシャルニーズ対応の担当チームでは当初、障害

を持つ方を主に対象としていたが、小さなお子さん連れの方など、他にも様々なニーズを持っている人がいるということがわかった。より大会を楽しんでいただくために、もっとできることがあると感じている。また、「情報保障があれば、アナウンスで聞き漏らしたところを確認できる」など、想定していた対象者だけでなく、それ以外の多くの方にとっても有効なサービスであることもわかった。

【４】まとめ

スペシャルニーズ対応で対象としているのは、全体から見れば本当に少数の方かもしれない。こちらがニーズを想定しても、本当にそのニーズを持つ方が来場するかは分からない。その中で、準備を進めるというのは、とても大変なことであった。「自分たちのやっていることは本当に意味があるのか。」と感じることもあった。しかし、多くの関係者、障害を持つ方にお話を伺う中で、自分たちのやっていることは無駄ではないと感じることができた。そして、大会が終了した今、私たちがやろうとしたことは、大きな意義があったと確信している。そして、協力してくださったすべての方に感謝したい。今年のこの活動を生かし、来年はさらに充実させていってほしい。東西インカレをさらにレベルの高い、みんなに優しい大会になるだろう。

（羽田野真帆）

今回スペシャルニーズ対応として東西インカレに携わってきて、その重要性（必要性）やまだまだ可能性があることを痛感している。障害者に対するサポート体制ももちろんだが、スタッフを含めた健常者へのアピールももっともっと必要なのだと感じた。私は以前からずっと考えていたことがあり、それが今回東西インカレに関わったことでさらに強い思いとなった。“スポーツに国境はない”という言葉をよく聞くが、国境だけでなくスポーツには障害者に対するバリアもないのではないか。“スポーツはすべてに対してのバリアフリーである”これが私の思いである。来年度からのこの部門はもっと強化していきたい・していってほしいと考えている。

（武内　栄希）

≪１４≫　運搬・撤収総括

執筆責任者：埃沢賢志

【１】目的・方法

大会の準備、後片付けを円滑に進めていくために、各部署から出された荷物を種類ごと､搬入ルート等の計画･整理し、それをもととして実際に会場内へスムーズに運び出す。また他の部署と荷物が行き来違わないようにし、それぞれの荷物を明確にする。混乱なく進めることで、大会の成功を裏から支えるということをイメージとしている。

【２】結果

（１）物品の割り当てについて

当日における 4 つのチームである､「カピオ内進行 T」「カピオ外進行 T」「Secu.InfoT」「ホール進行 T」に分けて、そこから出される荷物をそれぞれまとめていったという形式をとった。チームごとに出された備品リストをもとに、その該当する場所の荷物が､「学内をまわるトラック」「学外をまわるトラック」「カピオから借用」「自分たちで持っていく」「業者に頼んだ外注品」のどの手段を用いてカピオまで運ぶのかを１つ１つの荷物について分けていった。

（２）物品借用テープ

荷物を出し入れするときに、どの部署から出された荷物かを明確にし、作業をスムーズに行えるようにするためにタグテープを用いて物品テープを作り、そこに必要項目を書いてもらい荷物にはってもらった。

（３）当日の動きについて

8 日、9 日の準備段階では、だいたい予定通りに進んだが、11 日の大会終了後の後片付けは、以前から計画ではスムーズに行えないことがわかったので、前日に計画を練り直した。その結果、うまく片付けを終えることができた。

【３】考察

基本的な考えとして、自分たちが出す荷物は、自分たちで責任を持って集め、カピオに持っていくというものであり、自分たちはその仲介をして、トラックを手配し運搬するというものであった。よって当日の４つのチームごとで縦割りしていったことで、荷物の出所明確になり、整理しやすくなったと感じる。

それに加えて、荷物の１つ１つに物品借用テープを張ることで、長机等の多くの部署で使う物でも、どこで使用するものかはっきりとわかった。さらに､トラックから出すときに、どこの部署の荷物かが明確だったので、混乱が少なく、円滑に搬入することができたと思う。

当日の動きに関しては、計画していた予定に則って進めていたが、やはり予定通りにうまいこといかないものであり、そのあたりで臨機応変に指示したりと、リーダーシップが問われることを実感した。また後片付けの際など、全スタッフが自分の担当場所が終わったら、まだ終わってない場所の片付けにも来てくれて、協力してやれ、予定していた時間よりも早く終わることができた。そのようなところで、スタッフ全員で「東西インカレ」を創っているのだと実感したものであった。

【４】まとめ

後片付けのときに、物品借用テープを剥がすのに多くの時間と人を費やし苦労した。よって簡単にきれいに剥がせる素材のものに変えたほうがよいのではないかと思う。来年の運営形式によっては、今回の物品の割り当てがそのまま使用できないかもしれないが、基本的な線の引き方は同じなので、今年の考え方を参考にしてほしい。

こういったイベントはいかに自分で楽しみ、盛り上がることが大切であると思う。そういった中からやりがいを得ることができるのではないかと思う。楽しさの中に責任を持ったスタイルでやってほしい。

≪１５≫　オペレーションマニュアル製作

原稿作成者　伊藤健士

【１】目的・方法

オペレーションマニュアル（OM）は前日準備をあわせた大会４日間のブレインとなるもので、このマニュアルを読めば大会運営スタッフや当日のみ参加する者も仕事を把握でき、動くことができるというものを作ることが目的であった。

各局、各プロジェクトによる原稿の提出はマニュアル完成予定日の２週間前に設定した。これは、より分かりやすいマニュアルを作るために編集に力を入れようと思っていたのと、印刷自体にかなりの時間を要するだろうと思っていたからである。

大会当日での仕事の役割分担を決める必要があるので、当初の段階ではスタッフの大会当日の日程を調査するための何らかの質問紙を作ろうとしていた。

【２】結果

６月２５日の第３回総会までにオペレーションマニュアルを完成させなくてはならなかった。オペレーションマニュアルの原稿提出、完成までのワーキングプロセスは以下のようになった。

・　５月１２日　当日意向調査用紙（※図１参照）配布
・　５月１９日　当日意向調査用紙提出締め切り
　　OM原稿フォーマット配布の告知
・　５月２６日　各局、プロジェクト原稿フォーマット配布
・　６月９日　（完成２週間前）原稿提出締め切り
・　６月１６日（完成１週間前）原稿最終締め切り
・　６月２３，２４，２５日　マニュアル印刷、綴じ込み

大会当日、また前日の準備の人員を確保するために、当日意向調査を行い、これにより仕事を分担することができた。しかし調査日がだいたい大会の２ヶ月前であったので、未定という者や、後になって変更することもあった。

5月19日にOMの原稿の配布を告知したのは少しでも原稿の製作に備えてほしいという意図があったからだ。当初原稿の締め切りは6月9日だったのだがあまりにも提出する局、プロジェクトが少ないため締め切りを一週間延ばした。9 日に提出したところは全体の 4 分の 1 で 16 日には全体の 4 分の 3 が提出した。結局全ての原稿がそろったのが完成の３，４日前くらいになってしまった。この状況では編集作業はただただ提出された原稿を整えることになり、編集と印刷の同時進行でひたすら作業しなければ間に合わない状況になった。実際完成したのは 25 日の総会の 2 時間前位であった。

当日意向調査

2004東西インカレ実行委員会
大会運営局

東西インカレ当日2日間とその準備日2日間(7月8日～11日)に東西インカレスタッフとして作業が出来るかアンケートを実施いたします。下の表に○か×を記入してください。備考の欄には、もしその時にする作業が何となく分かっている方はおおよそでいいので記入をよろしくお願いします。

名前
【　　】
所属局･部
〔　　〕

		○か×かを記入	備考
8	AM		
	PM		
9	AM		
	PM		
10	AM		
	PM		
11	AM		
	PM		

図１　当日意向調査用紙

【３】考察

全体的なワーキングプロセスは順調なものであったと思う。全体のワーキングのペースをあげて行うことを意識していたので調査の日取りや原稿フォーマットの配布は適当な時期に行えたと思う。ただ最後のオペレーションマニュアルの編集作業が集中的になってしまったのは予定外であった。

オペレーションマニュアル自体の質を上げるのならば、編集作業の時間をもっと確保できなければならないだろう。足りないところを加えたり、余計なところを省いたり今回はそういった推敲の部分がまったくできなかった。ただ提出されたものを一つの冊子に並べ替えるだけに終わってしまった。

１４０ページを超えるこの冊子は編集と印刷が同時進行だったためページ数を振ることもできなかった。ミーティングやカンファレンスで目を通す機会があったとき、さっとページが開けないという場面が多く申し訳なかった。客観的資料による「間違いが多かった、先が見えずに動いていたのではないか、根本的に間違っている、マニュアル全体を読んでいる人が少ない」といった意見はそういうところから出ているのであろうと思う。しかし、提出が遅れるだろうことを予想して余裕を持って設定した締め切り日や原稿作成者の負担を軽減するためにあえて細かくフォーマットを設定しなかったことなどに対し、自分では先が見えていなかったとは思わない。

【４】まとめ

　まず、全体を通して見てみるとよく間に合ったと思える。印刷や綴じ込み、構成に協力して頂いたスタッフの皆さん、エグゼクティブプロデューサーに感謝したいと思います。

　次年度、つくばでの大会は３回目となり、ワーキングスタート時のマニュアルはきっちりとしたものが作られると思うので、当日のオペレーションマニュアルはより簡潔なものでスタッフの頭に入り、イメージできる程度のものが望ましいのではないかと思う。今年特に思えたのはこんなに分厚い冊子を全部読めるのか、読んだところでどれほど頭に残り動けるのか、問題が起きたときにマニュアルを開いて見ていたのでは遅いということである。次年度はスタッフの情報受容の能力に値するオペレーションマニュアルが出来上がることに期待しています。

第七章　大会結果資料

Ⅰ．大会競技結果

≪１≫競技結果

原稿作成者　田仲俊樹

2004東西インカレバレーボール男子王座決定戦
セミファイナルマッチ第1試合

主審：村上成司　　副審：黒澤明秀　　開始時刻　13:00

東海大学								近畿大学							
1set	2set	3set	4set	5set				1set	2set	3set	4set	5set			
22 21 24	29 22 21	22 21 24	29 22 21		3	25	1set	20	1	14 21	14 21	14 21	14 21		
						25	2set	21							
						23	3set	25							
						25	4set	23							
							5set								
29 2 15	2 15 24	29 2 15	2 15 24			98	total	89		12 13 4	12 13 4	12 13 4	12 13 4		
チームフォルト/4			サーブレシーブ成功率/82.9%					チームフォルト/4			サーブレシーブ成功率/67.9%				

評価		失点	得点	打数	競技成績	打数	得点	失点	評価	
決定率(%)	50.4	13	58	115	アタック総数	112	51	6	45.5	決定率(%)
決定率(%)	60.0	3	15	25	(内バックアタック)	28	12	2	42.9	決定率(%)
セット平均(本)	3.50	－	14	－	ブロック	－	4	－	1.00	セット平均(本)
効果率(%)	3.1	14	3	97	サーブ	90	3	13	3.3	効果率(%)
		－	23	－	相手のミス	－	31	－		
		27	98	212	合計	202	89	19		

15	24	21	22	29	2 C	38	18	39	19 L	13	3	No.		4	1 C	2	14	12	13	17	15	9	3 L	22	20
山内 隆宏	金子 隆行	佐藤 和哉	富松 崇彰	高橋 和人	鈴木 健太	王 金剛	沼田 貴光	落合 伸太郎	石川 俊輔	間杉 将彦	高橋 賢行	選手名		奥田 慎一	柏原 隆行	中西 教之	藤沢 秀樹	巴 特	塩 大地	山下 栄和	岡西 航佑	今村 佳照	石田 亮	東 健司	石本 裕樹
4	4	4	4	4	4	3	4	2	4	0	0	出場セット		4	4	4	4	4	4	4	3	1	4	0	0
5	13	11	39	32	15	0	0	0	0			打数	アタック	2	23	11	45	22	9	0	0	0	0		
1	5	6	23	14	9	0	0	0	0			得点		0	8	7	23	9	4	0	0	0	0		
0	3	0	5	5	0	0	0	0	0			失点		0	1	0	1	3	1	0	0	0	0		
－	－	－	59.0	43.8	－	－	－	－	－			決定率		－	34.8	－	51.1	40.9	－	－	－	－	－		
1	0	0	19	5	0	0	0	0	0			打数	アタック(内バックアタック)	0	4	0	20	4	0	0	0	0	0		
0	0	0	13	2	0	0	0	0	0			得点		0	0	0	10	2	0	0	0	0	0		
0	0	0	2	1	0	0	0	0	0			失点		0	1	0	1	0	0	0	0	0	0		
－	－	－	68.4	40.0	－	－	－	－	－			決定率		－	－	－	50.0	50.0	－	－	－	－	－		
3	2	4	2	1	2	0	0	0	0			得点	ブロック	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0		
0.75	0.50	1	0.50	0.25	0.50	－	－	－	－			セット平均		－	－	0.50	－	0.25	0.25	－	－	－	－		
15	19	9	21	16	10	0	7	0	0			打数	サーブ	18	17	10	19	10	8	4	3	1	0		
0	1	0	0	2	0	0	0	0	0			得点		0	0	0	3	0	0	0	0	0	0		
0	4	0	5	3	1	0	1	0	0			失点		0	6	1	4	2	0	0	0	0	0		
－	5.3	－	－	12.5	－	－	－	－	－			効果率		－	－	－	15.8	－	－	－	－	－	－		
0	1	0	0	1	0	0	0	0	0			ノータッチエース		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0		
0	0	0	0	1	0	0	0	0	0					0	0	0	2	0	0	0	0	0	0		
2	4	1	8	4	4	0	2	0	0			効果		1	3	1	4	1	0	1	0	0	0		
0	43	5	1	5	1	0	0	0	21			受数	サーブレシーブ	1	32	1	0	23	1	3	0	0	20		
0	36	4	1	3	0	0	0	0	19			成功		0	20	1	0	18	1	2	0	0	13		
－	83.7	－	－	－	－	－	－	－	90.5			成功率		－	－	－	－	78.3	－	－	－	－	－		

2004東西インカレバレーボール男子王座決定戦
セミファイナルマッチ第2試合

主審:富田満　副審:高橋直也　開始時刻 15:00

筑波大学								東亜大学				
1set	2set	3set	4set	5set				1set	2set	3set	4set	5set
1 20 21	1 20 21	1 20 21			3	25	1set	18	0	25 15 11	15 11 1	25 15 11		
						25	2set	17						
						25	3set	16						
							4set							
							5set							
9 24 22	9 24 22	9 24 22				75	total	51		13 7 1	25 13 7	13 7 1		
チームフォルト/2			サーブレシーブ成功率/98.0%					チームフォルト/4			サーブレシーブ成功率/79.0%	

評価		失点	得点	打数	競技成績	打数	得点	失点	評価	
決定率(%)	51.7	4	46	89	アタック総数	93	33	5	35.5	決定率(%)
決定率(%)	30.8	2	4	13	(内バックアタック)	15	5	2	33.3	決定率(%)
セット平均(本)	4.00	-	12	-	ブロック	-	5	-	1.67	セット平均(本)
効果率(%)	5.6	7	4	72	サーブ	53	0	4	0.0	効果率(%)
		-	13	-	相手のミス	-	13	-		
		11	75	161	合計	146	51	9		

22	21	20	1 C	9	24	10	25	2 L	8	7	4	No.		1 C	11	15	25	13	7	17	14	2	9 L	26	3
三上 圭治郎	丸山 祥二	志賀 崇	北島 武	石島 雄介	菅 直哉	川口 直樹	永野 健	勝野 裕士	壬生 裕之	林 宏樹	小川 将司	選手名		松永 浩義	堤 政博	濱崎 俊一	高取 諒平	中山 大祐	大道 大輔	迫 智由樹	西川 祐貴	福田 哲也	當間 栄尚	波多野 健人	柏木 貴司
3	3	3	3	3	3	2	1	3	0	0	0	出場セット		3	3	3	3	3	3	2	3	2	3	0	0
19	7	28	28	7	0	0	0	0				打数	アタック	2	29	4	18	32	5	3	0	0	0		
10	4	11	18	3	0	0	0	0				得点		0	9	1	7	11	3	2	0	0	0		
2	0	2	0	0	0	0	0	0				失点		0	1	0	1	2	0	1	0	0	0		
52.6	-	39.3	64.3	-	-	-	-	-				決定率		-	31.0	-	38.9	34.4	-	-	-	-	-		
1	0	8	4	0	0	0	0	0				打数	アタック(内バックアタック)	0	0	0	9	6	0	0	0	0	0		
0	0	2	2	0	0	0	0	0				得点		0	0	0	3	2	0	0	0	0	0		
1	0	1	0	0	0	0	0	0				失点		0	0	0	1	1	0	0	0	0	0		
-	-	25.0	50.0	-	-	-	-	-				決定率		-	-	-	33.3	33.3	-	-	-	-	-		
2	2	4	0	3	1	0	0	0				得点	ブロック	0	2	0	0	0	2	1	0	0	0		
0.67	0.67	1.33	-	1.00	0.33	-	-	-				セット平均		-	0.67	-	-	-	0.67	0.50	-	-	-		
12	15	8	9	11	15	2	0	0				打数	サーブ	10	8	8	5	7	5	1	4	5	0		
1	0	0	0	3	0	0	0	0				得点		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
3	0	2	1	1	0	0	0	0				失点		0	1	0	2	1	0	0	0	0	0		
8.3	-	-	-	27.3	-	-	-	-				効果率		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1	0	0	0	2	0	0	0	0				ノータッチエース		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
0	0	0	0	1	0	0	0	0						0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
4	2	2	0	3	0	1	0	0				効果		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		
15	8	0	12	2	0	0	0	12				受数	サーブレシーブ	0	26	0	4	15	1	1	0	0	15		
15	8	0	12	2	0	0	0	11				成功		0	20	0	3	11	1	1	0	0	13		
100.0	100.0	-	100.0	-	-	-	-	91.7				成功率		-	76.9	-	-	73.3	-	-	-	-	86.7		

2004東西インカレバレーボール男子王座決定戦
ファイナルマッチ3位決定戦

主審:村上成司　副審:松代寛　開始時刻 12:30

近畿大学								東亜大学					
1set	2set	3set	4set	5set	1	25	1set	20	3	1set	2set	3set	4set	5set
14 2 1	14 2 1	14 2 1	14 2 1			31	2set	33		15 11 1	17 26 11	26 11 1	17 26 11	
						23	3set	27						
						18	4set	25						
							5set							
12 13 4	12 13 4	12 13 4	12 13 4			99	total	105		17 13 7	13 7 1	17 13 7	13 7 1	
チームフォルト/7			サーブレシーブ成功率/91.6%					チームフォルト/5			サーブレシーブ成功率/93.3%		

評価		失点	得点	打数	競技成績	打数	得点	失点	評価	
決定率(%)	42.5	10	57	134	アタック総数	135	63	18	46.7	決定率(%)
決定率(%)	24.1	6	7	29	(内バックアタック)	35	17	8	48.6	決定率(%)
セット平均(本)	2.50	-	10	-	ブロック	-	15	-	3.75	セット平均(本)
効果率(%)	1.0	9	1	100	サーブ	104	1	8	1.0	効果率(%)
		-	31	-	相手のミス	-	26	-		
		19	99	234	合計	239	105	26		

4	1 C	2	14	12	13	17	9	15	3 L	22	20	No.			7	1 C	11	15	17	13	14	2	26	9 L	30	3
奥田 慎一	柏原 隆行	中西 教之	藤沢 秀樹	巴 特	塩 大地	山下 栄和	今村 佳照	岡西 航佑	石田 亮	東 健司	石本 裕樹	選手名			大道 大輔	松永 浩義	堤 政博	濱崎 俊一	迫 智由樹	中山 大祐	西川 祐貴	福田 哲也	波多野 健人	當間 栄尚	寺本 壮儀	柏木 貴司
4	4	4	4	4	4	4	1	3	4	0	0	出場セット			4	4	4	1	4	4	4	3	3	4	0	0
1	32	17	49	23	12	0	0	0	0			打数	アタック	打数	7	0	39	1	32	48	0	0	8	0		
0	10	10	19	11	7	0	0	0	0			得点		得点	2	0	16	0	15	24	0	0	6	0		
0	2	0	3	3	2	0	0	0	0			失点		失点	1	0	6	1	5	5	0	0	0	0		
-	31.3	58.8	38.8	47.8	-	-	-	-	-			決定率		決定率	-	-	41	-	46.9	50.0	-	-	-	-		
0	5	0	19	5	0	0	0	0	0			打数	アタック(内バックアタック)	打数	0	0	1	0	21	13	0	0	0	0		
0	2	0	4	1	0	0	0	0	0			得点		得点	0	0	1	0	10	6	0	0	0	0		
0	1	0	3	2	0	0	0	0	0			失点		失点	0	0	0	0	5	3	0	0	0	0		
-	40.0	-	21.1	20.0	-	-	-	-	-			決定率		決定率	-	-	-	-	47.6	46.2	-	-	-	-		
0	0	3	0	2	5	0	0	0	0			得点	ブロック	得点	3	1	4	2	0	2	0	0	3	0		
-	-	0.75	-	0.50	1.25	-	-	-	-			セット平均		セット平均	0.75	0.25	1.00	2.00	-	0.50	-	-	1.00	-		
14	16	15	20	10	16	5	1	3	0			打数	サーブ	打数	12	23	17	1	12	16	6	4	13	0		
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0			得点		得点	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0		
0	3	0	5	0	0	0	1	0	0			失点		失点	0	0	2	0	2	3	0	0	1	0		
-	-	-	5.0	-	-	-	-	-	-			効果率		効果率	-	-	-	-	-	6.3	-	-	-	-		
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0			ノータッチエース		ノータッチエース	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
0	2	0	4	0	0	0	0	0	0			効果		効果	3	0	1	0	1	1	0	1	1	0		
0	10	2	1	39	0	8	0	0	35			受数	サーブレシーブ	受数	2	1	35	1	8	16	1	0	2	24		
0	8	2	1	34	0	8	0	0	34			成功		成功	2	1	34	1	5	16	1	0	2	22		
-	80.0	-	-	87.2	-	100.0	-	-	97.1			成功率		成功率	-	-	97.1	-	-	100.0	-	-	-	91.7		

2004東西インカレバレーボール男子王座決定戦
ファイナルマッチ優勝決定戦

主審:富田満　　副審:高橋直也　　開始時刻 14:30

筑波大学								東海大学					
1set	2set	3set	4set	5set				1set	2set	3set	4set	5set	
1 20 21	1 20 21	1 20 21			3	25	1set	19	0	22 22 24	29 22 21	22 21 24			
						25	2set	20							
						25	3set	22							
							4set								
							5set								
9 24 22	9 24 22	9 24 22				75	total	61		29 2 15	2 15 24	29 2 15			
チームフォルト/5			サーブレシーブ成功率/76.5%					チームフォルト/5			サーブレシーブ成功率/85.0%				

評価		失点	得点	打数	競技成績	打数	得点	失点	評価	
決定率(%)	53.6	8	45	84	アタック総数	80	33	10	41.3	決定率(%)
決定率(%)	46.7	1	7	15	(内バックアタック)	11	2	3	18.2	決定率(%)
セット平均(本)	2.00	-	6	-	ブロック	-	3	-	1.00	セット平均(本)
効果率(%)	0.0	11	0	71	サーブ	61	1	9	1.6	効果率(%)
		-	24	-	相手のミス	-	24	-		
		19	75	155	合計	141	61	19		

22	21	20	1 C	9	24	10	7	2 L	25	8	4	No.			15	24	21	22	29	2 C	18	38	13	19 L	39	3
三上 圭治郎	丸山 祥二	志賀 崇	北島 武	石島 雄介	菅 直哉	川口 直樹	林 宏樹	勝野 裕士	永野 健	壬生 裕之	小川 将司	選手名			山内 隆宏	金子 隆行	佐藤 和哉	富松 崇彰	高橋 和人	鈴木 健太	沼田 貴光	王 金剛	間杉 将彦	石川 俊輔	落合 伸太郎	高橋 賢行
3	3	3	3	3	3	1	1	3	0	0	0	出場セット			3	3	3	3	3	3	3	2	1	3	0	0
13	10	21	28	11	1	0	0	0				打数	アタック	打数	1	18	6	29	15	11	0	0	0	0		
4	6	12	14	8	1	0	0	0				得点		得点	1	11	2	9	6	4	0	0	0	0		
3	1	2	2	0	0	0	0	0				失点		失点	0	3	0	4	1	2	0	0	0	0		
30.8	-	57.1	50.0	-	-	-	-	-				決定率		決定率	-	61.1	-	31.0	40.0	-	-	-	-	-		
3	0	7	5	0	0	0	0	0				打数	アタック(内バックアタック)	打数	0	1	0	10	0	0	0	0	0	0		
0	0	3	4	0	0	0	0	0				得点		得点	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0		
0	0	1	0	0	0	0	0	0				失点		失点	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0		
-	-	42.9	80.0	-	-	-	-	-				決定率		決定率	-	-	-	20.0	-	-	-	-	-	-		
0	0	1	0	5	0	0	0	0				得点	ブロック	得点	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0		
-	-	0.33	-	1.67	-	-	-	-				セット平均		セット平均	-	-	0.33	-	-	0.67	-	-	-	-		
11	15	16	11	6	11	1	0	0				打数	サーブ	打数	9	11	8	10	10	10	3	0	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0				得点		得点	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0		
4	1	2	3	1	0	0	0	0				失点		失点	0	4	0	1	2	2	0	0	0	0		
-	-	-	-	-	-	-	-	-				効果率		効果率	-	-	-	-	-	10.0	-	-	-	-		
0	0	0	0	0	0	0	0	0				ノータッチエース		ノータッチエース	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0							0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
2	0	5	1	0	0	1	0	0				効果		効果	2	2	0	3	0	4	1	0	0	0		
14	1	0	19	2	0	0	0	15				受数	サーブレシーブ	受数	0	28	0	0	11	0	0	0	1	20		
12	1	0	11	1	0	0	0	14				成功		成功	0	24	0	0	7	0	0	0	1	19		
85.7	-	-	-	-	-	-	-	93.3				成功率		成功率	-	85.7	-	-	-	-	-	-	-	95.0		

≪２≫　個人表彰

原稿作成者　田仲俊樹

【１】　方法

バレーボールの大会では欠かすことのできない各個人賞を決めるためにスパイク賞、ブロック賞、サーブ賞に関してはJVISの個人技術集計表（表1）をもとにそれぞれの部門の第1位の選手を選出し、セッター賞、リベロ賞、レシーブ賞、優勝監督賞、最高殊勲選手賞、敢闘賞に関しては全日本大学バレーボール連盟会長、つくば市長、筑波大学体育専門学群長、2004東西インカレ実行委員会EP、学連学生役員代表者による話し合いによって決定した。また、特別賞ということで観客によるアンケートをもとに選手2名、大学1校、出演団体1団体を選出しBest Tsukuban賞という名前で賞を用意した。

表1：JVIS個人技術集計表

■アタック決定率(バックアタック含む)

ランク	氏名	チーム名	セット数	打数	得点	失点	決定率
1	北島　武	筑波大	6	56	32	2	57.1
2	金子　隆行	東海大	7	31	16	6	51.6
3	迫　智由樹	東亜大	6	35	17	6	48.6
4	富松　崇彰	東海大	7	68	32	9	47.1
5	志賀　崇	筑波大	6	49	23	4	46.9
6	藤沢　秀樹	近畿大	8	94	42	4	44.7
7	巴　特	近畿大	8	45	20	6	44.4
8	中山　大祐	東亜大	7	80	35	7	43.8
8	三上　圭治郎	筑波大	6	32	14	5	43.8
10	高橋　和人	東海大	7	47	20	6	42.6

■ブロック決定本数(1セットあたり)

ランク	氏名	チーム名	セット数	得点	セット平均
1	石島　雄介	筑波大	6	8	1.33
2	堤　政博	東亜大	7	6	0.86
3	志賀　崇	筑波大	6	5	0.83
4	塩　大地	近畿大	8	6	0.75
5	大道　大輔	東亜大	7	5	0.71
5	佐藤　和哉	東海大	7	5	0.71
7	中西　教之	近畿大	8	5	0.63
8	鈴木　健太	東海大	7	4	0.57
9	山内　隆宏	東海大	7	3	0.43
10	巴　特	近畿大	8	3	0.38

■サーブ効果率

ランク	氏名	チーム名	セット数	打数	ノータッチ	エース	効果	効果率
1	藤沢　秀樹	近畿大	8	39	2	2	8	10.3
2	高橋　和人	東海大	7	26	1	1	4	7.7
3	三上　圭治郎	筑波大	6	23	1	0	6	4.3
3	中山　大祐	東亜大	7	23	1	0	1	4.3
5	金子　隆行	東海大	7	30	1	0	6	3.3

【２】　結果

（１）個人賞

スパイク賞…北島　武（筑波大学）

ブロック賞…石島　雄介（筑波大学）

サーブ賞…藤沢　秀樹（近畿大学）

セッター賞…菅　直哉（筑波大学）

リベロ賞…勝野　裕士（筑波大学）

レシーブ賞…金子　隆行（東海大学）

優勝監督賞…都澤　凡夫（筑波大学）

最高殊勲選手賞…北島　武（筑波大学）

敢闘賞…鈴木　健太（東海大学）

（２）Best Tsukuban賞

ナイスキャプテンで賞…北島　武（筑波大学）

ナイスパワーで賞…石島　雄介（筑波大学）

ホームで魅せてくれたで賞…筑波大学

アテネで金メダルで賞…シッティングバレーJAPANチーム

得票状況で受賞者が大体決まった時点で票の集計をやめてしまったため最終的な正確な得票は不明である。

Ⅱ．大会運営データ

≪１≫　　大会関係者出席状況結果

原稿作成者　矢沢智子

団体名	役職	氏名	対応種類	10日出席	レセプション	11日出席	アカデミック
つくば市	つくば市長	藤澤順一	Guest	○	○	○	
	つくば市議会議長	兼平英雄	Guest		○		
	つくば市議会副議長	大野光夫	Guest				
	文教厚生常任委員	坂本禎子	Guest				
	文教厚生常任委員	小野泰宏	Guest				
	文教厚生常任委員	橋本喜美子	Guest				
	文教厚生常任委員	田宮直子	Guest				
	文教厚生常任委員	中泉慶一	Guest				
	文教厚生常任委員	飯岡宏之	Guest				
	文教厚生常任委員	鈴木富士雄	Guest				
	文教厚生常任委員	塙豊光	Guest				
	文教厚生常任委員	飯田忠	Guest				
	文教厚生常任委員	塚本武志	Guest				
	文教厚生常任委員	金子和雄	Guest				
	教育長	藤井伸二	Guest	○	○	○	
	教育委員	大久保弘行			○	○	
つくば市体育協会	会長	山口哲司	Guest			○	
つくば市バレーボール連盟	会長	石黒澄子	Guest	○	○	○	○
つくば市商工会	会長	沼尻博	Guest		○		
	事務局長	新妻貞夫	Guest	○		○	○
	副会長	広瀬俊一				○	
筑波大学	学長	岩崎洋一	Guest			○	
	副学長	油田信一	Guest	○			
	学長特別補佐	吉武博通	Guest		○	○	
	体育研究科長	飯田稔	Guest	○	○		
	体育専門学群長	永井純	Guest	○	○	○	○
	体育科学系長	高松薫	Guest				
	企画部企画調整課社会貢献部	風間	Visitor				
JVA		足立龍哉	Guest				
	男子強化委員	白數仁孝	Guest				
	男子強化委員	南匡秦	Guest				
	男子強化委員	矢島久徳	Guest				
	男子強化委員	多田幹世	Guest				
	男子強化委員	久保義人	Guest				
	男子強化委員	楊成太	Guest	○			
	男子強化委員	山本和史	Guest				
Vリーグ	会長	飯島英胤	Guest				
	堺ブレイザーズ	中垣内祐一	Guest		○	○	
		大久保茂和	Guest	○	○		
		市橋祐之	Guest				
		増村雅尚	Guest	○	○	○	
	豊田合成	朝長孝介	Guest	○	○		
		藤田和弘	Guest	○	○	○	
	東レ	矢島久徳	Guest				
		山口誠	Guest		○		
		秋山央	Guest				
		小林敦	Guest		○		
	サントリー	鳥羽賢二	Guest		○		
		西田靖宏	Guest				
		花野裕祥	Guest				
		山村宏太	Guest	○			
	フランス	加藤陽一	Guest	○		○	
	東京ヴェルディ	日下慎吾	Guest	○		○	
全日本大学連盟	会長	市川伊三夫	Guest	○	○	○	○
	副会長	小野寺崇	Guest	○	○	○	○
	副会長	杤堀申二	Guest	○	○		○
	副会長	小出忠孝	Guest				
	理事長	久保田邦宏	Guest	○	○		
	東西学連理事長	柏森康雄	Guest		○	○	○
	全日本総務委員長	出居綏子	Visitor			○	○
	全日本総務委員	雛田総子	Visitor			○	○
	全日本審判委員長	菅沼裕一	Visitor	○	○	○	
	全日本広報委員長	田中浩一	Visitor				
	全日本審判委員長	河合信行	Visitor		○	○	

	サントリー株式会社	松倉	Guest	○			
	沼尻産業株式会社	三嶋一夫	Guest		○	○	
	株式会社塚越石材工業	塚越正章	Guest				
	株式会社アシックス	日置康夫	Guest	○	○	○	○
	東京ヴェルディ1969	伊集院弘岳	Guest	○			
	利根コカコーラボトリング株式会社	石毛浩	Guest	○	○		
	株式会社つくばYOUワールド	山上かつ子	Guest		○		
	株式会社スポーツビズ	田中和弘	Guest		○		
	株式会社ライトオン	江角徹	Guest				
	筑波研究学園都市ホテル協同組合・ホテル松島	松岡嘉一	Guest	○			
	東日本印刷株式会社	飯島眞	Guest	○	○		
オフィシャルスポンサー	株式会社デサント		Guest				
	株式会社ブレイザーズスポーツクラブ	清川健一	Guest				○
	ホテルグランド東雲	野口昌己	Guest	○		○	
	海老坪正子	海老坪正子	Guest			○	
	日本たばこ産業株式会社	山下	Guest	○	○	○	○
	豊田合成株式会社	勝間隆	Guest	○	○	○	○
	ファイテン株式会社	落岩浩二	Guest		○		
	アルケア株式会社	菅井智明	Guest	○	○	○	○
	関彰商事株式会社	鈴木信広	Guest		○		○
	新報社	亀山慶子	Guest	○	○		
	関東鉄道株式会社	宮野裕司	Guest			○	
	株式会社モルテン	中村欽哉	Guest	○	○		
	日本ハム株式会社中央研究所	藤田浩太郎	Guest	○	○	○	○
	有限会社ふじトロフィー	田中成貴	Visitor				
	福力商事有限会社	福力清史	Visitor				
	NPO法人スマイルクラブ	大浜　三平	Visitor				
	有限会社　鯨井会計	鯨井規功	Visitor			○	
メディアスポンサー	つくば青年会議所	豊崎晃一	Visitor		○		
	株式会社オフィス三輪	吉田亜衣	Visitor				
	日本文化出版株式会社	佐藤嗣朗	Visitor				○
	円城寺スポーツ		Visitor				
	ジャパンライム株式会社	吉井　健	Visitor	○			
	有限会社バレーボールアンリミテッド	河部誠一	Visitor	○			
	研究交流センター		Visitor				
	茨城トヨタ		Visitor				
	つくば都市交通センター	野村	Visitor				
	クリーンセンター	相澤東	Visitor				
	古い街並み写真提供	矢澤容子	Visitor				
	国土交通省国土地理院		Visitor				
	クレオ（西武百貨店・ジャスコ）		Visitor				
	下条整形外科		Visitor				
	A to Z		Visitor				
特殊	奥山欽哉	奥山欽哉	Guest	○		○	
	茨城学生活動支援組織　ぐっぴい	木村亮介	Visitor			○	
	バレーボール学会	遠藤俊郎	Guest				
		後藤浩史	Guest				
	筑波大学	守屋正彦	Guest			○	
	筑波大学人間総合科学研究科	蓮見孝	Guest			○	
	筑波大学人間総合科学研究科	渡和由	Guest			○	
	つくば市企画部企画調整課	飯泉省三	Guest			○	
	有限会社つくばインキュベーションラボ	島袋典子	Guest			○	
	表彰品提供	西藤宏司	Guest			○	
	筑波大学	福原祐三	Guest	○			
	茨城県バレーボール協会	大堀学	Guest				
当日	教育委員会	杉浦	Guest				○
	教育委員会	武井和美	Guest				○
	全日本大学バレーボール連盟	高橋登志子	Visitor				○

≪2≫大会スタッフ対応

原稿作成者　阪口かなえ

名前	所属	履修申請	属性(AD名)	当日業務			
				10日		11日	
				午前	午後	午前	午後
都澤凡夫			トーナメントディレクター	フリー		アカデミック	
松田裕雄			エグゼクティブプロデューサー	総括	総括	総括	総括
南文男			エグゼクティブアドバイザー	フリー			
勝見彩乃	第二学群人間学類	有	総合対応・障害者対応	×	×	障害者対応	障害者対応
川上奏	芸術専門学群	有	総合対応・障害者対応	障害者対応	障害者対応	障害者対応	障害者対応
久保瞳	医学専門学群看護・医療科学類	有	総合対応	総合対応	総合対応	総合対応	総合対応
杉舩竜也	第二学群比較文化学類	有	総合対応	×	×	総合対応	総合対応
園田友樹	第二学群人間学類	有	総合対応・障害者対応	障害者対応	障害者対応	×	×
武内栄希	第二学群人間学類	有	総合対応・障害者対応	障害者対応	障害者対応	障害者対応	障害者対応
田中裕子	医学専門学群看護・医療科学類	有	総合対応	総合対応	総合対応	総合対応	総合対応
矢沢智子	第二学群日本語・日本文化学類	有	総合対応	総合対応	総合対応	交流会	総合対応
朝倉享子			専属対応	専属対応	専属対応	専属対応	専属対応
伊藤リナ			専属対応	総合対応	総合対応	総合対応	総合対応
小野智史			専属対応	専属対応	専属対応	専属対応	専属対応
高巣文子			専属対応	専属対応	専属対応	専属対応	専属対応
西村誠一			専属対応	専属対応	専属対応	専属対応	専属対応
赤塚良輔			選手・出演団体対応	団体対応	団体対応	団体対応	団体対応
市村理子	第二学群日本語・日本文化学類	有	選手・出演団体対応	団体対応	団体対応	交流会	団体対応
岩井與幸			選手・出演団体対応	×	×	団体対応	団体対応
宇垣めぐみ	医学専門学群看護・医療科学類	有	選手・出演団体対応	団体対応	レセプション	団体対応	団体対応
宇野寛子	第三学群社会工学類	有	選手・出演団体対応	団体対応	レセプション	団体対応	団体対応
緒方清仁			選手・出演団体対応	団体対応	団体対応	団体対応	団体対応
木暮洋輔	第三学類工学基礎学類	有	選手・出演団体対応	団体対応	団体対応	団体対応	団体対応
坂寄健			選手・出演団体対応	×	×	団体対応	団体対応
津波古陽香	第三学類社会工学類	有	選手・出演団体対応	団体対応	団体対応	団体対応	団体対応
沼尻知子	第二学群比較文化学類	有	選手・出演団体対応	団体対応	団体対応	団体対応	団体対応
山田華子			選手・出演団体対応	団体対応	×	交流会	×
小孫　佳子	第二学群比較文化学類	有	アスレチック	チーム対応	チーム対応	チーム対応	チーム対応
山崎雅和	第三学群情報学類	有	アスレチック	運搬・選手対応	運搬・選手対応	運搬・選手対応	運搬・選手対応
牧野仁人	医学専門学群	有	アスレチック	選手対応	選手対応	選手対応	選手対応
荒川暁郎			バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
荒木祐亮			バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
家常亜紗子	第三学群社会工学類	有	バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
石川忠	第二学群比較文化学類	有	バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
猪俣朋恵	第二学群人間学類	有	バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
笹木隆之	第三学類社会工学類	有	バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
高橋沙矢香	第二学群人間学類	有	バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
埃沢賢志			バレー街道促進	地域・運搬	地域・運搬	地域・運搬	地域・運搬
堀越晃子			バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	バレー街道	バレー街道
山本三津子	第三学群社会工学類	有	バレー街道促進	バレー街道	バレー街道	アカデミック	バレー街道
米澤和泉	第三学群社会工学類	有	バレー街道促進	バレー街道	×	バレー街道	バレー街道
石岡愛美			オフィシャルアナウンサー	アナウンス	アナウンス	アナウンス	アナウンス
木脇研一朗			オフィシャルアナウンサー	アナウンス	アナウンス	アナウンス	アナウンス
杉田麻光			オフィシャルアナウンサー	アナウンス	アナウンス	アナウンス	アナウンス
髙野真弓			オフィシャルアナウンサー	アナウンス	アナウンス	アナウンス	アナウンス
西山嘉倫	第三学類国際総合学類	有	オフィシャルアナウンサー	アナウンス	アナウンス	アカデミック	アナウンス
石川大悟	第一学群自然学類	有	演出	演出	演出	演出	演出
尾崎亮太	第三学群工学基礎学類	有	演出	演出	演出	交流会	演出
斉藤郁	医学専門学群看護・医療科学類	有	演出	演出	演出	演出	演出
佐藤麻紀	第二学群比較文化学類	有	演出	演出	演出	演出	演出
高橋一郎			演出	演出	演出	演出	演出
中嶋希望	第二学群人間学類	有	演出	エキシビジョン	レセプション	団体対応	団体対応
浜中陽子	第二学群比較文化学類	有	演出	演出	演出	交流会	演出
古内ひとみ	医学専門学群看護・医療科学類	有	演出	演出	演出	演出	演出
宮崎彰吾	第一学群自然学類	有	演出	演出	演出	交流会	演出
小澤宏行	芸術専門学群	有	実況撮影	撮影	撮影	撮影	撮影
加藤萌美			実況撮影	撮影	撮影	撮影	撮影
上川礼子	芸術専門学群	有	実況撮影	撮影	撮影	撮影	撮影
北村亮太郎	芸術専門学群	有	実況撮影	撮影	撮影	撮影	撮影
佐々木絵理	芸術専門学群	有	実況撮影	撮影	撮影	撮影	撮影
髙尾俊介			実況撮影	撮影	撮影	撮影	撮影
中尾直美	芸術専門学群	有	実況撮影	撮影	撮影	撮影	撮影
浅田玲緒尚	医学専門学群	有	設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
池澤卓也			設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
小槻雄太			設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
金井貴史			設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
川村真一			設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
木曽雄介	体育専門学群	有	設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
五味新吉			設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
田仲俊樹	体育専門学群	有	設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
平松駿			設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
柳瀬浩之	体育専門学群	有	設営管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理	コート周辺管理
図師奈津子	第一学群人文学類	有	設営管理	情報保障	情報保障	情報保障	情報保障
羽田野真帆	第二学群人間学類	有	設営管理	エキシビジョン	情報保障	情報保障	情報保障
平野由起			設営管理	情報保障	情報保障	情報保障	情報保障
有海順子	第二学群人間学類	有	設営管理	情報保障	情報保障	情報保障	情報保障
荒井健太	第三学群工学システム学類	有	設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
荒井雪恵	第二学群生物資源学類	有	設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ

≪2≫大会スタッフ対応

原稿作成者　阪口かなえ

石井邦知	第三学群社会工学類	有	設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
岩本智裕	第二学群生物資源学類	有	設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
観愛美			設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
北田智子			設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
須田碧海			設営管理	ゴミ	×	ゴミ	ゴミ
冨永浩章			設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
中澤洋輔	第二学群生物資源学類	有	設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
前原三智子	第一学群人文学類	有	設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
山田歌織			設営管理	ゴミ	ゴミ	ゴミ	ゴミ
浅野和男			パトロール	パトロール	パトロール	×	×
池畑浩			パトロール	×	×	駐車場	駐車場
宇津木修一			パトロール	×	×	パトロール	パトロール
大喜憲一			パトロール	×	×	パトロール	パトロール
大久保剛史			パトロール	×	×	駐車場	駐車場
大久保正巳			パトロール	駐車場	駐車場	駐車場	×
大野史成	体育専門学群	有	パトロール	駐車場	駐車場	駐車場	駐車場
奥千加			パトロール	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール
川田公仁			パトロール	パトロール	×	×	パトロール
木原陽子			パトロール	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール
木村明男			パトロール	×	×	パトロール	パトロール
久慈正太郎			パトロール	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール
越田恵未			パトロール	パトロール	パトロール	アカデミック	パトロール
柴三千男			パトロール	パトロール	パトロール	×	×
白石陽介	第二学群人間学類	有	パトロール	エキシビジョン	パトロール	パトロール	パトロール
丹藤勝次			パトロール	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール
東郷公咲			パトロール	駐車場	駐車場	×	×
成瀬恵里			パトロール	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール
野沢修			パトロール	駐車場	駐車場	×	×
林正樹			パトロール	駐車場	駐車場	×	×
原田理恵	第二学群比較文化学類	有	パトロール	パトロール（掲示物メンテナンス	パトロール（掲示物メンテナンス	パトロール（掲示物メンテナンス	パトロール（掲示物メンテナンス
平本芳行	医学専門学群	有	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール
藤澤寛子	医学専門学群看護・医療科学類	有	パトロール隊長	パトロール（掲示物メンテナンス	パトロール（掲示物メンテナンス	パトロール（掲示物メンテナンス	パトロール（掲示物メンテナンス
船橋修			パトロール	×	×	駐車場	駐車場
松井沙織			パトロール	パトロール	パトロール	パトロール	パトロール
松本みな	第一学群人文学類	有	パトロール	パトロール（掲示物メンテナンス	パトロール（掲示物メンテナンス	交流会	パトロール（掲示物メンテナンス
三須愛			パトロール	パトロール（ルーム管理）	パトロール（ルーム管理）	パトロール（ルーム管理）	パトロール（ルーム管理）
宮崎雅子			パトロール	パトロール	パトロール	交流会	パトロール
宮本喜代子			パトロール	×	×	駐車場	駐車場
飯泉省三			アカデミック	フリー		アカデミック	
池田竜哉			アカデミック	アカデミック	アカデミック	×	18時まで○
菅家早織			アカデミック	×	レセプション	アカデミック	×
鯨井拓仁	第三学群社会工学類	有	アカデミック	アカデミック	アカデミック	アカデミック	パトロール
小松原亜弓			アカデミック	アカデミック	レセプション	アカデミック	パトロール
島袋典子			アカデミック	フリー		アカデミック	
関田巌			アカデミック	×	×	アカデミック	×
谷中智紀	第二学群生物学類	有	アカデミック	アカデミック	×	アカデミック	×
中西章典			アカデミック	×	×	アカデミック	×
中村玲	第二学群日本語・日本文化学類	有	アカデミック	アカデミック	アカデミック	アカデミック	パトロール
仲山知佳	図書館情報専門学群	有	アカデミック	アカデミック	レセプション	アカデミック	パトロール
宮崎雅文	第一学群自然学類	有	アカデミック	アカデミック	アカデミック	アカデミック	パトロール
石田真也			リサーチング	リサーチ	リサーチ	×	リサーチ
影山あき子	第一学群社会学類	有	リサーチング	リサーチ	リサーチ	交流会	リサーチ
木村義明			リサーチング	リサーチ	リサーチ	リサーチ	リサーチ
小山庶子			リサーチング	リサーチ	リサーチ	リサーチ	リサーチ
篠原瑤子			リサーチング	リサーチ	リサーチ	リサーチ	リサーチ
田中勝洋			リサーチング	リサーチ	リサーチ	リサーチ	リサーチ
中泉誠子	第二学群人間学類	有	リサーチング	エキシビジョン	リサーチ	交流会	リサーチ
中村美春	第三学群社会工学類	有	リサーチング	リサーチ	レセプション	リサーチ	リサーチ
箱守寛子			リサーチング	リサーチ	リサーチ	交流会	リサーチ
藤嶋由美			リサーチング	リサーチ	リサーチ	交流会	リサーチ
劉美憬			リサーチング	リサーチ	リサーチ	リサーチ	リサーチ
荒牧亜衣	体育専門学群	有	交流会				
井島彩美			交流会				
遠藤久美子			交流会				
影山あや子	体育専門学群	有	交流会				
木村早希			交流会				
澤畠文子			交流会				
白丸寿美	体育専門学群	有	交流会				
末代咲恵			交流会				
中西康己			交流会	フリー		交流会	
中村真由美			交流会				
野口実穂			交流会				
林蓉子	体育専門学群	有	交流会				
平井香菜子			交流会				
星亜矢子			交流会				
松井泰二			交流会	フリー		交流会	フリー
三上彩	体育専門学群	有	交流会				
村井菜月			交流会				
井上麻衣子			販売促進	販売	販売	販売	販売
海老沼祐子			販売促進	販売	販売	販売	販売
大谷暢史			販売促進	販売	販売	販売	販売
岡本直樹	医学専門学群医学類	有	販売促進	販売	販売	販売	販売
加納久美子			販売促進	販売	レセプション	販売	販売
木幡繁子			販売促進	販売	販売	交流会受付	販売
今野瞬			販売促進	販売	販売	販売	販売
佐々木裕子			販売促進	販売	販売	販売	販売
白柳友季子	医学専門学群看護・医療科学類	有	販売促進	販売	販売	販売	販売
鈴木宏奈	第二学群生物資源学類	有	販売促進	販売	販売	販売	販売

≪2≫大会スタッフ対応

鈴木誠			販売促進	販売	販売	専属対応	専属対応
田辺志帆子			販売促進	販売	販売	販売	販売
林裕介			販売促進	販売	販売	販売	販売
兵庫眞知子			販売促進	販売	販売	交流会受付	販売
宮田由紀子			販売促進	販売	販売	交流会受付	販売
横沢友樹			販売促進	×	販売	販売	販売
吉原則行			販売促進	専属対応	専属対応	販売	販売
宇佐見あかね			展示物促進	展示物監視	展示物監視	展示物監視	展示物監視
小林梓			展示物促進	展示物監視	展示物監視	展示物監視	展示物監視
杉田かおり	第二学群日本語・日本文化学類	有	展示物促進	展示物監視	展示物監視	交流会	展示物監視
岩瀬佳奈			レセプション	レセプション	レセプション	アカデミック	パトロール
大城聡香	第三学群社会工学類	有	レセプション	レセプション	レセプション	交流会	
角谷省吾	第三学群工学基礎学類	有	レセプション	レセプション	レセプション	パトロール	パトロール
金谷千亜紀	第一学群人文学類	有	レセプション	レセプション	レセプション	アカデミック	パトロール
川口あゆみ	第二学群日本語・日本文化学類	有	レセプション	レセプション	レセプション	アカデミック	パトロール
塩川真理子	芸術専門学群	有	レセプション	レセプション	レセプション	交流会	
山上航平			レセプション	レセプション	レセプション	パトロール	パトロール
菊池孝一	体育専門学群	有	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応
阪口かなえ	第一学群自然学類	有	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応
童安佚			スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応	スタッフ対応
水野知恵	第二学群人間学類	有	演出/レセプション/交流会	エキシビジョン	レセプション	交流会	
鈴木淳			選手・出演団体対応/交流会	団体対応	交流会準備	交流会	
阿部まゆみ			競技進行	連盟総括	連盟総括	連盟総括	連盟総括
大槻肇			競技進行	エキシビジョンラインズマン		×	
国松直			競技進行	エキシビジョンラインズマン		×	
鈴木美奈子			競技進行	エキシビジョンラインズマン	リトリーバー	アカデミック	リトリーバー
関本朝代			競技進行	バレ連スタッフ	バレ連スタッフ	×	×
高野七重			競技進行	エキシビジョンラインズマン	リトリーバー	×	リトリーバー
古矢直己			競技進行	9人制ＩＦ	リトリーバー	会場準備	リトリーバー
筈見　寿江			競技進行	9人制記録	リトリーバー	×	リトリーバー
リトリーバー30名			競技進行・リトリーバー				
青柳博之			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
石井晶			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
稲村亮			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
小田部寛子			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
上山佳織			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
木村苑子			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
小貫佳苗			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
斎藤幸輔			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
斉藤優			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
瀬尾圭祐			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
田上由香里			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
武井祐樹			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
田中将登			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
長岐彩花			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
本田健児			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
渡辺成美			常総学院高等学校JRC部	×	×	募金活動	募金活動
松原隆雄			常総学院高等学校JRC部・顧問	×	×	募金活動	募金活動
大海みゆき			常総学院高等学校JRC部・顧問	×	×	募金活動	募金活動
宇木博明			オフィシャルアドバイザー	レセプション	レセプション	フリー	
小神野洋一			オフィシャルアドバイザー	×	×	○	○
坂根正孝			オフィシャルアドバイザー	×	×	○	○
佐藤豊			オフィシャルアドバイザー	○	○	○	○
杉山晃			オフィシャルアドバイザー				
塚田修身			オフィシャルアドバイザー	○	○	○	○
長谷川聖修			オフィシャルアドバイザー	○	○	×	×
村田芳子			オフィシャルアドバイザー	×	×	×	×
吉田英夫			オフィシャルアドバイザー				

阪口かなえ

DOCTOR.AD名	名前	
水戸日赤病院整形外科医長	埜口博司	先生
筑波メディカルセンター病院整形外	西野衆文	先生

REFEREE..AD名	
オフィシャルレフェリー	神林清松
	高島好実
	村上成司
	富田満
	吉原明秀
	松代寛
	松延亮一
	秋山克巳
	高橋直也
	黒澤勝秀
シッティングバレーレフェリー	真野嘉久

≪３≫各種収支決済詳細　（１）運営業務全般

① 2004 東西インカレ収支決算報告書

収入			支出		
項目	金額	（前年度）	項目	金額	内訳
つくば市	¥1,095,000	¥1,095,000	謝金・日当	¥30,000	審判日当（2500円×6人×2日）
大学	¥2,000,000	¥2,203,000	交通費	¥440,510	
協賛・補助金	¥2,775,000	¥1,685,000	Vリーグ選手、出演団体	¥372,830	Vリーグ選手、シッティング(半額)、東海大学チア
三基商事㈱	¥500,000		スタッフ	¥67,680	西日本インカレ、シッティング打ち合わせ
サントリー㈱	¥300,000		借料	¥124,598	
東京ヴェルディ1969	¥300,000		グリーンフェンス	¥105,000	
㈱スポーツビズ	¥200,000		会場リハーサル	¥4,100	出演団体リハーサル用
㈱つくばYOUワールド	¥100,000		トランシーバー	¥15,498	
㈱ライトオン	¥100,000		消耗品費	¥696,144	
東日本印刷㈱	¥100,000		プリンター関連	¥352,970	インクカートリッジ、
沼尻産業㈱	¥100,000		フィルム等	¥14,490	記録用
ホテル松島	¥100,000		文具	¥65,239	DVテープ、ガムテ、CDR、宛名シール等
利根コカ・コーラボトリング㈱	¥100,000		AD作成用	¥65,094	ストラップ、名札ケース、紙等
海老坪正子	¥50,000		競技用品	¥43,400	ラインテープ
つくばショッピングセンターアッ	¥50,000		はちまき	¥21,021	交流会参加者用
関彰商事㈱	¥50,000		地域デザイン材料費	¥85,641	ネジ、ベニヤ、装飾グッズ等
グランドホテル東雲	¥50,000		その他制作材料費	¥30,181	金具、紙等
アルケア㈱	¥50,000		当日・会場関係	¥18,108	お手拭、募金箱、テーブルクロス等
ファイテン㈱	¥50,000		通信運搬費	¥444,612	
豊田合成㈱	¥50,000		携帯電話	¥234,517	2004年7月分まで
日本たばこ産業	¥50,000		郵便・宅急便	¥137,193	
つくばテクノパーク	¥30,000		学連機材運搬補助	¥30,000	学連
上尾中央総合病院	¥30,000		会場への機材運搬	¥42,902	レンタカー
つくば青年会議所	¥30,000		広告宣伝費	¥784,350	
松下電器産業㈱	¥30,000		ポスター	¥96,600	
日本文化出版㈱	¥30,000		チラシ	¥399,000	
東レ㈱	¥30,000		横断幕	¥288,750	5枚
ジャパンライム㈱	¥30,000		備品費	¥82,446	
㈱オフィス三輪	¥30,000		会議費・大会昼食費	¥692,136	
(有)バレーボールアンリミテッド	¥30,000		会議費	¥8,496	
㈱シバサイン	¥30,000		大会準備弁当	¥55,950	
三友㈱	¥20,000		昼食クーポン券	¥588,300	
美津野商事㈱	¥20,000		大会当日	¥39,390	茶菓子、コーヒー、氷
㈱カナディアンネットワーク	¥20,000		雑費	¥114,995	
税理士鯨井事務所	¥20,000		コピー代	¥27,130	
㈱ナガヤマスポーツ	¥20,000		手数料	¥7,375	手数料
ミユキコーポレーション㈱	¥20,000		修繕費	¥73,290	プリンター修理用
飯田稔先生(寄付)	¥10,000		保険料	¥7,200	
GALLERY2海老名店	¥10,000		外注費	¥815,795	
どるふ	¥5,000		カピオつり看板・たて看板・設置費	¥280,875	
(有)ふじトロフィー	¥5,000		タペストリー	¥141,750	
啄木鳥	¥5,000		表彰品	¥158,160	
(有)とり文	¥5,000		参加賞	¥215,670	
梅宝整骨院	¥5,000		サイン版作成	¥19,340	
ダイアナキャッツアイ	¥5,000		印刷製本費	¥500,000	報告書作成(予定)
円城寺スポーツ	¥5,000		最終報告会補助費	¥300,000	補助(予定)
小計	¥5,870,000	¥4,983,000	小計	¥5,025,586	
売り上げ	¥1,813,950	¥1,494,400	グッズ買入	¥2,569,875	
グッズ当日分	¥969,650		アシックスTシャツ等発注	¥1,147,125	
グッズスタッフ分	¥212,500		応援バルーン	¥168,000	
グッズ前売り分	¥300,800		パンフレット印刷	¥1,155,000	
パンフレット	¥331,000		タンクトップ	¥99,750	
レセプション売上	¥1,438,000	¥1,471,000	レセプション関連支出	¥1,044,943	
大学・出演団体	196000		パーティ料理・サービス料	¥880,000	
スタッフ	106000		吊り看板・たて看板	¥70,000	
一般（前売り）	903000		上記消費税	¥47,500	
一般(当日）	233000		雑費(プレゼント包装紙・紙等)	¥7,508	
			リーフレットの紙	¥14,385	
			リボン	¥25,550	
小計	¥3,251,950		小計	¥3,614,818	
合計	¥9,121,950		合計	¥8,640,404	（参考：昨年度：7929258円）
その他雑収入(クーポン券買取・利息	¥11,408		繰り越し	¥492,954	
合計	¥9,133,358		合計	¥9,133,358	

総収入	¥9,133,358
総支出	¥8,640,404
繰越	¥492,954

②局・プロジェクト別支出

局・プロジェクト名	支出額	主な購入物
事務局	¥1,525,140	文具、プリンター関連、昼食クーポン券等
プロダクション局	¥1,266,750	オフィシャルブック、取材費、消耗品
PR局	¥798,847	チラシ、横断幕、ポスター、郵送代
大会運営局	¥708,355	AD、サイン版、郵送費、茶菓子
アスレチック局	¥603,718	表彰品関係、競技用品、郵送代
エキシビション	¥85,474	シッティング交通費、郵送代、募金箱
パフォーマンス	¥89,880	東海大チア交通費、郵送代
スポンサード	¥38,420	郵送代
レセプション	¥1,057,758	パーティ料理、看板、リーフレット、郵送
リサーチ	¥1,020	画用紙
交流会	¥21,777	はちまき、名札シール
地域デザイン	¥87,561	材料費、郵送代、装飾関係グッズ
販売促進	¥1,414,875	グッズ
アカデミック	¥5,200	コップ、コースター、お手拭
プロデューサー裁量	¥31,789	郵送代、交通費、会議費

（2）販売業務全般

グッズ売上

項目	前売り・スタッフ	当日	合計
Tシャツ	¥430,500	¥722,500	¥722,500
タンクトップ	¥37,000	¥81,000	¥81,000
タオル	¥45,800	¥42,000	¥42,000
応援バルーン			¥124,150
オフィシャルブック			¥331,000
総計			¥1,300,650

グッズ仕入れ

項目	合計
Tシャツ	¥1,068,375
タンクトップ	¥168,000
タオル	¥78,750
応援バルーン	¥99,750
オフィシャルブック印刷	¥1,155,000
総計	¥2,569,875

レセプション売上一覧

項目		合計
出場大学	¥170,000	¥170,000
出演団体	¥26,000	¥26,000
スタッフ	¥106,000	¥106,000
一般(前売)	¥903,000	¥1,136,000
一般(当日)	¥233,000	
総計		¥1,438,000

レセプション関連支出

項目	合計
パーティ料理・サービス料	¥880,000
吊り看板・たて看板	¥70,000
上記消費税	¥47,500
雑費(プレゼント包装紙・紙等)	¥7,508
リーフレットの紙	¥14,385
リボン	¥25,550
総計	¥1,044,943

（３）外注販売業務全般

①スポンサー

出店名	販売品	売上金額	内訳	昨年度売上金額
利根コカ･コーラボトリング㈱	飲料	¥82,800	1 日目 ¥32,400 （216 本） 2 日目 ¥50,400 （336 本）	約￥36,000
アルケア㈱	高機能サポーター／皮膚保護用人工皮膚パット／疲労回復用圧迫ストッキング	¥20,000		出店のみ（販売せず）
ファイテン	アクアチタン等	¥150,000		

② 学園祭団体

出店名	クーポン券売上金額			全売上金額
香川県人会	1日目	¥26,150	¥71,900	¥159,700
	2日目	¥45,750		
新潟県人会	1日目	¥8,950	¥26,800	¥80,000
	2日目	¥17,850		
広島県人会	1日目	¥35,250	¥84,100	¥200,000
	2日目	¥48,850		
			¥182,800	¥439,700

③商工会

出店名	クーポン券売上金額	全売上金額
いいじま	¥182,450	¥380,000
COCO壱番	¥55,300	¥120,000
篠田屋	¥77,650	¥180,000
よしば	¥90,100	¥240,000
	¥405,500	¥920,000

第七章　大会結果資料

Ⅱ．大会運営データ

【４】大会関係者使用駐車場内訳結果

原稿作成者　大野史成

表：大会関係者使用駐車場内訳

駐車場利用者リスト

AD			駐車場名	氏名	備考	１日目	2日目
GUEST	つ　く　ば　市	つ く ば 市 市 長	カピオ	藤 澤 順 一		1	1
		つ く ば 市 教 育 長		藤 井 伸 二		1	1
		つ く ば 市 商 工 会		新 妻 貞 夫		1	1
		つくば市体育協会会長		山 口 哲 司		0	1
	ス　ポ　ン　サ　ー	利根コカコーラ（株）		赤 羽 慶 良		2	0
		（株）アシックス		日 置 康 夫		1	1
		ファイテン株式会社		高 石 恭 宏		1	1
		沼尻産業株式会社		三 嶋 一 夫		2	2
		アルケア株式会社		小野間一仁		1	1
		東 日 本 印 刷				1	0
		（株）モルテン		民 秋 史 也		1	0
	選　手	シッティングバレー選手				8	0
	全日本バレーボール連盟			杤 堀 申 二		1	1
				SPEC		1	1
		筑波大学学長		岩 崎 洋 一		0	1
				ゲスト予備		1	1
				SPEC(夕方)		0	8
				都 澤 凡 夫		1	1
				松 井 泰 二		1	1
				中 西 康 己		1	1
		学長特別補佐		吉 武 博 通		0	1
				松 田 さん		1	1
				加 藤 陽 一		1	1
		学　連　会　長		市川伊三夫		1	1
					計	29	28
		NEC	南3	楊　成 太		1	1
		トヨタ合成		藤 田 和 広		1	1
		東京ヴェルディ		日 下 慎 吾		1	1
				増 村 雅 尚		1	1
	つ　く　ば　市	つくば市クリーンセンター		相　澤　東		0	1
	ス　ポ　ン　サ　ー	関彰商事（株）		関　正 夫		1	0
		（株）ふじトロフィー		田 中 成 貴		1	0
		ジャパンライム（株）		吉　井　健		1	0
		（株）日本ハム		市　川　淳		1	1
				出 居 綾 子		0	1
		体　育　学　群　長		永　井　純		1	1
		JVA　会　長		飯 島 英 胤		0	1
				菅 沼 裕 一		1	1
				石 黒 澄 子		1	1

Ⅲ．大会客観的評価データ

≪１≫来場者アンケート結果

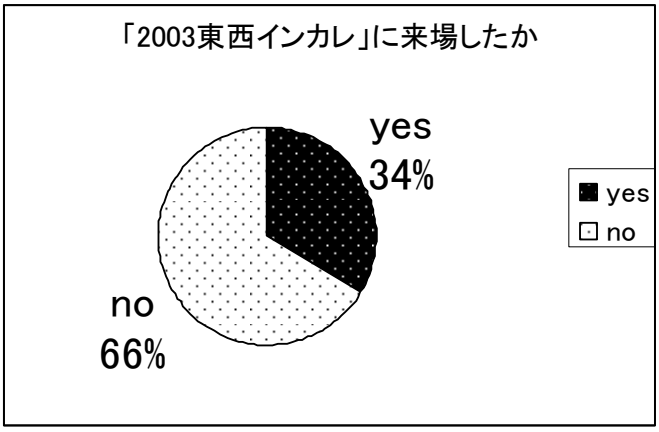
原稿作成者　リサーチプロジェクト

2004 東西インカレ来場者アンケート標本数

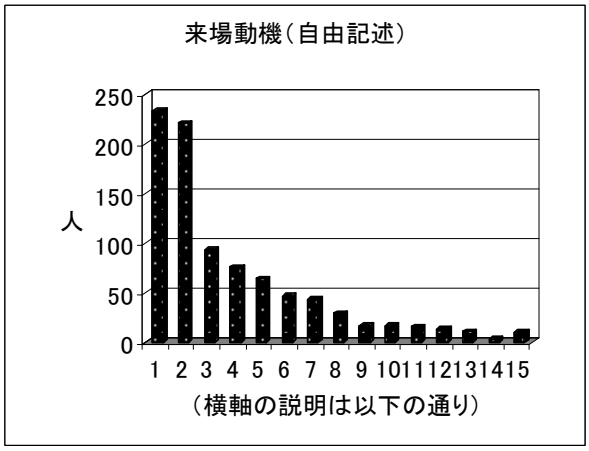
来場者	配布枚数	有効回収枚数	回収率
延べ 6000 人	2879 枚	893 枚	31.0%

（１）単純集計の部

Q1:昨年の「2003 東西インカレ」に来場したか。



Q2:2004 東西インカレに来場した動機



＜以下右上グラフの横軸の説明＞

1.　バレーが好き、興味がある、試合観戦
・バレーが好きだから
・バレーの試合を間近で見たかったから
・最高レベルのバレーを見たかったから etc

2.　大会関係者、出演団体
・オープニングセレモニーに参加するため
・リトリーバーとして etc

3.　出場大学の応援・選手のファン
・筑波大のファン
・好きなチーム・選手を見たいから etc

4.　誘い、付き添い
・友人、知人に誘われて
・子供が見たいといったから etc

5.　知人・子供が参加
・子供が出演するから（交流会・ダンス・マーチング・チアリーディング）etc

6.　去年来場したから
・去年の応援で病みつきになった etc

7.　宣伝・他大会の影響
・広告を見て
・校内の横断幕を見て etc

8.　サブイベントの観戦、観賞
・チアリーディングを見るため
・パラリンピック選手が見られるから etc

9.　Ｖリーガーのファン
・加藤陽一選手のファンだから
・中垣内選手が参加するから etc

10.　部活の一環
・部活で見学することになった etc

11.　レセプション参加
・レセプションに参加するため etc

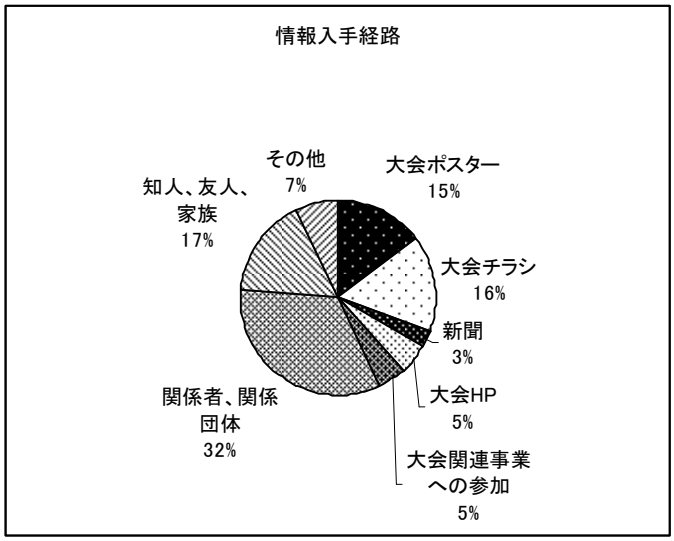
12.　場所の都合が良い
・家に近い
・会場を通りかかったので etc

13.　時間の都合が良い
・時間が空いていた etc

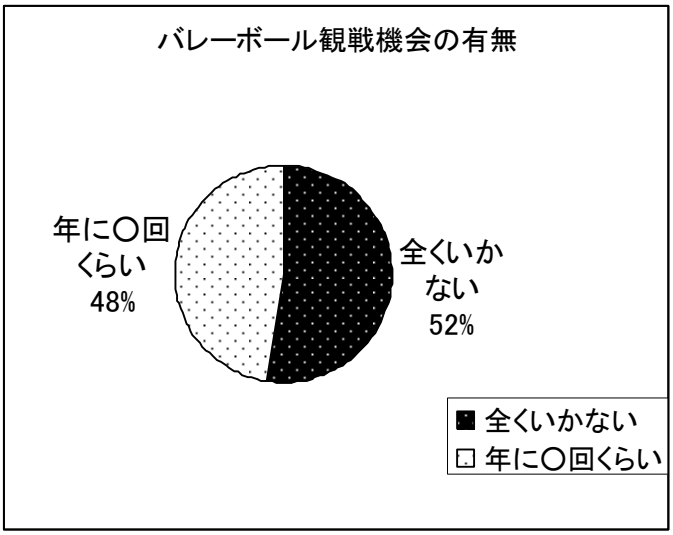
14.　その他
・来年の大会がつくばで開催されないという噂を聞いて
・カピオがみたい、会場見学
・東西インカレ自体の応援
・東日本のサポーターをして楽しかったから
・今年女子バレーががんばっているから
・無料

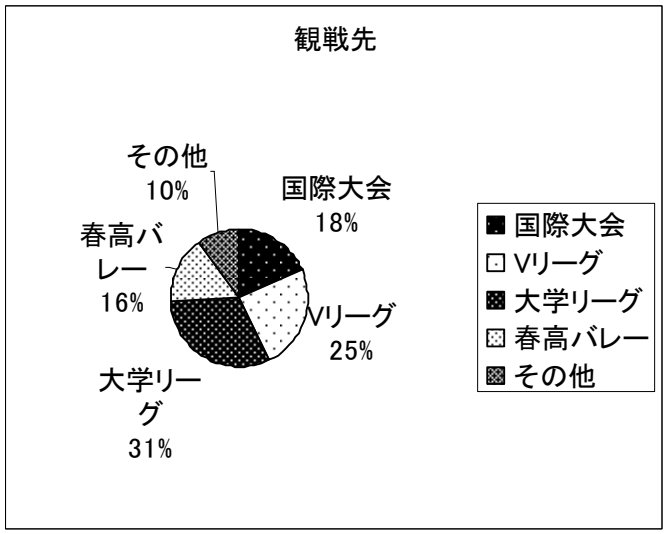
15.　無記入

Q3:この大会の情報をどこで入手したか。

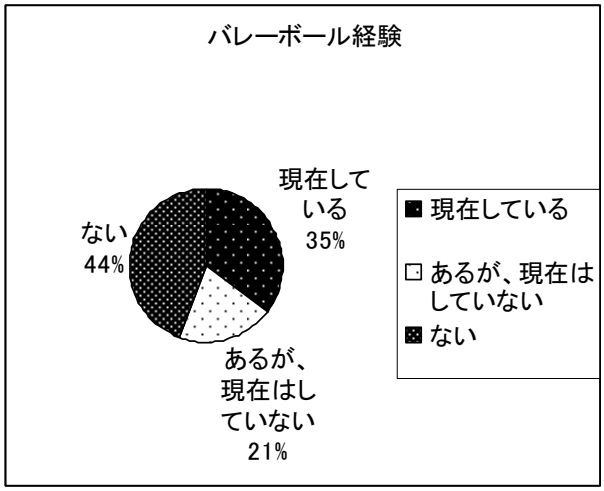


Q4:普段どのくらいバレーボールの観戦に行くか。

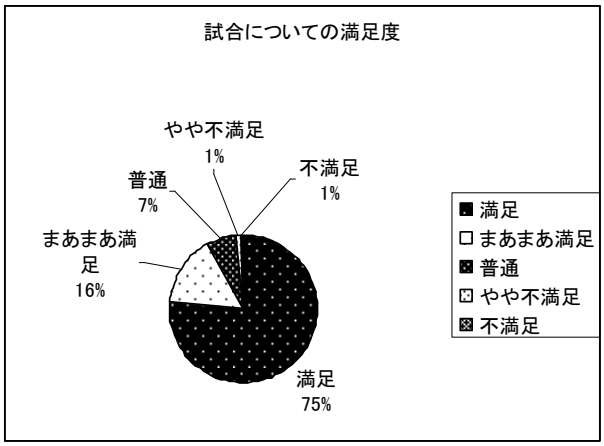


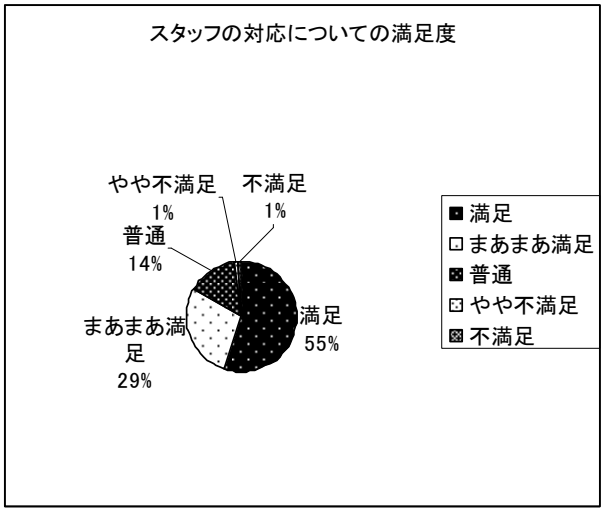


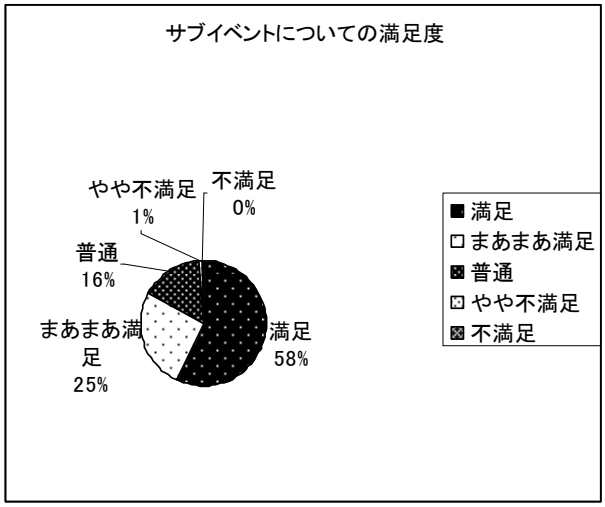
Q5:クラブ活動や部活動などに所属してバレーボールをした経験があるか。



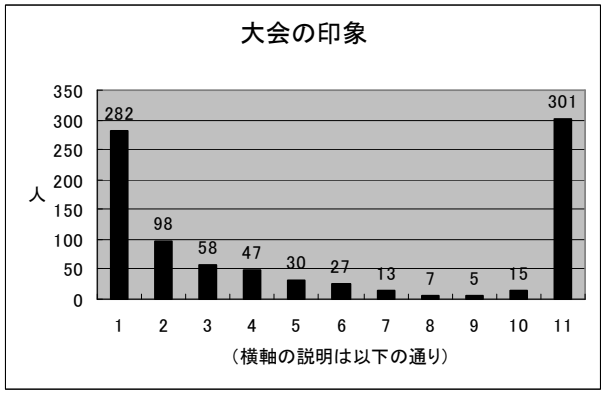
Q6:2004 東西インカレに対する満足度







Q7:この大会の印象



＜以下右上グラフの横軸の説明＞

1. 会場の雰囲気が良い
・臨場感が得られる
・手作り感がある etc

2. サブイベントがよい
・いろんな企画があり、盛大でよい
・他種のバレーを楽しんだ etc

3. 大学・地域との連携
・地域の人と一体となっていて良かった、地域と密着している、協力している、地域融合
・市民が自由に参加できる etc

4. 試合・プレーが良い
・一流選手のプレーが見られて良い
・実力向上になる、プレーを参考にしたい etc

5. スタッフの対応・態度
・スタッフの対応が良い、挨拶が良い
・年々創意工夫があり、関係者に感心 etc

6. 要望・クレーム
・客席を増やしてほしい、本部席が多すぎる
・コートがせまい、選手がボールを追いかけられるために etc

7. 入場無料
・入場無料だから気軽に行ってみようと思う
・無料なのがうれしい、無料で上級の試合が見られる etc

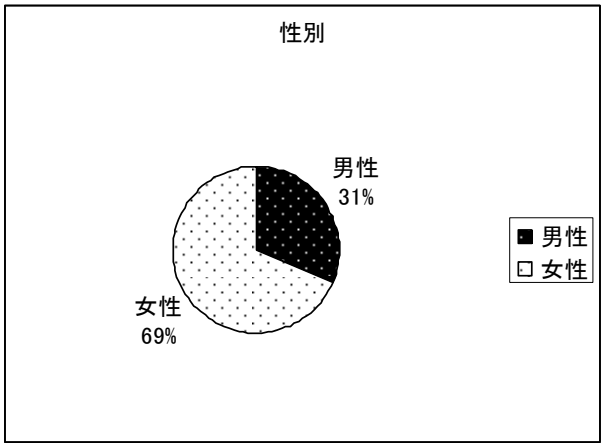
8. 応援がよい
・応援に活気があって、雰囲気がよい etc

9. 有名人との交流
・プロの選手と話せる
・選手や有名人に会える etc

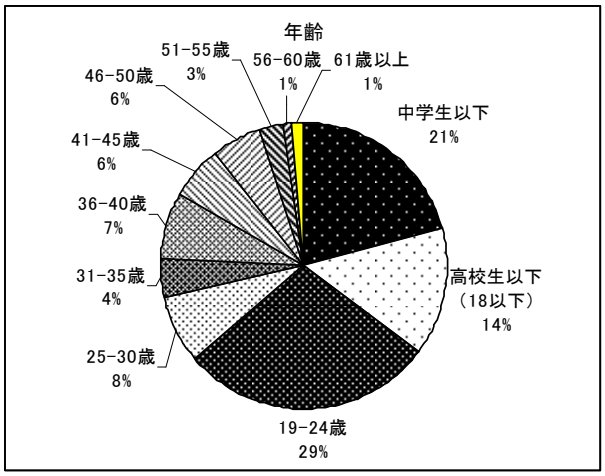
10. その他

11. 無記入

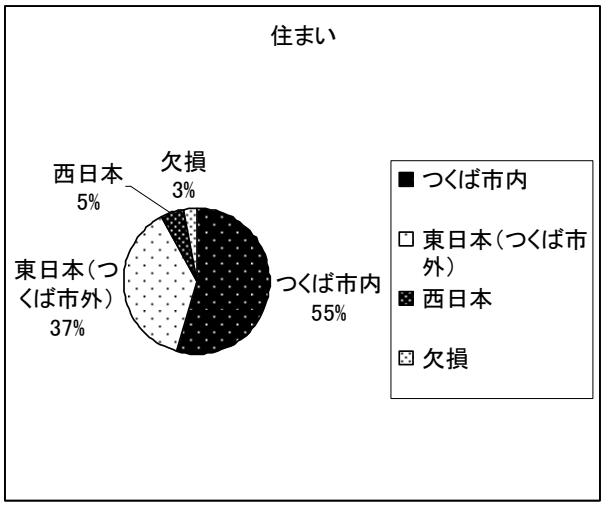
Q9-1:性別



Q9-2:年齢



Q9-3:住まい



【目的】

来場者アンケートは来場動機、情報入手経路、来場者の性質、大会へ感想、来場者の一般的な属性を明らかにする目的で制作・実施された。その結果はグラフが示すとおりである。

【考察】

注目すべき点を見てみよう。

まず今年の観客のうち 34%がリピーターであった。これは昨年の来場者の半数以上が今年も来場したことを示す。東西インカレの魅力が観客に認められたことを表している。逆に 66%の新たな観客を開拓できたことも、PR 活動が充実し、認知度が上がったことと大会自体の魅力がアップしたことを示しているといえる。

次に来場動機については、バレーボールに対する関心が最多である。興味深いのは関係者や出演団体としての参加やサブイベントへの期待からの参加というバレー以外の理由による来場が多いことである。これらの来場動機が「バレーの試合へ満足」「大会の雰囲気への満足」「サブイベントへの満足」という形で満たされ、「来てよかった」と観客に充足感を与えた。バレーとサブイベントが相互に魅力を創出しあう「Sports for all、 All for sports」の理念が達成されている。

PR 戦略は全てのメディアが効果的であった。

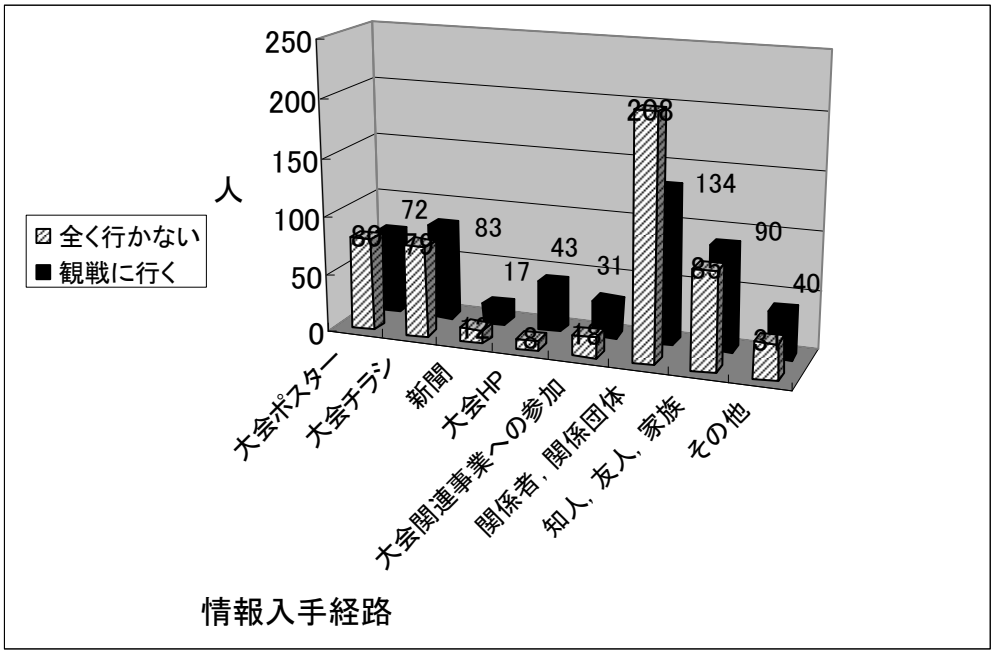
来場者の性質は普段まったく試合を観に行かない人 52%とバレーボール経験のない人 44%が東西インカレには来場したという結果は東西インカレの特長である。彼らが試合、対応、サブイベントに満足したことは「とてつもなくすばらしい成果」である。

来場者の属性については女性が多いこと、25 歳までの人が多いこと、つくば市内の来場者が半数以上であることなどが特徴である。

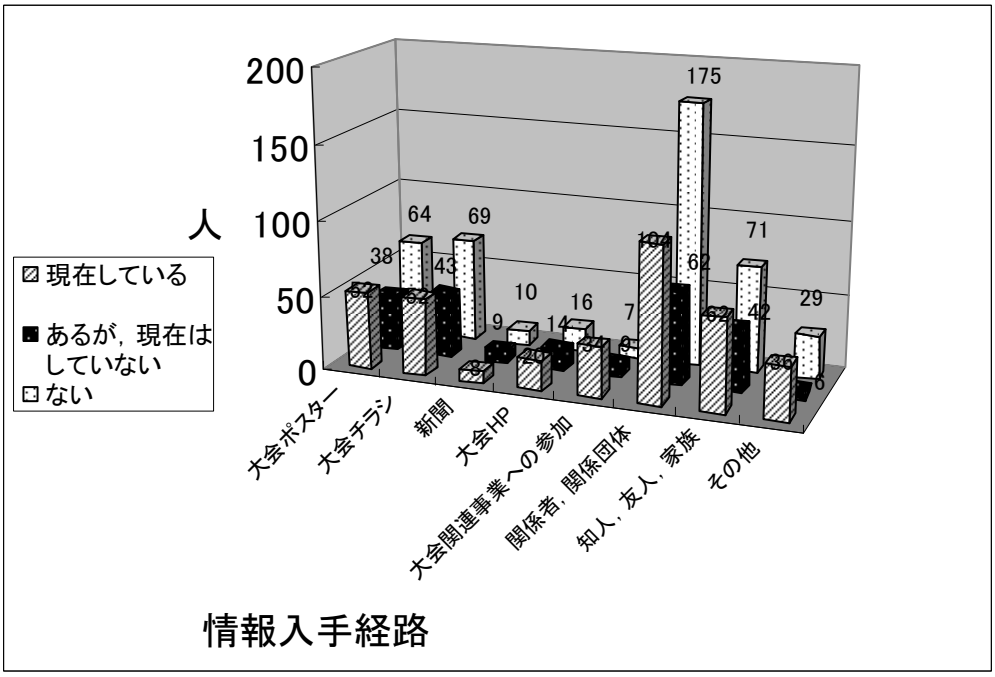
アンケートには考察するまでもなく東西インカレの成功が表象されている。

（2）クロス集計の部

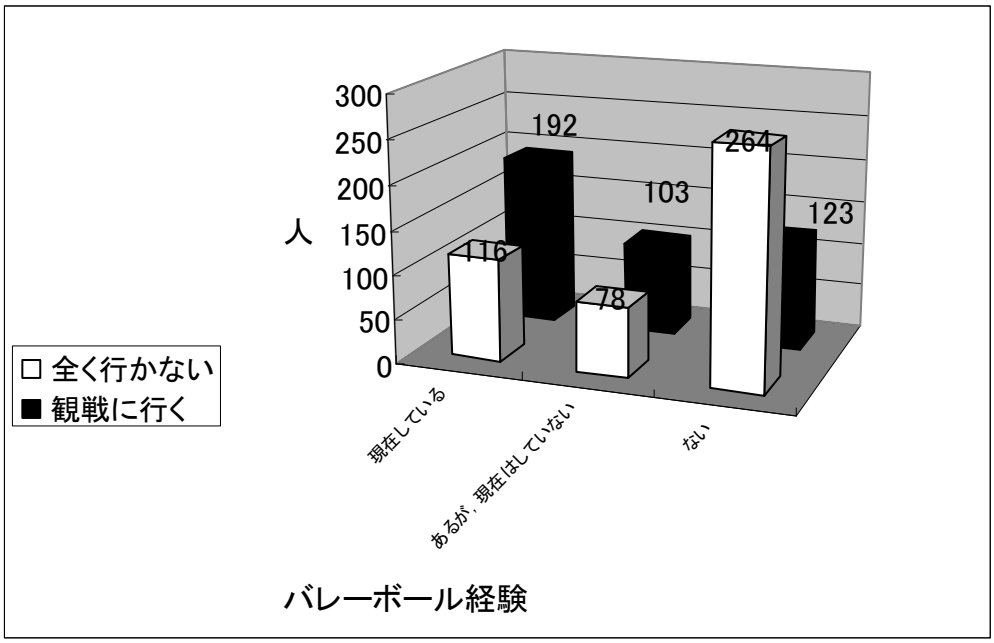
① Q3「大会情報入手経路」と Q4「普段どのくらいバレーボールの観戦に行くか」



② Q3「大会情報入手経路」と Q5「クラブ活動や部活動などに所属してバレーボールをした経験があるか」



③　Q4「普段どのくらいバレーボールの観戦に行くか」と
Q5「クラブ活動や部活動などに所属してバレーボールをした経験があるか」



【考察】

クロス集計で明らかになることは以下のとおりである。

①については、普段バレー観戦に行く人の情報入手経路と行かない人の情報入手経路の相違点

②については、バレーボール経験のある人とない人、また現在継続中の人の情報入手経路の相違点

③については、バレー経験、バレー観戦習慣の関係と来場者の特性

①より、普段から観戦に行く人は、バレーに関する情報に触れる機会が多いため幅広い情報入手経路を有している。また情報入手方法を熟知しているため、大会 HP から情報を得ている人が比較的多い。PR の手法として関連事業や HP での情報提供は玄人用に重要である。一方観戦に普段行かない人は「関係者、関係団体」として情報を得たという人が圧倒的に多い。東西インカレへ参加すること自体が情報に触れるきっかけになっている。

②より、バレー経験のない人が「関係者、関係団体」として情報を得たという人が圧倒的に多いことが分かる。

③より、「バレーをしたことがない、観にも行かない人」が約 30%（893 人中 264 人）いたことが驚きである。東西インカレでバレーに初めて触れるという人が多いということは、有意義である。

Q1(1)					
5	4	3	2	1	5
非常にそう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	思わない	非常にそ
43	35	11	3	0	29

Q1(1)					
5	4	3	2	1	5
非常にそう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	思わない	非常にそ
4	9	0	0	0	6

Q1(2)				Q1(3)				
4	3	2	1	5	4	3	2	1
ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない
29	37	23	3	36	45	8	3	0

Q1(2)				Q1(3)				
4	3	2	1	5	4	3	2	1
ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない
4	1	2	0	3	5	5	0	0

Q1(4)					Q2準備			
5	4	3	2	1	5	4	3	2
非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう
40	41	10	1	0	16	28	16	19

Q1(4)					Q2準備			
5	4	3	2	1	5	4	3	2
非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう
2	3	7	1	0	2	6	4	0

	Q2当日					Q3(1)		
1	5	4	3	2	1	5	4	3
思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも
4	20	42	17	10	0	34	36	17

	Q2当日					Q3(1)		
1	5	4	3	2	1	5	4	3
思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも
1	2	6	3	1	1	4	3	6

		Q3(2)						
2	1	5	4	3	2	1	5	4
あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思
3	1	67	19	2	3	1	35	27

		Q3(2)						
2	1	5	4	3	2	1	5	4
あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思
0	0	4	8	1	0	0	3	4

Q3(3)			Q3(4)					
3	2	1	5	4	3	2	1	5
どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう
24	4	2	14	27	33	10	7	46

Q3(3)			Q3(4)					
3	2	1	5	4	3	2	1	5
どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう
4	2	0	1	4	6	2	0	3

Q3(5)				Q3(6)				
4	3	2	1	5	4	3	2	1
ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない
30	9	3	3	47	24	16	3	2

Q3(5)				Q3(6)				
4	3	2	1	5	4	3	2	1
ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない
6	3	1	0	3	5	4	1	0

Q3(7)					Q3(8)			
5	4	3	2	1	5	4	3	2
非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう
25	26	21	15	4	33	24	21	7

Q3(7)					Q3(8)			
5	4	3	2	1	5	4	3	2
非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう
0	1	4	5	3	2	2	4	4

	Q3(9)					Q3(10)		
1	5	4	3	2	1	5	4	3
思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも
5	8	10	29	19	26	18	13	28

	Q3(9)					Q3(10)		
1	5	4	3	2	1	5	4	3
思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも	あまりそう	思わない	非常にそう	ややそう思	どちらでも
0	3	0	3	3	4	1	2	3

		Q5			Q6		名前	所属
2	1	Yes	No	?	Yes	No		
あまりそう	思わない	Yes	No	?	Yes	No		
14	18	58	13	19	30	38		

		Q5			Q6		名前	所属
2	1	Yes	No	?	Yes	No		
あまりそう	思わない	Yes	No	?	Yes	No		
3	4	7	1	4	1	8		

≪2≫スタッフアンケート結果

原稿作成者　リサーチプロジェクト

学生スタッフ編

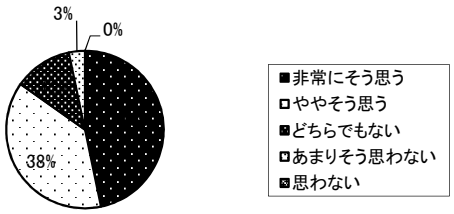
標本数	93枚

アドバイサー編

標本数	13枚

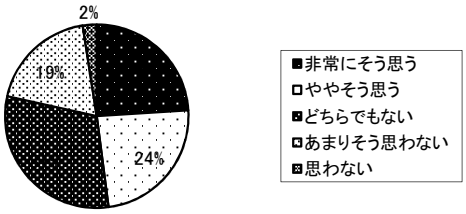
2004東西インカレ全体についての意見

東西インカレの理念Sports for all,All for sportsが達成された

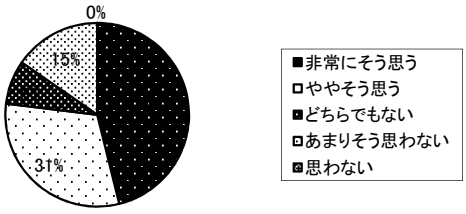


東西インカレの理念Sports for all,All for Sportsが達成された

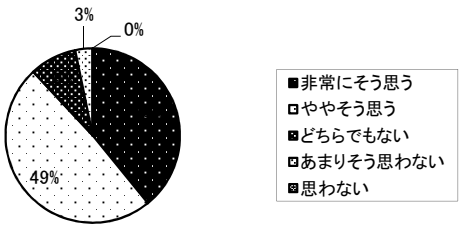
産官学民という四身一体が表現できた



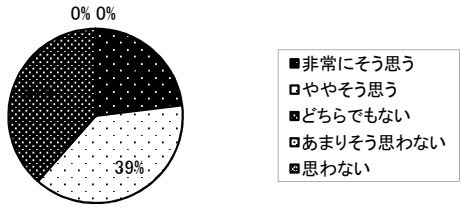
産官学民という四身一体が表現できた



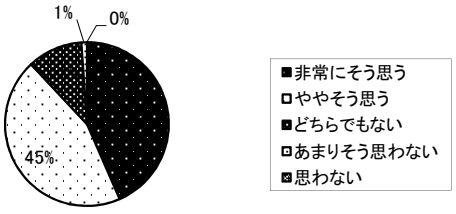
社会貢献が達成できた



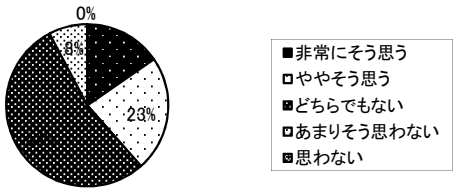
社会貢献が達成できた



バレーボールを通しての共生社会の実現が図れた

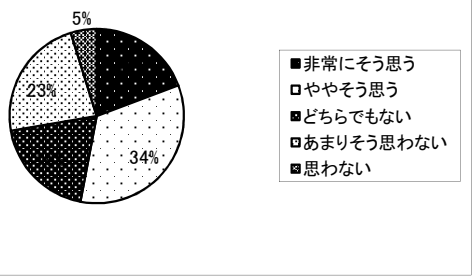


バレーボールを通しての共生社会の実現が図れた

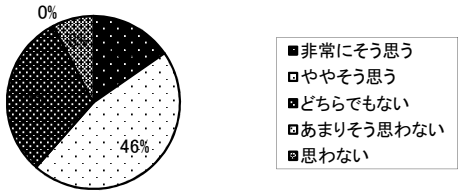


運営体制及び運営環境についての意見

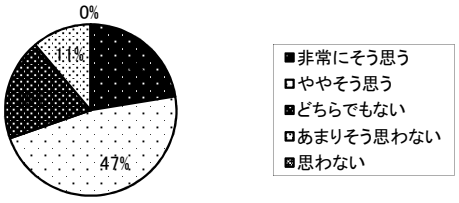
準備段階の運営体制や運営環境は適切だったか



準備段階の運営体制や運営環境は適切だったか



当日の運営体制や運営環境は適切だったか



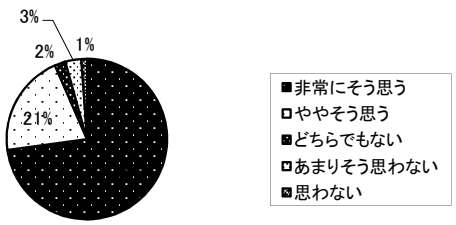
当日の運営体制や運営環境は適切だったか

スタッフとして参加しての感想

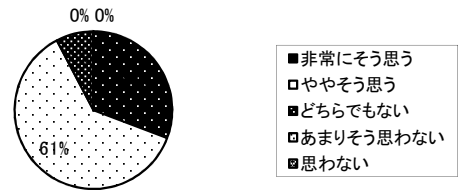
企画・運営は楽しかった

企画・運営は楽しかった

よい経験になった



よい経験になった



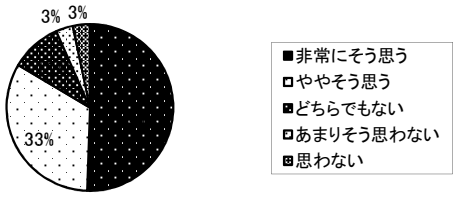
東西インカレに参加したことで人間的に成長した

東西インカレに参加したことで人間的に成長した

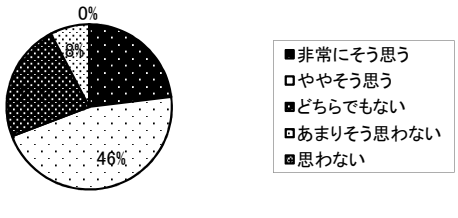
やろうと考えていたことが実現できた

やろうと考えていたことが実現できた

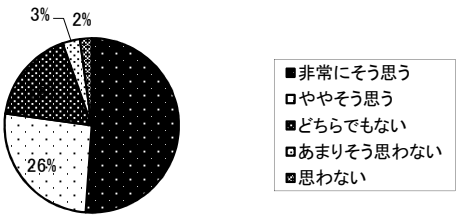
交友関係が広がった



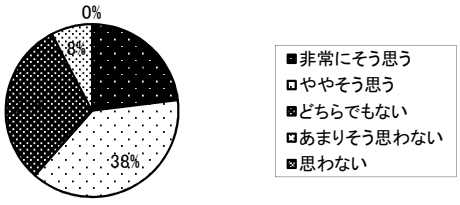
交友関係が広がった



バレーボールについてより関心がわいた



バレーボールについてより関心がわいた

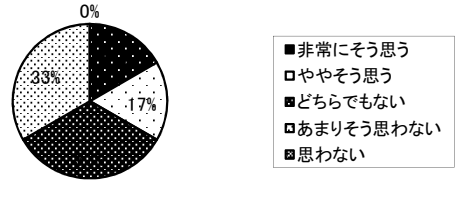


体力的にきつかった

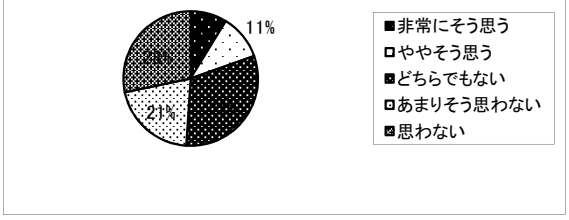
体力的にきつかった

時間的にきつかった

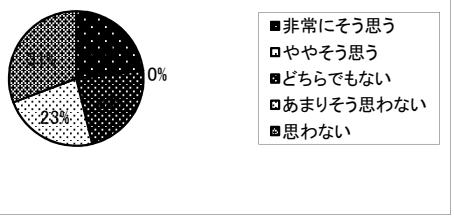
時間的にきつかった



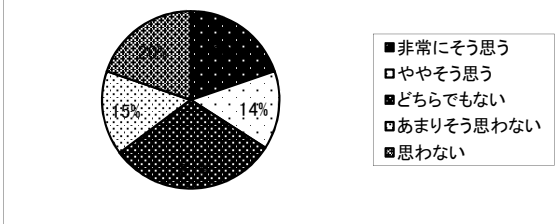
金銭的にきつかった



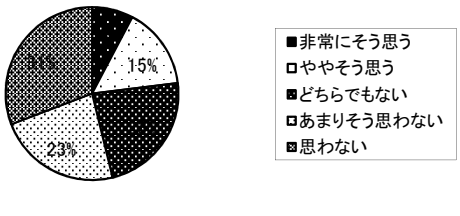
金銭的にきつかった



悩みが多かった

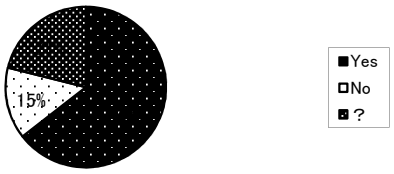


悩みが多かった

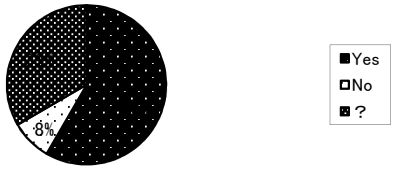


次年度への参加意思及びつくばユナイテッドVolleyballへの参加意思

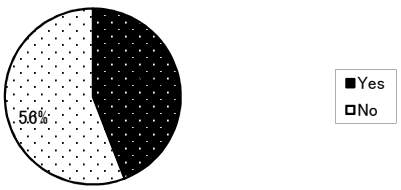
来年もインカレスタッフをやりたいか



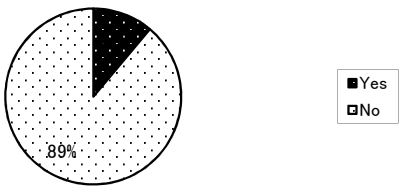
来年もインカレスタッフをやりたいか



つくばユナイテッドVolleyballの活動に参加したいか



つくばユナイテッドVolleyballの活動に参加したいか



≪３≫アドバイザーによる講評結果

アドバイザーの講評結果として、スタッフアンケート結果からの講評と、7 月 29 日に行われたアドバイザーを呼んでの反省会の講評を掲載します。終始和やかな雰囲気で東西インカレに対する評価が話し合われました。議事録をもとに講評部分を提示しています。

スポーツ振興課

いろいろな企画をみていて、よくできたのではないかと思った。昼食のチケット制も、商工会に客もきて、お互い様ということになり、大変良かった。展示などは、回を追うごとに改善されていて良かったと思う。全体的に、試合は１年目の方が盛り上がったが、そこは筑波大が強かったということで。今年は、シッティングとオープニングがよかったと、当日見に行った者が言っていた。女子の方もどうにかならないか、という意見もある。筑波は男子だけではない。女子の方も、東西インカレでなくても、エキジビションというかたちで試合をしてもらうことは無理か。違う客層がくることになり、いいのではないか．来年も中身の濃いものになるように頑張っていただきたい。

体育協会

来賓の方々について「来年はお弁当で」という意見があった。「自分たちはバレーも見たいし、並んで買う時間がもったいない」と言っていた。

交流会については〆切を過ぎてから申し込みをしてきた人も多かった。最後の総会のあとにも申し込みがあって、１００人を越えていたので、その人に関しては切った。締切日の前に、のせたほうがいい。

つくば市商工会

出店した部分は大成功に終わった。客の滞留時間も長く、売り上げも昨年の数十倍に。食券に関しては、賛否両論だった。

スポンサーの反応については、関商事さんが受け付けはしていないと思うが、客席で見ていた。今までは「バレーがどれくらい客がくるのか」という感じだったが、今回見に来て、今後も好意的に協力していただけると思う。

アドバイザーのみなさんの感想

シッティングが大変よかった。来年も盲人バレーなど、障害者スポーツが入る枠があってもいいのでは。フォーラムも、予想以上に導入でひきつけられた。情報保障と、出ていた方も個性的でおもしろかった。あと、広場をもっと大きく使ってもよかったのではないか。

今回参加して、よかったと思うことしかない。
①　つなぎのコンセプト。他の分野ともつながりができた。一番感動したのはこの組織。イベントチームの街づくりの可能性があると思った。②　経済効果があってよかった。商工会のような食のサービスはとても重要だと思う。アカデミックフォーラムも街づくりのコンセプトを発信できてよかった。いろいろなデザインがあるが、アクティビティのデザインが今後重要になると思う。③　グリーンハウスのプロジェクトに興味をもってもらったり、人的つながりができてよかった。芸術・体育に限らずいろいろなつながりができていた。④　キャンパスリニューアルなどで、組織の難しさを経験してきたが、非常に統制のとれた質の高い組織だったと思う。体育の集中力があった。芸術も学びたいところ。⑤　来年、芸術で参加するプロジェクトを創って、単位化したい。また、建築を専攻するものとしては、（この大会が）新しい体育館をつくるということでの研究対象にもなりうる。ぜひ、（今回のデータなどを）ストックしておいてもらいたい。

継続することに意義がある。より良いものを追求するのは将来的に必ず無理が来ると思う。2004 年の現状を維持できる内容で考えるべきである。また東西で交互にできる方が良いのでは。双方の良いところ悪いところ色々学ぶことがあるのではないのでしょうか。

現在の学生はしらけムードが漂っていると思っていましたが、東西インカレの運営に熱意を持って取り組む姿勢を見て、大変感動しました。

≪４≫　総合分析

原稿作成者　小野智史

【１】来場者アンケート結果、【２】スタッフアンケート結果、【３】アドバイザー講評結果を総合すると、大会は大成功であったと評価できる。理念が達成され、参加者と来場者がともに満足したという結果が見て取れる。

来場者のうちバレーボールの試合については91%の人が満足と答え、スタッフの対応やサブイベントについても80%以上の人が満足と回答している。来場者の内訳を見てもリピーターを獲得し、新規の観客も開拓して昨年より来場者数が大幅に増えた。初めてバレーボールを観、初めてバレーボールに触れる人が多いことも東西インカレが誇れるポイントである。そしてバレーボールをきっかけに人と人が繋がり、サブイベントとバレーボールがお互いを盛り上げ、相乗効果を生むという「Sports for all、 All for Sports」という東西インカレの理念が実現できていることに意味がある。

来場者アンケート、スタッフアンケートや反省会のミーティング、アドバイザーからの講評の中で多くの課題が提出されたことは真摯に受け止め、改善していくべきである。しかし、総合的に分析して、大会の理念と実現のための方策と関係者の努力の方向性は間違っていないということが認識できるのではないだろうか。

Ⅳ．名簿

≪１≫　実行委員

原稿作成者 羽田野真帆

トーナメントディレクター		
	都澤凡夫	筑波大学人間総合科学研究科（体育）
エグゼクティブプロデゥーサー		
	松田裕雄	筑波大学人間総合科学研究科（体育）
オフィシャルアドバイザー		
	飯泉省三	つくば市企画調整部企画調整課
	宇木博明	つくば市スポーツ振興課
	南文男	つくば市スポーツ振興課
	船橋修	つくば市スポーツ振興課
	小神野洋一	つくば市都市整備部　特定開発室
	椙山茂	つくば市障害福祉課
	塚田修身	つくば市総務部市長公室
	杉山晃	つくば市総務部市長公室
	石黒澄子	つくば市バレーボール連盟
	朝倉享子	つくば市体育協会
	高巣文子	つくば市体育協会
	松岡嘉一	ホテル組合
	野口昌巳	ホテルグランド東雲
	新妻貞夫	つくば市商工会事務局長
	吉原則行	つくば市商工会
	鈴木誠	つくば市商工会
	中西康己	筑波大学人間総合科学研究科（体育）
	嵯峨寿	筑波大学人間総合科学研究科（体育）
	蓮見孝	筑波大学人間総合科学研究科（芸術）
	渡和由	筑波大学人間総合科学研究科（芸術）
	坂根正孝	筑波大学人間総合科学研究科（医学）
	村田芳子	筑波大学人間総合科学研究科（体育）
	平山素子	筑波大学人間総合科学研究科（体育）
	長谷川聖修	筑波大学人間総合科学研究科（体育）
	丹藤勝次	筑波大学生命環境科学支援室
	吉田英夫	筑波大学人間総合科学等支援室(体芸)
	秋山克己	茨城県立並木高等学校
	川田公仁	つくば国際大学
	佐藤豊	茨城県立竹園高等学校
	川村真一	全日本大学バレーボール連盟

	池沢卓也	全日本大学バレーボール連盟
	海老坪正子	タナカ物流株式会社
事務局		
【物品環境管理部】		
局長・チーフ	山本三津子	社会工学類
【財務管理部】		
チーフ	伊藤リナ	体育研究科
【情報化促進部】		
チーフ	矢沢智子	日本語日本文化学類
副局長	羽田野真帆	人間学類
	小野智史	教育研究科
	埃沢賢志	社会工学類
【MO】		
	石川大悟	自然学類
アスレチック局	佐藤麻紀	比較文化学類
プロダクション局	浦田哲平	体育専門学群
PR 局	加納久美子	人文学類
アスレチック局		
局長	田仲俊樹	体育専門学群
【競技委員会】		
	川村真一	全日本大学バレーボール連盟
	池澤卓也	関東大学バレーボール連盟
	平松駿	関東大学バレーボール連盟
	小槻雄太	関東大学バレーボール連盟
【情報化推進委員会】		
チーフ	牧野仁人	医学類
	湯川涼子	体育専門学群
	吉岡里英	体育専門学群
	小山庶子	
【演出・企画委員会】		
	山岡祐衣	医学類
【機材管理委員会】		
チーフ	木曽雄介	体育専門学群
【贈呈品準備委員会】		
MO/チーフ	佐藤麻紀	比較文化学類
	小孫佳子	比較文化学類
プロダクション局		
【デザイナー】		
ディレクター	小澤宏行	芸術専門学群

ディレクター／web チーフ	佐々木絵理	芸術専門学群
	上川礼子	芸術専門学群
	中尾直美	芸術専門学群
	北村亮太郎	芸術専門学群
	加藤萌美	芸術専門学群
【グッズ部】		
チーフ	林宏樹	体育専門学群
	北島武	体育専門学群
	鈴木健史	理工学研究科
	壬生裕之	体育専門学群
	三上圭治郎	体育専門学群
【オフィシャルブック部】		
チーフ	桧山佑介	体育専門学群
	川口直樹	自然学類
	沼尻知子	比較文化学類
	杉田かおり	日本語日本文化学類
PR 局		
ディレクター	高橋一郎	社会工学類
	杉舩竜也	比較文化学類
	家常亜紗子	社会工学類
	斉藤郁	看護・医療科学類
	小川将司	体育専門学群
	山崎雅和	情報学類
	古内ひとみ	看護・医療科学類
	上平和幸	体育専門学群
	志賀崇	体育専門学群
	丸山祥二	体育専門学群
	菅直哉	体育専門学群
	小松原亜弓	国際総合学類
MO	加納久美子	人文学類
プロジェクト推進局		
【推進部】		
ディレクター	松田裕雄	体育科学系技官
	荒木祐亮	経営・政策科学研究科
	羽田野真帆	人間学類
	小野智史	教育研究科
	大城聡香	社会工学類
	高橋沙矢香	人間学類

	熊谷優	体育専門学群
	林宏樹	体育専門学群
	津波古陽香	社会工学類
パフォーマンス・演出プロジェクト		
アドヴァイザー	奥寺由紀	NPO 法人キッズチアプロダクション
	斉藤美穂子	常総学院高等学校チアリーダー部 SOLDIERS
	柳下健一	常総学院高等学校応援指導部
	成島純一	吾妻小マーチングバンドレッドウィングス
	長谷川玲子	タッチ体操クラブ
	林田祐樹	Dance Association Seeds
	平井隆	常陸乃国ふるさと太鼓会
	広谷吉昭	REAL JAM
	吉成隆一	竹園高校吹奏楽部
	井坂斗絲幸	井坂斗井坂斗絲幸社中筑波大学津軽三味線倶楽部無絃塾
	田中洋子	筑波大学吹奏楽団
	高橋舞	筑波大学体操部
	満富七恵	筑波大学ダンス部
	大島朋子	筑波大学応援団桐葉・筑波大学チアリーディング部
リーダー	津波古陽香	社会工学類
	赤塚良輔	自然学類
	市村理子	日本語日本文化学類
	宇垣めぐみ	看護・医療科学類
	宇野寛子	社会工学類
	木暮洋輔	工学基礎学類
	中泉誠子	人間学類
	沼尻知子	比較文化学類
エキシビジョンマッチプロジェクト		
アドヴァイザー	門脇純也	東北リコー
	森作秀裕	茨城選抜
	真野嘉久	シッティングバレーボール JAPAN チーム
	松原隆雄	常総学院高等学校 JRC 部
リーダー	羽田野真帆	人間学類
	中泉誠子	人間学類
	水野知恵	人間学類
	白石陽介	人間学類
	中嶋希望	人間学類
	永盛好貴	人間学類
レセプションプロジェクト		
リーダー	大城聡香	社会工学類

サブリーダー	川口あゆみ	日本語日本文化学類
	角谷省吾	工学基礎学類
	山上航平	社会工学類
	塩川真理子	芸術専門学群
	金谷千亜紀	人文学類
	岩瀬佳奈	看護・医療科学類
交流会プロジェクト		
リーダー	熊谷優	体育専門学群
サブリーダー	鈴木淳	工学基礎学類
サブリーダー	影山あき子	社会学類
	浜中陽子	比較文化学類
	尾崎亮太	工学基礎学類
	宮崎彰吾	自然学類
	松井泰二	文教大学非常勤講師
アカデミックフォーラムプロジェクト		
コーディネーター	蓮見孝	芸術学系教授
ゲストプレゼンター	中垣内祐一	V リーグ堺ブレーザーズ監督
プレゼンター	都澤凡夫	筑波大学男子バレーボール部監督
	島袋典子	有限会社つくばインキュベーションラボ代表取締役
	渡和由	芸術学系助教授
	飯泉省三	つくば市企画部企画調整課長
リーダー	松田裕雄	体育科学系技官
	中村玲	日本語日本文化学類
	谷中智紀	生物学類
	鯨井拓仁	社会工学類
	宮崎雅久	自然学類
	西山嘉倫	国際総合学類
	小松原亜弓	国際総合学類
	岡本直樹	医学類
	廣瀬美恵	人文学類
	池田達也	自然学類
	森岡可多	自然学類
	仲山知佳	図書館情報専門学群
地域デザインプロジェクト（バレー街道）		
リーダー	荒木祐亮	経営・政策科学研究科
	埃沢賢志	社会工学類
	高橋一郎	社会工学類
	家常亜紗子	社会工学類
屋外チーフ	山本三津子	社会工学類

	石井邦知	社会工学類
	笹木隆之	社会工学類
	堀越晃子	人文学類
	石川忠	比較文化学類
	荒川暁郎	社会工学類
	米澤和泉	社会工学類
地域デザインプロジェクト（つくばサイト）		
リーダー	高橋沙矢香	人間学類
	猪俣朋恵	人間学類
	川上奏	芸術専門学群
	杉田かおり	日本語日本文化学類
	宇佐見あかね	看護・医療科学類
	小林梓	看護・医療科学類
販売促進プロジェクト		
リーダー	林宏樹	体育専門学群
リーダー	横沢友樹	医学類
	桧山佑介	体育専門学群
	鈴木健史	理工学研究科
	壬生裕之	体育専門学群
	鈴木宏奈	生物資源学類
	吉田志緒美	生物資源学類
	田邊志帆子	看護・医療科学類
スポンサードプロジェクト		
アドヴァイザー	吉原則行	つくば市商工会
	鈴木誠	つくば市商工会
	新妻貞夫	つくば市商工会
リーダー	松田裕雄	体育科学系技官
サブリーダー	菊池孝一	体育専門学群
	小野智史	教育研究科
	中村美春	社会工学類
	松本みな	人文学類
	影山あき子	社会学類
	柳瀬浩之	体育専門学群
	横田剛志	体育研究科
リサーチプロジェクト		
リーダー	小野智史	教育研究科
サブリーダー	影山あき子	社会学類
	中泉誠子	人間学類
MO	中村美春	社会工学類

大会運営局		
局長	伊藤健士	体育専門学群
【総務運営部】		
チーフ	藤澤寛子	看護・医療科学類
	原田理恵	比較文化学類
アナウンス	西山嘉倫	国際総合学類
	高野真弓	社会学類
	石岡愛美	社会学類
	杉田麻光	社会学類
	木脇研一郎	人間学類
【サービス推進部】		
食料品管理	増田浩之	体育専門学群
	童安佚	体育研究科研究生
各種制作物	阪口かなえ	自然学類
宿泊施設管理	櫻井友樹	体育専門学群
駐車場管理	大野史成	体育専門学群
外部対応	久保瞳	看護・医療科学類
	田中裕子	看護・医療科学類
ゴミ処理管理	前原三智子	人文学類
	荒井健太	生物資源学類
	石井邦知	社会工学類
	荒井雪恵	生物資源学類
	岩本智裕	生物資源学類
	中澤洋輔	生物資源学類
	須田碧海	生物資源学類
	山田歌織	社会学類
	觀愛美	生物資源学類
スペシャルニーズ対応	武内栄希	人間学類
	園田友樹	人間学類
	勝見彩乃	人間学類
	永田真一	人間学類
	加藤七奈	人間学類
	有海順子	人間学類
	平野由起	人間学類
	図師奈津子	人文学類
	菅家早織	人文学類
	中西章典	教育研究科
	関田巌	PCY２９８
【施設機材管理部】		

チーフ	赤木貴雄	体育専門学群
	石川健	体育専門学群
	三須愛	国際総合学類
当日スタッフ		
	浅田玲緒尚	医学類
	石島雄介	体育専門学群
	石田真也	工学基礎学類
	井上麻衣子	看護・医療科学類
	岩井興幸	医学類
	海老沼祐子	看護・医療科学類
	大喜憲一	社会工学類
	大久保元晴	体育専門学群
	大谷暢史	医学類
	緒方清仁	看護・医療科学類
	勝野裕士	体育専門学群
	柄谷雅紀	体育専門学群
	木原陽子	人文学類
	久慈正太郎	医学類
	國近公太	体育専門学群
	五味新吉	看護・医療科学類
	今野瞬	看護・医療科学類
	坂寄健	医学類
	佐々木裕子	看護・医療科学類
	篠原瑤子	看護・医療科学類
	白柳友季子	看護・医療科学類
	田中勝洋	医学類
	永野健	体育専門学群
	箱守寛子	医療短期大学
	林裕介	医学類
	山田華子	医学類
	劉美憬	医学類

参加団体
筑波大学ダンス部
筑波大学体操部
筑波大学吹奏楽団
筑波大学応援団桐葉
筑波大学チアリーディング部
東海大学体育会チアリーディング部　FINE
常総学院高等学校応援指導部
常総学院高等学校チアリーダー部　SOLDIERS
常総学院高等学校 JRC 部
NPO 法人キッズチアプロダクション
竹園高校吹奏楽部
井坂斗井坂斗絲幸社中筑波大学津軽三味線倶楽部無絃塾
REAL　JAM
吾妻小学校マーチングバンドレッドウィングス
タッチ体操クラブ
Dance　Association　Seeds
東北リコー
茨城選抜
シッティングバレーボール JAPAN チーム
Na ごみ
常陸乃国ふるさと太鼓の会

≪２≫　GUEST･VISITOR

原稿作成者　田中裕子・矢沢智子

GUEST発送者リスト

団体名	役職	氏名
つくば市	つくば市長	藤澤順一
	つくば市議会議長	兼平英雄
	つくば市議会副議長	大野光夫
	文教厚生常任委員	坂本禎子
	文教厚生常任委員	小野泰宏
	文教厚生常任委員	橋本喜美子
	文教厚生常任委員	田宮直子
	文教厚生常任委員	中泉慶一
	文教厚生常任委員	飯岡宏之
	文教厚生常任委員	鈴木富士雄
	文教厚生常任委員	塙豊光
	文教厚生常任委員	飯田忠
	文教厚生常任委員	塚本武志
	文教厚生常任委員	金子和雄
	教育長	藤井伸二
	教育委員	大久保弘行
つくば市体育協会	会長	山口哲司
つくば市バレーボール連盟	会長	石黒澄子
つくば市商工会	会長	沼尻博
	事務局長	新妻貞夫
	副会長	広瀬俊一
筑波大学	学長	岩崎洋一
	副学長(組織・人事、学術、情報、環境安全管理)	腰塚武志
	副学長(教育、学生生活)	林史典
	副学長(研究、産学官連携、社会貢献、国際連携)	油田信一
	学長特別補佐	吉武博通
	調整官	笹井弘之
	体育研究科長	飯田稔
	体育科学研究科長	西平賀昭
	体育専門学群長	永井純
	体育科学系長	高松薫
JVA		足立龍哉
	男子強化委員	白数仁孝
	男子強化委員	南匡泰
	男子強化委員	多田幹世
	男子強化委員	久保義人
	男子強化委員	楊成太
	男子強化委員	山本和史
Vリーグ	会長	飯島英胤
	堺ブレイザーズ	中垣内祐一
		大久保茂和
		市橋祐之
		増村雅尚
	豊田合成	朝長孝介
		藤田
	東レ	矢島久徳
		山口誠
		秋山央
		小林敦
	サントリー	鳥羽賢二
		西田靖宏
		花野裕祥
		山村宏太
	フランス	加藤陽一
	東京ヴェルディ	菊池孝一
		日下慎吾
全日本大学連盟	会長	市川伊三夫
	副会長	小野寺崇
	副会長	枋堀申二
	副会長	小出忠孝
	理事長	久保田邦宏
	関西学連理事長	柏森康雄
特殊	奥山欽哉	奥山欽哉
	バレーボール学会	遠藤俊郎
		後藤浩史
	筑波大学	守屋正彦
	表彰品提供	西藤宏司
	筑波大学人間総合科学研究科	蓮見孝
	筑波大学人間総合科学研究科	渡和由
	つくば市企画部企画調整課	飯泉省三
	有限会社つくばインキュベーションラボ	島袋典子

VISITOR 発送者リスト

筑波大学	企画部企画調整課社会貢献部	風間宏章
全日本大学連盟	全日本総務委員長	出居裕子
	全日本総務委員会	雛田総子
	全日本審判委員長	菅沼祐一
	全日本広報委員長	田中浩一
	全日本審判委員長	河合信行
特殊	研究交流センター	
	茨城トヨタ	
	つくば都市交通センター	野村
	クリーンセンター	相澤東
	古い街並み写真提供	矢澤容子
	国土交通省国土地理院	
	クレオ(西武百貨店･ジャスコ)	
	下条整形外科	
	A to Z	
	茨城学生活動支援組織 ぐっぴい	木村亮介
	筑波技術短期大学 バレー部監督	今井計

≪３≫　協賛社・寄付者一覧

トップパートナー

三基商事株式会社

サントリー株式会社

プレミアパートナー

東京ヴェルディ 1969

利根コカ・コーラボトリング株式会社

沼尻産業株式会社

株式会社アシックス

株式会社塚越石材工業

株式会社スポーツビズ

ゴールドスポンサー

株式会社ブレイザーズスポーツクラブ

株式会社ライトオン

株式会社つくば YOU ワールド

加藤陽一

東日本印刷株式会社

ホテル松島

オフィシャルサポーター

つくばショッピングセンターアッセ

グランドホテル東雲

海老坪正子

ファイテン株式会社

豊田合成株式会社

アルケア株式会社

関彰商事株式会社

オフィシャルサプライヤー

株式会社総合印刷新報社

筑南ウエスト収集事業協同組合

つくば市農業協同組合

つくば市谷田部農業協同組合

日本ハム株式会社中央研究所

株式会社モルテン

関東鉄道バス株式会社

株式会社タカキベーカリー

メディアパートナー

有限会社ふじトロフィー

啄木鳥

どるふ

(有)とり文

梅宝整骨院

ダイアナキャッツアイ

GALLERY2 海老名店

株式会社ナガヤマスポーツ

三友株式会社

美津野商事株式会社

つくば青年会議所

NPO 法人スマイルクラブ

㈱カナディアンネットワーク

税理士鯨井事務所

有限会社小久保造園土木

ミユキコーポレーション株式会社

東レ株式会社

上尾中央総合病院

株式会社オフィス三輪

株式会社シバサイン

日本文化出版株式会社

円城寺スポーツ

門井レンタカー

松下電器産業㈱

ジャパンライム㈱

(有)バレーボールアンリミテッド

つくばテクノパーク豊里工業水道協議会

日本たばこ産業

寄付者

飯田稔（筑波大学）

（敬称略、順不同）